

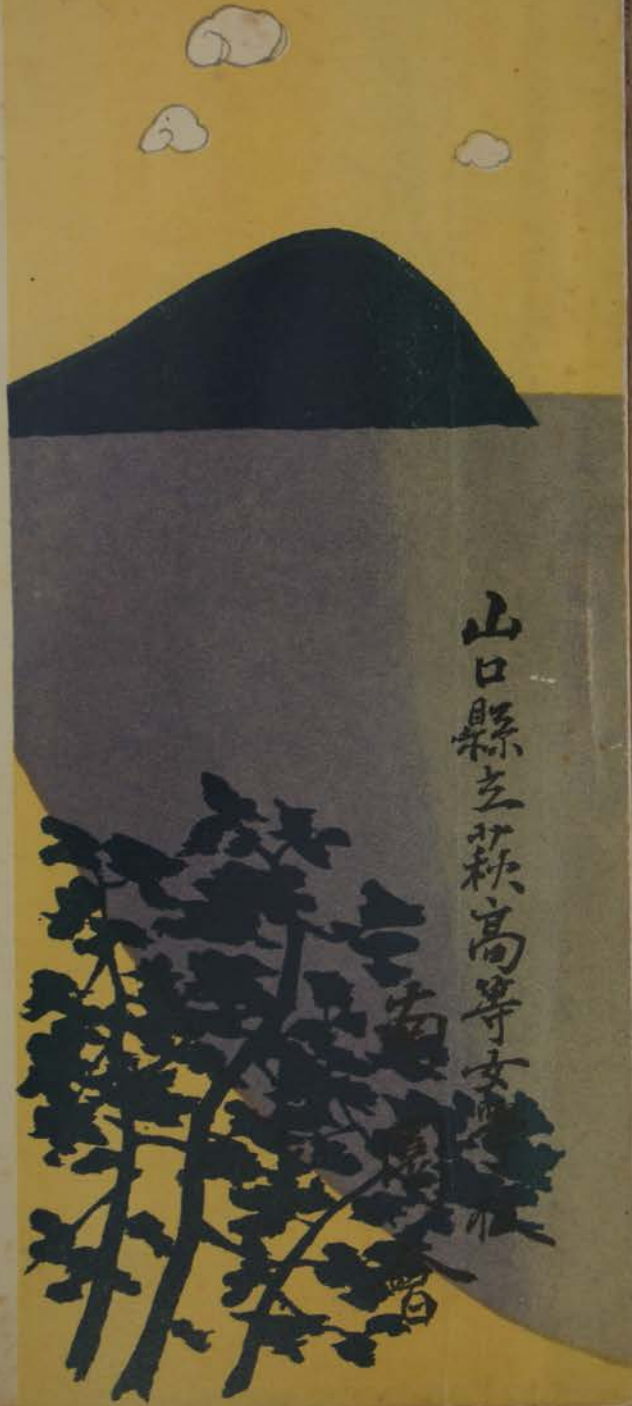
南園會誌

第二十號

創立二十周年紀念

任所訂正

三月



山口縣立萩高等女學校

南園會誌

南園會誌

第十二號



山口縣立萩高等女學校

目次

▼口 繪

- 一、二十周年記念式 長官告辭……………(コロタイプ)
- 一、第二十回卒業生(本科)梅組……………(同)
- 一、第二十回卒業生(本科)菊組……………(同)
- 一、第二十回卒業生(實科)……………(同)

▼二十周年記念式記事

- 一、式 辭……………山口縣立萩高等女學校長筒井捨次郎
- 一、告 辭……………山口縣知事 岡田周造
- 一、祝 辭……………山口縣立萩中學校長 河内才三
- 一、祝 辭……………萩市長 豊田勝藏
- 一、祝 辭……………椿東小學校長 河村要一
- 一、祝 詞……………卒業生總代 倉田静子
- 一、祝 辭……………生徒總代 小谷幾子
- 一、祝 電……………
- 一、沿革概要……………

- 一、山口縣立萩高等女學校創立二十周年記念祝賀會に於て……………瀧口 吉良
- 一、慰靈祭……………

▼教の園

- 一、七福神の話……………筒井 若村
- 一、靜に自己を磨きめて……………岡田 千引

▼二十周年記念行事

- 一、概況及各部だより……………(第三、四學年生徒)

▼文の園

記念文藝

- 一、作 文……………(各學年生徒)
- 一、和歌、俳句、川柳……………(同)
- 一、普 通 文 藝……………

▼修學旅行記

- 一、作 文……………(各學年生徒)
- 一、詩、和歌、俳句、川柳……………(同)
- 一、修學旅行記……………(各學年生徒)

▼由縁の園

- 一、隨 感……………齋藤ふみ子
- 一、友よ懐し……………左野 政子
- 一、東京市より……………村田 政枝
- 一、詩……………清水万龜子
- 一、逝ける姉……………岩武 正子
- 一、街に住みて……………大谷 初子

▼學校記事

- 一、學校日誌抄……………
- 一、卒業證書授與式……………
- 一、學藝部だより……………

▼同窓會記事

- 一、萩高等女學校同窓會の動靜について……………
- 一、同窓會々聞……………
- 一、同窓會校外役員氏名……………
- 一、第十九回同窓會總會の記……………大谷 榮子

▼會員名簿

- 一、特別名譽會員……………
- 一、名譽會員……………
- 一、特別會員……………
- 一、舊特別會員……………
- 一、校外會員……………
- 一、在校會員……………

- 一、南園婦人文庫だより……………
- 一、運動部だより……………
- 一、昭和六年度南園會歳入歳出決算……………
- 一、篤志者芳名……………
- 一、研究科規定……………
- 一、會 告……………

朝の海

御製

天地の神にそいのる朝なきの

海のことくに波たゝぬ世を

皇后宮御歌

はつ日かけ海よりいつるのとけさに

年も心もあらたまりけり



辭書官長・式念記年周十二立御

神田 先生
 藤田 先生
 吉村 常子
 粟屋 チエ
 有喜喜久子 阿武 光子
 厚東 光子
 阿田 亮子
 志賀 篤子
 時山 八千枝
 岡山 亮子
 山本 武子
 石金 夏子
 左野 咲子
 岡田 先生
 菅原 静枝
 菊屋 正子
 薄野 芳枝
 池内 先生
 阿武タミ子
 光永 一枝
 厚東 晴子
 兼田 静子
 中野 桃枝
 田中 蓉子
 田中 君江
 黒田 孝子
 北野 先生
 細田 先生
 田村 菊枝
 三月 文子
 山縣 信子
 高洲 ミヅ子
 伊藤 敏子
 大多和ヤミ子
 安藤 美枝
 山田 暎子
 河合 先生
 土屋 先生
 木村 俊子
 久保田ノ子
 伊藤 みづ子
 中村 貞子
 末本 節子
 笠置 先生
 河内 先生
 河野 藤恵子
 松田 喜巳子
 上利 先生
 今道 先生
 今城 先生

吉原 先生 佐伯 由枝 西山アヤ子 藤田好先生 藤田 先生
 神田 先生 松浦 梅子 金子 薫子
 藤田ミツロ 久芳 禮子 清水万輪子
 茂懸 文子 山根ハネ子 安田マサ子
 山不マサ子 西村マサ子 岡 翠子
 細田 先生 小山田サヘ山下 節子 池内 先生
 阿部ツヅ子 佐伯 文子 林ミヅエ 中野 先生
 七根 先生 渡邊野信子 森重 澄子 岡田 先生
 鹿竹 華枝 尾乃 清子 平岡 久子 校長 先生
 令城 先生 山本 聰子 安井 貞子 原田 先生 北野 先生
 池内ミキ 田中文江 高屋 菊枝 河合 先生 土屋 先生
 大田 松江 阿武 滋子 藤村 馨子
 上田 政子 阿部毛ミ子 笠置 先生 河内 先生
 高杉 渡泰子
 赤川 慶子

・ 今道 先生 上利 先生

創立二十周年記念式

式 辭

本日茲ニ本校創立二十周年記念ノ式典ヲ舉行スルニ當リ知事閣下ヲ始メトシテ多數貴賓ノ御貴臨ヲ辱ウスルコトヲ得タルハ本校ノ無上ノ光榮トスル所ニシテ職員生徒一同深ク感謝致シテ居リマス。

本校創立以來ノ沿革ニ付イテハ御手許ニ差上ゲマシタ本校一覽ノ始メニ概要ヲ記述シテ置キマシタカラ後刻之ニ付イテ御覽ヲ願ヒタイノデアリマス。只極メテ重要ナル點ニ付イテ簡單ニ申シマスト大體十年ヲ一期トシテ二段ノ發展ヲナシテ來テ居リマス。

ソノ第一期ハ創業時代幼年時代トデモ稱スベキ時代デ明治四十四年三月阿武郡會ニ於テ實科高等女學校設置ノ件ヲ議決セラレテカラ大正九年四月一日高等女學校ニ組織變更サレルマデノ十年間デアリマス。即チ明治四十五年四月明倫小學校ノ一部ヲ借用シテ授業ヲ開始シ續イテ同年九月校舍ノ落成ヲ見テヨリノ後九年間デアリマス。此時期ハ創立匆々ノコトマテ外部的ニハ大シテ變動モナク過ギマシタ。而シテ此間創業ノ事ニ當ラレタノハ初代校長米原鶴太氏ニシテ我校ノ爲メニ多大ノ後援ヲ賜ツタノハ瀧口吉良氏ヲ始メトスル阿武郡内有志ノ方々デアリマス。又本校ノ設立ノ始メニ創立費及擴張費トシテ母堂及夫人ノ名ノ下ニ多大ノ金品ヲ寄附セラレタ久原房之助閣下モ大ナル恩人デアリマス。

ソノ第二期ハ大正九年四月ヨリ昭和六年三月マデノ十年間デアリマシテコレマデ生徒定員三百名ノ實科高等女學校デアツタ本校方生徒定員五百名ノ本科實科併置ノ高等女學校トナリ着々内容ノ改善セラレルト共ニ設備ノ方面ニモ多大ノ擴張充實方行ハレ押シモ押サレモセヌ縣内有數ノ女學校トナリマシタ。此間ニモ前ヨリ引續キ萩市内阿武郡内有志ノ多大ノ後

授ヲ賜ツタコトハ申スマデモナク又之ニ至ルマデニ久原家ノ後援モ多大デアリマシタ。而シテ此時代ニ當局者トシテ多大ノ貢獻ヲセラレタノガ前校長齋藤彦一氏デアリマス。

ソノ第三期ハ昭和六年四月以後ノコトデアリマシテ生徒定員六百名ニ増加セラレ、十二學級編制ノ縣立デモ本校ノ部ニ數ヘラレル高等女學校トナウタ現今ノ状態デアリマス。之ニ付イテハ既ニ周知ノコトデアリマスカラ多クハ申シマセンガ本計畫ノ爲メ終始多大ノ御盡力ヲ賜リツツアル本校後援會理事各位ヲ始メトシ其他ノ有志ノ方々ニ此機會ニ深ク御禮申シマス。

此間ニ是非申シ上ゲタイノハ大正十五年五月三十日 今上陛下立セラレ立派ナ卒業生モ三千餘名ヲ數フルニ至ツタノデアリマス。此跡ヲ承ケ繼イダ吾等職員並ニ生徒一同ハ日夜勵精致

創立二十年記念式次

一、生徒、同窓會員、職員入場	二、來賓	三、長官	四、一長	五、學式	六、唱歌	七、勸語	八、唱歌	九、學式	一〇、來賓	一一、同窓會員	一二、在校生徒	一三、勸語	一四、勸職員	一五、校總職員	一六、閉式	一七、來賓	一八、職員、同窓會員、生徒順次退場
代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代	代
同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立	同起立

下ガ 皇太子殿下デアラセラレタル時當地行啓ノ嗣リ本校職員生徒一同方御親臨ノ光榮ニ浴シタコトデアリマス。コレ本校ノアラン限り永ク肝銘スベキ事デアリマス。

最後ニ一言附ケ加ヘタイノハ本校創立以來本年三月末日マデ滿二十年間勤務主任トシテ盡力セラレタ甲野貞介先生及ビ大正六年以來滿十五年間本校ノ爲メニ盡力セラレタ池上岩太郎先生ノ功績ニツイテデアリマス。即チ本校ハ初代二代ノ校長及ビ此等ノ先輩各位ノ御努力ニヨツテ今日見ル如キ光彩アル校風モ樹

シマシテ名譽アル本校ノ歴史ヲ汚サナイ様慾ヲ言ヘバ更ニ一段ノ光輝ヲ加ヘル様致シタイコトハ我等ノ切ナル念願デアリマス。來賓各位卒業生諸姉ニ於カセラレテハ本校ノ爲メ一層ノ御同情ヲ賜リマシテ益々其ノ發展ヲ圖ラシコトヲ切望スル次第デアリマス。

昭和七年十一月一日

山口縣立秋高等女學校長 筒井捨次郎

告 辭

本日茲ニ山口縣立秋高等女學校創立二十周年記念式ヲ舉行セラルヘニ方リ一言所懐ヲ陳ベテ祝意ヲ表スルハ洵ニ欣快トスル所ナリ

念フニ本校ハ明治四十五年阿武郡立實科高等女學校トシテ設立セラレ爾來幾多星霜變遷ヲ經タリト雖モ常ニ時世ノ進運ニ策應シテ經營宜シキニ適ヒ校舍設備内容共ニ比年充實シ校運益々隆昌ニ趨キ卒業生ヲ出スコト二千餘名ニ達シ各社會ニ

貢獻スル所尠カラザルハ誠ニ慶賀ニ堪ヘザルト共ニ既往關係各位ノ勞績ニ對シ感謝措ク能ハザル所ナリ
惟フニ今ヤ我國ハ思想界經濟界ニ將タ國際關係ニ於テ頗ル重大ナル時機ニ直面セリ即チ國民相率ヒ自奮自勵以テ難局ヲ打開シ更生ノ實ヲ擧ゲ進ンデハ新文化創造ノ爲我民族獨自ノ使命ヲ顯揚スルタメ一層ノ緊張ヲ要スルノ秋殊ニ婦人ノ覺醒發奮ニ俟ツベキモノ尠カラズ則チ子女ノ教養家庭生活ノ改善社會風教ノ振肅國民體位ノ向上等之ヲ婦人ノ力ニ依頼スル所甚大ナリ

庶幾タハ職員各位並生徒諸子本日ヲ記念シ既往ヲ回想スルト共ニ深ク國家ノ前途ヲ思念シ精勵格勸各其ノ本分ヲ全ウシ
學校一致更ニ清新ノ意氣ヲ以テ校運ヲ進展ヲ圖リ以テ國運ノ隆昌ニ貢獻セラレムコトヲ
一言以テ告辭トス

昭和七年十一月一日

山口縣知事 岡田周造

祝辭

山口縣立萩高等女學校、本日ノ吉辰ヲトシテ、創立二十周年ノ式典ヲ舉ゲラレ、洵ニ聖代文化ノ象、祝福セズンバアル
ベカラズ。惟フニ本校ノ濫觴ハ、明治四十五年四月郡立實科高等女學校トシテ創建セラレ、爾來春風秋雨、此ニ二十年ヲ
經過セリ。惟フニ創業固ヨリ難ク、守成亦易キニアラズ。紹述繼承此ニ至ル、其ノ間、地方文化ノ啓發ニ、家庭黨化ノ事
業ニ、覆育誘掖ノ功績大ニ見ルベキモノアリ。二十年ノ辛酸又思ハザルベカラズ。夫レ本校ハ阿武ノ清流滔々トシテ流ル
ル處、嘗テ舊藩科學研究實驗ノ地トシテ、新興學術ノ發祥地タル南園館ノアリシ地ナリ。ソノ流風ヲ掬シ遺韻ヲ汲ミ、校
基益々堅ク校風維レ揚リ、曩キニハ南園婦人文庫ノ新築成リ、今ヤ運動場ハ擴張セラレ、學級ハ増加シ、校舍又増築工事
中ナリ。洵ニ盛ナリト云フベシ。

惟フニ世相ハ、輕佻危激浮華放縱ナルモノアリ。コレ聖代ノ悞事ト云フベシ。斯ル時ニ當リ、勤儉貞淑ナル賢母良妻ヲ
要スルコト切ナルヲ覺ユ。本校ノ任ヤ大ナリトイフベシ。夫善々タルモノハ莠、君子ノ見テ以テ樂シム所ノモノ、翼クハ
炳乎タル過去ノ歴史ニ鑑ミ、益々ソノ聲譽ヲ發揚シ、薰化ノ功ヲ收メ、江湖負托ノ重キニ負カザランコトヲ、此ニ聊カ蕪

辭ヲ述ベテ祝辭トナス。

昭和七年十一月一日

山口縣立秋中學校長 河内才三

祝辭

茲ニ本校創立記念式ヲ舉行セラルルニ際シ一言祝辭ヲ開陳シ得ルハ余ノ洵ニ欣快トスル所ナリ

本校ハ明治四十五年ノ創立ニ係ハリ爾來年ヲ逐ウテ次第ニ規模ノ大ヲ加ヘ又内容ノ充實ヲ遂ケ其ノ間郡立ヨリ進ンデ縣
立ニ昇格シ校運愈々隆昌ヲ告ゲテ茲ニ二十周年ノ吉辰ヲ迎ヘラル、ニ至レリ

願ミルニ本校ハ其ノ學風極メテ堅實ニシテ醇美敢ヘテ時流ヲ趁ハス又舊套ニ泥マス克ク時代ノ要求ニ副ヒテ女子教養ノ
本旨ヲ全ウシ創立以來已ニ二千餘人ノ卒業生ヲ出シタルハ國家社會ノ爲貢獻セラル、所實ニ多大ナリト謂ハザルベカラズ
惟フニ國運ノ進展ハ女子教育ノ振興ニ俟ツ所頗ル多シ蓋シ一般婦人カ克ク世運ノ進歩ニ適從シ強キ自覺ト自奮ノ下ニ益
々婦德ノ涵養ニ局メ以テ流ニ良妻賢母ノ實ヲ舉グルニ至ラムコトハ之ヲ國民思想ノ上ニ階フルモ之ヲ國家經濟ノ上ニ鑑ミ
ルモ洵ニ喫緊ノ要務タラハルヘカラサルナリ冀ハ本校職員諸君並ニ生徒諸子深ク念ヲ茲ニ輸シ彌々其ノ業ニ勵ミ以テ上述
ノ目的ヲ達成スルニ遺憾ナカラムコトヲ

終リニ臨ミ益々本校將來ノ盛運ヲ祈リ以テ祝辭トス

昭和七年十一月一日

萩市長豊田勝藏

祝辭

秋空一碧錦繡山野ヲ包ムノトキ茲ニ山口縣立萩高等女學校創立二十周年ノ盛典ニ列シ願ミテ多年ノ效績ヲ稱ヘ更ニ將來ノ進展ヲ念ヒ慶シテ慶祝ノ微衷ヲ表ス

昭和七年十一月一日

椿東小學校長 河村要一

祝詞

緑ノ影永久ニ茂リアイテ志都岐ノ礎世々ニ榮エ阿武ノ川波濤々トシテ御代々々ノ聖恩ニ浴スル菊花菫都ノ今日シモ我ガ懐シノ母校ニ於セラレマシテハ數多貴賓ノ御臨席ヲ辱ウシテ茲ニ創立二十周年記念ノ式典ヲ舉ゲサセラレル事トナリ數ナラス私共マデ同窓生トシテ此ノ榮アル席ニ列ナル事ノ出來マシタ事ハ誠ニ感激ノ極ミデゴザイマス。

願ミマスレバ明治四十五年ノ春明倫小學校敷地ノ一部ニ創建サレマシタ阿武郡立實科高等女學校コソハ我ガ母校ノ基礎デゴザイマシテ同年六月校舍ノ新築成リ輝カシイ前途ヘノ第一歩ヲフミ出シタノデゴザイマス其後大正九年高等女學校ト

組織ヲ變更サレ、サラニ大正十二年ニハ縣ニ移管サレ山口縣立萩高等女學校ト改稱サレテ今日ニ及ンダノデゴザイマス。コノ間敷地ノ擴張校舍ノ増築ハ勿論内容外觀共ニ益々充實サレ校運ハ年ト共ニ隆盛ニ赴キ校風ハ月ト共ニ發揚サレ今ヤ學藝方面體育方面共ニ縣下何レノ學校ト比スルモ決シテ劣ラヌ境地ニ進展シテ參ツタノデゴザイマス。カクモ目覩シイ校運ノ隆昌ヲ來シマシタノハ時代ノ趨勢トハイヘ偏ニ關係當局方々ノ御盡力ト地方有志方々ノ限りナキ御後援ト更ニ歴代ノ校長先生ヲ始メ諸先生方ノ御盡力ト御苦心ノ賜デゴザイマシテ私共卒業生トシテ深ク感謝ノ念ニ堪ヘナイト同時ニ今更ノ如ク一路報恩ノ念ニ燃ユル次第デゴザイマス。

今ヤ我ガ國現下ノ情勢ヲ視マスニ外ニハ對滿對支對聯盟等ノ難問題アリ、内ニハ經濟界不況國民思想動搖ノ傾向アリ、更ニ内外多事多難ト申スベク我等國民ヲ舉ゲテ難局打開ニ努力スベキ秋デゴザイマス。恰モコノ時代我ガ懐シノ母校ガ本日ノ式典ヲ舉ゲサセラレマシタ事ハ私共ニ重大ナル意義ト無限ノ力強サトヲ感ジサセラレルノデゴザイマス。私共ハ國家ノため社會ノため將又内助ノため今後益々婦徳ノ涵養ト知識ノ收得トニ精進シテコノ光輝アル母校ノ歴史ヲ更ニ發揚スベク念ジテ止マナイ次第デゴザイマス。

聊カ蕪辭ヲ述ベテ祝詞トイタシマス。

昭和七年十一月一日

山口縣立萩高等女學校卒業生總代

倉田靜子

祝 辭

四方ノ山々錦繡ノ色ヲ裝ヒ、阿武ノ流モイヨク澄ンデ参リマシタ好季節ニ當リ、茲ニ本日ノ佳辰ヲトシ、知事閣下ヲ始メトシ、數多來賓ノ御來臨ヲ賜リ同窓會員多數出席ノモトニ、本校創立二十周年ノ吉典ヲ舉行セラレマスコトハ、我等五百ノ乙女達ノ限り知レヌ感激ニ滿サレタ喜ビデ御座イマス。

願ミマスレバ明治四十五年ノ春、由緒深キ南園ノ跡ニ實科高等女學校トシテ呱呱ノ聲ヲアゲ、爾來幾星霜時勢ノ推移ト共ニ大正十二年縣ニ移管セラレマシテ今日ノ隆盛ニ至ツタノデ御座イマス。コレモ偏ニ當局方々ノ周到ナル御指導御經營ト、歴代校長先生ヲハジメ諸先生ノ獻身の御努力、先輩ノ方々ノ母校愛ノ賜物トニヨリマスモノト、今更ナガラ感謝ノ念ヲ禁ジ得ナイノデ御座イマス。

ソレニツキマシテモ私共ハ此ノ盛典ニアヒ、日ニ月ニ榮エ行ク南園ノ學ビヤニ、恩師ノ御懇篤ナル御教導ノモトニ、先輩ノ姉君達ノ殘シ置カレマシタ美シイ行跡ヲ慕ヒナガラ學ビノ道ニイソシムコトノ出來マスコトハ何トイフ幸福ナコトデ御座イマセウ。

思ヘバ近時ノ我國ハ我等ノ狭キ見聞ノ中ヨリ考ヘテミマシテモ内外殊ニ多端ノ重大時局ト思ハレマス。此ノ際ニ於テ學ビノ道ニイソシム私共ハ將來ニ向ツテ大キナ責任ノアルコトヲ覺悟シ、益々德操ヲ磨キ、學藝ヲ修メ、心身ヲ鍛ヘ、明ク清ク直ク一條ニ伸ビテ善良ナル校風ヲ發揮シ、二十年來ノ歴史ニ一層ノ光彩ヲ添ヘタイト念ジテヤマナイノデ御座イマス。コノ芽出度クモ亦輝カシイ意義深キ盛典ヲ機會トイタシマシテ、更ニノ新シイ覺悟ヲ以テ確乎タル歩ミヲ踏ミ出シ、ソノ將來ヲ誓フト共ニ今後益々本校ノ發展ヲ祈ル次第デ御座イマス。茲ニ生徒一同ニ代リ一言ヲ述ベテ祝辭ト致シマス。

昭和七年十一月一日

山口縣立秋高等女學校生徒總代

小 谷 幾 子

祝 電

懷舊ノ感深シ貴校ノ隆盛ヲ賀ス
御盛典ヲ祝ス
二十年祝典ヲ祝ス
御盛典ヲ祝シ貴校ノ御隆盛ヲ祈ル
御盛典ヲ祝ス
遙カニ御盛典ヲ壽グ
御盛典ヲ祝ス
御盛典ヲ祝ス
御盛典ヲ祝ス
御盛典ヲ祝ス
御盛典ヲ祝ス
謹ミテ記念式ヲ祝シ母校ノ發展ヲ祈ル

米原鶴太郎 齋藤彦一 山本英松 三矢富治 吉富憲三 厚狹高等女學校校長 岡村憲三 岩國高等女學校校長 森要之助 長府高等女學校校長 山中文彦 田部高等女學校校長 山近曹一 船木實科高等女學校校長 野田高等女學校校長 野村吉次郎 島根縣女子師範學校 玉置文 同窓會東京支部

- 一、明治四十四年三月阿武郡立實科高等女學校設置ノ件阿武郡會ニ於テ議決本部出身兵庫縣武庫郡本山村故久原文子氏創立費トシテ金壹萬圓寄附
- 一、明治四十四年九月八日本校設置認可修業年限三ケ年ノ實科ヲ置キ生徒定員ヲ參百名トス
- 一、明治四十五年四月一日開校山口縣視學米原鶴太本校長トナル
- 一、大正元年九月校舍建築落成ス
- 一、大正二年四月補習科（修業年限一ケ年）設置
- 一、大正三年一月十七日勅語贈本ヲ下賜セララル
- 一、大正四年十月二十八日大正天皇御眞影ヲ下賜セララル
- 一、大正五年十二月兵庫縣武庫郡本山村久原清子氏本校擴張費トシテ金貳萬圓寄附
- 一、大正六年二月五日 皇太后陛下御眞影ヲ下賜セララル
- 一、大正六年十二月二十七日 今上天皇御眞影（皇太子殿下御當時）ヲ下賜セララル
- 一、大正七年一月校地擴張并ニ校舍建築落成ス
- 一、大正七年五月二十七日校長米原鶴太山口縣都濃郡立都濃高等女學校長ニ轉任同年五月三十一日山口縣視學齋藤彦一本校長トナル
- 一、大正八年七月久原清子氏本校理科教室ノ改造擴張并ニ備品費トシテ金六千圓寄附
- 一、大正九年四月學校組織ヲ變更シ山口縣萩高等女學校ト改稱シ修業年限四ケ年ノ高等女學校ニ修業年限二ケ年ノ實科ト修業年限一ケ年ノ補習科ト併置シ生徒定員ヲ本科實科合シテ五百名補習科ヲ三十名トス
- 一、大正十年三月郡費ヲ以テ三教室ヲ増築ス
- 一、大正十一年九月郡費ヲ以テ六教室ヲ増築ス

- 一、大正十二年四月縣ニ移管シ山口縣立萩高等女學校ト改稱ス
- 一、大正十三年四月補習科ヲ廢止ス
- 一、大正十五年五月三十日職員生徒一同 皇太子殿下ノ御親閱ヲ受ケ
- 一、昭和三年十月十六日 今上天皇陛下 皇后陛下御眞影ヲ下賜セララル
- 一、昭和四年四月十六日校長齊藤彦一願ニ依リ其職ヲ免セララル
- 一、同日山口縣立宇部高等女學校校長兼教諭筒井拾次郎本校校長兼教諭ニ補セララル
- 一、昭和四年十月六日南園婦人文庫新築落成ス
- 一、昭和六年一月三十一日 今上天皇陛下 皇后陛下御眞影奉還
- 一、昭和六年二月七日 今上天皇陛下 皇后陛下御眞影ヲ下賜セララル
- 一、昭和六年四月一日本科定員四百名ヲ六百名ニ増加實科定員百名ヲ廢止ス

山口縣立萩高等女學校創立二十周年記念祝賀會に於て

瀧 口 吉 良

秋天晴朗纖翳なく菊花馥郁芳香を放つ秋に於て、茲に本日をトシテ本縣立萩高等女學校創立二十周年記念祝賀會を舉行せらるゝに當り、不肖の私も此盛典に御招待を蒙りたるは、寔に光榮と存する次第であります。先頭筒井校長費下より私にも本日何か祝辭を述ぶる様にとの御交渉を受けましたが、私は本來腹笥空しくして何も御話

の材料を持ちませんけれども、一言其實を塞ぐ爲に温故知新の意味に於て、滿堂諸君の御清聽を煩はさんと欲します。
先づ本縣立萩高等女學校の前身たる阿武郡立萩實科高等女學校創立の遠因に遡つて見ますに、明治三十二年六月一日の明倫小學校校長安藤紀一君が、阿武郡小學校教職員の決議を代表して萩地方に高等女學校設立のことを提唱して、其陳情書を當局に提出せられたのが原因であります。

爾來幾多の歲月を経過して明治四十三年に到り、阿武郡會より時の阿武郡長へ左の建議を提出したのであります。

建議書

刻下の奎運に鑑み本郡に高等女學校の必要を認む右設立に關する調査をなし適當の時機に於て本會に附議相成度右及建議候也

明治四十三年三月四日

山口縣阿武郡長 藤 富 嘉 作 殿

山口縣阿武郡會議長 澁 口 吉 良

於斯機運漸く相熟し來り會ま久原文子刀自が巨萬の資金を義捐せられたるが動機となり、阿武郡立萩實科高等女學校設立の運びに立到り、明治四十四年九月八日其筋より設立認可を受け、其學科修業年間に三ヶ年として大正元年六月より始業せしむ

御諒閣の爲開校式は延期せられて翌大正二年十一月六日を以て盛大に執行せられました。

其當時の郡の行政代議兩機關の要路に立つ人士の間に於ては一場の座談として所謂良妻賢母と云ふも何だか大袈裟に聞だるので農村本位の世話女房を養成する位の程度が可ならんかと互に其意見を交換したこともありまして。

然るに奎運の進歩時代の要求に促がされ又制度の變革に伴ひ種々の經路を辿りて、大正九年四月には四年制の本科を設け實科の修業年間に二年に改め、別に一年制の補習科を置き大正十二年四月には郡立より縣立に移管し、昭和六年四月實科を廢止し、本科定員四百名を六百名に増員して現在の本科在學生徒無慮五百名に垂んとする盛況を呈し、情ら往時を追憶すれば實に隔世の感があります。

さて舊藩主毛利公の南園御殿の一廓を本校の敷地として公府家より分讓せられたる高義と、其間に隱然斡旋せられたる故井上馨侯の任俠とは、彼の久原刀自の義捐金の美舉と共に等しく本校の深く徳とし譲られざる事柄に屬すると同時に、大に誇とせらるゝこと、信ずるのであります。

さて又餘談に涉りますが久原家より巨萬の金圓を義捐せられたる當時に、故増山宗史氏と私が兵庫縣武庫郡本山村久原家の本邸を訪問せる際暫らく應接の間に待たせられ、良ありて主人房之助君が接見せられて直ちに私共兩人を持佛堂の次の間に案内せられ、母堂文字刀自を茲に導かれ祖先の靈前に點燈せられて主人より母刀自の名に於て萩實科高等女學校建築費寄附のことを奉告せられて後其金券を交附せられたので、此刻那私共兩人は感慨無量共に暗涙を催し衷心より感謝の誠意を表しました次第であります。

終に臨んで本校が其特色を發揮して、聖代の奎運に寄與し以て將來益々隆盛に赴かんことを祝福致します。

慰靈祭

十一月三日午前十時から南國會主催のもとに、故本校職員生徒並に卒業生諸姉の靈を講堂内の祭場で祭ることになりました。

學校長の祭辭並に慰靈詞及物故者芳名等は次の通りであります。

慰靈祭次第

- 一、生徒、同窓會員、職員入場
- 二、遺族入場
- 三、學校長入場
- 四、神官着席
- 五、開式ノ辭 (物故數報告)
- 六、修被
- 七、降神式
- 八、獻饌
- 九、祝詞
- 一〇、學校長祭辭
- 一一、同窓會員總代慰靈ノ辭
- 一二、在校生總代慰靈ノ辭
- 一三、玉串奉奠禮拜
- 遺族總代
- 學校長



慰靈祭祭場

職員總代

同窓會員總代

在校生總代

- 一四、撤饌
- 一五、昇神式
- 一六、遺族總代挨拶
- 一七、閉式ノ辭
- 一八、學校長、遺族、職員、同窓會員、生徒順次退場

慰靈祭、祭主祭辭

昭和七年十一月三日山口縣立秋高等女學校南園會長筒井捨次郎誠惶頓首謹シテ清酌庶羞ヲ供ヘ恭シク故本校職員生徒並ニ卒業生百九十三柱ノ神靈ニ告グ

明治四十五年四月本校創立以來二十回ノ星霜ヲ送迎シ校運日ニ進ミ月ニ展ビ今ヤ生徒定員六百名校地校舍創立當時ニ倍スルモノアリ卒業生ヲ出スコト二千有餘名各賢母良妻才媛トシテ使命ニイソシメルニ鑑ミ過去ヲ追懷シ前途ヲ祝福センガ爲メ屢ニ多數貴賓ノ來臨ヲ得テ二十周年祝賀ノ式典ヲ舉行セリ然ルニ顧ミテ各位並ニ諸師在世ノ往時ニ思ヒヲ走スルニ及ビ暗然トシテ涙下リ追憶ノ念禁ズベカラズ茲ニ多數遺族ノ臨席ヲ乞ヒ職員生徒同窓會員相會シ慰靈ノ祭典ヲ舉グ

惟フニ各位並ニ諸師前途有爲ノ材ヲ抱キ或ハ天職ニ或ハ營業ニ勉勵シ寄與矚目セラルル所多大ナルモノアリシニ倏チニ

昇天セラル今ニシテ懐ヘバ往時夢ノ如ク轉タ人生ノ朝露ノ如キヲ覺ユ靈前ニ立テバ當ニ茫乎トシテ哀愁思慕ノ至情油然タルノミ然リト雖モ本校ノ發展及ビ過去ニ於ケル社會的貢獻ハ全ク各位並ニ諸姉ノ遺芳ニ負フ所甚大ナリ其ノ跡ヲ承繼セル吾等各位並ニ諸姉ノ遺志ヲ繼ギ教育修學ノ事ニ專念シ 上ハ聖旨ノ万ニ對ヘ奉リ下ハ社會風教ノ振興ヲ圖ランガ爲メ魯鈍ニ鞭チ日夜兢々トシテ奮勵セントス庶幾クハ各位並ニ諸姉靈界ノ高キニ在リテ吾等ノ爲メ深甚ナル冥護ヲ垂レ給ハンコトヲ

慰靈ノ詞

昭和七年十一月三日、コノ日母校ノ創立二十周年ヲ記念セラル、行事ノ一トイタシマシテ、今ハ已ニ亡キ數ニ入ラレマシタ先生ヤ、卒業生ヤ、生徒ノ方々ノ慰靈祭ヲ行ハレルニ方リマシテ 謹シデ亡キ皆様方ニ申上ゲマス。

願ミマスレバ二十年ノ昔、私共ノ母校ガ呱呱ノ聲ヲ舉ゲマシタノハ、アノ昔乍ラノ松ガ枝メグル明倫小學校ノ構内デ御座イマシタ。其ノ後今日マデ幾變遷ヲ經テ來タコトデ御座イマセウ。其ノ間次第ニ校舎モ立派ニナリ、設備モ整ヒ、又内容モ充實シテ參リマシテ、校運ノ榮エユクウチニ、コノ度二十周年ヲ迎ヘルコトガ出來マシタノハ、誠ニ私共コノ學ビヤニ育チマシタモノニ取ツテ、何ヨリノ喜ビデ御座イマス。

然シコノ喜ノ中ニモ只一ツノ悲シイコトハ、同ジ學ビヤニ共ニ學ビ、共ニ導カレマシタ皆様方トコノ度ノ二十周年ノ御祝ヲ共ニスルコトノ出來ナイコトデ御座イマス。今日ハ皆様ノ御靈ヲ御招キ致シマシテ、學校ノ有様ヲ御覽ニ入レル次第デ御座イマスガ、皆様モ幽明境ヲ異ニシテハ居ラレマシテモ、キツト母校ノ今日ノ隆昌ヲ御喜ビ下サルコト、信ジマス。ソレノミナラズ、母校ノ今日ノ榮エマスソノ事ガ、スデニ皆様方ノ御加護ニ依ル事ト思ヒマス。

ドウゾ皆様モコノ度ノ祝賀ニ御加ハリ下サリマスト共ニ今後モ益々校運ノ發展シマスマヤウ、コノ上トモ御守護下サルコトヲ御願ヒ致シマス。

二千餘名ノ同窓會員ニ代リマシテ無辭ヲ連ネテ慰靈ノ詞ト致シマス。

昭和七年十一月三日

山口縣立萩高等女學校同窓會會員總代

下 間 靜 子

慰靈ノ詞

南園ノ園生ニ菊ノ香モ高キ霜月三日、謹シデ今ハ亡キ師ノ君達、イトホシキ姉君達ノ尊キ御靈ノ御前ニ小サキ乙女ノ胸ニ心ヲ込メテ祭ノ詞ヲ申上ゲマス。

ア、懐シキ思出ノコソロヤ、風ノ朝雨ノ夕在リシ御面影ハ何時マデモ夢忘ル、事ナク、數々ノ教子ヤ懐シキ友皆ノ片時モソノ胸ヲ去ラナイノデアリマス。サリナガラ哀レ今ハ早ヤ悲シクモ幽明境ヲ異ニシテ何時ノ世ニカ又相見マキラスル事ノ叶フベキカ。凡ソ生キトシ生ケル者ノ逃レ難キ世ノナラヒトハ言ヘ、盡キヌ恨ミ嘆キヲ今更ノ如ク深ク感ジラレルノデ御座イマス。

今日ハ南園會主催ノ下ニ遺族ノ方々ノ御參列ヲ得テ、殊ニ嚴カナル慰靈祭ヲ、校長先生諸先生ヲハジメ奉リ、同窓會員

ノ御姉様達ト御一緒ニ打揃ウテ行ハセラレル事トナリマシタ。祭ル神在マストカ、願クバ萬歳此所ニ集ヒ給ウテコノ祭典ヲ見ソナハシテ頂キタウ御座イマス。

此ノ學ビヤノ庭モ皆様方ノ御心ヅクシノモトニ、健ヤカナル生立チヲ續ケ、質實剛健ナル校風ノ光ガイヤガ上ニモ御イデ、開校二十周年ノ祝賀ノ盛典ヲメダタク舉ゲリセラレマシテ學校ヲ舉ゲテノ此ノ榮、コノ喜、實ニ何物ニモ代ヘラレマセン。コノ嬉シサヲ今ハ亡キ皆様ノ尊靈ノ前ニ先ヅ告ゲマホラセ、此ノ喜ビヲオ分チ申上ゲタイノ御座イマス。是モ偏ニ今ハ亡キ師ノ君、姉君タチノ過ギニシ御努力ノ賜ト深ク感謝申上ゲネバナリマセン。

先輩ノ皆様達ノ御後ニ歩ヲ續ケテ學ビニイソシンデ居マス私共ハ、一入學業ヲイソシミ、修養ニ努メ、意キ此ノ學ビヤノ歴史ヲ汚ス事ナク勉メ勵ンデ、本校ノ歴史ニ一層ノ光彩ヲ添ヘテ行キタイト誓ツテ居リマス。誠ニ心アフレル思ヒハ盡サレズ、千萬無量ノ感懷ガ次々ニ湧キ出ルノヲ止メル事方出来マセン。

仰ギ願クバ神靈永ヘニ安ラケクシテ、本校並ニ我等ノ前途ニ光明ヲ與ヘ給フヤウ願ヒ上ゲマス

誠ニ拙キ言葉デハ御座イマスガ一言申上ゲテ慰靈ノ辭ト致シマス

昭和七年十一月三日

山口縣立萩高等女學校生徒總代
中 村 正 子

物 故 者 芳 名 (總數百九十三名)

(特別名譽會員)

久原 文子

(名譽會員)

増山 宗史

岡 十郎

岡 乙次郎

楨 俊治

(舊特別會員)

田中タカヨ

松田 ハル

本水 旭

河村タケヨ

中津江延彦

福島 城清

中村 彌兵

長濱 友雄

(校外會員) 第一回卒業生(實科)

山本 政子

松本 早知

田中 冬子

田邊 ハル

倉田 チヨ

島田 壽美

堀 千代

小野 恭

安達 ハツ

山下 カメ

河村タミ子

第三回卒業生(實科)

河野ミツ子

君谷喜興子

田中フミコ

倉増千代子

倉田 尊子

黒瀬キミコ

松原 ツル

三浦 ヨシ

榎原マサミ

溝部 ハル

大賀 政

安田 ヨシ

河村 豊子

第四回卒業生(實科)

藤原 久枝 山下マタコ 北村 光子 前田トミコ 浮里ミヨコ 野村 マツ
 齋藤 キク 堀 綾子 齋藤ヤスコ 山本チヨコ 堀 君代 阿武ミユキ
 堀 壽子 吉岡タケヨ 上田 ツル 中原 俊子 野村 文子 植村 操
 河村 千代

第五回卒業生(實科)

三島 コウ 師井 アイ 厚東 ヨシ 池田 京子 中島ヨシコ 田中 静子
 木村 静枝 杉村 サヨ 溝部ヘナコ 草刈 政子 藤田ハツセ 増山ウメ子
 第六回卒業生(實科)

粟田 鹿子 堀永 ヲタ 中村 貞子 末成 清子 波多野ナツ 村上 ウメ
 大庭ヨシ子 田總イセコ 白石 壽子 伊藤 花子 中山 壽子 田村 トミ
 第七回卒業生(實科)

山中 繁 井町ヒサコ 松浦キミ子 中村 花子 大賀 ヒデ 今地 ヒデ
 厚東 美恵 宮木 信子 森田ミチコ 堀 梅 溝部ウメ子 半井 嘉子
 第八回卒業生(實科)

五峰ヨシコ 林 春枝 仁尾 玉 河野ユキコ 横山ミチコ 高須ナヲコ
 竹内 恒子 高橋 キク 田坂アヤコ 八木 房子 北野ツネコ 宮本マヌエ
 重岡 キヨ 平田ウメヨ 小島 繁子

第九回卒業生(本科)

小池キヨコ 小島 貞子 山根 静子
 第九回卒業生(實科)
 上野ユキ子 波多野トミ子 三上ヨシコ 御手洗峰子
 第十回卒業生(本科)
 大田 キク 河村千代子 瀧口 静子 村上 コト 大和 直子
 第十回卒業生(實科)
 植村 親 藤原 静子 村木 勝子

第十一回卒業生(本科)
 阿武 米子 石井 フサ 木原 花子 桑原 サヨ 村橋 元子 安間アヤコ
 第十一回卒業生(實科)
 大石 ヲヤ 小島 秀子

第十二回卒業生(本科)
 元山 初子
 第十二回卒業生(實科)
 武藏屋梅子

第十三回卒業生(本科)
 江川 利子 木谷美壽子 佐伯 尚子 篠原 光 大岡 高子 熊谷 愛子
 石川ナツ子 岡本トシエ 田中 花子 長井 龜代 長村 ウメ 林 吉子

- 第十三回卒業生(實科)
 - 大草 操 佐藤ヤス子
- 第十四回卒業生(本科)
 - 服部クマ子 河野マツ子
 - 福島 靖子 松本キクノ
- 第十四回卒業生(實科)
 - 河村美登利
- 第十五回卒業生(本科)
 - 林 光子 山本 淑子
- 第十五回卒業生(實科)
 - 山村 八重
- 第十六回卒業生(本科)
 - 倉重千代子 佐伯 文子
- 第十七回卒業生(本科)
 - 佐伯千代賀 秋山 敏子
- 第十八回卒業生(本科)
 - 長野 光枝 香川 ミチ
- 第十九回卒業生(實科)
 - 吉村フミ子

- 都築 松代 矢次 清子
- 第二十回卒業生(實科)
 - 山本 竜子 (在學中ノ物故者)
 - 中村ヨシコ 高木千枝子 柳井 育江
 - 竹内 富子 平賀 ナツ 土井 秀子
 - 山川 歌子 原田 セツ 大石 サト
- 西村マサ子 河野 峯枝 高松 幸子
- 山中 操 高木壽美子 大岡ヨシ子
- 小笠原信子 藤本ハル子 山根トシコ

記念行事日程

一、十一月一日(火曜日)	一、記念式(講堂)午前十時三十分	一、生徒作品、ベザリ、食堂(校)	一、十一月三日(木曜日)	一、慰靈祭、遺族、生徒同窓會員(講堂)午前十時—十二時
一、記念祝賀會(祝賀會場)正午	一、展覧會(校)午後一時—四時	一、生徒作品、ベザリ、食堂(校)同上	一、音樂會(生徒)(秋市公會堂)午後二時—四時	一、展覧會(校)午後九時—四時
一、十一月二日(水曜日)	一、學藝會(講堂)午前十時—十二時	一、展覧會(校)午前九時—四時	一、生徒作品、ベザリ、食堂(校)同上	一、音樂會(一般公開)(秋市公會堂)午後七時—九時



教の園

七福神の話

筒井茗村

二四

私は子供のとき生家の茶の間の板戸に張つてあつた仕曆の真中に極彩色で描かれた七福神の繪のことを時々思ひ出す。ろくないでたちの人々が寶船に乗つて居る姿が子供心を強く惹き付けたのであらう。何でもよく問ふ。問屋とあだ名された。私が、田舎の物識りと言はれたお祖母さんに五月蟬く問うて叱られたながら丹念に説明されたことも覚えてゐる。

釣竿を持つてニコ／＼してゐるのが恵比須様、槌を振上げて米俵を踏んで居るのが大黒様、白鬚長く垂れて杖をついて居るのが壽老人、頭の長いが外法様（實は福祿壽のことであるが、私の地方ではその形魔術に用ふる外法頭に似て居るより訛つてかく言ひ傳へられて居る）お腹の大きいのが布袋様、甲冑いでたちの武者姿なのが毘沙門様、琵琶をかゝへた美しいお姫様が辨天様だと言はれたのは今でも覚えて居る。

さて此の七福神は一體どんな神様だらうか、勿論子供のときは俗説のまゝで信じて別に不審もなかつたが、稍物心づいた青年となつた頃より長い間疑問のまゝ別に研究もしなかつたが、最近或る事を調べる序に一寸研究したから諸子の御参考の爲め一寸紹介して見よう。

恵比須様は少彦名命とも言ひ事代主命とも言ふが、普通は蛭子命と言ふことになつて居る。何れにしても古事記にある

神様で古來日本民族の信じた神様である。ニコ／＼宗の開山で釣竿を手にして、鯛を釣上げて喜色満面たる所、快活、樂天、清廉を表し、海國民の特色をも示して居る所、古來大和民族の國民性の或る方面を代表して居るものと言へる。槌かに日本七福神の第一位に置かれる資格がある。

大黒様はもと印度の神大黒天のことであつたのだらうが、神佛混合で字音相通する所から大國主命と附會して今では出雲の神様と言ふことになつて居る。打出の小槌を振り上げて努力次第で福は幾何でも出て来ることを示し、足下の米俵は農業の守護神たることを示し、序に鼠にまで福徳を分たれることを表して居る。農業の勤勞、槌振りの能率的努力、此の二つは槌かに福の源泉である。以上二神は我國民性とよく融合して居るから七福神から、離れても福の神として全國到る所に祀られて居る。

壽老人は支那式の老翁で玄鹿と云ふ千五百年以上の劫を経た鹿を連れて居る所を描かれて居るが、此の玄鹿の傳説からして支那のもので、多分道教あたりの神様でせう。眉も鬚も長く雪白で悠然として俗世間より超越して居るらしい態度は槌に長壽の象徴である。「命あつての物種で」健康と長壽も亦福の大なる要素である。

福祿壽はもと南極老人星の化身で支那宋代に道士となつて現れた人であると言はれて居る。その名の如く福と祿と壽とを兼備した君子で種々の説があるが、智能と信望の表象とされて居るのが真らしい。長い大きな頭の中は知識と経験で満たされ、童眼白鬚少しも邪氣のない所温厚篤實の君子で信望の表徴でせう。智能と信望が福の源泉たることも何人も異論のない所である。因みに私の郷土地方の俗説には前述の通り此の福祿壽のことを頭の形から外法様と云ひ、此頭を用ひて一種の魔術（佛教で言ふ正法でない法）を使ひ福を招き寄せる力のあるものと考へられて居る。これ素より俗間のグロ的迷信で素より取るに足りない説である。

布袋様は支那宋代の禪僧契此のことで、常に大なる布袋を背負ひ便々たる太鼓腹を撫でながら各地を行脚した。我國の

良寛和尚の様に無邪氣無欲で正直で何時までも重心を持ち、度量極めて大きく、人から貰つた物は悉く背の天布袋に入れて子供等と遊ぶとき之を取出して皆んなに分ち與へることを樂にして居たと傳へられて居る。無邪氣無欲、寛大、重心これあれば貧乏でも幸福である。心の福とはこんな所から得られるのであらう。

以上の三神はまだ十分日本化せない支那莫の多い神様で日本では床の置物等には用ひられるが、單獨にこれを神として祠を立てて祭るのは殆んど無い様である。是等ごとくなく我國民性とそぐはない所があるのかも知れぬ。

毘沙門様は又多聞天とも言つて、印度に於ける佛教守護の神様である。其の威容でも分る様に惡魔(私利貪慾)の軍を討ち退け善根(慈悲公益)を施すものを守護すると言ひ傳へられて居る。福の根本はこの世を淨化すること、今日の共存共榮の理想を實現すれば眞に恒久不變の福利を受け得ることを考へ合せて見ると、儘かに此神様も福の神たる資格に申分はない。因に我國では眞言宗などで早くより此神様を輸入して各所に祀つた。殊に大阪の東郊志貴山の毘沙門天の如きは楠木正成の誕生にからんで名高いものである。

辨天様とは印度の辨財天女のことであるが、神佛混合時代に市杵島姫命と附會されて各地の水邊に祀られて居る。其名の辨財天女の中の財と言ふ字のある所に着眼し、福の神金儲の神とせられてしまつたが、元來はその手にせられる琵琶でも分る通り音楽の神様で、その容貌の優雅なると相合して和順、溫雅の徳を表徴されて居られるのである。併し和順溫雅は人類の平和に缺くべからざるものであり、殊に女性の美德として古今東西何れも此徳を讃美する所を考へると福徳の女性的方面の代表者として必要缺く可からざる神様である。因に印度の辨財天女の頭の冠に白蛇模様のある所より此神様の使者を蛇とし、十二支中蛇を表す巳に附會し巳の日に小判形の巳成金と云ふお守を受け、以て福運を招來すると云ふ迷信までも出来上つて居る。尙辨天社の社内に白蛇を飼つて居るもの、その社地域に多數の蛇を放養して居るもの等のグロテスクな風習もある。

説いて突に至ると七福神とは快活清廉、勤勉努力、健康長壽、智能信望、無邪氣寛宏、克己、義勇、溫雅和順等の七徳の表徴と考へるべきである。即ち福の源は徳で、徳を養ふことによつて自然福は得られるが、徳なくして福を求めるとは畢竟迷信であると言へる。自力更生の高唱せられる今日我等は徒らに他力的福運を待望する迷信に陥らず、何處までも修養を積み、徳を修め、先づ自らの心を淨化し自力で合理的に福を求むべきである。

最後に七福神についての一つの傳説を附け加へて置かう。

徳川家康或るとき天海僧正に、天下泰平の秘訣を問うた。僧正即座に答へて曰く、七難即滅、七福即生と。而からは七福とは何か、曰く、清廉、有福、壽命、人望、大量、威光、愛嬌と。家康大いに感じ庶民教育の爲めこれを具體化せしめ畫師狩野某に描かせたのが恵比須(清廉)大黒(有福)壽老人(壽命)福祿壽(人望)布袋(大量)毘沙門天(威光)辨財天(愛嬌)の七神で、七福神の信仰はこれから始まると言ふ説である。併し是は何でもよい事は家康即ち権現様の遺訓とした徳川時代の辭説で、その實足利時代の末頃より信じられたものであると言ふ説が今日では有力である。

靜に自己を凝視めて

岡田千引

綾錦取りかさねても思ふかな寒さおほはむ袖もなき身を

畏れ多くも 昭憲皇太后さまは嚴寒來るとも着るべき着物も持たぬ貧しい身の蒼生を憐れませ給ふて、折にふれての御吟詠にもかくお詠みになつたのであつた。其は丁度明治十二年、今から五十五年の以前の事である。

其後の我が日本の世相は如何に變遷して來たでせうか、日清、日露の戦役を經、世界戦争の後に至つては、世界の五大強國の一から三大強國の一とまで數へられる様になつて來た。工藝文物の進歩、生活様式の變化、凡らゆるものの上に目覺しき發達を遂げて今日に到つたのであるが、扱今靜に現時の世相を再び見れば、あはれ今一度 昭憲皇太后の御歌を繰返して拜誦せずにはゐられぬ事を痛感するのである。

食ふに其の日の糧食あり、寒さを防ぐに十分の着物を持つてゐる。そして雪や雨霜を凌ぐに不足のない家を持つて、しかも學用品だ、小遣錢だと何不自由なく貰ふことが出來て、日々女學校に通つて勉強してゐる皆様や、已に女學校を卒業して猶廣く深く人間學を研究してゐられる先輩の方々にも、餘暇ある折々、靜に自己を凝視めて考へて見る必要はないでせうか？

あゝ私達はかうして達者で、愉快に、勉強もし、働いても出來る事を心から感謝したい。そして愈々益々興へられた自己の天職に向つて努力して進みたいと思ふのです。

禾を鋤きて日午に當る、汗は滴る禾下の土、誰か知らん盤中の餐、粒々皆辛苦なるを。

之は支那唐代の詩人李紳の作であるが、粒々皆辛苦でもよい、兎に角細々でも其の日の生活を續けて行かれれば結構である。働いて行かれれば、まだしも幸福である。今日、日々の新聞を見てゐると、働くにも職なく、食ふにも食べ物がなくて困つてゐる氣の毒な人が日本國內のみにも非常に澤山の人である。驚くべき多數である。

内務省社會局で昭和八年一月二十一日に、昭和七年十月一日の現在の全國失業者推定數を發表されたが、其れによると失業者總數五十三万九千五百五十八人、之を六年同期に比較すると六万四千九百四十五人の激増である。猶その内譯を見ると給料生活者八万八千六百六十八人、日傭労働者二十万七千七百七十人、其他の労働者二十万七千五百二十人であると。(大阪毎日新聞一月二十二日記事、調査人口七百二十二万四千四十三人)

皆様如何です。五十万人の失業者……之等の職を失つて其日の生活にも困つてゐる人々にも、妻もあれば子供もある人々が多勢ある事でせうと思ふ。其等の家族を合算すると失業のために困つてゐる人々の數は随分と多數に上る事でせう。其等の現状を考へる時に、我等は期せずして自己の幸福を感謝し、廣大無窮の皇恩に感激し、専念自己の修徳習業に精進して、家のため世のため國のために一意報いんとする忠孝二道の勵精に志さねばならんと今更の如く思はざるを得ないであらう。

同じ様に机を列べて小學校で習つた學友の中にも、可惜學才はありながらも家の都合で女學校に進めなかつた者が可成り有る事と思ふ。女學校へ入學させれば必ずや天才を發揮して、將來立派な婦人になるであらうと思はれる者が随分ある事と思はれる。左様した境遇の人々のある中から、女學校に日々通學出來うる皆様は何と云ふ幸福な人であらうか？

あゝ有難い、私は幸福だ……と衷心感謝なさい。そして専心勉強に修徳に努めて立派な婦人とおなりなさい。其が第一の孝行でもあり亦忠義でもある。

其は昨年十二月の十二日の事であつた、午前六時頃山口市内のある牛乳屋の主婦が裏の藁小屋から小兒の泣く聲が聞えるので覗いて見ると、其處には生後一年半位の男兒が捨ててあつた。可哀さうに榮養不良で瘦衰へてゐる、古いモスの着物を着せてあつたが、寒さに凍えて泣聲さへも絶えなくであつたのです。恐らくは失業苦のために年の暮も越せないの脊に腹はかへられずして捨てたのであらうが、誠に人生の悲惨事と云はねばなりません。其から越えて本年一月十五日午後十時四十分頃、下關の或る活動寫眞館にモス衾にモスのチャン／＼を着せた可愛い三才位の男の兒が同じく捨ててあつたが、之も矢張り生活に苦しむ人が思ひ餘つて捨てたのであらうか。

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に感ひぬるかな

平 兼輔

燒野の雄子、夜の鶴とか、如何なる人と云へども、自分のお腹を痛めて産んだ可愛い子供ですもの、誰が憎くて捨てる

ものがあるであらう。皆等しく可愛い我が兒である。堪へられるだけ堪へたに相違がない。よし自分は三度の食事を二度に減してでも可愛い我が兒には食べさせてあげたいといふ母性愛は誰にもある。否有り餘る程持つてゐるのが世の中の親の常である。其の親が可愛い子供を捨てるには深い事情もあつたであらうし、よくよくの事でもあらうと思はれる。可愛い我が兒に代ることが出来るならばむしろ自分をと嘆いた事であらうと思ふ。

朝夕の柴の烟も立てかねて嘆きこらむ宿をこそ思へ

貧家に對する限りなき憐愍を垂れさせ給へる 昭憲皇太后のこの御詠を拜誦し奉り、更に右大臣實朝の

いとほしや見るに涙もとどまらず親もなき子の母をたづぬる

の歌を讀む時、捨て兒の親を探して泣いてゐる有様がまさ／＼と一個の幻影となつて現はれて来るではありませんか、おゝその兩眼には涙を一杯に浮べてゐる、猶も大粒の涙が次から次へと溢れ出て来る。私は今これと思ひ浮べたのみで早や胸は一杯になり異様に息塞がる壓迫力を感じざるを得ないのです。

貞享元年松尾芭蕉四十一才の八月、江戸から東海道を上つて伊賀大和地方へ旅をした途中、今の静岡縣富士川の邊りまで行くと、三才ばかりの捨子のしてあるのを見た。そして其のいとも哀れげに泣くのを見て

猿を聽く人捨兒に秋の風いかに

と吟じてゐる。前には物凄いまでに滔々として流れてゐる富士の大河、西には近く日蓮宗の道場岩本山實相寺があり、枝から枝へと猿の飛び傳ひつゝ淋しく啼く聲が聞え、背後には天下の靈峰富士の雪委かうした堤上に捨てられてゐる哀れな捨兒を見た時は、芭蕉ならずとも實に自己天運の拙さを吟せざるを得まいと思はれる。昔も今もかうした不幸な者の多くある中で、其の日／＼が安心の裡に暮せる人々は、神佛の加護豊か幸運兒と感謝せずして何としゃうぞ、私等は自己の今日あるを感謝すると共に、之等多くの不幸な同胞の上に思を廻らすの必要があるのではなからうかと思ふのである。

私達の感覺世界に映り来る世の中は誠に推移變遷の目まぐるしい無常の世界である。

今日もまた暮れぬと鐘の音なり命終ると告げ渡るかも

世の中の牢固ならぬことは流れて浮ぶ水沫泡の如し、と持法華問答抄に日蓮上人は述べてをられるが、誠にその通りで、我等は一日の事は其の日の中に凡てを處理して明日を更に思ひ煩ふの勞を省かねばならぬ。明日は又その日が自己の全世界である。自己最後の一日であると思つて凝念専心に勵むことが必要である。かの芭蕉は自分の常に詠む最後の句は之れ即ち我の辭世の句であると述べてゐるが、我々もかうした信念の下に来る日も亦来る日も精進して行かねばならぬと思はれる。

後の世と聞けば遠きに似たれども知らずや今日もその日なるらむ

之は惠心僧都の姉君の歌で、元且に詠まれしものと、信念に生きるものは明せずして其の思ひを一にするとも云ふことが出来るではありませんか。

失業者でなくとも、又捨兒でなくとも、其日の生活もやつとの事がかつ／＼に暮してゐる者が随分ある世の中である。家貧くして學校に行けない者も澤山にゐる。最近の新聞記事によると、北海道方面には打續く水害飢饉のために三度々々の食事も事を欠き、欠食兒童もその數何万人かある様子、大都會などの裏面に行くと、不況の今日哀れな子供がさぞや澤山ある事と思はれる。

其は大阪市内の某小學校の出來事であつた。五年級の女の兒が、毎日晝食時になると、食事に家へ歸る風を装ふてゐるが、其實家へ歸らずにそのまゝ空腹で押し通してゐたのであつたが、或日體操の時間に強い運動に耐えきれずしてとう／＼運動場に倒れたのであつた。驚いて起して色々看護をし、そして事情を聞くと、其の女兒は昨日より少しも食事を取つてゐないとの事であつた。氣の毒に思つた受持調導が食事を取寄せて與へると、子供は少し喰べたきりで後を殘して

持つて歸らうとするのである。幾らすゝめても喰べやうとしないので深く事情を訊して見ると「私は昨日より食事を取らぬのであるが、母はもう三日も前から食事をせぬので、切角戴いたこの辨當を母に喰べさせたいのです。さぞ母もお腹をすかしてひもじい事せうと思ふと、胸一杯になつて戴けないから……との返事に、訓導も泣けば憐れにみた人々までも貰ひ泣きをしたとの話。

國亂れて忠臣現はれ、家貧しうして孝子出づ。とか云ふ語がある。兎角富家の子女に賢者が少いと云ふは果して何を語つてゐるか、棘の路を行く者には自己の現在を最もよく知つてゐる、そして一路向上の念に燃えてゐるが、常に安易に暮してゐる富める人々の子女には世の中の苦勞を少しも知らぬ。一粒の米粒も皆農夫辛勞の結晶なるを感じない。そして浮々と味もなければ熱もない、燃ゆる固い信念もなければ、強き一路の光明もない、易々樂々の生活を續けて行く、平々凡々の其日を續けて行く。かうした人々が一人でも多ければ多いほど國家としても損害である。有害でなくても少くとも無益の人々である。我等今日の幸福を享受してゐる者はこの點にも深く心を秘めて、氣の毒な人々の多くある中に、何の心配もせず、かうして毎日學校に學び得ることは幸であると感じて、一言の訓戒も叱責もなくとも立派に成業して行く事の出来る人とならねばならぬと思ふ。

富士の山でなくとも其の嶺へ一足飛びに登りつくことはむづかしい。物には凡て順序がある。千里の遠きも一歩々々と意らずに進み行けばこそ、牛の歩みのよし遅くともで、何時か目的地に達する事が出来るのであると同様に、我々が如何なる青雲の志を抱くも其は結構ではあるが、大きな希望を有つのは誠に可い事ではあるが、一足飛びに其の成功を期せんと思ふならば、それは愚にあらずんば狂である。事は一歩々々と健實に築き行く所に成功があるので、學校の勉強も其の通りであらうと思ふ。運動競技にしても亦其の通りである。上手だからとて油断はならぬ。下手だからとて失望は要らない工夫と熱心さとがあれば必ずや成功の域に達するであらうことは疑ひがない。

よく見れば薺花咲く垣根かな

芭蕉はかう吟じてゐる。こゝは片田舎、山家の畑の垣根の所に、小さな薺の花が咲いてゐる。誠に小さな花である。小さな花ではあるが、花には生命がある。造物主から賜つた尊き生命を宿してゐるのだ。そしてその全生命をうち込んで今を盛りと咲いてゐる。おゝ何といふ尊い力であらう。敬虔な姿であらう。私達は現在の一念に生きて行けばよい、他を思ふ所に隙があり弛みが伴ふ。其處に失敗の第一歩が萌し來るのである。

我等には今與へられた尊い使命がある。大きな仕事がある。家を治めるものは家を治める事に於て、外に働く者にはその働に於て、學校で學ぶ者には學ぶ凡ての方面に於て、教へる我等には教へる方面に於て、各々其々の大きな働があるのだから、其の仕事に向つた其時に、其の日は其の日の一念に於て全魂を打ち込んで臨目も振らずに働くのである。其の働の最中少しでも心に曇がさしては既に神聖を失つたものといはねばならぬ。自己の尊い天職を汚濁したものといはねばならぬ。

鋤を手にして後を顧見る者は神の國に適はざるものなり

之は聖句であるが、實に甘い事を云つて居られる。之は農夫に譬を取つたものであるが、田の畔を鋤もて耕す農夫が、長い田の畔を耕すに、途申まで來た時もう何處まで來たかとよく後を顧見る者である。之は人情である。自分のして來た仕事を振り返る事はよくある習であるが、クリストの心では左様した氣分の生じる所、早や既に決心が鈍つてゐるのだ。隙が生じ、迷が生じ、悩みが生じ、罪の萌しが生じてゐるのだと戒められてゐるのである。誠に尤もな話で、私達は一旦目的を定めて事業に着手した以上は、必ず獅子奮迅の勇猛心を振り起さねばならぬ。あの了海和尚が二十二年の長い歲月の間雨の日も風の夜も、一意専念大菩提の勇猛心を振り起し、一挺の鑿を手にして青の洞門を掘穿つて難所に惱む多くの人々を助けたあの精進の淨心が肝要である。その勇猛心あつてこそ始めて脆くも破壊された岩孔から、岩國川の清き流れに映

つたあの月光を眺める事が出来たのであらう。これこそ即ち満願真如の月の影である。この時の了海は既に人ではない、佛陀の地位にも登り得た善智識である、尊い彌陀の權化である。

悲しい位、我等罪業深き者は容易にかうした境地に達し得ない。しかし如何ほど雲表に聳ゆる高嶺とても登れば登る路はあるもので、要は自己の現在に忠實なるか否やの僅の差であるのが、末は恐るべき大の差となつて、果は如何にあせつても挽回する策もない様になつて、終には後悔先に立たずといふ風になり行くのではなからうか。

私はよく人にこんな事を云つたものである。

尾張清洲の城主織田信長の草履を取つた藤吉は、よくその職務に忠實で常に草履取り以上の仕事を仕遂げたが故に、遂には一躍士分にも列せられたのだ。侍大將になつた彼れ藤吉郎秀吉は、侍大將以上の仕事を常にして遂には一國の國主となつた。國主となつた羽柴秀吉は、常に國主以上の働に努力した。かくして遂には天下の覇者となつた彼秀吉は、決して之れ一時の僥倖でもなければ何でもない、皆常に自己の現在以上の働に努力したので、其が上將の目に止つて昇進して行つたのであると……。

私は今でもこの信念には少しも異らぬのである。我々はお互に皆今日與へられたその職分がある。其の職分を其儘に後生大切と株守してゐるのみでは將來に何等の見込がない。今日の與へられた職分に忠實なるは勿論の事ではあるが、其れ以上に、工夫考索して働いてこそ漸漸頭角を現はす様にもなるのではあるまいか。

だが茲に考へねばならぬ事がある。弱い人々には現在以上に働いて、其に對する報いの來らぬ時にはやゝもすれば心に隙が出来る事である。濁りの生じる事である。左様した時には其が失望となり、不平となり、弛緩となり、反逆となる、誠に危険至極な事ではあるまいか。私は常にかう考へてゐる。世の中には働きたくとも、勉強したくとも仕事がないがために出來ぬ人が随分多い、病氣で悩んでゐる人も少なくない、其等の人々の中で、自分のみかうして達者で勉強させて貰ふ

ことは、働かせて戴く事は、あゝ何といふ幸福な事であらうかと、私のこの考へは死ぬまでは變らぬであらうし、皆様も亦かう考へてほしい。そして自分に與へられた仕事に對つて、現在の一念に於て専心忠實に努力する様に祈りたい。さうしてお互に生徒は生徒として、娘は娘として、主婦は主婦として、其々職にある者は其の職の神聖なる奉持者として、自分によつて始めてこの仕事が出来あがるのだとの信念を持つて……。

日蓮は聖人の一分に當れり、未萌を知るが故に、日本國中日蓮一人、西戎を調伏する人たるべし。

刀杖瓦石の迫害の中にあつても、日蓮上人はかく喝破してをられる(立正安國論)この意氣と力とを私達は欲しい思ふ。仍公出でずんばの氣概が欲しい。

その意氣、この氣概こそ誠に持つべきものなれど、一步過つて自惚れとなつてはならぬ、傲慢となつては猶更危険である。やゝもすると、左様でなくてさへ自惚、傲慢、無節操、無秩序等の雜草が心頭に生え易いのである。目に見る雜草は手で除かれねば鎌を以てし藥品を以て除く事も出来やうが、心頭に生じた雜草は誠に除き難い。この雜草は如何かすると逸早く嫉視、猜疑、讒謗等の果實を結びたがる危険極りないものである。冀くは私達は常に大所高所より凝乎と靜に自己を凝視め、世の中を凝視め、そして自己を誤らず、世の中を毒せず、進んで人の世のため少しでも働き得る様な心掛けを養ひたい。

心にも及ばぬものは何かあると心に問へば心なりけり

元政上人は其の昔、詠んで居られるのであるが、誠に其の通りで分らぬものは不可思議力を具へた人の心だと云はねばならぬ。寸時でも油斷をすると何時の間にか心の雜草は忽ちに蔓らんとするのである。實に危険千万と叫ばねばなるまい。

おゝ外庭には寒雨頻りに訪れて橋葉を叩きさながら惱める人の涙の様に寂しい今宵であるが、我れ何の幸ひか、かうして所懐の一端を述べられる事を感謝したい。冀くば前途多幸の皆様には、幸ひに心身共に益々健在ならん事を。(一、三三三)



概況及各部だより

概況

第四學年 岩本フミヨ

多くの人々の御同情、先輩の方々との多年の御盡力によつて、我が南國の學舎は此度目出度く二十周年を迎へる事が出来た。四方の山々は色とりどりに錦を着かざり、空は飽くまで高い。何所からか菊の香が漂つて來た。その下で蟻の如く全校生徒が日曜も忘れて活躍し始めたのは、十月もはや終を告げようとする三十日であつた。

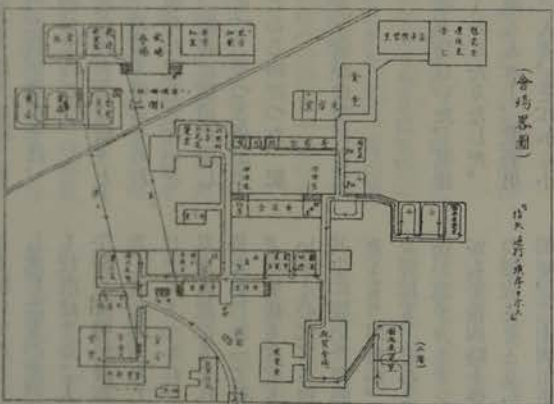
人々の心には不平もなければ不満もない、見えるものは唯机、教壇を運んでゐる笑顔ばかりだつた。明くれば三十一日、月日の流れ行くを悲しむ三十一日も、裝飾の騒ぎに掻き消されてしまつて浮れ気分の方が勝ち誇つてゐた。門前の緑門、玄關の花飾、窓外にはみ出て秋風にゆらく萬國旗は一入人々の心を引きつけた。この二日にて變り果てた校舎を見ては、生徒の力の偉大さがすつかり感ぜられた。

全生徒は唯自分の體の動くがまゝに動かしたのである。我が家をさして歸り行く生徒の姿が、妙に尊く見えた。多分大聖院の晩鐘だらう、その餘韻が空をふるはせて響き渡るすつかり疲れてゐるが、なかく眠れない。何時眠つてしまつたのか、再び目が覺めた時は鐘の叫びと、鐘の音とが窓際に透られて漂つてゐた。東の空がほの／＼と白み始めた。學校に行くともう四、五人も來て居られた。朝禮にて祝餅記念書を買ひ、記念式、祝賀會も事なくすみ、これより我々の待ちこがれてゐたショッブガールだ。開店早々續いておし寄せる人波に皆の顔はうれしさで一ぱいになつた。三時頃は殊に多い。椅子が足りない、給仕が間に合はぬ、券の引換へに目が舞ひさうだ。賣上は豫想の意外の意外のその又意外、不況風は何所に吹いてゐるやら。ベザ1の方もテョッキが一つしか残らないといふ所さへあつた朝から賣子とよるこんでゐた二日も、學藝會のために午前中を講堂にてすごしてしまつた。その日の人出は又すばらしいものである。講堂にはぎつしりと、入口には溢れ出てゐた。昨日と變らない。三日。空は一入高い。

明治節拜賀式舉行後、十時より今は亡き先輩の方々、先生などの慰靈祭が、水を打つたやうな講堂で行はれた。二時より公會堂にて永井郁子女史の獨唱會が行れて、食堂、

バザ1、展覽會で一部を除いた生徒の他は全部行くのであつた。この日は殊に人出が多く、どの賣店も品切れ／＼と叫ぶのが聞える。券を持つた人は波の様に押しよせる。櫻すしのハンチンを着た顔の大きい、赤い、どこか愛嬌のあるぢいさんが、その人波の前に立ちただかつて頭をべこ／＼下げ「ハイソノ、ドーモ」とあやまつてゐるのもちよつと面白い。今日限りと思ふと名残惜しい。午後七時よりは又永井女史の獨唱會公會堂にかしよせた人は又すばらしいもの。

十年前の音楽會は、まるで實費が出ないといふ始末であつたこのやうな一寒町が十年にしてこのやうな一市となり、このやうな盛大な音楽會を作つたのは、汽車の往來とそれに伴ふ蓄音機ラヂオの普及によつて養はれた音楽趣味がその大部を占めるものであらう。このやうにすべての點に於て大成功をなしただのであるが、我等の頭中に残る一つの暗い影がある。



(会場案内)

「すべてのショッブガールが斯くあるや否や」社會は荒波である。眞立つ我々も、この荒波に投込まれるのだ。決して花笑ひ、鳥歌ふ春のやうではない。身を切るやうな寒風が吹いてゐるのに違ひない。この荒波に飛び込んで波濤と戦ひ、最後まで上手に泳ぎ切るのが眞に價値ある人生ではなからうか。万歳の聲消えぬ滿洲に、コーヒの園たるブラジルに其他到る所に我々の墓場はある。

第一日目

第四學年 小谷 幾子

日毎夜毎、夢にまで私達をたのしませた本校創立二十周年の記念日！私達はこれをどんなに待つてゐた事だらう。その日は遂に來た。輝やかなしい太陽と朝らかな青空とを持つて……

何時にもなく六時前に一人で目覺めた私は、直に楽しい今日を豫想し、浮き／＼して落着かなかつた。

支度もそこ／＼で登校した。誰の顔も喜びでピンクに輝いてゐる。八時二十分の最初の鐘がなると、皆は白い作業服も甲斐々々しく、満座の会場や通路を今一度大掃除。皆の苦心と努力で、見違へる程美しくなった我が學びやは、用意萬端を整へて、たゞ時の來るのを待つてゐる。

まぢ通しかつた十時の鐘を合圖に、生徒の代表者は積々と記念式場につめかけた。時をうつさず、來賓も着席せられそれより約二時間半に渡つて創立二十周年の記念式はいとも厳かに舉行せられた。私達の感激は、歡喜は絶頂に達して、相當に長い時間も、たゞ夢中にすぎ、やつと氣がついた時は、來賓の方が肅々と退場されてゐる時だつた。記念式も無事に終了した。

その次は祝賀會だ。これは新しいピシボン室が会場にあてられた。約三四十分間で終つた。待遠いのは午後一時である。

やつと一時のバザー開きの合圖の鐘が鳴りひびいた。私達はめい／＼各部署に着いて準備おさ／＼おこたりなした。待ち兼ねたやうにぞく／＼つめかけて來る人々！、老若男女！、奥様らしい人、勤め人らしい二三人連、それから小さい子供も。それらの人達はまづ二十周年記念祝賀と書き出されたアーチをくゞつては、ものめづらしげにあたりを

見廻しながら、先づ受附へ。階上より望めば、眞直に見えるいつもの白い八丁通は今日とはとぎれ／＼ながらも黒く長く續いてゐる。それがみんな例のアーチをくゞるんだから大したものだ。賣店も、食堂も、展覽室も、どこもかしこも校内はまるで人の渦だ。

午後三時頃が最高潮らしく、賣行も一段と素晴らしい。この素晴らしい賣行と正比例してホヤ／＼の賣子さんはとてつつかれてしまつた。私は人波にもまれながら、あえぎながら、かう思はざるを得なかつた「これが不景氣にあえぐ世相かしらと……」どの賣店も食堂も大賑ひ、明日の賣る物がなくなりはしないかと心配する程の賣行だつた。

其中に鑿いた四時「バザーやめ」の鐘。あゝもう四時か。お客様も、ぞろ／＼門より出られる。遅く來た方は、私達が窓やカーテンを閉ぢたりするのを、口惜しさうに見ながら午後四時十分ばかり過ぎた頃には、校内はあらまし元の静寂さをとりかへした。嗚呼、二十周年記念の第一日も大盛況裡に終をつけた、それにしても本當になんといふ人出だつたらう。今私の胸にあるのは、明日第二日目の楽しい豫想のみである。

第二日目

第四學年 林 英 子

昭和七年十一月二日は本校創立二十周年記念行事の開催致されましたから二日目であります。

朝會は七時四十分より寄宿舎の食堂で行はれ、「昨日は初めての事ではあり、まだ／＼不十分なので今日は完全に充分にせよ」と岡田先生より御注意がありました。其の後直ちに二十分位にて夫々教室廊下のお掃除をすませ、九時から開かれる賣店、食堂、展覽會にいらつしやる一般の方々をお待ちする。

十時より學藝會が開催された。來校された大部分の方は私達生徒の演ずる音楽、劇、談話等を熱心に御覽下さつた日頃熱心に練習された甲斐があつて、皆夫々得意の技能を發揮して滿場の聴衆を酔はせ、十二時すぎ漸く終りました。丁度正午で御腹のへつてゐる時なので學藝會が盛會であつたと同様に何處の食堂をのぞいて見てもすし詰めの満員で立錫の餘地なく、閉店になるまでこの状態でありました。賣店の方は學藝會を見に來られた方が大底一品二品は買はれるし、わざ／＼こられた方もあつたので昨日よりは賣行は少かつたけれども賣品はひつぱりだこの景氣でした。終

りごろには殆どなくなつて明日の賣品が少なくてこまるといふ喜ばしい心配でした。

展覽會場は校舎全體が使用されてゐますので何處から行つてよいやら解らないで、半分も見ずに歸られた方もあつた様です。平素から熱心に練習した吾々の精神のこもつた作品を十分見ていたゞけなんだのは残念ですけれども、校舎の都合上仕方がないと思ひます。各會場を順々にのべてみることに致しませう。

第一會場（南園館、寄宿舎）には女性として是非とも知つておく必要のある生花の陳列室で、南園館は研究科生のみの生花で、流石年長だけに寄宿舎のに比べて優つてゐる。寄宿舎は二年生ので研究科には及ばないけれども仲々お上手で眞面目に日頃から習つて居られる事を察するに充分である。

第二會場（一梅、松組の教室及び圖書室）の中、一年梅組の教室は縣下及び他縣立高等女學校の書畫である。本縣からは山口、下關、長府、防府、岩國、柳井、宇部、久賀高等女學校の諸校及び安部技藝女學校で、又福岡縣、廣島縣、島根縣等の縣立高女よりのも多數あつた。圖書習字共各學校が自信をもつて出品したのだけに、名筆名畫の揃ひである。習字はお手本がどこも同じらしく、字體も筆法

もよく似てゐた。一年松組及び圖書室は本校生徒の習字、
圖書の陳列場である。日頃の熱心なる努力によつて書かれ
たもので、色紙に、畫仙紙に、短冊に色々の書き方によつ
てその紙面を活し、字を活してゐる巧さは、一寸他校にみ
られない。圖書は四年生は少しも出品しては居ないけれど
も、下學年だけで素晴らしい成績を擧げてゐる。

第三會場（農業準備室）は本校選手が縣體や、西部體育
會に本校の名譽を双肩に荷つて出場し、石にかぢりついて
もと、血の出る様な奮闘を續けて得た花環や賞狀三十幾つ
が、狭い室に猶所せましとならべたてられてゐる。又陸上
選手のリコード表が上の方にかゝけてあり、選手の用ひた
スパイクも並べてある。陸上部の戦跡を思ひ起すに充分で
ある。

第四會場（新館三階）には帝展作家、中學校の水沼先生
當校の秋山先生、田總百山等の畫、商業の有田先生の書、
女では櫻江女史の畫もあつた。皆一流の大家だけにすばら
しいものだ。その中で紅一點櫻江女史は本校卒業生だつた
とのこと、その書かれた畫を見てゐれば女史のお顔がなつ
かしい。水沼先生の畫に男らしい氣が動き、秋山先生のは
何處となしに女らしい所のひらめいてゐるのは環境から
であらうか。有田先生の書のうまさといふものは言語では

いひつくせない、形といひ筆勢といひ……。
第五會場（地歴教室）は小學校兒童の畫の出品された
所である。小學生らしい所はあるけれども相當上手にかい
てあつて、これはと思はれるのも澤山あつた。市内の小學
校が多く、遠く小郡の方から出品されたのもあつた。

第六會場（一年菊組教室）では家事科の染色や、地歴の
展覽だ。この室は裝飾は質素に上品にして、また作品は賑
やかな染物や、地圖等で、うつりがいいので飾られてある
作品も一層きれいに手際よく見える。染物は三年生の作製
で、浴衣、風呂敷、帯、長褌袴、クワシヨシ、袴等が多く
主に實用的のものが多かつた。こんなものを賣品にしたな
らば賣行きも一層多かつた事と思ふ。地歴は地圖が一番多
く、細密に研究されて作製されたもので、實物を目のあた
り見るが如く作られてあつた。

第七會場（二年菊組教室）は一年から四年までの手藝品
の陳列で、自分々々でいろ／＼と工夫して作り出したもの
で大變面白い作品も澤山出品してあつた。主なものを擧げ
てみれば、チュールの肩かけ、鏡かけ、クワシヨシ、キル
ク草履、リリヤンの刺繍等で、猫の圖案化したのや、猫の
姿を應用したのが大變多かつたやうだ。

第八會場（圖書館）は歐洲各國の圖書。

フランス。ベルギー。イギリス。ドイツ。オランダ。イ
タリーの諸國で、フランスの出品畫が一番多かつた様に思
ふ。

西洋人は素晴らしい上手だらうと思つてゐたが、比べて
見ても上下の差別はないといつてもいい。唯鉛筆畫の多か
つたことは案外だつた。

以上で展覽會場は終であります。どの室を見ても皆素晴
らしい好成績でありまして、各人の努力の程が思はれまし
た。四時に各室共閉ぢられましたけれども、校門を出て歸
つて行く人々の顔には満足の様子がたゞよつてゐました。

今日（第二日目）は昨日に劣らぬ澤山の人出で、五百の
生徒は何處にもぐりこんだかわからぬ位に着飾つた人達に
よつて校舎内は一杯でありました。

第三日目

第四學年 中 村 正 子

霜月三日、小春日和のうららかな光が秋のすんだ空氣を
通して一杯に降つて居る。あゝ今日は明治節。舊日本の古
い扉を開いて新しい世界の日本とされ給ひし明治大帝の御
稜威を仰ぎ尊み、敬虔な心が湧き出て来る。水劫に輝く日

本の誇。私達は此の日午前七時半より講堂にて明治節拜賀
式に參列する。明るい晴れやかな秋の此の日、誠に明治節
にふさはしい日であつた。

式が終ると私達は一勢に校内の掃除に取りかゝる。十時
四十分全部の準備も出来上り、それより二十周年記念事業
の一である慰靈祭が行はれた。式は神式であつた。亡き百
九十幾人の御靈を心からお慰めする事は私達に取つて、御
靈に對する感謝の念と、同情の念と、さうして將來の誓を
一層強くする。

此の日、遺族の方々の御參列を得、同窓會員の姉上様達
と共にいかに尊く、厳かに式は擧げられた。誰一人騒ぐ人
の有らうか、ひっそりとした式場には、神主の聲と、慰靈の
詞を讀む聲と、笛の音と、遺族の方々のすゝり泣かれる聲
のみである。此の目出たき二十周年の記念日に、今は早幽明
境を異にする數々の亡き御靈の前に私達は何と云つて好い
のか……。唯黙して居るばかりである。特に遺族代表の方
が亡き愛兒の事を想ひ出されてか、涙にむせんで男泣きに
泣いて挨拶された時には、誰も皆もらひ泣きした。盛大に嚴
肅なる中に慰靈祭もつゝがなく終つた。この後遺族の方々
は特に作法室の方で記念寫眞が撮影せられた。

明治節、慰靈祭も幕をうち、午前中一寸暇の有様であつ

たバザールも、又賑はしい光景にかへつた。

今日は記念式最後の日であるとして、昨日にも劣らない盛況を呈した。賣店も食堂も一杯の人である。特に食堂部の忙しさ。

今日は亦記念式の催の一として、大音楽會が開かれるのである。私達生徒は、賣店係、食堂係の外は皆午後一時公會堂に向つた。待ちに待ち惚けて居た音楽會である。永井郁子女史は人も知る世界的な方だ。女史は特に邦語で唄はれる唯一の方だ。誰か云ふ「女史は音楽界の革命児だ」と。午後二時より漸く女史の音楽は開かれた。女史は先づ第一に私達に親しく音楽の色々な話をして下さつた。實に女史の音楽會に赴かれた事は今日で六百七十三回と云ふ多數に及ぶさうだ。

初め二十分ばかり童謡でよく唄はれる「雨が降る」を熱心に教へて下さつた。口の動かかし方、姿勢の取り方等色々。特に音楽家に取つて、或は私達に取つて正しい唄を歌ふには口を大きくよく動かす事ださうだ。こんな事等を熱心に小さい子供に分り易く話して下さる。

今日の晝の會は特に小學校の生徒の歌ふ様な音楽が多かつた。何を聞いても、何度聞いても、幾らでも聞いて居たくなる。特に女史の慈愛に満ちた唄ひ振りは、私達に一層の

深い印象を與へた。晝の音楽會も午後四時前豫定通りに終る。

「音楽の夕」音楽は人を優さしく明るく清くしてくれるあの廣い會場が全く一寸のゆとりもない混雑である。いよいよ午後七時方雷の如き拍手の中に音楽の夕は開かれた。プログラムは何れも皆アンコールの波にもまれて進んで行つた。テンポを早めて唄はれる唄など、どうしても人を魅せずには置かない力があつた。さうして秋の夜長に音楽は心よい蝶ともなつて、人々の心にリズムを流す。

けれども女史が今日の如き位置を築かれた半面には苦しかつた様々の苦心の有つた事を考へねばならない。

其處に人としての教訓が生れ、尊さが増し、人生の意義がはつきりとうなづかれる。女史は音楽ばかりでなく、何かにつけての愛國者だ。私達は現在の日本の姿を見、其の日本に生れて行く事を考へる時、強い信念と誓を持つて我が日本の國を進めて行きたい。

かうしてあの心配して居た音楽會も豫想外の大盛況の下に終を上げた事は何につけても好い事だ。

これで漸く二十周年記念式の第三日目の行事も完全に終を告げた。

受附係より

第四學年 栗 屋 儀 子
水 津 靜 江

(第一日目)

氣遣つてゐた天氣も意外によく晴れて恵まれた記念式日和になつた。午前十時半から二十周年記念祝賀の式典は舉行せられた。時刻の迫るにつれて來賓の方々は五六人宛一緒にいらつしやいますので、御芳名を承つたり、御案内をするに忙しい。中には式が始まつて來る人もありました。約二時間あまりで式は終り、來賓の方々は祝賀會場へ行かれる。

午前十一時半頃になると、氣の早い觀客は受附へつめかけられる。豫定通り午後一時入場が許されたので待ちまびて居た來客は一時におしよせる。絶間なく人が出たりはいつたりしてお祭の様な騒ぎだ。二時、三時になるとまた足数がふえて、歸る人より來る人の方が多い。

あれだけの人がどの家へ歸るんだらうかなんて思ふと秋も廣いものだ。

受附の前でキュービーがつえて、母親らしい人が一所懸命に吸ひ出して居る姿も面白い。受附で見るといふらん

な姿の人が來る。レデー、マダム、ジエントルマン、モボプロ型等々……。

この分では食堂も賣店も繁昌するだらう。

およその推量でさつと千五百人は來ただらう、小敷の係生徒では案内はとても行き届かない。

(第二日目)

午前十時から學藝會があるので受附係は來客の希望に應じて、夫々學藝會場展覽會場へ案内する。

學藝會もかなり盛況で、演技の中頃迄にはぎつしりつまつて、後はみんな立つてきいて居られた。お晝田學藝會は終を告げた。今日も昨日に劣らぬ盛況でどの會場も満員である。

(第三日目)

慰靈祭があつた。

今日も相變らず人の行き來は絶えない、中には三日間毎日來る人も見受ける。

喜々として喜び合ふ中に敎附に憂をたゞへて慰靈祭に出席せられた方々は、今日のこの喜びを共にすることの出来なかつた我が子の事が、新しい涙と共に一入思ひ出された事せう。

午後は公會堂で開かれる音楽會へ大部分行つてしまつた

ので、後は外來者と少數の係生徒だけで賑しい中にも何となく物足りない感じがした。

やがて午後四時の鐘がなり、來觀の人達が歸つてしまふと、ひっそりとして邊にぬき散らかされた草履が盛況の名残を示してゐる。

會場係より

第四學年 石田知子
品川房子

榮ある記念式が私共の手によつて作られた式場に於て行はれた。

昨日腰かけを上げたり下ろしたり、重たくつて泣きさうだつたけれども、今日かうした晴れの式場にあてられるは嬉しい。

晝から明日の學藝會の會場を作る。

かうしたら工合がいゝかしら？、悪いかしら？、と色々工夫の結果こしらへたのだ。

ステージのまわりに紅葉を散らしたりしたのも美しく見せるためだつた。

これで學藝會の會場は出來上つた。

第二日目には學藝會の後始末をさつさとすませて、慰靈祭の祭場を作り、四年の菊組の人達だけ公會堂に行き、明日の音楽會の飾りつけをした。

モールのつないである所を縫つたり、色々苦心した。これで會場はモールと万國旗で美しくかざられた。

私達は町に電燈のつきはじめた頃に、やつと歸宅する事が出來た。

第三日目の最後の日は、朝から公會堂に行つて準備をし午後一時過ぎに完成したので、もう始まるのを待つだけになつた。

祝賀會接待係より

第三學年 柏木喜美子

中央のくす玉より四方にはり渡された五色のテープ、萬國旗、四方の紅白の幕で本校二十周年の祝賀會場は美々しくかざられて來賓の入場を待つてゐる。十時少し過ぎてどや／＼と入場、前方の長官席には知事代理を始として數人の名士方、それと向ひあつて來賓一同が着席せられた。校長先生の開會の辭があり來賓瀧口氏の祝辭があつた。その祝辭によつて本校の誕生時代の様子がひし／＼と忍ばれた。

續いて開宴、折りを聞く音、箸を割る音、急に騒がしくなる。その間を生徒がなれない手つきでお酒をついで廻る。

良妻賢母の卵のおしやくで來賓の顔はみるまに赤く染まつて來た。所々で笑ひ聲がおこる。しばらくの後、長岡少將の萬歳に合してこの二十周年記念を祝福して祝賀の會は閉ぢられた。

化粧品研究室より

第四學年 朝枝都喜子

十月三十日

朝はクリーム、ベルツ水、乙女肌、髮油を作つたり、瓶に詰めたりし、午後は机を片づけ、理科室入口より進み、突き當りより右に曲り、又右に折れ、理科準備教室より出る様に會場を作つた。天井より四方へ万國旗をはりめぐらし、乙女肌、ベルツ水の實驗、賣場、クリーム、髮油の實驗、賣場の順に交る／＼並べた。他の教室と違ひ上品をモットーとして作つた裝飾は始めは物足りない様な感じもしたが、見れば見る程あつさりした高尚さを保つて化粧品室にもつとも相應しい、研究室だけに後のガラス戸柵はそのまゝでいる／＼の實驗道具が整然として、和やかな小春の光に輝い

てゐる様は、この室全體に一種の威嚴と緊張味とを與へてゐる。かくする中に日は漸く西に傾きかけたので準備半ばにて解散した。

十月三十一日

午前中は室内の掃除や整頓をする中に過し、午後は入口出口共に人目を惹くに十分な裝飾をした。

次に商品全部に價を附ける。まるでせり場の様な騒ぎ、「十錢」「いや十五錢」各自が口々に云ふ。その中に先生が「十錢」とおつしやれば一齊に十錢とする。

此等もつゝがなくすみ、あらゆる準備は整つた。赤いベルツ水、出入口のボスター、すべて明日を待つばかりだ。やがて暮れやすい日はあたりをふんわり包む頃、皆明日の盛況を胸に描きつゝ歸路についた。

十一月一日(第一日目)

不安だつた昨夜の雲もだん／＼と晴れて、菊の香高き十一月一日は訪れた。「祝創立二十周年記念」とかゝげられた青々としたアーチ、色とり／＼のテープ、すべてこの喜を祝ふかの様だ。正午近くなるにつれ、空には一片の雲もなく小春の光は徐々に總工の幸福の上に降り注ぐ。やがて午後一時の鐘と共に一齊に開店した。お客様はそれとばかりなだれを打つて先づ第一に化粧品部へ。

昨日流石苦心したゞけあつて裝飾も大層上品で、いや味がなく、又豪華な庭園に咲く牡丹花の如きその濃厚な人目を惹きつける様なベルツ水が、万国旗の間に見え隠れする様は自然と人の足を止める。來客殺到して一時は係員一同大童の體で、會計の机上には見る／＼お金が積みかさなる髪油は何時の間にか賣り切れ、あわてゝ作ると云つた騒がくてたつた三時間にクリーム等は大半賣れ、午後四時の鐘と共に豫想外の好成績を上げて第一日は平和に終を告げた。

十一月二日(第二日目)

秋の空は何處迄も高く限りなく澄んで、一片の雲も見あたらぬ。昨日にも増して盛んにすべく午前九時の鐘は遠く強く鳴り響いた。今日は昨日より一層の盛況を見る爲め宣傳に努め、入口とクリームの前には水槽を備へ、來客にいろ／＼手を洗つて戴き、試験の爲ベルツ水、クリームをつけて貰つた。そのせいかベルツ水の賣行は昨日より一層素晴らしい勢であつた。クリームはもう残り少なくな心細い。乙女肌、髪油はどん／＼次をこしらへねば間に合はない。又一方では効用等を刷つたビラを數多作り、學藝會の合間に配つた。午前十時からの學藝會の爲め大部分はその方に行かれ、一時は暇だつたがその内に學藝會も満員となつた。

化粧品研究室より

第四學年 木村代志枝

十一月三日(第三日目)

空は眞青に晴れた。すが／＼しい朝です。今日は最後の一日、よりいゝ結果をあげるべく學校へ急ぎました。昨日の様に教室の窓を明けてお掃除を始めました。萬国旗が秋風にはた／＼と音を立てゝゐます。賣臺の上には二三十のクリームと三、四十のベルツ水と、たつたそれだけで、髪油は全然ありません。

二三十のクリーム、とベルツ水では、今日の最後の戦線飾るにはあまりに貧弱です。式から歸つた私達は、開店までにと一生懸命で今日の戦闘準備を始めました。

瓶を洗ふもの、クリームをつめるもの、又乙女肌を作るもの等々、この賣店だけは時ならぬ騒ぎです。しばらくの後クリームも大部出来、乙女肌もその姿を臺の上にはあらはしました。これなら又昨日の様に、再ましく戦線に臨むことが出来るでせう。私達は靜かに椅子に着きました。開店までに多少でも心を落着けるために……

午前九時、いよいよ開店です。今日も又昨日の様にものすごい人波です。賣子の私達の聲は喧れさうです。二日間の練習で、もうお客様方にもなれて來た私達は、學生らしい快活さと禮儀を失はない程度に随分よくしゃべりました。賣子達の馴れた顔に、秋の日は心地よく、さうして秋風は爽やかです。

クリームも乙女肌も、ベルツ水まで今日は飛ぶ様に賣れで行きます。お蔭にはもうクリームは殆どありませんでした。ベルツ水がひとりあの赤い色を臺の上にならべておきました。ひまなお表はいつもの賣子は退屈です。テーブルをかこんで皆椅子に腰掛けて顔を見合せてゐます。誰の顔を見ても疲れの中にも喜びをたゞへてゐる様です。

午後一時からは大部分の人達は公會堂に出かけて、後に少數の人が残つて、賣臺を守つてゐました。二時、三時になると人もまばらです。私達はホツと安心しました。

爲又だん／＼來客が多くなり、午後は昨日以上の盛況「いらつしやいませ」「どうぞお入り下さいませ」。乙女らしい愛嬌に惹かれ、廣い室も人、人の群でむせかへる様だ。クリームはもう後二十をもあまさない。この分では明日は早々締切らなくてはならないだらう。やがて午後四時の鐘と共に昨日以上の盛況裡に第二日もつゝがなくなつた。

ベルツ水も影をひそめて、もう二、三本残つてゐるきりです。クリームは勿論全部賣切れてしまひました。

閉店の直前賣子の丁さんが皆賣つて來ると言つて、二三本のベルツ水を持つて出て行かれましたが、閉店の鐘が鳴つて間もなく、素手で歸つて來られました。これで全部賣切れます。こんなによく賣れようとはほんたうに豫想外でした。

お勘定もすんで、皆言ひ合せた様に椅子に腰掛けて大空を仰ぎました。秋の空はどこまでもコバルトに澄んでゐます。

最後の一日も終つて、私達は家路に急ぎました。秋の日はもう山の後にかげり、風も冷たく頬をなでて、安心とも嬉しさとも、淋しさとも、つかぬ不思議なものが、私達の胸の中をスーッと通り過ぎて行きました。

裁縫手藝品バザー係より

第四學年 齊藤富美

我が南園の學びやが呱呱の聲をあげ、日の本の若き乙女達を女性として導くべく使命を負うてより歲月は夢の如くに流れ、早や二十年は巡り來ました。

菊の香もゆかしい昭和七年十一月一、二、三日、この日こそどんなにか私共の期待的となつてゐた事せう。さすがの大家も一點の曇もなく枝から枝を渡る小鳥の群もさながら創立二十周年を祝福するかの如く絶好の記念日和でした。

一日午前七時四十分、全校生徒は食堂に集合しました。嬉しさに満され微笑をかはさないものはなく、小鳥が春を喜ぶ様に喜びました。午前十時三十分より講堂に於いて本縣知事代理を初めとし、数多の貴賓の御臨場のもとに盛大に記念式は舉行されました。最高學年としての私はこの式に参列する事が出来、どんなにか喜び感謝した事せう。そしてこの學びやの増々榮え行く事を希望し祈らずには居られませんでした。午後一時より展覽會、バザー、食堂、化粧品部等記念行事の總ての幕は開かれました。私の役は裁縫手藝品バザー第三室に當りました。私共の全力を盡し工夫を凝した裝飾の中にバザー品は隙間もなく陳列され、女店員として各自所定の場所に着かされたのを見て、丁度何處かのデパートへ行つた様な感じがしました。これも本校全生徒の努力と諸先生の御盡力の結晶であります。

二三人寄集る毎に「これ程の品物が賣れようかしら」と氣遣ふばかりでした。客を引入れるべくメガホンの聲は校

内に響きます。その中祝賀會を終へて來賓の方が二三人、四五人と入つて來られると、早速の事南園デパートの賣子達は熱辯を振つてサーヴィスを初められました。

「お花は如何ですか」「水も入らずこの頃のスピード世界に適してゐます」「南園デパートの大安賣」こんな聲が彼處、此處から聞えます。さうして黄赤のばら、チウリツプの造花は二本、三本と選んで行きます。次第にお客様の数は増し、會計をしてゐた私共も景氣付き「はい札を」「はいおつり錢も」「目も舞ふ程に忙しくなりました。バザー室は一杯です。その間一所懸命にお客様のお相手をしていらつしやる友達の色を見ると、嬉しくて涙がこみあげて來る程です。其の効あつて室へ入る人は悉く何か買求められました。これも皆生徒の努力をお汲み下さつたのでせう。エプロン、スエター造花の賣行きのよい事。不景氣／＼と不景氣は何處へ行つたのでせう。けれどもさすがの押し合ひへし合ひの人波も三時半頃になりますとあの景氣は何處へやらと思ふ程人は減りました。

氣遣はれてゐた即賣品も明日のバザーが氣になる程少く中でも八十枚以上もあつたエプロンなんかあと七八枚、スエターも三つばかり、婦人羽織下は賣切れ、五山もあつた造花も三山になつた。スポーツ人形も四つばかり机の片

手藝裁縫陳列室より

第四學年 益 盛 雅 子

(準備)

陳列品がすぐ一目で見えるやう裝飾といつては、なるべくない方針でしたけれど、私達はあつさりと淡泊な色のテープ、地歴の模型圖、染物陳列室は白と藤の交りを目だたない程度に左右に張りわたし、室の四方と真中に大きく机を並べました。

半ば地歴、半ば家事なので、先づ染物の出品物を壁にはりつけ、帯等は椅子にたらかして、何だか大通りのショールームの飾りつけでもしてゐるやうな氣になつて、大變得意になつてをりました。

地歴は此等と反對側の壁に、小さな模型圖は机上に並べこれで大體此の室は明日を待つばかりとなりました。夏休み中に製作した手藝品展覽室は、やはり地歴の教室と同じく小さな雑品は四方へ、ショール、オーベイ、クツション等は真中へおとなしく坐りました。もうこれで一日の朝掃除と陳列品を整頓しさえすればよいことになりました。

(第一日)

日は壁かに小春日と相映じて室内の長裾袴、座蒲團がく

隅にころんでゐた。四時近くに四五人のお客様がおいでになり「もう少し早く來ればよかつた。」とおつしやるの聞いてほんたうにお氣毒な程机上は隙が出来た。やがて閉幕の合圖四時の鐘が鳴り、一同後片付けに取掛つた。今日一部の賣上高を勘定して見ると何れの部も豫想以上の成績をあげ諸先生方のにこやかなお顔を見ては喜ばずには居られませんでした。劇家用エプロン等も出したらほんたうによく賣れたでせうに。忙しさに追はれ食堂の方へ一寸も顔をのぞける事は出来ませんでした。随分と繁昌したさうです。かくして一日の行事は無事盛大に終を告げました。この日二千餘人のお客様を迎へ開校以來の盛況を呈しました。お客様をいらつしやる毎に「良く出来ました事」「一通ではなかつたでせう」と賞讃の言葉を下さつた事は、製品者の私共としてどんなに嬉しく有難く聞えた事せう！又私共の作品を買求めて下さつたお客様と、恵まれた天候とに感謝の言葉もありませんでした。さうして私共は一日のわすか四時間の中に「何事も爲せば爲し得るものだ。」と云ふ尊い教訓を痛切に體驗しました。明日明後日もこの意氣をもつてやつたならば……。

つきりと隣にくひ入るやうです。

恰も私達の今日の喜を祝福するやうに晴れ渡つた秋の日は、室内にさはやかな気分をつくらしてくれました。

私達の室はどうしても若い方に興味を持たれるらしく、女の方はみな鮮やかに精妙に染出された反物に、帯に、風呂敷に、眼を輝かして「こんなの皆生徒が染めるんですか」と豫期以上の出来栄に来る人毎にかく問はれるのでした。

紫紺に座の子をあしらつた風呂敷には、誰も一度は目を注がれ感嘆詞をあげられました。

二教室に種類の異なるものが並べられてゐるので、狭苦しい感じがしないでもありませんでした。

併しあれだけの品にでも皆さんは染色と云ふことに就いて、幾らかより以上認識されたことと思ひます。

手藝品ばかりの展覽室

其處にはもえる赤い日中のひととき、少なくともすべてを忘れて専念につくりあげた夏季課題の手藝品、リボン人形、ビーズ細工、電燈カバー、フラワリリー、マクラメレース、毛糸、布の廢物利用等その他手藝科としてつくつたチュール刺繍のショール、ハイフコイト、鏡掛、クツション、何れも全心を傾注し涙ぐましい努力を惜まなかつたものばかりです。其の人の知られない努力の結晶のやどつて

五〇
ゐることを私達は見逃しません。さればこそ、かく多数の人々が私達の苦心をよんで下さり、賞讃の眼を其の出品物に集中して下さるのだと思ひます。午後四時終の鐘にも人々はまだ續々熱心にみて下さるのです。私達も其の熱心さに壓倒されて眞面目に任務を盡したと思つてをります。

陳列及開會中の様子

第三學年 和 木 綾 子

三十日から始めた校内裝飾は、翌日三十一の午前十時頃迄には殆ど仕上つた。めぐるまじいばかりのテープの波、萬國旗のひらめき、赤に、青に、黄に、さしもの廣い全校舎も到るところ裝飾の粹を施した。

さて其の次には、いよいよ陳列にとりかゝるのである。

陳列品は展覽會の圖畫、習字及生花會の生花を除く外總べて全校生五百名の汗の結晶とも言ふべき、裁縫、手藝品及化粧品である。賣店の部は、化粧品物理化學室を始め、四菊、三菊、三梅教室の四ヶ所であり、非賣品陳列の部は二菊教室である。賣店係の人の手に依つて次々と運ばれて来る品物は、セーター、チョッキ、袖無の類から、優美なリリアン人形、造花、電燈カバーの類、それを諸先生の指

圖のもとに配置よろしく並べて行く。陳列、それは丁度、新築の建物に家具を収めて行くその氣持で、本當に楽しいものである。やがて午後三時になつた。陳列も終つた。先生及生徒の協力一致の努力の姿をまのあたり見ることの出来た時何とも言へぬ喜びが胸を衝いて湧き出づるのを覺えた。三時半より生徒は各係の主任の先生の許に集つて、種々の打合せや生徒各自の責任等についてのお話があり、愈々明日に迫つた祭典を待つばかりとなつたのである。

あくれば二日、待ちに待つた十一月一日は稍吹く微風と共に訪れた。空はあくまで麗かに、白雲さへたなびいて、心無き自然までが榮ある今日を祝ふかのやうに思はれた。午前十時、創立二十周年記念式は講堂に於て、いと盛大に行はれた。數多の來賓、在校の先生生徒を始めその席に連つた總べての人は、唯感慨無量のうちに古き母校の姿を偲び、現在の發展に對しては涙のうちに喜び、涙のうちに深き感謝を捧げたのであつた。正午閉式。かくして記念祭典の幕は閉ぢられた。午後一時、バザー開店、と見る間に堰を切つたかのやうに校門に押し寄せる人の波、廣い校内は忽ちにして人の湖と化したのである。第二、第三賣店は編物、枕カバーの賣行が最もよく、第一賣店では子供の喜ぶ菓子の花籠、玩具類の評判がよかつた。特に人々の心を引

きつめたのは生徒の熱心な奉仕振りであつたらうと思ふ。又しるこ、うどん、コーヒー、壽司、菓子等の賣店の繁昌は想像も及ばぬ程で、生徒の愛嬌のよい挨拶には、誰しもその儘素通りするわけには行かなかつたであらう。美味しいうどんの香の寮圍氣の中に蓄音機のリズムに合せて舌鼓を打てば、人の心には秋の感傷もなければ、戸外を吹く不景氣の嵐もない。思へば今日の一日こそ幾千人の慰安の會であつた。やがて四時になると、どの賣店も一齊に閉ぢられた。と共に意義あり又楽しかつた祭典も一先づ幕をおろしたのである。

あくれば二日、空は名残なく澄み、日脚は麗かに南園の學びやを包んだ。九時開會、十時より十二時迄學藝會が催されたため、一時は閉暇であつたが、一たび講堂が數百人を吐出すと共に、各賣店の天手古舞が再び演ぜられた。かくして二日、三日の秋の日の更くるにつれて、我々五百の生徒の胸には、この目出度い祭典に臨んで、この南園の母校に對する敬虔と報恩の念をいやが上にも刻みつけられて行つたのである。

圖畫習字展覽室より

第三學年 作 間 淑 子

「お人形は如何ですか」。「この洋服はお似合ですよ」
「クリームは如何ですか」。「おしるこ食堂はこゝです」
「コーヒは……パンは……おすしは……と云ふ様な聲をのが
れてホツとする所、それが圖畫、習字展覽室でした。
十月三十日、三十一日の二日間、準備に目の廻る様に忙
しかつただけに、當日の私達こゝの係は何んどのんびりと
してゐた事でせう。

一日はお晝頃からお客様が見えましたが、これは記念式
に參列された來賓の方々で、一般の方は二時頃からが多く、
四時過ぎても觀覽者が多いので戸を鎖すのを二十分もた
めらつたのでした。

二日目、この日も多くの觀覽者がありました。午前十
時から十二時までの學藝會の爲に午後は大混雑でした。昨
日に比して婦人が多かつた様に感じたのは、女子は服裝が
華美である爲目立つて心にのこつてゐたのでせうか。

最後の日三日は永井郁子女史の音楽會の爲、午後は留守
居役として四年の人と私の二人でした。休日のせいかサラ
リーマンらしい人の群がたくさん吸込まれて来て、鍵をお

五二

ろさうとしても一寸々々の聲に待たされました。かくして
三日のお役目は無事に終りました。私のお役所、それは展
覽室中でも最も邊鄙な、最も静かな「しるこ」「しるこ」
の聲にもはなれた所で、本校の展覽物で満たされてゐる所
でした。お隣に同じ様な室が二室ありましたが、こゝには
他校の出品物を主として本校の分も多少陳列せられてあり
ました。なほ其の外に二室陳列物がありませんが、こゝは
私のお役所とは感じを異にしてゐて、位置もしるこ食堂の
二階と前とを陣取つてあつて大變賑やかさうでした。こゝ
の展覽物は二階が本校の先生及び有名な先生方の出品され
た畫で、階下は小學生のでした。一見しても吹き出しさう
な一年生の圖畫もありました。私の様に續心も字心もない
者にはどこか、どうかと云つて分りませんが、總じて上出
來と云ふものでせうか、觀覽客からも數々のおほめ言葉が
もれてゐました。私はかうして三日間を思ひ出す時、靜か
に／＼頭に蘇つて来るものは、一つ／＼「ホツ／＼」と丁寧に
見て行つて下さるお客様を受けた時の室の空氣です。

參 考 品 其 他

第四學年 三 島 房 子

各室には萬國旗とテープが張られ、中央は切紙の花で埋
まつて、色とり／＼の色紙で文字がくつきりと藝術的に書
かれてゐる。

陳列品は配置よく列べられ、化粧品は綺麗に體裁よく整
理して値段がつけられる。

會場係の手によつて裝飾された廊下其他到る處は萬國旗
を翻してゐる。

先づ第一印象の玄關は中央は大きな花輪、兩端にはテー
プで飾られ、興味を一層喚ぶ。

正門の前には厳めしく又楚々たる感じを抱く杉葉のアー
チが構へられ、それに一瞥を與へて準備を終つて歸途に着
く。

一日、二日、三日を通じて參考品に就いて述べよう。先
づ化粧品部、ベルツ水は、材料としてアルコールにグリセ
リン、苛性可里に水とを混合して、香料のベルガモットも
一二滴下せば出来るのです。

乙女肌、南國クリーム、髮油類も一々材料を列べて實驗
を致しました。

化粧品は質のよい純粹のもので、よくクリームなどで
鉛の入つたのがありますが、之は大變皮膚に害ですから化
粧品は特に純粹の物を用ひなければならぬと思ひます。

第二には手藝品ですが、これは主に夏休みの酷暑に打ち
勝つて製作しましたもので、刺繡の草履、帯締、人形、壁
掛等色々な陳列品で室は一ぱいです。

家事科は主に三年生の染色です。着物、帯、風呂敷、袴
袖、と何れも専門家の物品にも優つてゐます。綺麗なもの
ばかりで之には誰も驚歎の聲を發せずには居られません。

その教室の半ばは、地歴にあてられ、精巧を極めた地圖
模型が陳べられてゐる。ニスを塗つた艶々しさ、乾葡萄で
製作した新趣向等、人の注意を惹かない物はありません。

阿武郡の小學校兒童の繪畫・習字、縣外の女學校と縣内各
學校の習字・圖畫は一年梅組の教室に、本校のものは一年
松組の教室に陳列せられ、圖畫教室は色紙短冊が配置され
て、大きな唐紙で書いた江戸繪が古風の情を味はさせてく
れます。

新築の階上には諸名家の人の手によつて書かれた掛物が
かけられてある。私共の乏しい鑑賞力では批判することは
出来ないが、諸名家の作だけにとにかく見事なものばかり
でした。

南國文庫には外國の中學校の書畫が陳列してある。室内
の不行届と、室が隔離してゐた爲見られなかつた方も澤山
有つたと聞きますが誠に遺憾でした。

五三

会場をめくりて

第四學年 中 村 正 子

二十周年記念の大事業の一であるペザリは十一月一日の午後一時より、十一月三日に渡つて行はれたが、かくも盛んに、多くの人々の來校を得て終つた事はほんたうに喜ばしい事です。特に係の方々の明るく、やさしく、親切なサービス振りには完全にお客様の心を引いた事と思ひます。次に各部に就いて簡単に其の様子を記して見ませう。

一、賣店の部

其の一、第一賣店

此所は主に一、二年生の方達の力を込めた製作品ばかりでした。一、二年生らしい可愛い美しい物で小さい子供さんや女の方達に大変好い感を興へた様です。

可愛いキュービーさん、子供さんや若い女の方のお目に留り、大変よく賣れました。それからチョココレイトを入れた可愛い美しい花籠も大いに歡迎された様です。此の夜こゝには毛糸の變つたハンドバックも大変よく出来て居た様です。又粹な感じのする煙草入れは男の方達の目に留りました。

第一日、二日、三日と大變によく賣れ、美しかつた部屋

も何だか淋しいがらん堂の様になつてしまひました。

其の二、第二賣店

この室の裝飾は殊に趣向を凝し一層ヤダン味を見せておました。三年生の製作された毛糸編物、電燈カバー、やさしい美しいリ、ヤン人形等が多く並べて有りましたが、第一日目から最早非常な景氣で或は明日、明後日がどうであらうと心配された程賣れてしまひました。此の室は第二日目は第三賣店の残りのエプロン、セーターをゆづつて部屋をかざりましたが、第二日目も亦入盛況の中に終り、三日目には第三賣店へ全部品物を移し、殊ど賣切れの状態でした。

其の三、第三賣店

四年生らしい落ちつきと明るさの加味された部屋。此處も第一日目から非常な人で、或はもう品物が無くなりほしまいかと心配した程でした。編物のセーター、可愛いちやんこ、白い綺麗なケーブ、實用向きの羽織下、エプロン等、大歡迎されて一日目で全部なくなつてしまつた位のお景氣です。よく賣れると元氣が出て来るのでせうか、賣子さん嬉しさにうき上氣して上手に賣つて居ました。此の外滑らかなスポーツ人形も小さい子供さんに喜ばれ、美しい白、赤、黄のチェリーリップ、肉色、白、赤のバラの花も蒸

士の方達に澤川買つて頂た様いです。第二日目は第二室の

リ、ヤン人形等とゆづり合つたり、又特に二年生の方の作

られたヤン／＼コ等で部屋は又賑やかになつたが、亦歸

りにはがらんとした淋しさになつてしまつた程です。

「皆さんは仲々賣り方が上手ですな」等戲談を云つて、

造花に香もないのに匂つて行かれる紳士さん、子供の洋服

を買ふに餘念のない奥さま、賑はしい光景でした。

けれど二日目、三日目は第一日目に比べると少し淋しい

様な感じもしましたが、何處も想つて居たよりの大成功、何

とうれしい事でせう。

一、食堂部

美味しいコーヒー、しるこ、うどん、すし、そして白い

エプロンの綺麗な生徒さんのお給仕振りは一〇〇パーセン

ト、皆さまの胸に好感を興へたと思ひます。

其の一、コーヒー、菓子部から

甘いコーヒーの香、を特に二階の窓で指月山や青い夏澄に

埋もれた萩の里を見下して味ふ等、全く好い感じでした。菓

子部は明治製菓の色々の菓子で美しく飾られました。コー

ヒー、チョココレイト、ランチ、キヤラメル等美味しい物で

一杯です。此處も一日、二日、三日變らない賣れ行きでし

た。

其の二、「世界一のうどん、大サービス」と書いたうどん

部屋の光景をのぞいて見ませう。

何處の食卓も一杯です。お給仕さんも大變に忙しい事

でせう。お味も上等です。一日、二日、三日變りのない好景

氣でした。

其の三、うどん部屋の向ひはおすし、その隣は果物です。

おすしは中食變りに特に大もてでした。少しお鹽がき、

すぎて居ると云つていらつしやる方も有つた様です。

其の四、最後の大評判のおしるこ部へ。

メガホンで呼ぶ生徒さんの聲。おしるこ部屋も亦他に劣

らない大盛況でした。お味？、勿論あれなら上等です。室

が廣い爲にゆつたりとした感じがしてとても好かつた。一

日に二千何百杯も出たさうですから、とても忙しさだつ

たと想像出来ます。

かうして食堂部も白いエプロンの纏ると共に、ほんたう

にうれしい程よく賣れ、人々に喜ばれた事は仕合せと思ひ

次に植物性の髪油も大變な賣れ行きで、クリームと共に三日目など又作り増したと云ふ程です。

此の化粧品部で、特にお客様に安心第一の感を興へたのは、實際にためして頂いて買って頂いたといふ事です。乙女肌も大變によく賣れました。

こんなに盛大に、こんなに氣持よく、ほがらかな喜々とした中に、秋の晴れた空のすがすがしさにも負けない位、バザールの終つた事は、二十周年記念の事業として恥しくない事を信じます。そして私達は一生此の樂しかつた記念事業を追憶して、どんなに學生時代の、ほがらかさと、樂しさ、そして亦純な光景を味ひ、懐しむ事が出来るでせう。此の後この様な事が開かれた場合には、こんなに盛大に、いやこれよりも尙立派に行はれる様にと望んで居ます。

學 藝 會

第四學年 吉 田 泰 子

碧瑠璃に澄渡つた秋空、只見る黄葉連山を裝ひ、菊の香高き巴城の里に、氣すめる南園の風光、阿武の流悠々として適素な影を宿し、古き歴史を秘めて居ります。

併して明治四十五年の春、此の光輝ある南園の地に嘯々の聲をあげ、多年幾變遷を重ね、日出度く創立二十周年の祝福すべき日は参りました。

昭和七年十一月一日、おごそかに記念式はあげられました。それに引續いて盛大な記念行事も行はれました。その一つとして學藝會が催されました。

十一月二日、此の日は校内生徒の學藝會でありました。朝から随分の人でまるで校内は人の波を打つたやうな賑かさでありました。それで學藝會場も満員の大盛況です。

午前十時より音楽會は開かれました。

第一のプログラムはめくられました。

一、開會の辭

二、校長先生御挨拶

三、音楽、對話童謡、桃太郎

可愛らしい歌ひ方、ほんとに無邪氣な童謡で如何にも愛らしい子供らしい唱ひ方に微笑せられました。

四、談 話

絶對の心

五、音 樂

時計臺の鐘

夕暮の頃

ヨロツバを放して聴くやうなカリヨンの音を思はせるやうなメロデーの伴奏から始まる。

大空に遠く遠く鳴り響く鐘の音が浮雲の中に消えて行く物淋しい情景である。

濱には人影も無い秋の暮、波靜かに汀に一人物思ひに耽る、秋たけてすさび行く濱に波の間に、鳴く千鳥の聲もあはれな、一種哀愁的な調子でありました。

六、算術 對話 簡便法

簡便法は用ひれば勿論簡單で便利であります、一般にあまり用ひられませんが、實際使用するとなると熟練を要するのが缺點であります。然し日本人として度量法の改正は殊に必要であります。

七、音 樂 紅貝

紅貝を拾つた思出の濱に一人しよんぼりと佇めばたゞ昔に變らず波の音のみが今もあるのみであります。

八、家事 浴衣の染め直しについて

これは廢物を生かす方法で實際家庭經濟上大に利用すると良いと思ひました。

九、音楽 齋唱 村の英雄

秋の暮、長年住んだ牛小屋で死んだ牛に對する可憐な童謡でありました。

十、音 樂 ビアノ聯彈

マーチ舞踏

一年有志

二年有志

三年有志

四年有志

五年有志

六年有志

七年有志

八年有志

九年有志

十年有志

一年生としては大變に上手に出来ました。

五七

勇壯活潑なマーチでありました。

十一、遊 戲 旅愁

戀しい故郷、懐しい父母、やるせない夕べを聯想させるやうな優美な踊り方一入旅愁の身にしみ感がありまました。

十二、音楽 齊唱

あの山蔭

運動會

無邪氣な子供心を歌つたもので快活な調子で面白く感じました。

十三、音楽 ビアノ聯彈

春が来た

汽 車

リブレット

風

霧

迷子

逢ふは別れの始めとして定めなき世の常である、共に別れ路に立ち「さらば」と袂を分けてとも惜別の涙潑々と禁ずること能はざる情景であります。

十六、英語劇 私共の教室

一年生としては大變に上手に出来ました。

五七

十七、音楽 獨唱 桐畑 二年有志

月見草

コーラスに引きかへて物淋しい旋律でありました。

十八、化学 木材の乾溜と木炭の性質 三四年有志

我々が日夜燃焼料として絶えず用ひられてゐる木炭につ

いて、その性質と製法を實驗を加へて詳細に述べられた

十九、教訓少女劇 穂をたづねて 二年有志

心優しい兄弟が母の病氣をなほす爲に、森の姫の宮を訪

ねて行く、教育的暗示を加へた面白い、且快活な劇であ

りました

二十、合唱 露營の夢 二、三、四年有志

砲弾は電の如く、銃丸は雨の如く宛らにして雨、宛らに

して雷、忽ちどろく関の聲、ラツパー齊響渡る、硝烟

電光、閃々湧立つ、潮とおしよせ、哨喊とろく敵軍

くづれて天地にとどろく味方の勝鬨、争鬨今はた止みて

ふけ行く宵露營の簾消え果て、屍を渡る夜嵐の血潮にむ

せぶ星の影、戦後の一夜假の宿、夢に結ぶは戀しい我が家

拍手！ 拍手！

二十一、閉會の辭

万歳！

永井郁子女史邦語獨唱會

プログラム

一、洋琴獨奏

乙女の詩

一、日本新歌謡 六曲

1、秋の月

2、出船

3、ふる里

4、かもめ

5、京のいとさん

6、晝の夢

(休憩十分)

一、各國名曲 八種

(日) 姫松、若竹

(支) 駄菓子賣の歌

(露) 薔薇と乙女

(獨) 折ればよかつた

(英) 菊

(米) ミネトンカ 湖畔にて

(佛) 小夜樂

(伊) サンタ・ルチャ

(休憩十分)

一、特別番外 三番

(イ) 唐人お吉

(ロ) 龍峽小唄

(ハ) 肉弾三勇士

君が代合唱

會衆一同

(終)

ピアノ伴奏 上角田芳子嬢

歌詞

秋の月

光はいつも變らぬものを
殊更秋の月の影は
などか人に物思はする
あゝ鳴く蟲も同じ心か
聲のかなし

瀧廉太郎作歌
同 作曲

出船

今宵出船か
暗い波間に
船は見えねど
沖ちや千鳥も
今なる汽笛は

お名殘惜しや
霧がちる
別れの小唄に
鳴くぞいな
出船の合圖

勝田香月歌
杉山長谷夫曲

無事で着いたら 便りを呉りやれ
暗い淋しいほかけのもとで
涙ながらに 讀まうもの

ふる里

どんとふんだよ ふるさとの土
土は赤いか 稲穂がみのる
みのる稲田に さざ波打たせ
流れて吹くは 黄金の波よ
若いかひなの 血潮がをどる
海のあなたに 夕日が赤い
夕日が赤い

金城榮治作歌
宮良長包作曲

どんとふんだよ ふるさとの土
海は青いと 白帆が走る
走る白帆に 大漁旗を
あけて父權 かへるよと
濱に待つ子の 歸が光る

海のあなたに
夕日が赤い

三

どんとふんだよ
黄なユイナの
散つた井戸端で
母は笑顔で
老の瞳が
海の彼方に
夕日が赤い

かもめ

かもめ／＼去り行くかもめ
かくも寂しくちずさみ
渚はてなくつたひゆく
かもめ／＼
入日のかたにぬれそぼち
びよるとなくはかもめどり
あはれ都をのがれ来て

室生犀生作歌
弘田龍太郎作曲

海の渚をつたひゆく
海の渚をつたひゆく

京のいとさん

京の／＼いとさん
一
今この京のいとさん
むかし京の大佛つあん
天火でやけて大火事
夜中の空が眞赤いけ
京の町が眞晝間
鳥がさはいでグア／＼／＼
西のお山へ逃げだした
おそろしかつたおはなしを
二
あなたは聞いておいやすか
京の／＼いとさん
今この京のいとさん
四條河原のまんなかで

高尾亮雄作歌
澤田柳吉作曲

床凡おいてござしいて
雪洞つけて燈つけて

川にお足をつツこんで
水にうつした夕すゞみ
あんたは知つておいやすか

畫の夢

薔薇はなさくかけに伏して
詩をまくらに仰ぎみれば
うたの心は花に入りて
笑むよ花びらえむよえむよ
えみてえみてうたとなるよ
薔薇ほほえむかけに伏して
詩をいだきて眠りみれば
はなのすがたは夢に入りて
舞ふよ乙女のまふよ／＼

高安月郊作歌
梁田貞作曲

まひてまひてこひとなるよ

乙女まひまふそでに隔れて
戀をうたひつ我もまへば
ゆめの心は委ぬけて
散るよ諸共ちるよちるよ
ちりてちりてはなとなるよ

各國名曲 八種

姫松小松・若竹男竹

日本古謡
山田流琴曲

ひめ松こまつ 姫まつ小松
緑のいろませ 春ごとに(繰返)
わか竹をたけ 若たけ男竹
模なたわめそ うきふしに(繰返)
【註】御存知の「櫻」など、共に山田流琴曲の手ほどきも
のです地唄や琴唄にはよい歌が澤山あるのですが、日
本式の歌ひ方では効果的でありませぬ。それ故永井先
生はそれらの佳き歌を正しい洋樂の音階にのせて歌上
げ洋樂心解者に本當の日本歌謡の良さを再認識させや

うと、かねてから努力してゐられます。
「櫻」や「姫松」はほんのその片鱗であります。

駄菓子賣の歌

支那民謡
齋藤佳三作曲

桂花白糖條頭糕¹
晴るゝ日も

桂花白糖條頭糕
曇る日も

白堤蘇堤の西湖
籠をかついで何遍廻るや

白堤蘇堤の西湖を

桂花白糖條頭糕²
春の日も

桂花白糖條頭糕
秋の日も

白堤蘇堤の西湖
聲はながれて木精に響くは

白堤蘇堤の何處

【註】西湖は、南宋の古都「臨安」すなはち今の杭州の西方にある周圍五里ほどある湖水で、湖中には孤山、湖心亭、三潭印月などの小島があり極めて美しい。なほ其孤山には東方からと南方からの堤路があり、堤上には柳が植えつけられてある。前者は白樂天が築いたので白堤、後者は蘇東坡が築いたので蘇堤、そして此勝地には幾十艘となく客舟が浮べられてゐるが、その客を相手に堤上を頻りに「クイ、ホア、ボ、タン、チヨ、デイ、コ」——駄菓子の名——と叫びながら行く駄菓子賣がゐる。この奇異な旋律を主題として作られたのがこの歌曲である。

薔薇と乙女

永井郁子作詞
コルサコフ作曲

ばらの香 慕ひて
露うたへど

いらへもなし 薔薇
x

若人

遠慮が過ぎた

ゆうべも夢に見た²

山かけのさゆり
星がたづねたら

宿かすだらう
蟲がすがつたら

うなづかうものを
折ればよかつた

遠慮が過ぎた
折ればよかつた

遠慮が過ぎた

【註】シェーマン・ハインク夫人などもそうでしたが、永井先生もアンボも運めて歌はれます。言葉が速くて明せきで歌唱に一種の魅力さへある先生の「折ればよかつた」は他の追隨を許しません。

菊

アイルランド民謡
ムーア編曲

折らすに置いて来た

山かけのさゆり
人が見つけたら

手を出すだらう
風がなぶつたら

露こぼさうものを
折ればよかつた

遠慮が過ぎた
折ればよかつた

折ればよかつた

高野長之作歌
ブラームス作曲

【註】ウム……はハミング、ボイスといつて聲樂技巧上の一大難關であります。

調べに思ひを寄すれど
乙女は 若人の

奏づる秘めごと
空しく聴くのみ

ウム……………

底の千草も 1
わしのねも
かれてさびしく なりにけり

あゝ白菊
あゝ白菊
ひとりおくれて 咲きにけり

露にたわむや 菊の花
しもおどるや 菊の花
あゝあはれ

あゝ白菊
あゝ白菊
人のみさをも かくてこそ

【註】 翻譯の難しい事はいふまでもないので、散文はある程度まで實現されてゐますが詩では成功してゐません音楽の場合は、一層それが困難であります、そこで原作に即しないで全く自由な日本語詞を附けた方が却つて妙な譯詞によるよりも意義ある場合が多いのです。「螢の光」「菊」「埴生の宿」など全く日本の歌になりきつてゐるではありませんか。

ミネトンカ湖畔にて 六四
小泉 治譯詞
リユランス作曲

月の眞塵よ汝が隣近しく
なにはや我におそれあらせじ
み空はまさほにささなみ輝りはふ
きいきね生命の我が誓ひの言
月の眞塵よなどさはに近く

【註】 米國の民謡作家リウランスがミネソタ州ミネヤポリス附近のミネトンカ湖邊に居住せる米國印度人の旋律を取つて變曲したものです。伴奏の聲音は湖の小波を暗示し、旋律はレガアトの多い愛戀の情をうつしてゐます。土人に取つて尊いものは彼等の運命の支配者たる月と太陽とそして彼等の財産である狩の獲物であります。それらを指差して戀人に眞實を誓ふ土人の娘の戀は永井先生の演奏を通じて輝かしい生命の翼を得るに相違ないと思ひます。

グノー小夜樂 近藤朝風譯
グノー作曲

あはれ床しき歌の調べ
夕はるかに胸に聴けば
心は歸る樂し音

あゝ唱へや君よ、永遠に唱へ
いさ懐しの君唱へ
唱へ、唱へ、あゝ永遠へ

あした彩なす雲の如く
君が笑ひの浮ぶ見れば
いつか憂愁の影も消ゆる

あゝ笑まずや君よ又も復も
いさ懐しの君笑めよ
笑めよ、笑めよ、あゝまたも……

【註】 第三節を略す。フリユート助奏付を本格とす。
サンタルチャ
ナヅリ民謡
堀内敬三譯詞

一、月は高く そらに照り
かぜも絶へ 波もなし
來よや友よ 舟はまてり

二、そよと渡る 海かぜに
流るるは 笛の音か
晴れしそらに 月は冴えぬ
サンタルチャ サンタルチャ
(繰返)

三、めくしナポリ 夢の國
雲なく なやみなし
舟夫のうたの 遠くひびく
サンタルチャ サンタルチャ

四、いさや出でむ 波の上
月もよし かぜもよし
來よや友よ 舟はまてり
サンタルチャ サンタルチャ

【註】 皆同じメロデーですから一と二だけ歌ふことにしま

特別番外三番
唐人 お吉
六五

西條八十作歌
佐々紅華作曲

駕籠で行くのは お吉ぢやないか

下田港の 春の雨

泣けば椿の花が散る

逢つて行きたや 鶴松さんに

幼馴染の あの人の

おきの黒船 さざりで見えぬ

泣けば涙で なほ見えぬ

泣くになかれぬ明鳥

龍 峽 小 唄

白鳥省吾作歌
中山晋平作曲

ヘア、天龍流れて稲穂はこがね

繭はしろがねお國自慢の

天龍峽よハヨイトヨイト

ヘア、伊那の黒土踏みふみごさ

川は天龍 山は赤石

見てござれ

ヘア、川をへだて、灯が見える

楓をひく灯か 物を縫ふ灯か

戀の灯か

(以下略)

【註】永井先生が珍らしくも此種のものをおられるのは洋樂の正しい音階にのせて上品に歌上げるところに甘味があるのとかく下品になり易い小唄類に價値づけられるゆえんではあるまいか。

肉 弾 三 勇 士

渡邊榮伍作歌
古賀政男作曲

昭和七年二月の二十二日の朝まだき
残月かゝる大空を仰ぎて誓ふ三勇士
水筒の水酌み交し廟行願を取ずんば
皇軍進む道なしと決死の覚悟三勇士
鐵條網は十重二重破る任務は我にあり
爆薬筒に火を點じ胸に抱きて三勇士
敵前實に十米突我と我が身を投げつけて
骨肉共に飛び散りぬ壯烈無比の三勇士
全軍あぐる勝どきや皇國を護る勳は
御旗と共に輝かんあはれ肉弾三勇士

音樂會



第四學年 山 縣 節 子

澄徹たる阿武川に影をうつしてより二十年、多大の歴史を築してこゝにその功を誇る我が校の二十周年記念日はめでたくむかへられた十一月一日、雑草の枯れんとする間に咲き誇る菊花の高き香は、我が校の今日の隆盛を特に祝つてくれます。

でもやがて第三日も我等の期待と共に明けた十一月三日味爽の空気を透して國旗の翻るのが映る。いくら降つても此の日になれば必ず晴れると云ひ傳へてゐる三日、やはり今日も小春日和とでも云ふ長閑さ、射す日の光もそゞろに熱度を増しています。ふんわりと一脈の白雲が國旗と共にたなびいてゐます。

天地もろともに、明治大帝の御徳を慕ひ奉りて、この佳辰を祝します。

そのすがくしい心を持つて、今日又迎へられたのが、大なる期待のもとに催される音樂會でした。現代はラジオレコードと或は流行人氣を的とすることに於て、すべての音樂會に第一人者としてその超越せる名聲をふり、ファンを虜服されてるのは關谷敏子、宮川美子女史等でせう。

でもこの燦爛たる太陽に比し、暗い夜に正しき迷はぬ道を教へる月の如く、又種々な雜誌等で一時耳にした「邦語獨唱」即ち「邦語を愛し外語を除けよ」と祖國愛に燃えられソプラノ歌手永井郁子女史こそ、私共は一層樂壇に誇り飾られし功あるものと思ひます。

近く、否音樂とはたのしく一緒に歌ふものだと考へし頃よりこのかた、この秩地方において名ある歌手を迎へ、その玲瓏たる名聲を賞したと云ふ事は一べんもなかつた。その物足りない淋しさが、この永井女史に依つて一時に足り満たされると云ふのですもの、余る幸福に皆狂喜したのです。

それと同時に、秩地方は十數年にわたり、レコード、ラジオの急デンボな發達をなした爲、音樂に對する理解觀念が充分だつた事に依つて、當日は午後七時よりの開會と云ふに、五六時頃よりドンムとまるで公會堂建設以來初めてと思はれる程の人で、誰しも想像出来ない盛大な獨唱會場となすことが出来たのだと思ひます。

ステーチと名のつく粗末な舞臺は出来ました。人々の話によれば、今回こゝに立たれるのは女史としては四百餘回目のコンサードださうで、實に驚駭すると共に女史の音樂に對しての熱心さがうかがはれました。

満場の人々は、たゞづを唾み大なる期待の前に開會七時を待ちました。

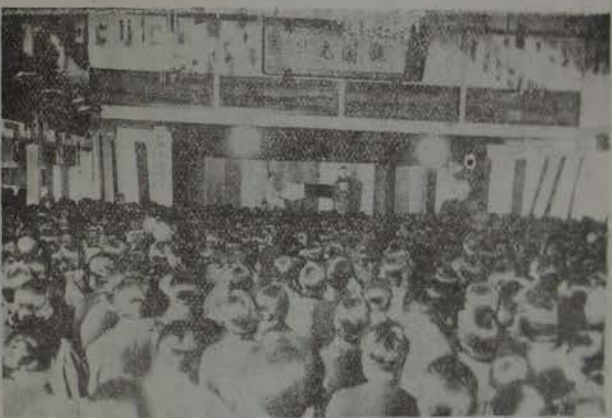
初め筒井校長先生よりの御挨拶として、この樂壇のバイヲニヤに百雷の如き大拍手を浴せ、勇氣づけて下さいます様にとのお願ひがありました。

いよ／＼初めに立たれたのは今回の伴奏者角田芳子嬢で、一目で朗な音好感のもてる人で、すぐと輕裝なスカートの裾を垂らされ、ピアノに向つて「乙女の謠」と題して奏でられました。

そこには量り知れない熟練によつて生ぜし巧みなキーをたゞかれるお手もと等は感服せざるものはありません。むりのない、しかも悠長なりムムは咲いて散りました。

次にいよ／＼永井女史がお出になりました。

おゝ！そのこぼれる様な微笑をもつて挨拶された時、や



はり祖國愛に生きられる如き何等のかさりけない朴直なる女史を見た時は、音樂會をはなれて一種の嚴肅さで胸がときめくのでした。そこが女史の藝術に對する個有な點であることをあり／＼と表現せられ又感じられました。

「秋の月」といふ歌で初められ、一同はしみりとした秋の夜を想像させられます。つゞいて起る拍手！アンコール！ではばらくは落着きませんでした。

次は「出船」でこれは相當藤原義江氏等のレコードでおなじみでしたけど、又種類の情があらはれました。次が「ふる里」と題するもので、その出の「どん」と踏んだよふる里の土……」と元氣なしかしそこには秘められたる里のなつかしい哀愁の念を覚え、特に今晚のプログラム中で好評をほくした歌で、すさまじい拍手。アンコールによつて女史は再び出場されて、今度は別

な「日本の子守歌」を歌はれましたが、これも子供の無心にお伽噺の夢に入つた情景をまざ／＼とうつして來るのでした。

本當に清亮たるその御聲と云ひ、態度といひ、そこに少しもの表裏のない、他のことで魅せようとするものゝない所に、一聲歌を上げずん／＼と不思議な力で壓せられるのを覺えます。

「かもめ」「京のいとさん」「晝の夢」と歌はれる毎に加はる女史の齎した熱度で、満場は一層と沸騰しました。こゝで十分間の休憩をとられ、やつと自分の存在に氣が付き、口々には讚美の言葉で一はいでした。

同 冷 泉 龍 子

各國名曲八種の中の先づ最初に日本古謡山田流等作曲の姫松小橋、若竹男竹、次に支那民謡の駄菓子賣の歌——支那で言ふ駄菓子の名「桂花白糖條頭糕」歯切れのいい先生の歌ひ振りは、恰も支那特有の沈靜な空氣の中を、又夕闇を透して鼠色に見える揚子江の水際を賣り歩いて行く駄菓子賣の子の心その物だった。

薔薇と乙女

永井先生獨特の名作詞だけあつて素晴らしい好評を招いた物だった。靜かな夕暮、微妙な光のふるへを乗せて、大陸の空氣を小さくゆすぶりながら飛んで來た様なその優しい美しいメロデーには思はずうつとりとした私達だった。ブラーム斯作曲の「折ればよかつた。」作詞も、作曲も、獨唱もい。

折らずに置いてきた山蔭の小白合
人が見つけたら手を出すだらう……
テンポを速めた女史特有の歌ひ方、切れては續ぎ、續いては切れ、さうしてその音は多くの人の頭の上を響き渡つた美しい曲美しいメロデー。
ホーンと最後のピアノの音と共に降る様なアンコール
そしてアンコール……
再び鳴りを靜めた會場に漂ふ物は先生の優しくうるんだ様なお聲のみ。
星が降ねたら宿かすだらう
虫がすがつたならうなづかうものを
……

アイルランド民謡の菊
全くなごやかな作詞と作曲、唯それだけ。

ミネトシカ湖畔にて
感慨無量だつただけ……。

グノー小夜樂

グノー作曲、或る時はやる潮ない思ひを仄かなる吐息に浮ばせ、又或る時は胸の高なる喜びが溢れた様に強く、そして弱く響き渡る樂の音、靜かな夜の寂寞を破つて私達の胸にほのかに深くすくみ泣く様なそのセレナーデ。

高潮した沈黙が長く続いた。

明るいつヤンデリヤの下に先生の美しいお顔が愈々映え渡る。——とその時萩高女の同窓生が右から出てかをり高い菊の花を親しく手から……手へ。

浴びせかける、拍手、拍手、拍手の響。ここで十分間休憩をやがてか、げられたプログラム。

ナポリ民謡サンタルチャ

サンタルチャの物語りを知つては、先生はその優しい滑らかな聲の中に何處か清い冷気が含まれて深い、深い海底にでも沈んで行く様な、引きこまれて行く様な淋しさかひしと胸に沁む歌だつた。

來よや友よ

舟は待てり

サンタルチャ

サンタルチャ

特別番外三番の唐人お吉

させる物があつた。

拍手、アンコール 拍手

午後十時前後に階上、階下一同起立、莊嚴嚴肅な君が代を合唱し、かくて盛會裡に會は滞りなく閉ぢられた。神祕的な其の歌に、夜の音楽に、私達一同はそのまゝ身も心も奪はれて居た。

しかし多くの人の波は何時までも私達をその幽明境にさ迷はせはしなかつた。

幾つもの人波にもまれて、靴もそこ／＼につまかけ、投げ出される様に公會堂から往來へ飛び出た時、ほつとつく息と共に目に映じた物は靜かに夜をかけて巡り行く空だつた。月光は淡く門燈の光と交錯して、音楽會のアーチに薄青き赤き光を投げかけて居た。

雀の囀り

寛 み どり

降り續いた雪もどうやら霽れて、太陽は珍らしくもこ／＼と機嫌のよい顔をして笑つてゐます。今朝は不思議に少しの風もありません。寄宿舎の屋根でじつと職員室を眺

七〇

駕籠で行くのはお吉じゃないか

下田池の 春の雨

泣けば椿の花が散る

特種なその作曲を聴く

椿の花が三つ、四つ散散いてゐる。行く春の隅たけてなごやかなる風情だ。無念無想にやがて焦點もばやけて薄れる許り眺め入るお吉が……沖にあるその黒船を、髪をみだして清邊に鳴咽する哀れな姿。誰か知る燃えるお吉の心を……唇をかみしめる様なくやしさを、感傷に走つた馬御や、槍の様な怒りや、さては小雨の様なすくみ泣きは、波を……

黒船を遊ぶ恐しい風の中に消え盡してしまつた。

中山吾平作曲として名高い龍吟小唄

豆絞りの手拭を頬かむりした山だしの翁と、山と山とに映

まれた川の流に筏を浮べて流れて下る天龍とを、上氣した

空気にくみ取つて見た。

ハヨイトヨイトヨイトサソ

ヤレコノセ

先生の美しい聲の旋律より思ひは遠く天龍の谷間へ……。

古賀政男氏作曲の肉弾三勇士

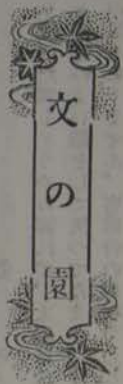
古賀氏固有の作曲と、力ある先生の落着いた歌ひ方とは、

あくまで君國の爲壯烈な最後を遂げた三勇士を眼前に展開

めてゐる親子の雀は頻りと何か話しあつてゐるではありませんか、私はそつと聴耳を立てました親雀は熱心に子雀に訓へてゐるのです。

「誠に面白きは人間の世界である。異なる境に産ぶ聲を揚げた男女の人々が、不思議や神のみに恵まれて奇しくも尊い萩の學舎に集つて來、我れ劣らじと我執の一念に没却してゐる。あゝ愚なるは人の常かな。心頭を振り立て、俗身を擲らせて毛糸の編物三昧に機心寒泉を蔽はんとする女人の形相、數へれば四つ五つは見える。譲りたりとて何かあらんと觀するに、四悪五濁に染む袖人達は、徒に黒白の境に煩惱の奴となつて、勝つたと云つては二目の三日のと鼻を高々とし、負けたと云つてはエイエなどと歌聲を揚げて念佛代りにお餅で茶を沸かすあゝ愚るは人の凡慾や」と、子雀は唯々と首肯のみで、之れまた頻りに眼を天の一方に走らせて、隨て翔らん自由の天空を求めてゐる様です。

折しも鐘が鳴りました。俄に空には暴風の吹き荒れて狂ふ様に騒がしくなつて來ました。さて明日の天候は……



記念文藝

二十周年を迎へて

第一學年 齋 藤 芳 枝

二學期の始めより、まことにまつておました二十周年記念祭を、いよ／＼迎へました。私はこの記念事業の中の、案内係になりました。さうして皆さんと一緒に、まめ／＼しく働きました。私達はこの記念祭を迎へる爲に、帽子、花靴下等を作りまして、大へんいそがしう御座いました。私が一人目のお客様を案内しました時、バザーに飾つてある、あれだけの品物が皆賣れるだらうかと、心配致しました。けれど次々に案内して行く度に、目に見えるやうに賣れて行くのを、私達は大へんよろこんで居りました。此の様に、第一日目のバザーには、三千人からのお客様がおいでになりました。大へん盛大に終りました。翌日も、

三日も大成功にして、とゞこほりなく終りをつけました。この三日間のバザーで、あれだけの品物を賣り切るまでによく賣れたといふ事は、先生方や生徒が、心を合せてあの事業にあたりましたので、始めてあれだけの事が出来たと思ひます。私は、この二十周年にあたりまして、何事も皆が心を一つにすればあのやうな、偉大な力になる事を學びました。私達もこの點を實行しなければなりません。

二十周年を迎へて

第一學年 野 村 節 子

十一月一日は、我が萩高女の二十周年記念日でございます。この日私共は早朝より登校しました。そして記念式は始まりました。私もこのうれしい記念の式場に列する事が出来まして、まことに有難く思ひました。校長先生のお話や、來賓の祝詞などがありまして式後、展覽會や、バザーなどがございまして、私は案内係になりました。お客様がずんばんとくさんおいで下さいましたので、皆様とよく御案内いたしました。お書にはおしることをたべました。南園館には生花がございましたので、午後は神野さんとそこでお客様をおむかへ申しました。翌日も又その翌日もずつと

でした。又私達は全くの草履取りでありました。

一寸の隙をぬすんでは食堂へ行きました。食堂係の方も面白い事を言つては、忠實にお客様を呼んで居られます。おしるこ、コーヒー、うどんにしろ皆其の味は上出来だつたと思ひます。

二日の日は案内をしました。お客様がお出でになると、「よくいらつしやいました。どうぞ此ちらへ」と言ふ様に案内するのであります。それは面白い事です。自分の言つた言葉がをかしくなつて一人で吹き出してしまふ事もありました。三日の日には午後公會堂にて永井郁子女史の獨唱會がありました。私達はどんな顔だらうか、どんな聲だらうかと思つて、公會堂へいつても気がそは／＼してゐました。私達は獨唱會等は始めてなので、どんなのが面白いのかわかりませんでした。永井先生の種なのが上手で、ほんとうの歌ひ方だなと言ふ事がわかりました。大變面白く愉快でした。

此の三日間を反省して見ますに、面白い事、愉快な事ばかりいふ事、腹の立つ事いろいろの事がありました。どれも皆在學中の思ひ出の種だと思ひます。

又私達の在學中に、こんな大い行事のあつた事を心から喜び、ほんとうに幸福だと思ひます。

案内係で御さいました。お客様もほんとうに大勢いらつしやいました。そして私たちの手藝やら書方、圖書などを御らん下さいました。又食堂の方には上級の皆様方がにぎやかに、そしていそがしさうにお客様方に、おしるこやら、うどんやら、其の他のものを差上げていらつしやいました。先生方もおいそがしさうにあちこちと、さしづついらつしやいました。三日目には永井郁子先生の獨唱をきかして戴き、お上手なうたひ方にきくとれてしまひました。開校以來二十年の長い間、たくさん生徒を送りむかへたこの校舎に、今日一生徒として私も學びの道にいそしむ事の出来る幸を、本當にうれしく思ひました。

二十周年を迎へて

第一學年 井 上 多 美 恵

草木は紅葉し、全くの秋日和に萩高女創立二十周年を迎へました。此の式は以前よりの私達の慣れの行事であります。私は案内係を務めました。

お客様がお出でになると、上草履を持って下駄と取り替へるのです。中には私達が草履を差出すのに下駄のまゝ上らうとする人があります。ほんとうに目の廻る種な忙しさ

二十周年を迎へて

第一學年 河野ウメ子

本校が明治四十五年創立されて以來、幾星霜今日漸く此處に滿二十周年を迎へ盛大な記念式が催されました。此の記念式日には、バザー、展覽會等、展覽會は生花、手藝品、習字、圖書等で本校生徒の出品は勿論遠く廣島、九州方面の女學生の出品があり、とてもよい参考になりました。その外學藝會、音楽會獨唱會があつて獨唱會には邦語獨唱で有名な水井郁子女史を招いて公會堂で催され、此の三日間にわたる催し物は本校創立以來かつてない盛大さでした。特に三日の日は我國四大節の一つで明治節で本校に於ては盛大な祝賀式と共に、本校卒業同窓生の追悼會が催され私も在校生の一人として其の式場に加りました。このめでたい記念日に、榮ある萩高女の一年生として生を受けた私は何と恵まれてある事でしょう。だが唯やたらに幸福感到にひたつてゐてはなりません。私にはよく分らないけれども毎日の新聞で讀んだり人に聞いたりする現在の我が日本の非常時を思ふと私達一女學生も何だか緊張したい氣持になります。此の二十周年を迎へた今日を限りに大いに勉強に勵みたいと思ひます。萩高女生として恥しくない人にな

りたいと思ひます。

二十周年を迎へて

第一學年 山田直子

菊の香薫る十一月の、一日、二日、三日、これは在校生徒の永久に印象づけられた、二十周年記念式の催された時であつた。過ぐる二十年前、水清き阿武川のほとりに、學舎が生れてより、先生方の御教訓、おいつくしみ深い同窓生方々の、熱烈な愛校心の賜によつて智徳の玉を磨き、體育の進歩、校舎の増築、榮える萩高女の名を高からしめ、此所に目出度く創立の記念式典が行はれたのである。

展覽會、學藝會、バザーに私達は不斷の力を揮やかした。此の時私は案内役の任務を與へられた、桃、紫のリボンを胸につけ、お客さんを御案内して廻る事は大変愉快に、嬉しい事であるといはつて居つた。さて、一日になると、それは全くうらぎられた。多数のお客さんが朝からつめかけられた。案内役は何處へやら、草履取となつた。豊臣秀吉の藤吉郎時分の草履取が想ひ出された。唯一つの草履とは違ひ、二百餘りを丁寧に列べるに／＼と廻り、又は聲を張り上げてあちこち集め、たうとう此の務を果した。

第二學年 藤原俊子

天氣のよい二日目、一人のお婆さんが見えた。私は親切に大事にお婆さんに草履をそろへて上げた。お婆さんは危い足どりで、しつかりと兩の手をそへてはめられ、孫にでも言ふやうに、「いくら上げようか」と聞かれた、私はちまつと困つたが、さうだ、下足料の事だと思つて、「お金はいりません」と言つて上げると、合點の行かない様な顔の中にも、嬉しさうな笑を浮べて、中へ入つて行かれた。此の質朴な態度のお婆さんが、何かよい人に見えた。草履を平氣で履き散らし。下駄箱の中へ履物を入れない人と比べた時、私は有難い氣がした。或る時、小さい子供をつれた男の人の私達に感謝の言葉をかけられた時は、大變嬉しかつた。この三日間、種々様々の人にお會ひして、世の中は美しくもありきたなくもあると思つた。

「人のふり見て我がふり直せ」忙しかつた草履取、私にとつてはよい教訓であつた、と共に、愉快な仕事であつたと思ふ。

私達は、生徒の本分を守り、善良な國民としてよりよく學校の名を揚げなければならぬ。

歌の奏でを聞きて

七五

校長先生のお話がすまして、ピアノをひく人が出られました。さびのある上品な洋装姿でした。堂内は水を打つたやうに、しーんとして、あたりにひびくのはたゞピアノの鮮かな音のみ……強く弱く、高く、低く、おもしろく、さびしく……白魚の如き指の動くたびに其の妙音が堂内にひびきわたりました。手は肩の處からダンスをするが如く、やはらかに、強く、しなやかに、或はたがひちがひに動きまはります。いかにも愉快さうに！

その見事さ！私はうつとりと見とれておりました。やがて一回おへて去られました。今度は永井先生と二人で出られました。永井先生は茶色に黒船とかもめをあしらった、派手な紋服を着ておられました。そして足を一步前に出して、手を前にくんで華やかな歌はれました。ちよつと首をまげられる毎に、其の清くすんだ、ほがらかな美しい聲がお腹のそこから咽歌を通つて、高く、低く、強く弱く、たのしそうに、又さびしそうに、口をもれて我等の耳に傳はるのでした。そして我等はその一曲を聞く毎に、胸の内に想像畫をながめては消してゐるのでした。かくて二三曲おへると退場なさいました。満場水打した如く静かです。話聲は一つも聞えない中に、拍手の音のみは山にこだませよとばかり堂内にひびき渡りました。永井先生が出られる毎に、去られる毎に、拍手は限りなく續いてやまないのです。ふるさとの土は二度うたつて下さいました。

「海の彼方に夕日が赤い／＼と云ふ處に、一番情がこめてあつたと思ひます。曲が終つて退場される時、一年の大岡さんが、ふり袖姿で、菊の花束を持つて出て、永井先生にさしあげられました。京のいとさんと云ふ歌も、大へんおもしろうございました。永井先生が作られた、ばらと少女の最後の「ウム……」は、音楽上の一大難所とも言ふべく

大へんむづかしい處とかですが、先生は何なく、うたつてのけられました。曲が終つた頃、同窓會の方がお二人、それ／＼花束を永井先生に送られました。いつも拍手の音のみが堂内に満ちてゐました。今度は折ればよかたをうたはれました。先生の折ればよかたは調子をすこし早めて、歌はれ情味たつぷりでした。拍手が長く／＼續きましたので、又歌つて下さいました。そして番外として、唐人お吉三勇士などを、それからあひだに、野中のばらを歌つて下さいました。

終りにみんなで「君が代」を合唱しました。これで音楽會の終りとされました。母や友達と、一しよに家にかへりました。時は丁度時計が十時をつけておりました。

食堂めぐり

第二學年 藤 家 敏 子

大宣傳にさそはれて、入つて来たおしるこ、この食堂もすでに満員で奏でるレコードの音と、人のさどめき、お給仕の人の行きかひ、頭がぼろ／＼としそうです。

やつと落ついてあたりを見渡せば、あそこには、何々さんのお母様が、こちらには何々さんのお姉様が、ほんとう

に大變です、耳のそばではカン／＼ひびくレコードの音、やつとおしるこにありついて、さて食べやうとそうつと口に運んで来て「あつ」と思はず聲を發しました。

熱かつたのです。本當に舌が焼けそうでした。舌焼けたのでせう。後で飲みにくかつたから。ほう／＼の體でおしるこの食堂をにげ出しました。もうこの食堂はまつびらです。神妙に二時間も持場に控へてゐて、今度はおうどん屋へ出張です。さすがに時間はづれで、こゝはすいてゐますやつぱりこゝもやかましいレコードの音です。もつと子供らしいものを望ましいと思ひました。

お給仕の方のサーブス振りは満點です。こゝではおいしく頂いて、十分好感を持ちながら、自分の持場たる展覽會々場に歸つて行きました。

正午のサイレンの音と共に、おすしの食堂へ出張です。食事時の事として、その大入は想像以上です。二十分も待たされた上でやつと頂くことが出来ました。それも人におしつぶされさうになつた隅つこのテーブルです。命から／＼御飯をすませてやつと外に飛び出して、フーと大きい息をすひました。正午には行くべからずです。

午後三時丁度いゝ時です、今からコーヒの食堂に出かけます。出口の反對がはに陣取つて出入の人を眺めなが

ら、靜かにコーヒを飲むのも仲々面白い事です。

おしるこの失敗をくり返すまいと、そつとお口にもつて行きました。何て冷たいコーヒでせう。

立つてゐる湯氣はだてなんぞせうか、本當に冷たいコーヒです。お口の舌が驚いてゐる様です。

そろ／＼失禮しませうね。

こうして私の第一日の食堂巡りはおはりました。空は高く澄み、日はうら／＼かに秋風はさはやかに吹いてゐます。

記念日のうれしさ

第二學年 加 藤 美 知

朝起きて空を見ると、日本晴ともいひたいやうにすつきりと晴れて、所々に綿のかたまりでもちらばしたやうに、ふわり／＼と雲が風にゆられてういてゐます。

登校道すがら今日の二十周年記念日を聯想しつゝ校門をくゞると私どもが裝飾した薬玉や色様々の色テープで飾られた玄關口、その左を見ると創立二十周年記念會場入口又受付、右を見ると、おいしい／＼おしるこどうぞおはいり下さいとの大きなピラがかいてあります。それを見ると私のいやしんぼの口からよだれが出さうでございました。

私どもの教室へ第一歩をはこんで中を見まはすと、目もさめるばかり美しく飾つてございました。それからそれ／＼他の教室を一順してまわりました。

コーヒー、お菓子の店々は如何にも暖かさうに湯氣の出でゐるコーヒーの繪が大きくおいしさうに書いてございました。そこでも又よだれを出しかけました。バザーも大へんよく出来て居ました。一年生の作つたキユーピーさんも大へんよく出来てをりましたので、あれならきつと皆賣れるだらうと思ひました。

記念日の式も盛大に行はれ校長先生のお話をなさるお聲も今までになく頭の中にまともりよくしみこみました。記念日ほど氣持のよいすが／＼しい心地のした時は今までにございませんでした。

二十周年記念を迎へて

第二學年 加藤 藤道 子

菊のかをりもゆかしい時節となりました頃、私共の待ちに待ちあこがれた我が校の、創立二十周年記念及其の行事もいよ／＼明日にせまりました。今日私共生徒は餘念なく各教室、受付、廊下等めい／＼受持の任務に當るのでした。

美しく、華かに、そうして盛に勇しくと言ふ氣持は満ちあふれて、何時もの仕事の二倍も三倍も進んで行くのであります。其の隣に私は協同一致と言ふ言葉に、大變感動され何事も皆協同一致をして事をしたら、成し遂げられないと言ふ事はないと感じ入つたのでした。

其から約四五時間で裝飾されたその美しい華やかな見事さは、筆にては言ひつくされません位でした。

萬國旗はひら／＼とひるがへり、赤、黄、緑、白、紫、其他のテープは天井のすみから／＼氣持よく渡され、中心となる所には、赤、白の花輪が圓をまがきおさまつて居り、廊下の到る所も萬國旗が如何にも勢よく勇ましく、風になびかされてゐるのであります。

其の後私共の精心こめて編み上げた赤ちやんの、袖なし煙草入、ハンドバック、はなを等美しく飾りそれもとどこほりなくすみ、戸じまりに念を入れ、お別れを致し明けて一日、洋服も美しくふき清め、スカートの折は正しく何となくすが／＼しい氣分になる。

式前各先生から記念繪葉書、お祝の品、赤、白のお餅を戴き後皆各係の場所に着く。皆にこ／＼顔で福の神でも急にまい込んだ様である。

私は展覽室の係で十一時から十二時、二時にかけて殊に

忙がしい。七十位の腰の曲つたおばあさんまでが杖にすがりながら此の祝日に参列して下さつたのを見て、ほんとうにうれしい様な感じがした。

若いのも、年寄も萩を中心として、各地からお出でになり、受付の所は黒山の様で来る人／＼が皆おしつへされつ満員である。

おしるこ、うどん、コーヒー。食堂等皆一ぱいでどれとて入られ様もない。此頃の面白い流行歌等蓄音機にかけ、誠に賑である。又どの賣店も／＼皆満員でお氣に召されたのをお買ひの様であり、或る賣店等は一日の中に早や大分なくなりかけてゐる様であつた。

私の隣に二人のおばさんが「まあ、ほんとうに洋服でもよくこしらへてある。家の子供に丁度よいようなのがありましたかどうしませうか」等語つて居られる。

化粧品の方の教室も大分半分位は賣れた様である。展覽室の方に行つて見ると此所も、かなりの人で本校の圖書清書等を見てお出でになつて居る。其の内の成人が私に短冊に書いてあつた清書を「これは生徒さんが書かれたのですか」「はい」「ほんとうに上手に書いてある」と稱言を言つて居られたのを聞いても一寸うれしくなる。だん／＼人も増し、豫想以上の入出であつた。おしるこ

うどん、すし、コーヒー等の内でもおしるこが一番よく繁昌し、皆「ほんとうにあんばいが上手」等言つてはどし／＼入つて行かれる。もう四時近くなつた。

後で先生にお伺ひして見れば、萩の土地が始つて以來の珍らしい入出だそうで、何となくうれしい様である。

此の記念式行事も、この三日間に行き渡つてとどこほりなく、しかも大變な賑やかさで終る事が出来た。どうか此の萩高等女學校の行く末ます／＼發展し、立派に御國に役立つ人々が養成され、此の學校の名譽にきつづけられない様又榮ゆく様この記念式に當つて心から祈りたいのです。

あこがれの音楽會

第二學年 赤間 アキコ

二十周年の中で一番印象深かつたのは音楽會であつた。いろ／＼と其の當夜を想像し夢にまで見た音楽會。世界的の音樂といふものはどんなものであらうか？本當に私は指折數へて持つてゐた。

バザーの最後の三日目が終つた時、先生が「音楽會へ行く人は早く行かないと席がありませんよ」とおつしやつたので大急ぎで歸り、支度をそこ／＼にして夕飯もいただかな

いで友達とどび出した。

行く道。「私はまだあんな人の音楽を聞いたことはないよ」「私もよ」等いろ／＼と語り合つて公會堂へと歩を運んだ。

行つて見たらまだ。うちへ歸らないで行かれた人が四五人と、会場係の人しか居られなかつた。

先づ入つて感じたことは、裝飾が上品で美しかったことである。何だか夢の國へでも来たやうな気がした。

時計を見たらまだ五時にもなつてゐなかつた。

今から二時間以上、随分たいくつだ。でも仕方がない。けれども友達といろ／＼お話ししてゐる間にいつか時計は六時をさした。

あゝもう一時間待ちどほしい。もう三十分待ちどほしいこれを繰返してゐる間にいつしかもう三分といふほどにせまつた。

その頃はいつしか会場は二階も下も、ぎつしりつめこんだ人々で一寸の隙もないほどである。

ちん／＼七時を打つた。いよ／＼これからだと思ふとほつとした。

初め校長先生の挨拶があつた。

次に角田芳子嬢の獨奏。乙女の唄があつた。

立二十周年記念式及び、記念行事のあつた日です。

誰も彼もが各々の任務につき、忠實にまめ／＼しくよく働きました。

市民の來校者も、又かく別多勢でした。

賣店の賣子の聲もほがらかに、聲高々と張り上げて、來るお客様を呼んで居ます。

誰の顔を見てもうれさが漲つて居ます。

近所の人のお話では「たいへん賣子さんが、上手だからどうしても素手ではもどられないわ」と言つて居らつしやつた。

私共は会場係であつて、いろ／＼の所を裝飾して廻つて考へもつかぬ大きな力が生まれ出たのであります。

なせばなる、なさねばならぬ、何事も

ならぬは人のなさねなりけり。

と詠んで居る古人の様に、どんな事でも多くの人々が、一つに團結したならば、どんな事でもなる。と云ふ事を目前に見まして、何も云はれぬ感に打たれたのであります。

又永井女史をお招きして、音楽會を開いたのも、澤山の人出でありました。

あゝかうして今では記念式も早や過去の夢となつてしまつた。

八〇

俄に起る大拍手

それから永井種子女史の挨拶。

一番初めは「秋の月」

その上手さ、何といつてよいやらわからなかつた。

たゞぼんやりと聴き入つた。

又角田花子嬢の手のよく動くこと。まるでこんにやく見たやうだ等と二度叱罵した。

「出船」「ふる里」「かもめ」の順に獨唱。その間に十分休憩があつた。その時大岡さんがお花を送られた。

いよ／＼最後に會員一同起立で君が代合唱だつた。この時は又自ら襟を正さしめた。

これでお別れをしていよ／＼歸途についた。

晩秋の風はようしやなく顔を撫でた。

十一月三日の午後七時から九時まで、私の生命のある限り私の脳裡に深く刻みつけられた楽しい時であつた。

創立二十周年を迎へて

第二學年 橋 本 雪 江

由々の樹木、紅と變ずる十一月一日より三日間。

私共にとつては、忘れられない記念の祝日であります。創

創立二十周年に會つた事を私は幸だと思ひました。學校の發達をいのりつゝ筆を止めます。

會場の準備を追想して

第二學年 横 山 ト シ 子

あこがれの二十周年の記念行事は、はや過去の事となつたが、もう一度、記念式前の準備の事をふりかへつて見たい。其折、私は展覽會係だつたので、なか／＼いそがしかつた。数日前から餘暇あるごとに、いろ／＼の準備に取りかゝつた。其日も各小學校や、中學校より送つて來たものを、學校別に分けたり、裝飾用の花を作つたりした。三十日には日躍であつたが、勅語御下賜の記念式かたん、準備の爲に登校し、習字、圖畫、を大きい紙に張つたり、萬國旗を付けたりの裝飾をして、これも亦遅く歸つた。最後の三十一日の日には、どうでも、こうでも仕上げねばならぬ。出来なければ、夜通でも、しなければ、もう明日は記念式の日で何ともする事が出来ないで、菊花會の菊を活けて、直ぐ室に入つて、準備に取りかゝつた。何しろ私共の係の受持つて居る室は、八教室もあつて、なか／＼仕上らなかつたが、夜通でもすると言ふ決心をもつてしたの

で、やつと六時頃に終つた。もう歸る時には、家々には燈火の光が窓邊に映つて居た。二人の友達と雑談に耽りつつふと山を見ると峯と峯との間に、三日月が照つて居た。それに黒雲が、かゝつて物凄かつた。指月の山の方は、もう夕焼は、とうに消えて暗かつた。小鳥はもう眠つて居たでせう。三人でこれ等の情景に見入り、他方をふりかへらうともしなかつたのだ。たゞこの光景を見ただけで早や今日の疲も何處へやら行つたやうだつた。家ではもう食事も、すんでゐた。かうして骨折つたことは、どれだけ一日から三日まで三日間の記念行事を盛大にするに力あつたこととせう。今では少しの心残りもありませんが、私はこれによつて一つのモットーとなすべきものを作つた。

其は一すぢに心をそれに進ませたならば、如何なる事でも成就する事が出来ると言ふことを悟つたことであつた。

忘れがたき日

第二學年 勝部 貴美子

創立二十周年を迎へた喜びと、其の時の行事の面白さは、深く胸に刻みつけられて、忘れ難い印象となりました。其の時の事を一寸思ひ浮べても、胸がおどつて來ます。そ

れにつけても、私共が丁度此の二十周年の記念日を本校生徒として祝ふことの出来た事を、いつまでも感謝せねばならないと思ひます。

第一の印象となつたとは、その裝飾の派手やかなことと賑やかなことでした。

ひら／＼と氣持よく朝風夕風になびかされる萬國旗や、テープ、モール、きれいに造つた花等が、空にあふるるが如く飾つてありました。けれども飾る苦心は、單なる事であつたのでは決してありません。共同一致と、それに伴ふ幾日かの餘裕時間を之に使つて、やつと仕上げたものであります。

私は前から、食堂係になりたいと思つて居りました。所が、その心が先生に通じてか、遂にその一目となる事が出来ました。

第一日目から三日に至るまで、食堂の中は人の黒山をきづいたが如き有様で、校内何處を尋ねても、唯人々の笑ひさざめく聲ばかりでした。

一日目に於て、そろ／＼忙しくなりかけた頃は、もう日の傾くに程近い頃でした。けれども、二日三日は、朝からの目の廻る程の忙しさでした。各食堂に於て臨時券を發賣しましたが、其の賣行きにも驚きました。

何をして居る人を見ても、喜びと、満足と、幸福に満ちた顔が、あり／＼と私共の目に映りました。それは恰もうれいなき人生の群集の様でした。

かくして忙しく、又愉快に三日間を終へました。

食堂の賑はしさ

第二學年 若松 ヨシ子

「いらつしやい／＼おしるこ食堂はこちらです」。と云ふ聲が盛んに聞えて來る。私は暇でしたので、おしるこ食堂の前に立つてゐますと、上級生の人々が、いらつしやい／＼と云はれます。その愛嬌のよいのに、ひきづられて入りました。中に入つて見ますと、お客様が多く、すわる所もないくらゐでしたが、南側の片隅がすいてゐましたので私達はやつとの事で椅子に掛けました。入つて第一に目についたのは、上級生の方々が白いカウボーイ服を着けてお給仕をせられる姿でした。そして第二に目についたのは、一つ一つのテーブルの上に、花が生けてあると云ふことでした。これらに氣のついたのは、私だけでなく、他のお客様方も感じられた事でせう。すこししますと、係の方が、おしるこを持つて來て下さいました。私達は蓄音機をきいた

がら食べました。そして出る時も有難うございましたと云ふ聲をききますと、もう一ぱい食べ様かと云ふ感じがしました。今度は、うどん食堂に行きました。うどん食堂でも同じ様に、いらつしやい／＼と云ふ聲。餘りお客様が控られませんが、真中のテーブルにこしかけました。向ふから、うどんを持つてこられる様子、うどんからは湯気が上つてゐました。其の湯氣を見ただけでも、おいしそうでした。私達と一緒に食べはじめました。そして食べしまつた時はお腹が一杯で歩かれないくらゐでした。私達が食べてゐた時隣の椅子にをられた男の人が「なか／＼愛嬌がよく、商賣が上手だな」といつて居られましたが、本當にさうだと思ひました。

創立二十周年記念日を顧みて

第三學年 安藤 房子

創立二十周年記念事業！私達乙女の心は或る一種の喜悅を持つて十一月一日を迎へた。今思へば三日間は唯々なつかしい一場の夢のやうにしか思はれぬ。

一日から小春日和とか恵まれた良いお天気であつた。創立以來初めての盛大さといふことだ。私達は盡くせるだけ

親切に丁寧に盡くした積りでは有るが、未だ／＼足りなかつた事を非常に後悔した。

後悔前に立たず。とは實に良く云つたものだ。來年又バグーが有つたら、今度こそはと今から大いに息こんで待つて居る。

二十年前私達は未だ生れて居なかつた。その頃から多くの先生方の御努力によつて今日に至つたのだと思へば、今更感謝の言葉すら言ひ盡くされない。

私達は此の際大いに自重して、萩高女の生徒として恥ぢない生徒と成るやうに心して努めよう。

それがせめてもの過去に對して、現在御努力下さる先生方に對して、又二十周年を迎へた學校へ残す心の記念ではあるまいか。

賣店にて

小春日や集ひ來りし客人の繁くなるこそ嬉しかりけれ。彼方を見此方を見する客人のその面持を微笑みて見る。

南園の學びの庭に年滿ちて今日ぞ待たれし二十周年。

二十周年記念に當つて

第三學年 齋藤 マサ子

來賓、卒業生、生徒等によつて講堂は一ぱいになつた。式はいともおごそかに行はれ、校長先生の式辭を始とし、本縣知事代理告辭、市長、來賓、中等學校、小學校、卒業生等の代表によつて祝辭は述べられ、又本校に永く勤積された先生等の表彰があり、かくて此の日出度き創立二十周年記念式はつゞがなく終つた。考へて見れば、此の女學校が呱呱の聲を上げてより、二十年間に日ざましい發展をなし、遂に今日の榮ある日を迎へたのである。それは各歴代校長先生及び他の諸先生の御盡力及び卒業生の御援助による賜である。その後を受けついで私達は、運動に學業に凡ての方面に努め、益々本校の名を上げねばならぬ。その目的を成就するには各生徒が各本分を盡しさへすればよいのである。まして私達は來年は四年生である。私は此の二十周年を迎へるに當つてその責任を大に感じ、且その責任を全うすべく固く心に誓つた。

我が校

第三學年 山田 まさ子

大正二年呱呱の聲を擧げて今や二十年、滔々と流れる阿武川の清い流れに姿を映して健やかな發達を遂げて参りま

した。その間諸先輩や、歴代校長先生、職員諸先生方及び我々の姉とも言ふべき幾多の卒業生の方々の燃える如き意氣が相集つて今日の盛大な我が校をつくり上げて來たのであります。そして今や熱心な校長先生始め諸先生方の御教訓の下に全校五百の我々生徒は勉強に運動に夫々規律ある發達振りを見せてゐます。殊に運動方面に於ては近年長足の進歩をなし、最近宇部における縣下の女子運動大會に我が校は二等のレコードをつくり、つゞいて近縣女子中等學校競技の四百米競走に一等を獲得し、新進の元氣を見せてゐるのである。今後ますます我々は一致協力と各自の眞剣な努力によつて、この元氣ある健全な校風をますます向上せしめて阿武の流の清き如く、指月の山の緑をかへざる如くうるわしい校額をつくりあげて行かねばならぬ。

裁縫手藝品陳列室

第三學年 田村 里子

本校創立二十周年記念展覽會は開れました。こゝは、裁縫手藝の陳列所だけあつて、飾つてあるものは皆目もさめる様な綺麗なものばかりでした。手を通して見たいような洋服や、オーバー、手藝の方では、見るからに美しい刺繡の

草履、又はクワッシュン、編物では、可愛らしい赤子服、帽子などと、いろとり／＼の毛糸で編んだのが、澤山陳列されてゐて、それが本當に、どれもこれも立派に出来てゐました。これらの物を作るのに要した多大の時間と、その努力を思へば見る人をして、唯々、感心させる外はありません。午前中お客様はさう多くは來られませんでした。二時頃になると俄に、澤山來られて、陳列會場は非常に賑やかになりました。出品物の批評は、一々聞く譯に行きませぬが、見に來られた方々は、皆大變感心してゐられました。二年の高洲さんの額入の文化刺繡や、誰のかわらないけれどモダンなショール等は、特に人目を引き、お客様は、非常に褒めていらつしやいました。中にはクワッシュンや、毛糸刺しの、ショールを見て「之は賣られないのですか」と問はれる奥さんもありました。三日間を通して、賞讃の聲につゞまれて盛況を呈しました。

慰靈祭

第三學年 吉田 富美

鐘の合図で講堂に入りました。水を行つた様に静かでありませぬ。遺族の方や、同窓生の方が入られて式がはじまり

ました。せき一つ開かない静かさであります。笛と笙の聲とが聞えはじめました。神主さんが祝詞を讀まれて、おはらびがすみました。亡き御靈に向つて、校長先生、同窓生總代、在校生總代の方が慰靈の言葉をのべられました。自と泪をとどめなくさそはれました。遺族の方は尙更に情在中の事などが目前に浮んで来て、胸もはりさける思ひがした事ひせう。

嗚呼、今は亡き百九十二人の御靈は、この二十周年記念を祝つて、地下に安らかにぬむつて居られるかと思へば、誠に感慨無量です。惟へば亡き師の君や姉君方の御加護によつて、こゝに南園の學びやも二十才といふ年をむかへてきたのです。私達も今は亡き御靈に報いる爲、修養に努め學びやの面目を一層向上させる様に心掛けなければなりません。

慰 靈 祭

第學三年 高崎 千壽子

記念行事の最後の日、十一月三日午前十時より慰靈祭が行はれた。いふ迄もなく私達の舊亡師や、お姉様方や、親しく朝夕おなじ窓に勉強した友達の無き魂をお慰めしたので

しい様な乙女のさらゝかな日に、この光榮ある今日を迎へ得たのだ。

南園の木々も園に戯れ遊ぶ乙女等の時代の移り行くにつれて、風俗知識等の變つて行くさまを、どんな目で眺めて来たであらう。風俗の現代と異つた純日本趣味のみなきつた、少女たちが阿武の川面にうつた姿を思ひ浮べては、一人時代の變る姿を見て、驚いてゐるのではあるまいか。私共がよくそのお庭に遊ぶ時、其の木、その草が、封建時代、衣うちかついだ女たちがそゝる歩きをした頃の事を物語つてくれはしまいかと、ちつとその木にもたれ、草の上に臥して、聞き入りたい様な氣がする。

一人ぼつちの南園の建物も、直ぐそばには異つた風の見なれない校舎が建築されて行く時、異様な眼を見はると共に、賑かになるのをよるこんだだらう。そしてその窓から見える笑顔の年々に變つて行くのを見て、一人ぼゝゝゝんでゐる事であらう。

南園こそ私共の學舎を去つた後も、永久に變らぬ記念すべき物だ。この園を思ひ起す時、きつとたのしい學園と、みめぐみ深い師の君の御教訓を思ひ起すだらう。

あゝ我等の母校よ！、南園よ！、永久に幸あれ。

ありますが、今日のお日度度い日を共に導くことの出来なものは誠につきせぬ泪の思ひ出であります。祭場の正面に神棚が設けられて、澤山のお供物がしてある。左側に神主が四人、前の方に遺族の方々、黒い紋着に袴、袴で着席していらつしやる。其後に私達や同窓生が列席しました。何處となく顔に憂ひの影が見え、皆静かにしゝんとしてゐます。私も今までの賣店の浮れ心地は何處へやら、たゞたゞ感慨無量だつた。神主の吹かれる笛の音には更に新たな涙がにじむ様にひゞく。女の方はまぶたを赤くしていらつしやる人もあります。校長先生、同窓生、在校生總代が慰靈詞を讀まれる。「もはや無き數に入られて今日の喜びを共にすることが出来ませぬのは……」讀む人の手は自然にふるへ、聞いてゐる人の頭は自とさがり、あちこちにすゝり泣きの聲が聞える。順次に玉串を捧げ、今日の祝を奉告すると共に心から亡き魂をお慰めして式は閉ぢられた。

二十周年を迎へた南園館

第三學年 藤村 貞枝

天高く澄み渡り、阿武の川波いよゝ／＼清く流れる頃、私共の母校は創立二十周年を迎へたのである。たのしいうれ

二十周年記念行事第一日

第三學年 木下 房子

私達秩高女生として、忘れる事の出来ない二十周年記念日も愈々今日となつた。氣づかはれたお天氣も私達の至誠が天に通じてか、からりと晴れわたり、誠に小春日和とも言ふべきである。昨日遅く迄残つてした裝飾も今日は一段とはえ、一箇月二箇はおろかも夏休頃より苦心して製作した作品も飾られ、もうお客様を持つばかりである。全校五百人の生徒の顔も嬉しさに充ち満ちて記念式気分はいやが上にも高まる。顧みれば二十年の昔此の由緒深き南園の地に、女子教育の重い使命を帯びて本校は創立せられ、秋色豊かな十一月一日、今日しも此の記念すべき日を迎へたかと思へばその喜びもさこそうなづかれる。

午前十時私達は講堂に入り、記念式は縣知事代理を始め數多の來賓列席のもとに厳かに始められた。君ヶ代合唱、勸語奉讀と、式次第は順々と進み、十二時前に終つた。お晝からはもう一般觀覽者が見えるので皆白のエプロン姿もかひん／＼しくひきしまつてお客様を待つ。ぞく／＼と來られるお客様に馴れないながらも私達として精一ぱいの愛嬌をふりまく。時間が経つにつれお客様は多くなるばかりで

世は不景氣と言ふに此處ばかりは其の影すらも見る事は出来ぬ。田邊さんと二人で入口で「よくいらつしやいました。どうぞあちらへ」を口のすつばくなる程くりかへす。賣る方は賣る方で又大變に忙がしい。男の人の中には化粧品なんか用はないと入りもしないで食堂の方に行つてしまふ。そんな時は大いに憤慨した。さうして居るうちに、四時の締切時刻も迫つて来たので戸を閉ちて計算にとりかゝつた。クリーム、ベルツ水、髪油、何れも意外の賣れゆきに皆大喜びで後始末をして家路についた。井町さんと二人で「明日はもう此の勢だと賣切れるかも知れません」。等と語りながら日暮の街を急いだ。二十周年記念の第一日に相應しい愉快な日であつた。

創立二十周年記念を迎へて

第三學年 井 町 文 子

私達が久しく待ちわびてゐた創立二十周年記念式は、霜月一日、天高く、日は麗らかに照り輝き、菊花は薫る好季節に舉行せられました。

滔々と流れる阿武の清流に、清き姿を映す我が秋高女は大正二年創立以來幾多の變遷を経て、今や縣下有数の充實

した女學校となり、こゝに日出度く二十周年の式典を迎へこのよき日にめぐり合ふ事の出来た私共の喜びは何に譬へられませう。

殊に、色々の朝しには、我を忘れて熱中しましたが、今は唯、私達に深い印象と感銘を與へるのみです。

頼みますれば、私達はこの充實した學舎に育れ、阿武の清流を眺め、緑濃き指月の山を仰ぎ、修養にいそんで居る事は、本當に幸福な事です。

二十周年記念を迎へ、私達は、同窓生の疎された大なる足跡を辿り、高き理想に向ひ、指月の山にかゝる月の如く清く、優しい人和女子となるべく、勉強しなければなりません。内憂外患多端なる時局に於て、眞に必要とするものは良き日本婦人です。

私達は、この二十周年記念に遭遇した事を、祝ひ悦ぶと共に、更に、更に、充實した婦人とならなくてははいけないと思ひます。

私達は、この榮ある二十周年記念式を誇ぐと共に、良き經驗を得、新らしき決心を確立するに最も良い機会となつたことを祝福しなければならぬと思ひます。

X X X X X

創立記念祭の日

第四學年 山 村 富 士 子

大空は高く冴えて、私達の記念祭を祝福するかのやうに燦然と照り輝いて居ます。校内には生徒の思ひ／＼の美しく、さうして華やかな裝飾が、どの部屋にもどの部屋にも飾られてあります。

午前八時より寄宿舎の食堂で朝會があり、記念寫眞を戴き、その後大掃除をすまし、各係員はそれ／＼部署につきました。私共うどん屋は準備が大變忙しく、樂屋では天手古舞をしました。午前十時半より記念式が開かれ、多數の來賓列席の下にいともおごそかに行なはれました。

記念式白髪ぞろひのいとすこき
午後一時より各賣店食堂が開かれました。續々來る觀覽に各部忽ち大童の體。うどん屋の如きは「あの一誠にすみませんがちよつと品が切れましたでございまして」といふ次第。

おうどん屋下品と見えても立寄りて
食べて見ればもう一杯
手藝品部も素晴らしい景氣
俄かうりにやてんでこ舞の即賣店

記念日の感想

第三學年 鈴 木 繁 子

賣子達知り人達へば押賣し
男學生物を買ふにも名前を見。

この南國の學びやは、創立されて以來はやくに二十周年記念日を迎へることになりました。この榮ある十一月一日、二日、三日の三日間は記念日和とでもいふやうな空よく晴れて天もこの幸を祝福するかの如き日であつた。校門には立派なアーチが設けられ、各教室は色とり／＼のテープや萬國旗等で飾られてある。一日は午後一時から開場といふのに時刻を待たず打ちよせて來られる。その様にまでかけつける人々は早く即賣品を買はうとしてゐる人に違ひないと思つた。時刻がたつに従つて貴婦人達は詰めかける數時間の間に約二千名の方が見えた。私はこんなに盛況であらうとは豫想の外であつた。これらの人々は案内係によつて展覽會會場やバザールへと導かれてゆく。食堂の方は大混雜で特にうどん食堂等は一はいで席もないといふ繁昌ぶりである。バザールの方は見る間に賣れて行く。一日目からこの様では明日賣る品物の補給も如何かと氣遣はれる位で

ある。化粧品賣店の方も思ひの外に人氣よく、その賣行きは驚く程であつた。この様な有様で三日間通じてどの部も豫想外の好成绩を収めて、終を告げる事の出来ましたのは、各係の多くの熱心の賜と思ひます。私共はこの記念日を祝福すると共に、このよき日に遭遇した幸福を永久に忘れる事は出来ないであらう。

感激のこの日

第四學年 和田 榮子

十一月一日！あゝ私たちは、この榮ある記念日をどんなに待つたことか？

歡喜と好奇心に張り切つた心は、過日の疲勞をも忘れさせ、全く有頂天にしてしまつた。

明るい嬉しい感覺に陶酔しながら――

ほんとうに幼兒の様な嬉びだつたまぶしい朝の光りは、山も木もあらゆる、すべてを黄金に包みながら、強く／＼地上を照らして居た。

ひさしから見ゆる紺青の空は、遠く／＼山のかたに擴つてゐる。すが／＼しい朗らかな朝だ。

まだ早いとは思ひながらも、なにかとせき立てられる心

九〇

に、自と足早めつゝ學校へ向つた。道々浮き立つ様な嬉びに幾度となく、ほえまきには、居られなかつた。

學校に来て見ると、校内は、紅黄と色とり／＼に飾られてこれが朝日に照る美しさは、私たちの見る目を一層よるとばした。お早ようの言葉ももどかしく行きかふ人々にも同じ喜びがあつた。

今朝は別に用事もなく、二三のお友達と、ブラ／＼歩るきながら、教室を見てまはつた。

どこの教室も皆思ひ／＼に美しく飾られてゐる。まもなく始業の鐘がなり一同講堂に集合した。

浮き／＼した中にも緊張した一同は、せきばらい一つする者もなく式は刻一刻と進んだ。

朗々と響く御勸語の聲も今日は、一入有がたく身にしみて、身動きさへも出来なかつた。君が代合唱後、知事さんを始め各方々の祝辭があつた。なんだか祝辭が我が事の様にもうれしく思はれた。在校生總代の祝辭を最後に一同晴々と退場したのは十一時半頃だつたか。

その後祝賀會が始まると共に、私たちも各掛について、一時ざわついた校内も、やうやく静まり唯開會を待つばかりの様子だつた。入口には二三の觀覽者が見つけられた。もう直き始まるのだと思ふと、自と胸が高まつて来る、お

晝も大分すぎた頃、下の賑やかな祝賀會が終つたらしく、三々伍々と展覽室に上つて來られた。何か大聲で話ながら、足もとのヒョロ／＼した燕尾服姿はいかにも愉快さうだ。相次いで一般の來客が見え、早や、受附もひらかれたらし

ゝ。

萩の有志の書畫で飾られたこの室では、さうとう觀覽者があり、いろ／＼の批評の聲に、とても賑ぎやかだつた。

ひき／＼なしの來客に、少しもひまのなかつた、私たちは三時頃やうやく食堂に入る事が出来た。なんたる盛況だらう、行きかふ人にうすぐらくなつた廊下は、壓されるばかりだつた。今にも押し出されさうな人を、やつとの思ひで押分けて、椅子についた時は思はずホツとした。モヤ／＼と湯氣の立つ暖い、うどんも、むす様な人混みにゆつくりと味ふ事も出来ず残念だつた。次々に入つて來る人に、ゆつくりもされず、再び廊下の雑踏の中を歩いた。すし店、パザール店と、致る所はちきれさうな繁昌で、その中に上手なサービスが、來客にとても、よい快感をあたへてゐるらしい、最後にコーヒー店に入つて、おいしい牛乳の入つたコーヒーを飲んだ。此處は他の雑踏に競べて、少しは静かだつた。よい休憩所だつた、浮き立つ様なジャズレコードもさ程に感ぜられない。

記念式雜感

第四學年 中村 スミ子

秋が更けて來た。稲田に金色の穂が夕風をうけて揺れてゐる。菊の香りも秋空にゆかしい。海も山も皆な秋だ。

私の大好きな秋が訪れて來た！

この希望と喜びに満ちた時に當つて、開校二十周年の記念式を迎へると云ふ事は、又何んと云う喜ばしく光榮なこととせう。

友の顔は希望に輝いてゐます。誰も／＼幸福そうにはしやき廻つてゐます。明日になつたのですもの待ちに待つた記念日が――……。

何んだか、悪戯つ子が悪戯する前の様な好奇心に似た感じが身内に渦巻きます。モダンにそしてシイタに飾付けられた部屋々々の裝飾に人々はその様に驚異の眼を見はるだらうか？

私達の甲斐々々しいエプロン姿のお給仕振りに、人々がどれだけ満足するかしら？など色々な思ひが絶え間なく、頭の中を行ったり来たりするのです。

早く／＼明日になればよいと、機織りの中でつぶやいた事でせう。まだ休まないのもう電燈を消してお休みなさいと云はれるお母様の聲に果てない空想の世界から我に歸つた。

「お休みなさい」と小さく母に言葉をかけてスタンドのスイッチを切ると、うるしの様な闇が私の小さな書齋一杯になつた。冴えた眼を無理にとぢると、又友の笑顔や、美しくい部屋飾りの飾りが幻の様に浮んでくる。いつしかうつら／＼と夢を現の世界をさまよつてゐる内に、深い／＼眠りの世界に落ちた。私は又自動車のエンジンの騒がしい音に夢路を破られた。

あゝ今日だお天気はとまづ第一に障子を引きあげた。空は澄んだ湖を思はせる様に青く高く、にこりなく晴れて私の心配を一掃してくれた。

ちろちろと人波を縫ふ様にして動いてゐる。軽やかなジャズが人々の心をかきたてる。甘い和やかな雰囲気が出る所に満ちてゐる。皆な楽しいほゝ笑ましい光景だ。かくして第一日は喜びの内に暮れていつた。外には星が明日の幸福を約束するかの如く輝いてゐる。

記念式の前後

第四學年 小 谷 幾 子

四方の山々にも、めつきり赤や黄の色彩を感じ、秋のシンボルの菊も、眞盛の美をさらしてゐる秋だけなはな今日今日は正に十一月一日。

待ちに待ちし創立二十周年は来た！

氣づかつて居た天候も、時のたつまゝに次第に晴れて、最初の鐘の鳴る頃には、指月山の上に大きな青空が顔をさし出して居ました。喜びにはやる私には、それがさながら私達の訴が聞えて、天も又今日の祝賀式を祝福してゐる様だと思へないんです。

午前十時の鐘を合圖に、先づ生徒入場、次に職員、來賓貴賓と順次に席に着いた。

時正に十時半。

七時すぎ心地よい朝風を健康な頬にうけて大地踏む足も軽く、明らかに友と話しつゝ學校に歩を運んだ。もう喜びにはち切れそうなる友の笑顔が、そここゝに私達を待つてゐた。いよ／＼十時すぎ鐘を合圖に一同講堂に集合して、意味深き今日の記念式は厳肅に挙げられた。式後直ちに新校舎で祝賀會は開かれた。今日は午後一時から一せいに學校全部を開放し、一般觀覽に供するので午前中は皆別りにひまだつた。

午後になるともうぞく／＼と色んな階級の色んな人達が押しよせて来た。美しく粧いこらした婦人や、可愛い赤ちやんを抱いた若いお母さんや、ボマー子の子をぶんと／＼させた會社員風の友達や、ナツバ色の學生や、まいだれはんでんの小僧さん、腰の曲つたお婆さん大人から小供に致るまでさいげんなくおし寄せてくる。そこには只だ人と人とのオンパレードが有るのみだ。

来る、来る、よくもこんなに人が居るものだ和我ながら感心する位、次から次へと押し寄せてくる人！人！人！校庭も校内も人との重なりで埋つてゐる廊下も人で一杯だ。しるこ店もうどん店もおすし賣場もコーヒ店も目まぐるしい程たてこんでいる。手が足が口が目が異様なすばやさを持つて動いている。友の白いエプロンが忙しそうにあ

いはゞ、元服の式とも云ふべき、記念すべき二十周年の記念式が、いよ／＼舉行せらるべき時間である。

満堂水を打つた如く寂として、只あるは、嚴肅と祝賀の氣のみ、君ヶ代、勅語奉讀、唱歌勸語奉答と次第に式は豫定の如く進んで行く。

次は學校長式辭、長官告辭、それから、いれかはり、たちかはりの來賓祝辭。

いよ／＼今度は私の番だ。もう觀念しよう。「在校生總代祝辭」大きい土屋先生の御聲。私は胸をはすませながら起ち上つた。

瞬間、満堂の視線が私の身に集つたのを感じた時、急に恥かしさとそして大きい責任とを感じて、はやくも歸くなつた。それでも、先刻から幾度も／＼頭の中で練習した様に、一生懸命でいよ／＼「四方の山々……」と讀出した。

案外、讀み出すと落着もやゝ出来、心配して居た聲も相當に出た様だ。やつと讀み終り、それを壇上に捧げて、席に着き、先ずやれ／＼と思つてはつとした。

私の祝辭がすむと、勤続十年以上の先生方の表彰式や、以前本校の職員としてお盡くし下さつた中野、池上兩先生に、感謝の記念品贈呈があつて、式は無事にプログラムを完了してまつた。

久しぶりで中野先生にもお会い出来て、とても懐かしかった。

式もすんで、ホットした氣で外を見る。

先づ踵に入つたのは、朗らかなコバルトの空。眞夏の海を思はせる様な濃さそして胸もすくほどの高さだ。ふと下を見れば、ビールの空びんで囲まれた小さい花壇に、白や黄の一輪菊が一杯に咲亂れてゐる。それは上から見れば丁度、籠に盛られた花束の様な感じがした。とにかくとても美しい。

フと見上げて、まばゆさを感じた時、背中の暖かさを思ひ出した。先刻から私の頬や肩におちて居た晝前の太陽のために、私の大きな黒い服は、思ふぞんぶん熱を吸ひこんで、少しあたたかすぎる位だ。

窓にもたれて、うつとりと秋の快さに浸つてゐた私を突然うなり出したサイレンが呼び覺してくれた。そして當然の結果として、強く空腹を感じ、皆とつれだつて、食堂へ急いだ。

会場めぐり

第四學年 鹿 島 千 代

十一月一日、此の日を如何に一日千秋の思ひで待つて居た事ぞう。

喜びに溢れた胸を押へて祝賀の機門に迎へられ一歩校内に入ると、何時も落着ある學校も華かに裝飾せられて、今日の記念日を祝つて居るかの様であります。先づ第一歩を化粧品展覧室へと急ぐ。

その名もゆかし南園グリーン、その他色々な化粧品が行儀よく並んでお客様を待つて居ます。

次は菊花會場へ――
此所には二年生の方が生けられた菊が氣品高き香を漂せてゐます。次は南園館の生花を見ますと優しさとしとやかさと氣品とを感じました。

今度は體育會で戴いた花輪や優賞杯の飾られてゐる所、此所では本校體育の如何に盛んなかを思はせられると同時に、尚一そう練習されて好い成績を取られ、本校の名を一層輝し度いと思ひました。それには私共皆で選手の方を勵し力づけて上げる任務があると思ひました。

それより圖書展覧會場へ――
本校名物のおしるこ食堂。

ほがらかな樂の音此處が一番人氣がある様で多くの方が入つて居られる。お給仕して居られる方はとても忙しそう

である。

愈々陳列場へ――。此の室の裝飾の上品さの中に生徒作品が美しく飾られて、中には廢物利用の巧に作られてあるのを見ると、流石に本校生徒の質素を思はせられ、私も今からは廢物を上手に生かす事に注意しようと思ひました。

次は第一賣店へ――

此所は二年生の方の受持でキュービーさん達が、今日の記念日を祝つて居るかの様に晴着を付けて机上に愛嬌を振撒いてゐます。此方にはキーキバスケツトが頼も落ちそうなお菓子を入れてお客様を待つて居ます。

第二賣店へ――

三年の方の受持で編物が大部分を占めて居ます。

第三賣店へ――

四年の受持で編物エプロンでその他造花此れが一番人氣があると見えて、誰でも買つて下さいまして「お花は如何で御座いますか」の聲も朗らかに忽ち賣れてしまつた様子でした。

コーヒー食堂やうどん食堂からジャズの音がしきり流れて來ます。

思へば此の萩高女も創立二十年と云ふ年月を経て、今日では縣下に誇る女學校とまでになりました。それには卒業

されたお姉様方が残された、立派な校風と先生の並々ならぬ御盡力とによつて、今日の様な立派な女學校になつたのであります。

私共は此のお目出度い二十周年の記念日を記念としまして、勉強方面に、體育方面に益々力を注いでお姉様方の残された校風を高め益々良い女學校にしなければならぬと思ひました。

私は此のお目出度い二十周年記念に會つた事を、大變嬉しく思ひますと同時に、萩高女の生徒たる立派な行をしななければならぬと、今更の様に思ひました。

賣店風景

第四學年 竹 内 文 子

おゝ何んと氣持の好い朝だらう。まるで天も地も皆が萩高女二十周年の記念日を祝福してゐる様だ。之が記念日和とでも言ふのだらうか。例日の如く曉天參拜に行き、そして二十周年記念の盛大なる事を祈る。

喜ばしいアーチをくぐり校内に入つた。目のとゞく所皆裝飾してある學舎。私共の教室は、菓子、コーヒーの食堂に用ひられ、まるで何處かのデパートの食堂の様だ。午後

だ。さあ之から愈々私共のショウツプガールを眞似ながらも活躍する時が来た。

「来客だ。向ふで「袖無しはいかゞですか」。と言ふ聲がするかと思ふと、又こちらでは「エプロンはいかゞですか」と呼ぶ。又こちらから二三人一緒に「お花はいかゞですか、お土産に買つて下さい」と發聲する。けれど此の様に元氣に大きく云ふ様になる前には、大方の人は、こんな事は始めてなので、小さい聲でぶつ／＼言ふ。併し一品でも賣れるともう元氣一杯だ。

祝賀會歸りの來賓の方に「お花はいかゞですか」と言ふと、とてもあつさりと言つて下さる。お花を買はれるのは女の方が多いだらと思つたのに、男の方が多いのには驚いた。始めの間は紳士ばかりで、お花位しか賣れなかつたのが、一般の方がぞろ／＼來られ始めると「セーターを下さす」。「はい」「エプロンを下さい」「はい」「袖無し」「羽織下」と今迄のんびりとしてゐた體が急に忙しくなつて來た。

會計の所には、二三人一緒に行く位になり、とても混雑し始めた。私の受持つてゐる羽織下が一枚々と消えて行く。あんなに澤山あつたのに、今は數へる程になつた。

それと同様に針金にも、セーター、エプロンの賣れた後

の人形を買はれる等、私達は微笑まずにはゐられない好風景もある。

私の前の羽織下はいよ／＼二三枚になつた。それだのにお客はまだぞろ／＼來られる。

會計の所に行くのに、一歩行つて立止り、二歩行つては立止らなければならぬ程混んで來た。

四時迄には、後二三分餘りしかないのに、お客が少なくなつた。後一枚だ。誰か早く買つて下さるとよいがと思ひながら一寸外へ出てすぐ歸つて見ると、たつた一枚残つてゐた羽織下の姿がもう見えない。もう羽織下はなくなつてしまつたのだ。私の持場の羽織下は一枚も残らずに賣れたのだ。私はとても嬉しかつた。又ほつと安心もした。

いつしか刻々に時は過ぎ行く。後四時迄には數分しかない様になつた。やがて腕時計の長針は四時を指した。室内はもう賣品は残り少なくながらんとしてゐる。

かうして賣店部は大盛況に第一日を終つたのだ。

賑しさと忙しさのいい日

第四學年 佐伯朝子

の小さい水が淋しそりにトつてゐる。臺に並べてある袖無しがどん／＼會計の方に行く。賣店を出る客の手には、番檯、チュウリップの造花が握られてゐるのだがどん／＼多くなる。一寸ゆつくりする時が來たのでお友だちと、うどん部に入つて見た。あんなに澤山のアイブルが殆んど満員だやつと隅の方に席を見出した。レコードはジャズを奏でてゐる。

賣店に歸つて見ると、相變らず繁昌だ。此處にみると、どこに不景氣風が吹いてゐるのかわからない。私共の言ふ言葉もだん／＼上手になつて來る様だ。お客さんの中には「とても上手ですね。氣の毒で買はずには居られない」と。と眞面目に言はれるのを聞いた時、私達はどんなに嬉しかつたでせう。でも澤山なお客さんの中には、たまに、買はずにひやかして歩く人もあつた。賣店といふ所はいろ／＼な人に接する所だ。でもさすが「安くして下さい」と言ふ様な人は居なかつた。

どん／＼賣れて行く反面に、又だん／＼室内が淋しくなつて行く。主人を失つた竹が、ぼつんと、針金から下つてゐる。

泣いてゐる坊やが、スポーツ人形の所迄來て、面白いスポーツ人形を見てやつと泣き止み。お母さんは喜んで、そ

菊花の香りほこる頃、十一月、晩秋の空は一天に晴れたこの日において、このお目出たい記念行事のすんだことは私共にとつて、何ともいへない歡喜そのものでした。

私はベザー係で、水色と赤のリボンを印に、賣店に立つて聲の枯れる程呼びさげんだものです。

賣店にさしこむ日光に輝やかされ、あちらこちらとお客の注文に口を交すのでした。

第一日目

朝まだきいよ／＼今日からの記念行事の心持ちで身をきよめ、食堂に集まり、祝賀會の式場に足を早めた。

寂とした式場の片隅の花瓶の菊の花が匂ひ漂ふて、何となく寂としたなかに、唯耳にきこえるのは祝詞をよむ人の聲のみ、室のすみ／＼までひびきわたる。

この二十年に一べんの祝賀會の式も目出たくおはり、來賓の方々は晝食の祝賀會場へ足を進まされた。

晝食もベザーのすしを買ひもとめ、おいしく／＼すませた。

さあ、いよ／＼これより賣子として賣店につかねばならぬ。

先日まではあの淋しい教室が、すつかり裝飾されて何と言つてよいか、百貨店の様に美しく飾られた。

これだけの品物がよくも集まつたものと、皆びつくりする程だつた。

品物の集つた事はうれしうが、第一心配になるのはこれだけの物が賣れるかしらと心細くなる程であつた。まあそんな事は考へないで、お客が見えたらしつかりすゝめやうと待ちかまへてゐた。

一時になるとそろ／＼お客も見えはじめた。

いつの間にか賣店を往來する事も出来ない程満員になつた。うれしくもあり、又いそがしくもある。

あちらへ行けばこちらがぬげ、あちらこちらと目の廻る程いそがしかつた。

もう四時頃になるといつの間にか賣れてしまつたのか不思議であつた。

あとの淋しい教室を後に今日は終つた。

賣店ばかりに居た私が一步外へ出ると、しるこ屋も満員うどん屋も満員、素食頃になるとすし屋も満員、又コーヒ一屋も、菓子屋も、果物屋も賣り切れる程であつた。

この僅か三時間の間に夥しい人出の爲め、大人氣で誰の顔を見ても微笑んで居られる様だつた。

二日目

今日こそは残り品物を皆賣り拂ふと言ふ意氣で賣店につ

エプロンも朝出したのがもう二三枚位しかない。

二日目もすみあと一日をしつかりと、上手に活動しやうと云ふ意氣で夜も早く床についた。

三日目

もうこれで最後なのでしつかりやらうと胸にきめた。朝は講堂に集まり明治節の式が行はれ、窓ぎはからは小鳥の鳴聲がいかにも祝つてくれる様だつた。

もう昨日まで品物は皆うれてしまつたので、一室は中止して後の一室に皆集めらる程であつた。こられるお客さんの方々も賣切の賣店を見て驚かれた様であつた。

來られる方々の中には「昨日の羽織下はありませんか」と、もう賣れてしまつた品をほしがられて居られ、昨日來たらよかつたと口々に言つておられた方もあつた。

もう終りには一つの賣店の品物は皆うれて、先生方も來られる方は皆びつくりして居られた。

いよ／＼これで記念行事も終つたと思ふと、うれしくもあり又二十一年に一回のことと思ふと、淋しくもあつた。夜は今までの疲れを回復する爲め楽しい音楽をきくことが出来る。

この三日間のお祝いと共に、亦再び學びの道へいそしもうと思つてゐます。

いた。

朝は昨日の淋しい賣店を飾りたほして又昨日より一層美しく飾つた。

始はあまりの人氣でもなかつたが、晝頃の學藝會のすんだ頃、又押し寄せて來る有様だつた。

お客さんの中には、昨日の終りは皆うれてゐたのが又こんな品物が出て來たと、びつくりして居られる方もあつた。昨日程のお客でもなかつたが、菓子、コーヒ一店で皆止まられる様だつた。

賣店にも來てもらはねばならないので、コーヒ一店の前で頭を下げて「どうぞ賣店の方へいらつしやい、エプロンや、お人形に、お花に、それから赤ちやんの袖無」といろ／＼口をからして案内し、見えるお客さんには買つて下さい／＼と再びすゝめるのだつた。

誰もなにか一つは買つて行かれて、ほんとうにうれしかつた。あれだけ澤山あつたお花も、とう／＼五六本位になり、菓づとがぼつんと残つて居るばかりでだん／＼さびしくなる。人形等も始百以上もあつたが、それもあと三十もない位になつてしまつた。

朝から立ち通して足も疲れた頃、四時の鐘は耳にひびきわたつた。今日は昨日よりは賣高は多くないが、それでも

創立二十周年にあつて

第四學年

前 田 禮 子

巴城の一角に、恵まれた環境を持つて萩高女と呼ばれてより、春秋は幾度か去來して、すでに二十年。榮ある今日の日はこの萩高女の天地に訪れたのだ。

しかも創立以來磨き磨かれて來た、尊い美風の誇と共に迎へる事が出来たのだ。

思へばその長い間は、たゞに垣々たる大道の直に、長安の都に通じたのではないと信じられる。そこに校長先生をはじめ、諸先生方、先輩の方々の尊い汗と、涙と、さうして美しい血汐の痕を思つてこゝに到れば、一人に感慨を深うする。さうして此の地、尊いこの地に學ぶ事の出來る私達は、その尊い汗と涙と血汐に、心こめて感謝すると共に今の我國、經濟國難、外交國難の世に當つて、如何に責任の重大なるかを思はずには居られない。

現在の學生は概して驕慢に陥り、修養を以て兒戲とさへしてゐる者もある。文運の進歩するにつれて、知識の殿堂に誘はれて、知識から知識へと歩を進めて行く。然し山の高きが必ずしも貴くなく、如何に優れた知識を持つてゐても、そこに修養が伴はなかつたなら、それは駄目だと思ふ

身に修養あつて、そこに知識の存在するのは真に貴い。
山紫水明のこの秋の地に、そして空に、又この秋を郷土とする私達の心の中に、あの修養の人、松陰先生、乃木大將は永遠に生きて居られる。さうして私達の求めに應じていつでも親しく導いて下さるのだ。

私達が常に人格の向上に専念し、一步なりとも、その完成に近づく事は、轉々たる我校風の永続と向上の上にも、又大日本帝國臣民としても、世界人類の一人としても、重大な事であると思ふ。

巴城の一角、阿武の流清き畔に、この榮ある日を迎へた私達は、この上とも人格向上に努めて、昭和維新に於ける、隠れた大きい力とならなければならぬ。

創立二十周年記念式を迎へて

研究科生 大谷 榮子

期待を以つて待ちに待たれた十一月一日は、遂に來た。此の日天高く晴れ渡り、まがきに匂ふ黄菊白菊も一入の芳香を放ち、此のめでたき佳き日を祝福するかの様に見受けられた。

此の由緒深き南園の學舎に於いて、幾多の私達の先輩の

ひの中に無事に終了し、私達はほつと肩の重荷をおろした様な氣がしました。

私達研究科生一同としましても我がことの様嬉しく、益々榮え行く我が校の前途に幸あれと祈つてやまないのであります。

和歌

第二學年 大 深 芳 枝

古しへの南園御殿をしのびつゝ此の記念日にあふぞうれしき

同 綿 津 和 枝

二十年の勤に榮えて南園の松の緑はいやまさるらし

同 末 永 嘉 子

菊かほる校舎の窓に晴やかなほゝえみかはす今日の記念日

同 中 山 ふ じ 子

萬雷の如き拍手をあびながら靜に笑ますわが永井女史

同 淵 ユ キ 子

學び舎の生れてこゝに二十年の祝ひことほぐ今日ぞ嬉しき

同 藤 家 敏 子

方々が學ばれてより幾星霜、遂に二十年は経過して此の佳き日を迎へることの出來たのは、ほんたうに喜ばしい限りである。

私達研究科生も此の記念式當日と二日、三日に聞かれらるベザリの準備の爲、セーター、チヤン、チョコッキ等々……の毛糸編物類をはじめ、造花や廢物利用等を作るのに來る日も一生涯命であつた。

當日は研究科生は全部主として食堂、ベザリの方のお手傳をするこゝになつた。食堂はふしるこ、うどん、コーヒ、菓子、果物等で夫々幾人かづゝ割當てられた。一日は記念式の後新館に於いて祝賀會が開催されて、研究科より十人ばかり出てお手傳ひするのであつた。

二日は講堂に於いて學藝會が開催され、三日は慰靈祭が行はれ、南園館には生花が陳列され、又各教室悉く満腔飾の粧ひを凝らし、且ついろ／＼の生徒の作品などが飾られて随分賑やかなものであつた。

一日、二日、三日と續けて随分な人出で食堂はいふに及ばず、各手藝品の賣店等も頗る盛況を極め、大繁昌であつた。

私達おしるこの賣店も非常に賣れ行きが良くて、一同力を合せて終日一所懸命に働きました。かくして三日間は賑

何となく我等の頬に微笑の上りて嬉し今日の記念日

第三學年 安 藤 房 子

南園の學びの庭はいやさかに榮えて今日のおよき日迎へぬ

同 伊 藤 道 子

榮えゆく菊の香高き學びやに晴れのよき日を迎へけり今日

同 上 田 民 子

立錫の餘地なきまでに賑はひぬ今日しも晴れの二十周年

同 大 河 戸 た け 子

慰靈祭集ふ遺族の面持も同じ憂ひに沈みけるかな

同 大 橋 タ カ 子

菊の香のほのかにかをる霜月に祝の式はあげられにけり

同 賀 田 ノ ブ 代

我が編みし服の賣れたるうれしさも束の間にしてもどし來るかな

同 齋 藤 マ サ 子

朝早く起き出で見れば空晴れて今日のおよき日を祝ふかと思ゆ

同 齋 藤 マ サ 子

霜月の澄み渡りたる大空に菊の香高き南園の里

同 境 綾 子

學校へ行く足どりもいと輕し今日ぞ榮ある日と思へば人々のくやみの言葉聞く毎に失せにし人の遺族思はる

にぎはしく五色のテープ張りわたし目出度き今日を迎へし
うれしさ

同 作 間 淑 子

天までもひびけと歌ふ君ヶ代の學びの園は榮えゆくらん

同 高 崎 千 壽 子

滔々と流るゝ阿武の川波に菊の香匂ひてよき日迎へぬ

同 田 村 里 子

らどん屋の元氣にみちし呼聲も知人來れば人影になり

同 長 尾 光 子

我が校の立ちし時より二十年榮え／＼て今日をことほぐ

同 名 和 冷 子

校門の日の丸の旗ははた／＼と霜月空に立ちてありけり

同 藤 村 貞 枝

學び舎の建ちにし日より二十年めでたき今日を迎へたるか

同 山 田 快 子

霜月の空はうら／＼に晴れわたり今日のことほぎ祝ひけるか

同 山 田 正 子

すく／＼と我が學舎の生ひ立ちて二十の秋に逢ふぞうれし

同 山 田 正 子

き

同 大 和 泰 子

秋空も日本晴とはなりにけり今日の祝をことほぐがごと

同 山 中 松 子

秋空もすみわたりたる南園にみそなはれけり記念の式典

同 吉 田 早 苗 子

秋の日に二十周年迎へたりいやさかえゆく我が學舎は

同 吉 田 富 美

霜月の空うら／＼かに晴れわたり今日のよろこび祝ふごと見

ゆ

同 山 崎 千 枝 子

記念式幸あれかしと大聲に君ヶ代歌ふ霜月の朝

同 伊 勢 島 政 子

菊の香にいだかれながら我が校は二十周年迎へたりけり

同 大 谷 和 子

どの人もわが校目ざして歩み來る八丁通りの繁き人足

同 岡 喜 美 子

南園の學びや建ちて廿年菊の香高き今日のよき日は

同 岡 崎 延 子

幾千の乙女子送りて二十年歴史にほこる南園の園

入日浴びまぶしく光るバザールにて友とかぞふる今日の賣上

け

同 小 野 村 壽 子

逝きし姉慰靈祭には天降り共によき日を祝ひたるかな

同 神 田 幸 枝

案内をする度毎に我が造りし人形賣れよと祈りつゝ見る

同 柏 木 喜 美 子

幾千の卒業生の母として學びの庭は輝やきにけり

同 河 田 功

いらつしやい何かいかゞと賣子達過ぎ行く客の姿見送る

同 木 下 房 子

菊香る清の園の學びやもこの喜びに充ち満ちにけり

同 久 保 井 島 代

はじめでの試みなれば人々に物賣る事もはづかしきかな

同 小 泉 ア イ

我が手にて作り上げたる手藝品賣れてうれしきバザールかな

同 齋 藤 文 子

絶間なき觀覽人の案内に日は廻れ共たのしかりけり

同 佐 竹 ヨ シ 江

カフエーのマグム氣取りですましてることほぐ今日の友ど

同 品 川 ナ ミ エ

同

同

同 大 和 泰 子

秋空も日本晴とはなりにけり今日の祝をことほぐがごと

同 山 中 松 子

秋空もすみわたりたる南園にみそなはれけり記念の式典

同 吉 田 早 苗 子

秋の日に二十周年迎へたりいやさかえゆく我が學舎は

同 吉 田 富 美

霜月の空うら／＼かに晴れわたり今日のよろこび祝ふごと見

ゆ

同 山 崎 千 枝 子

記念式幸あれかしと大聲に君ヶ代歌ふ霜月の朝

同 伊 勢 島 政 子

菊の香にいだかれながら我が校は二十周年迎へたりけり

同 大 谷 和 子

どの人もわが校目ざして歩み來る八丁通りの繁き人足

同 岡 喜 美 子

南園の學びや建ちて廿年菊の香高き今日のよき日は

同 岡 崎 延 子

幾千の乙女子送りて二十年歴史にほこる南園の園

入日浴びまぶしく光るバザールにて友とかぞふる今日の賣上

け

同 白 石 幸 子

いらつしやい何か如何とすゝむればほめてすき行くにくら

同 鈴 木 繁 子

伯母様も亡き數にかとおもほへばをどろ涙に秋風ぞ冷ゆ

同 鈴 木 繁 子

記念日やバザールのクリム人氣よく誰も／＼と押かけて買

同 田 中 サ ン

ふ

同 田 村 吉 江

記念日をことほぎながら明日の日を樂しみつゝも急ぐたそ

同 田 村 吉 江

引續く觀覽人の接待に天手古舞へど今日を樂しき

同 林 五 榮

空晴れて今日の目出度き記念日を誓心よく迎へぬるなり

同 平 野 晴 代

小春日に我南園の學びやもはや二十の年をむかへぬ

同 福 島 成 子

もれ來たる悲しき樂をきくにつけ在さぬ結を思ひ出しけり

同 藤 田 靜 江

秋空に菊の香高き學びやに樂しく迎へぬことほぎの今日

同 松 浦 ヲ ネ 子

同

ひげそりの後によくきく響聲に歩みとどまる若き人達
同 宮 野 環

笛の音にさそはれながら亡き友の面影しのぶ霜月の朝
同 山 村 富士子

太陽も今日の佳き日を祝ふらん菊の香包みて南園にかこや
同 和 木 綾子

去り逝きしあはれ姉君まのあたり見る心地していと悲し
き
同 和 木 綾子

みたま呼ぶみのりの聲のしみんと響きつるらんはらから
の胸
同 和 田 和子

大空も晴れてよき日を祝ふらん記念行事の今日のよろこび
第四學年 石 田 知子

今日こそは目出たき日よと秋空のいやが上にもすみわたり
けり
同 磯 野 千尋子

高らかにこの祝日を壽げよ菊の花薫る我等が學び舎
同 小 原 種子

笛の音も淋しくひびく慰靈祭とはに安かれ亡き友のたま
同 原 川 幸子

天地の神もこの日を祝へるかけにうらゝかなり今日の秋晴
れ
同 松 本 禮子

さわやかに晴れたる朝の心地よき記念祭を祝ふやうなり
同 前 田 禮子

永井女史のふるさとをききてその聲の力強さを今もわすれ
ず
立よりて又退きて眺めやる麗しきかな水芭蕉の跡
同 河 邊 綾子

記念日の間近くなりて友も我も落ちつかぬ日の續く此の頃
晴々と夜は明けにけり記念日の光のどかに我が窓にさす
同 中 川 清子

阿武の地に學びの光さしそめて二十年迎ふ今朝のうれしさ
人形はいかゞですかと賣る人のほゝえむ顔にえくぼ見えけ
り
同 永 田 泰子

おしるこのおいしおいしの呼賣にひき入れられて二つ食べ
けり
同 三 輪 愛子

ひたすらに待ちし高女の記念日を胸深く秘め忘ることなし
同 冷 泉 龍子

俳句

第二學年
きこえくる樂の音淋し慰靈祭
同 世 良 安子

秋日和展覽會も客多く
同 粟 屋 郁子

慰靈祭せきする人の涙あり
同 伊 藤 登美代

記念日バザーに流るゝ人の波
同 木 村 範子

記念日や殊にめでたし菊の花
同 埴 松 子

秋の朝晴れてうれしや記念式
同 津 森 静代

記念日や風にたなびく色テロブ
同 加 藤 美和

秋空の晴れて目出度き記念式
同 金 子 タツエ

祝賀會人の波やら花の波
同 木 下 たか子

秋晴や祝ふバザーのにぎやかさ
同 兒 玉 八重子

秋晴や空に鳥舞ふ記念の日
同 榊 織枝

我もまた貰ひ泣きせり慰靈祭
同 篠 原 敏子

校門にあふぐアーチや秋はるゝ
同 田 中 玉枝

秋風や胸もときめく記念祭
同 福 田 瀧恵

菊かほる今日のよき日や記念式
同 松 浦 八重

亡き友を祭る御棚や菊薫る
第三學年 岡 靜江

慰靈祭涙にくるゝ秋のくれ
同 大 橋 タカ子

すゝりなく聲も悲しき慰靈祭
同 賀 田 ノブ代

小春日や菊の香高き記念祭
同 河 田 功

同 和 木 綾子

白菊や涙の露の慰靈祭

第四學年

サーピスで賣り飛ばしたるペザリーかな

同 澄野萬龜枝

奥歯までしみこむミルクのあつさかな

同 松本禮子

秋晴や人のこみあふ記念祭

不景氣と云へど忙し販賣部

同 前田禮子

よろこびのアーチに続く秋の空

同 朝枝都喜子

秋風にゆらぐテープやベルツ水

同 岩本文代

南国に菊の香高し記念祭

同 末國フサエ

うらゝかな小春日和や記念式

同 中村聖子

エプロンの姿勇まし女學生

同 野村京子

記念日やほゝ笑み交す乙女達

同 冷泉龍子

末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

同 末長く勧語るや記念式

川柳

第二學年

展覽會下手な所は足ばやに

同 井關八重子

賣店の前で子供はせがむなり

同 宗樂方子

記念日や恐しさうな燕尾服

第三學年 高崎千壽子

同 山田英子

馴染客義理で品物買はされる

同 山田正子

桃刺や汁粉にけふるおちよほ口

同 小野村壽子

うどん部が叫べばすし屋も又どなり

同 平島京子

二人連一瓶買ふにも相談し

同 松浦ツネ子

祝賀門豆で祝賀の字が書かれ

第四學年 堀初枝

ジャズの音につられて入るうどん店

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

同 堀初枝

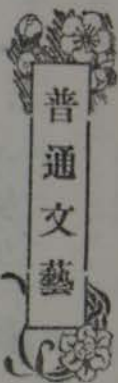
同 堀初枝

同 堀初枝



(眞野昌子著太陽と雲より)

早春の銀の屏風に新しき歌書くさまの梅の花かな
なつかしき春の雪かな白玉の環をつまさぐる心地こそすれ
自らを春の姉とも思ひなし靜かに人を戀ふること
船の笛鳴れば離れ旅と云ふ悲しきものを思ひおはせり
くれなゐの尾をば櫻にかけたるは山鳥に似る春の落日



普通文藝

入學の喜しさ

第一學年 竹下泰子

試験合格発表の日、朝から私は早く一時が来ればよいと待ちこがれて居ました。やつと待ちに待った一時が来ましたので、私はお友達と二人で女學校まで走って行きました。行くときすぐわくわくする胸をおさへて雨天體操場へ行つてどきどきしながら一番から順次に目を通して行きますと、あ、ありました、ありました。私の受験番號である九十一番が——あの時の嬉しさは、ほんとうに合格した人になければわかりません。私はお友達と二人でおどりに上つて喜びました。けれど私達の租の人が二人落ちて、一人は第三補決でしたので嬉しい其の反面に、どこか淋しいものがありました。もういよいよ合格したとなりますと、入學式の日が待ちどほしくなり、又、教科書や其の他の學用品をととのへる時の嬉しさは、ほんとうに——何とも言ひやうのない程、嬉しう御座いました。その待ちどほしく思つた入學式も来まして、もう女學生の一人として學校で活動する事は、私に取つて最大の喜びであります。

運動會

第一學年 井上サト子

すみ渡つた大喧、強い太陽の光線を體身に及びながら、まるでスボーツから出来た様な滑潤たる少女達が自由自在に活躍する姿。運動會の楽しい心にならうとする姿である。ボーキー一個で「ロー！ロー！」と上る喊聲。

萬衆が手に汗をにぎる決勝點、なに一つとして私達の若い血潮をどどらせないものもない。

その楽しい運動會ももう目前にせまつてゐる。楽しい嬉しい心で迎へませう。

新年

第一學年 秋山集義子

一九三三年も遂に來た。「一年の計事は元旦にあり」といふ。私の三三年度の希望は、たゞ一心に勉強して人々非難される事のない様に、此の昭和八年を立派に又有益に過さうと言ふのである。

昨日汲んだ井戸水は、今朝はもう若水となつて新しく自分の心を清めてくれる。すがすがしい氣持で家を出た。家々には門松が立ち、國旗は朝風にはた／＼となつてゐる。曲りかどで危くぶつ／＼かきさらうになつた自動車の前にも、小さい注連飾が結びつけられてゐ

た。

學校でお友達と「お目出度う」の御挨拶もすみ、式場へ入る。式場はしんとして、前にある三階下の御寫眞も神々しく、自然と頭が下る。校長先生のお話も有難く身にしみた。私達も大いに活躍して社會に有益な人とならねばならぬと思つた。歸りは雨もやんだ。道で長いお袖の着物を着て、カアンとよい音を立て、追羽子をしてゐる可愛らしい子供、それ等の顔を見ても生き／＼として嬉しさうだ。

幾度巡り來てもお正月の目出度さは、常に人の心を今一度新しく奮ひ立たせる力を持つてゐる。

お正月

第二學年 福長惠美子

十二月三十一日後もう一つ寝たら、昭和七年ともおさらばしなればなりません。もう一つ寝たら十六のお姉様になるんです。何だか胸がぞく／＼する様です。みんな手傳つてメ飾やお鏡を飾つてしまふと、もう夕方になつてしまひました。私は先に床に着きました。みんな火鉢のまわりで談笑していましたが、やがては其の談笑も盡きたと見へて、銘々の寢床にもぐり込んだ様子です。私は今晚は除夜の禱を聞いて寝やうと思つたのに、それさへ聞かなかつたほど、ぐつすり寝込んでしまひました。ふと目をさまして見ますと、

新年を迎へて

第二學年 青山阿彌子

曉の鶏に夢破られて夜のとばりが開かれた。水晶の如き水雪の中を鶏は啼しげに、新年を迎えて聲高々と挨拶をしてゐます。あゝ此の家にも希望多き、昭和八年が訪づれてまゐりました。いよいよ我等も希望多き、昭和八年のスタートを切つたのです。もう若水を汲

む手も軽く車の軌る音が此の新たな空気の中心を譲つて聞えます。かばとはお起きると、空には鳥の群が新年の挨拶を交し合つてゐる様に物を飛び廻つてゐます。家内中に新年の御挨拶をすまして、佛前に通ひと梅の香、桜の香、水せんかの香が本堂一ぱいに満ちあふれて私にも新年を迎えてくれます。我が家を一歩ふみ出せば、草木もねむりをさまし、嬉しげに新年を迎へた。大自然國風は風にひるがへり、何とも云ひ様のない静々しさ、どこまでも純で熱烈熱ゆる様な心強い國風は風上でたなびいてゐます。人々の顔も自然に打笑みお目出度うの挨拶を交換し合ふ心身共に清めたおごそかな式を終へ希望に満ちてゐる。今の我等は此れをいつまでも忘れず、新年のよろこびを祝ふと共に、滿洲に於ては攝政殿下何十度と云ふ水にとどされた寒さをしのいで、新年を迎えて居られる我が兵士を思ひ、又國內は財政問題、思想問題等實に多事多難である。今日に出くはした私遣女性に、大いに奮發して勉強を勵み節約を行つて、昭和八年を無事に送りたものでござります、私は此の一月元旦にあたりまして、先づは勉強に勵み、家のお手つだいをよくし、節約を行ひたのしい昭和八年を無事に過したいと思ふのでござります。

新年の感想

第二學年 花田 きみ 代

最早年が明けて、昭和八年になりました。私は元氣で十五年を迎

へ、特に十五と言ふと何だか急に年が增えて来た様に感じました。だからこそ今年に自覚しなければならぬのです。朝の顔を見れば今日は一層冷めた感じが、そして僕も特別に氣持が良い此の心こそ、すがすがしい貴い心でせう。元旦の此の心こそ、崇高な心にならば無いでせう。鶴も早くから鳴いて居ます。鶴も今年は大々よりも特に御芽出度いのでせう。其は今年に鶴の年ですから、私の耳にも、元旦の朝の鶴の聲は雄かに、如何にも芽出度い様に聞えました。春日神社の太鼓の音も良く聞え、人々にも、年の始の音を知らせて居る様です。學校での拜賀式は午前十時からなので、静に机にもたれて何やかと色々の事を思ひふけるのでした。前の事から思ひ出して見ると、月日の立つのが早いと言ふ事が一層早い様に思われます。もう直ぐ昭和八年になるとは、人から言はれないでも自分の心には常に思つて居ながら、かうして考へると、もう昭和八年になつたと。前に年の明けるのは直ぐだと、覺悟して居ながらも本當に餘りに時の立つのが早いと感じました。學校内に入ると、皆が御芽出度うの聲を發して居られる。友達同志が言つて居られるのも、何だか自分迄が嬉しい氣がしました。確かに一週間位、顔を含ませなかつたのも、もうお友達顔が變つて來られた様です。暫くして、其れんくの嬉しさうな顔が、講堂に集り一年に唯一度しか無い此の御芽出度い式を済まして又別れました。歸つて見ますと年始狀が澤山來て居ました。お友達、親類等から、御父さんに當てたのや、私に當て、來たのや、本當に何れを見ても、繪葉書迄が略

しさらでした。元旦一日だけは其で好いのです。お正月氣分を發揮して、しつかり楽しく喜びつゝ遊ぶのです。けれども、何時迄もこんな幸福な事ばかりでは有りません。之から後又、どんな苦しい、悲しい事が有るとも知れません。其は今から覺悟して居て昭和八年を有効に過す様に計畫を作つて置かなければならないと思ひます。

断章 三篇

第二學年 藤道 谷 恵 衷

秋 草

さまよひ來れば秋草の
一つ残りて咲きにけり
面影みえてなつかしく
手折ればくるし花散りぬ。

除夜の鐘

下駄の音がたえまなしに聞える、母の針の手が忙しさうに妹の晴着の上をチヨロ／＼と動いてゐる。其の傍に眠つてゐる妹まにっこりと笑つた。どんな夢を見たのでせう。近所からよにぎやかな話聲が聞える。まだ何となく宵のうちらしい様だ。時計はさつき十一時を打つた。私は何も考へずに唯次から次へと物思ひにふけつた。新

元旦の感

新年——元旦——うその様な氣がする。寒梅の花の香が早くも今年のを告げ顔に花屋の店先にいけてあつた。およそ天地萬物を深く眺め渡す時、新しいいと云ふものは一つもない様な氣がします。日月草木、其の中に生きて居る人間の有様も總べて無限の昔から初まつた事で、これから又無限に續いて行く事です。併しめい／＼が其の心持を新たに引きしめて天地に向ふ時、あらゆるものが皆新しい力を持つて生き／＼と見る人の心を更に新たに力づけてくれます。元旦の目出度きは此の喜びにかゝつてゐるものと思ひます。昨日拜した太陽が今日は初日の出となつて輝き出る時、自ら心が新しく力に燃え立つてまゐります。昨日汲んだ井戸の水が今朝は若水となつて新しく自分の心を清めてくれます。すが／＼しい門松しめ縄の飾すべてが爽かで旁の氣持がありません。幾度めぐり來るともお正月の目出度きは常に人の心を今一度新しく奮ひ立たせる力を持つて居ります。

元旦の朝

第二學年 藏 田 八 穂

新年！新年！

私達が指折り数へて待つてゐた新年はいよいよ其の形を世界の前にあらはしてきた。

私は六時頃お友達二三人と春日神社に参拜すべく行つた。風はびゆう／＼と吹き雨はよこなぐりに降つてゐる。一年の第一番目の日からこんな天気であつたら後の日はどんな天気になることかしら？ 神前にゆかづいて拍手を打つと、何とも云へぬ感にうたれてしらずと心が引きしまつて行つた。

東の空を仰ぎ見れば雨の中におぼろながらも白んでゐるのが見える。私はその中の初日を想像して拜んだ。

路傍の家々にはすでに起きてゐるらしく「おめでと、おめでと」と云ひかわしてゐる。其の聲は皆幸福さにみち／＼と心から發してゐるらしい。

門に立てある門松でも平日に見る時とはなんとも思はないのに、今日は特に目立つて見え何んだか私達を心から祝つて居り悪い事が家の中に入らないようにと門の前でがんばつてゐるように見える。

学校に行つてめでたく式をすましお賽までにと近所へお年始に行く時には風はやみ雨は小降りになつてゐた。子供達は傘をさして羽根 羽子板を持つてうらめしそうに空をながめてたつてゐる。

更生の意氣

第二學年 林 七 三

私に取つて今年は何だか變な年の標でもあり、始めて年を取つた標にも思はれる。

何日もは、旅行に出るのだが、今年には自分の家に居て歌留多を取つたり色々遊んだりしたからでもあらう。

でも元旦に雨が降つたので何だか陰氣くさくて！。之がよく輪にある様に、雪晴れの上天氣だといふんだつたけれどそれでも歩き過ると、家の中にはおかざりやおそなへ、外には日の丸の國旗と門松で暗さが一寸消された標だつた。

思へば早いものだ、晴れた日に、曇つた日に、雨の降る日に、此の門松をもう十五回も見ただから。

「よし！丁度いい、十五回がいゝ區限りだ」と私は心にさげんだと力強い氣持がぞくぞくとわいて思はずにつこりほゞえんだ。

此の區限りをさかひにいゝ方へと進まう。

先づそれには門松を見る時、先年の事を思つても、何時も後悔のない標笑つて次の年を迎へる。そのよい感じだ！此の樂しき心を忘れたかつたら、きつとよい年が過せるに間違ひない。さうだ！きつとさうだ！。私はこう心に決心すると、目をしつかりと門松に向けた。どうやら合點をしてゐる標だ。

來年まにっこりと笑つてみようこの標したる松を！

社頭の感

第二學年 綿 津 和 枝

小さな雨が降つてゐます。一番どりの頃から、次々と語でた人々も、今はとだへて私どもの階段を上る足音のみがひびきます。鎮守の宮は森としてものうごかず。覺ゆる大木には尊い神氣が漲つてゐるやうで、自づと標を正さしめ、心の引きしめるをおぼえます。

神殿にゆかづいて、悲しく拍手を打ちました。そして新しい年の覺悟を心にくりかへしました。今國家は重大なる難局に當面しておられます。私個人としても、父なく祖父なき後を、只だ一人の母が、懸命に私共を背んで下さいます。國民として子としてどうしていたづらにうか／＼と、くらしで行けません。空虚な生活より内容充實に、そして確實に一步を進めて行きたいと思ひます。ともすれば學問、修養を人ごとのやうに思ひ、表面だけの功名等の如きものにのみとらはれ易い、私の中に過き去つた年と共に、とばりの彼方へすて、参りました。空理空論に走り、虚榮の幻を追ふ。又良心に苦しみつゝも、無意味な妥協に應じる。こんなつまらぬこと等を考へたり、こだわつたりしないやうにしようと思ひます。大切な修養期であります。低級な趣味に終始して墮落して行くも正しく深い思想の持主となるも、今が其の岐路だと思ひます。

今年の計畫

第二學年 河 村 富 子

希望に満ちた新年は清々美しき幸福をお土産として私達を訪れて來ました。ほんたうに正月には生れ變つたやうないき／＼とした清い美しさがございます。

一夜の中に去年にあつた不正な行ひも何もかもすつかり清められて何事をするにも頭を浮ばす良い方へ正しい道へと思ふのでございます。

思へば今年こそは勤勉につとめやう。

今年こそは良い人にならうと考へましたのに昭和七年の計畫は十分その通りに過ごせなかつた私でございます。もう子供でなく大人に仲間入りする私共でございます。子供と大人の仲間になつたのがつまり私、私共のこの今です。勉強をするにも發育に勵むにもこの機會だと思ひます。後悔は先

「たゞず」とやら、このやうに今のうちに體を張り、一人前になつてやがては立派に家庭を持つて行くのが私共の務であります。

「一年の計は元日にあり」と申します。

私もそれにならつて女學生として恥かしくない計畫をしたつもりです。

先づ最初に自分の缺點をなほさうと思ひました。

第一に努力の足りない事でございます。

もう少し考へればむづかしい問題も出来るのも怠つてしないので、これを本年はよくするつもりです。

次に餘り體の丈夫でないと云ふ事です。

健康をそこなふのは親不孝でもあり自分として大變損であると思ひます。先生も大變氣遣かつて居られますのを見ますと、ほんとうにすまないやうな氣がします。

體を丈夫にしなればこれからの世には到底勝つ事は出来ません。

第三に禮儀にかけて居る事です。

「親しき中にも禮儀あり」と申しますのに、つい親しい方とは言葉の悪くなる事がございます。

女の禮儀のかけて居るのは見苦しいものでございますから今後之も氣をつけやうと思ひます。

之まで決心した實行々々は努力健康を第一番として、氣を大きく

持ち禮儀をおきまへる決心をしました。

何事も以て云ふより實行で、このよい機會の新年を利用してこの一年間を奮勇に價値あるものに使ひたいものと思ひます。

寒稽古の朝の光景

第二學年 渡 多 野 馨 子

ぼつと目が覺めた、四時である。いつもの寝坊も寒稽古といふ事が頭にしみこんでゐると見えて、今朝は早く目が覺めた。

硝子越しに見える外は眞世界だ。私は曙しきの餘り寒さも忘れてがはとはね起きて外へ出た。

一番籠か二番籠かはしらぬが威勢よく活氣に満ちた聲で歌つてゐる。もう向ふの談治屋ではトンテンカン／＼と精を出して働いて居られる。家より母の呼んでゐるのが聞えたので名残をしくも其處をたち去つた。

未だ時間は早くあるのになんだか氣がそは／＼して御飯もお茶づけをしやぶ／＼と食べて家を出た。

近所のお友達をさそつて未だ暗い銀世界の町を歩いて行く。ざく／＼と雪をきる音が氣持よく耳にひびく。自動車の通つた跡をすべつて行く私は體が重いのだらうか外の小さい人の方が上手にすべつて行かれる。なんと情なき事よ。空には残月が明鏡のやうに冴へてそのあたりに星が月を守つてゐるかの様に點在してゐる。學校へ近

よる毎にお友達がふえて大變にぎやかになつた。ふと後方を見ると唐人山ほのかに明けそめ、次第に月の光がうすくなると共に相反比例して東よりは次第に太陽の光が神武天皇のお弓にとまつた金の鶏の如くにかがやき、指月山にはそれが反映して朝焼をなしてゐる。實に筆舌につくしがたき光景であつた。これを寒稽古の第一日目に味ふことの出来た私共は實に幸福であつたと感謝してゐる。

蛇の目傘

第三學年 綾 子

雨が降る。丁度あの時の様なやさしい淋しい小雨が、それは丁度今日の様な雨の降る或る日、母の使の歸り道夕まぐれの雨の中を

雨が降ります雨降る

遊びに行きたし傘は無し

思はず口ずさみながらしよぼ／＼暢氣さうに歩いてゐた。ふとふりかへつた私の背に、ぼつかりうかび出たのは女の姿だつた。紫地に大きなあぢさゐの花をあしらつたコートに、黒ぬりの足駄が雨にぬれてつや／＼しい。白粉氣の無い顔に紅を帯いたかと思はれる様に上氣した頬、切長の目は凄く程美くしい、無難作に束ねた髪はくつきりと浮び出たうなじに重さうだ。まあ綺麗な人、悲しい思ひ出の数々を一人胸に秘めて短い生涯を終つた美しいあの叔母様にそつくりだ。何時かその人は私と反對の道に曲つて行つた。なぜか強く

心惹かれた私は、何時しかあとをつけてゐた。すんなり淋しいなぜ肩が蛇の目の傘から見えてゐた。びんのほつれ毛はかすかに風にゆれてゐた。何か思ふ溜息か、時々ほつと漏れる息は肩越しに小雨の甲に消えて行くと、其の人の姿は重いつめたい病院の門に、淋しい夕もやの中にかき消す様にきえて行つた。あゝあの人も病院に！

散り行く花は美しい

雨の降る日のあの蛇の目

忘れかねたる我が心

用も無いのにあの路を

過ぎにし委求めつゝ

消えた蛇の目がうらめしい

忘れかねたる我が心

雨さへ降れば思ひ出す

お姉様へ

第三學年 大 橋 タ カ 子

あの厚かつたカレンジャーが今は僅か一枚になつて淋しく風に揺れてゐます。今日は大晦日ですね。唯今お年玉ありがたう。やつと春を迎へる気分になりました。うれしい事悲しい事も共にわけあつたお姉様、いつも學校のお話を聞くのをたのしみに、私の歸るのをた

のしく待つてゐて下さったお姉様の居られなかつた此の一年間は、私にとつてはとても淋しい年でした。

神の御恩寵によつて毎日を感謝のうちに愉快に暮して居られるといふお姉様の御便り、どんなにうれしく又うれしくやましくよみました事です。華やかな都で姉妹三人でお迎へになるお正月はどんなに楽しい事ですと、猶私の淋しさがみにしみます。

お姉様と義兄様も愈々一月には朝鮮のお父様の許に行かれる事になりました。さうすれば私は本當の一人ぼつちになります。でも私は叔父様の家で辛抱して一生懸命勉強し又皆で楽しく暮す日を待つ積りです。

新しいカレンダーが一年前の様に又厚くかゝつて居ります。どの位はがせばお姉様達にお逢ひする日が来るか知ら。

春のよるこびが刻々としのびよつて來ます。よいお年を召す事をお祈りしてをります。

餅

第三學年 岡 静 江

「静ちゃん！静ちゃん！」

「うん……」

まだ午前三時の夜中頃母に捲り起こされた。餅つき、さうだ、今日は餅つきだわ、手早く枕元に並べてあつた服を身に着け、水を汲む

「今度はお節餅ですからようやつて下さいよ」

「はい〜」

「べつたんこ〜。えや〜」

「はい〜」

おばさんが器用な手でお重ねをつくつて居られる内に、私は一寸自宅に歸つてお湯を沸かす。エプロンは粉で真っ白になつてゐた。はたき〜、又叔母さんの家に行くと、館をつゝんでゐた弟が、一つの館を包むのに困り切つて居た。館が出來ると早速一つ口に入れてみた。出來たてだからとてもおいしい。

外がしらじらと明け、前の屋根が白く光つて見える。きやつ〜、驟いで騒ぎ廻してゐるのに、叔母さんの家の子はまだ寝そべつてゐる。

「まあ！本當に寝太郎だね、静ちゃんは！と、昔な驚いてゐた。七時過ぎた頃信ちゃんに寝ぼけ顔でひよこ〜、起き出て來た。

「しらついでら」

ねむさうな聲で聞かされた。

家の方に運ぶ者〜。ちがて家の方の館はすんだ。次は叔母さんの家の館、叔母さん方は三人だけで、又餅隠ひだからすぐ歸つてしまった。

今年の餅はとても味が良い。と母も感心してゐた。寒になつた

水は氷の様に冷えきつてゐた。なでる様に顔を洗つてそ〜くと髪をとく。外は眞黒な霧に包まれてゐたが、裏の方からは霧の聲が聞えて來た。弟も用意が出來たのでオーバーを着込んで外に出た。近所の家は皆な戸を立てこめて居た。横丁のゆるやかな坂を下り切つた所にある親戚の家に行くと、もう餅搗屋さんが三人來て居て、大きな釜には赤々と薪木がくべられてあつた。

「お早やう御座います」

叔母さんはお米をといで居られた。私達は炊事場の板場に腰を掛けて居た。二十分程すると米が掛けられた。私は釜の上に粉をまいて、さあ何時でもおいでとばかり待ち構へて居た。五時前第一の蒸籠からよくふけた米が上げられた。前のおばさんも手傳ひにいらつしやつた。

「さ〜つきまつせ〜」

「はい〜よいしよ〜」

「やあ〜えや〜」

おぢいさんが赤鉢巻でこね取りをする。若い衆二人が杵を振り上げて勢よく餅をつく。

「さ〜上げまつせ〜」

「ごつとん！聞くなつた餅が釜の上にくるがり落ちると、熱い湯氣をたて、横に廣がつて行く。前のおばさんが小餅の大きさに切つて行くのを私達もどんどんまるめる。弟がそれを盆に入れて籠にならべる。二日三日つづく中に、手傳人が三人、四人と多くなつて來た。

けれど、もうお餅で腹一杯これで正月の用意もすんだ様な氣がする。

覺悟

第三學年 岡 喜美子

人は何事をするにも最初に瞭然たる覺悟が必要であります。自分の思ふがままの希望が、豫想が、わけなく實現し得るならば、世に不幸、貧乏の聲は聞かなくてすむでせう。が、しかし世渡りは私達の想像する様に存ばかりではなからうです。陰謀あり、暗通あり、誘惑が腹の手を擴げて待つて居る。こゝに於て實際成功すべき才能は持ちながら、覺悟の定まらず意志の薄弱なために誘惑に陥ちいり成功し幸福になるべき筈の人も、一時の享樂、苦痛の爲に一生運世の敗殘者として終らねばならぬ。希望を達し、幸福になるには、想像以上の苦痛、困難がある。その場合に最初の大きな覺悟を何時までも保持して只管に自分の信念に突進した者が、初めて世の勝利者となるのである。が、しかし誰しも覺悟を有して進むば成功するかと云ふとさうばかりに行かない。時には失敗と云ふ事もある。此の場合の覺悟が最も必要である。いくら一生懸命に力を盡してやつても、運の悪いときは時たま失敗をする。この時に士氣が下り起きの覺悟で冷静に初一念に向ふべきであります。一度の失敗に氣をくじき再生への道を尋ねないのは、世に成功の價値のない人である。

又それが思ふがまゝに實現したからと云つて決して止むべきではない。又こゝにも覺悟が必要である。希望は此の世に於て果てしなく限らない。こゝに發見が見が起つて来る。一つの希望が實現すれば更に又新しい希望が生れて来る。果して人に何處まで行つて満足するのであらうか。この様に希望の彼岸に達し、幸福になるには常に欠なる覺悟が根本となるのである。

一里の道を歩く第一歩、十里の道を歩く第一歩、百里の道を歩く第一歩、同じ一歩でも覺悟が違ふ。一歩。

たと一歩に於てはそれぞれ皆變りはない。然し覺悟に於ては大なる相違があるのである。とかく物事をするのには一里の道を歩くに十里の道を歩くべき心持が大切である。

子守唄 かつら

第三學年 佐 竹 ヨ シ エ

レ——ばの折戸のしづがやに
をきなと——をうなが住ひせり——
晩秋らしいしめつばい夕暮の空気をふるはして、哀調を帯びた子守唄の静なメロデが流れて来た。

寂しい秋の夕暮、あたしがよく坊やを抱いてお庭を歩きながら唄つたあの懐かしい子守唄、聞いつぶらな瞳を大きく見ひらいて、眠ら

うともしない坊やをねせようと思つて一生懸命唄つた。

暫くすると健やかな寝息を立て、深い眠に沈入る坊やを抱きしめた。そして頬づりしながらなほも唄ひつづけた。あたしの幸福な一番楽しい時間だった。神なりの身のその時あたしが「近く別れるべき運命にある」等知るよしもなかった。

「あすありと思ふ心の色ざくら夜半にあらしの吹かぬものは」と言つた人の心を、自分の身に経験してはじめて自分の心とする事が出来たのだ。

肉親の愛程大きいものはない。あたしは坊やが懐しくてたまらない。

柏崎に「飛下落葉の風の前には、有爲の轉變を悟り、電光石火の影の内には生死の去來を見ること。はじめ驚くべきにはあられども、幾世の夢と醒よりし、假の親子を今をだに、涕ひ果もせぬ道芝の、露の愛身の置所、誰に問はまし旅の道。是も愛き世のならひかや」とある。生れた以上死のある事も、親子兄弟と何時かは別れなければならない日の來る事も、皆知つては居るけれどもあきらめられない。坊やは寂しい暗い道を一人ぼつちで歩んで居るのだらうか。

罪を犯すべも、人生のけがれも、知らずに清きまゝで死んで行つた坊やだから、きつと幸福に姉と手をつないで親子で楽しい道を歩いて居るに違ひない。あたしはさうだと信じた。

「飛下落葉の無常は又、常住不滅の榮をなし、一色一香の縁生は

無非中道の眼に應ず、人間個々圓成の觀念。なほもつて至り難し。あら定めなの身命やな、人間有爲の轉變は眠子の中に現れて圓淨に歸る妄執の、其生き死にの海なれや。生田の門の幾世まで夢の巷に迷ふらん」

「坊や——」あたしは夢にでも幻にでもいゝからもう一度可愛い坊やの姿を見たい。

何時まで生きて何時まで悲しい思出に泣くのやら。

永遠に眠れる弟

第三學年 松 浦 孝 子

「洋！洋！」お母様は弟の洋をしっかりと胸にいだいて幾度呼ばれた事だらう。けれど弟は依然としてお母様のお言葉には答へようともしない。それはその筈、弟はもう此の世の者ではなくなつてゐたのだ——

でも一時氣を失つたのではないかといふので、お醫者に直に電話がかけられた。間もなくお醫者は來られた。そして色々とはしくしらべられた。けれど、あゝ、なんと無情な世だらう。あれ程信用せるお醫者の口よりは「誠にお氣の毒ですけれども助かる事は到底出来ません。誠にお可愛相ですけれど」この悲しい報を耳にした時は、今まではりつめてゐた胸は急に悲しみに亂れた。そして一家中聲を上げて涙の出る限り泣いた——涙の泉の枯れるまで——。

側にあるお母様のやつれたお顔から銀の様な涙の一筋のあるのを見た時、又新しい悲しみが込み上げて來た。けれどどうする事も出来なかつた。お母様は、洋よなせ早く父母に先立つて旅立つたのか、お前は一家中の拠だからお母様たちのそばに居る事は一番少ない筈なのに、なぜお母様より早く去つてしまつたのだ。洋、洋、もう一度元氣のよい返事をこのお母様にきかしてくれ。と云つてそこに泣きくづられた。

近所の人は來られてみんな泣いてお悔みを云はれた。お父様はもう致しがたがない、けれど可愛相な事をした。洋、お父様の行くのを淋しからうが待つてゐてくれ」と云はれた。私たちもなんと云はうとしたけれど、涙が胸につかへて何事も云ふ事が出来ない。無理にいはずれば口がゆがんでしまふ。これらの悲しみを知らないうで、弟は今にもう手を胸の上に合はせて、顔には白布を覆うて、清い／＼と涙であの世に逝つてゐるのだ。そして楽しい世界で佛様と遊んでゐるのだ。一日経てお葬式は舉げられた。そして概は西の濱に送られた。あゝ、もう弟は二十軒内外四方の墓の中に納められるばかりの白骨となつてしまつた。それを見て又一層の悲しみをよび起した。私は運命のはかなさを今更感じた。

あゝ、もうあれから五年たつ。なんと月日のたつのは早いものだらう。「去る者は日々に疎し」といふけれど、私は幾年たつても忘れはしない、いゝえ、永遠に忘れはしない。亡弟の事を思ふと、何時どんな時でも悲しくなつて來る。けれどもお母様の悲しみは又ど

人なであらう、お母様は一度も忘れられた事はあるまい。何日かある夜お母様と二人で寝てゐるとき、私がつい亡弟の洋の事を話したら、お母様はそつと床の中で涙をぬぐはれた。それを見た私も知らず／＼に涙が出て来るのを覺えた。そしてその夜は涙のまゝでねてしまつた。

あゝ、私はよく人の居ない所で、亡弟洋の事を思ひ出しては幾度泣いた事だらう。たゞ亡弟の事を思ひ出すにつれ、無限に悲しく可愛相でたまらなくなつて来る。

老も若きも、死は人生のおきてである。死んだのは私の弟だけではない。あゝ、私はあきらめよう。あきらめるより外に仕方がない――と思ふあとからこみ上げて来る悲しさをどうする事も出来ない。

空 想

第三學年 和 木 綾 子

空想は自由であります。私達が頭に描く如何なることでも、それを空想の形で取扱ふ以上、誰一人異存を申し立てる人はない筈であります。それだけに頼りないものとも考へられませう。

私達の頭の半分は空想で満されて居ります。その中の或物は、世の幾多の苦しみを細て確かな信念のもとに生きて居る人々に對しては、生意氣を思はせ、奇異の眼を瞠らせるに過ぎないかも知れませぬ。私達の頭は往々にして其の突飛な空想を生み出します。若し其

の空想の一片でもが此の世のどの部分へ持ち出されたとしても、それは辻褄の合はぬ、それこそ秋の名月を欲しがつて流水へ手を突込む猿の愚かさを聯想させる外には、何等役に立たないことが多いのであります。

空想は夢であります。薄曇で描いたぼんやりした繪であります。

でありますから、ふつと我に目覺めた時には、はかなく消えるのでありませうし、實現といふ困難な仕事の前には、もつと／＼色褪せた繪としか見えないのであります。そして、私達はしばしば空想といふものはかたさを味ひます。それは、私達が大人になつたなら現在の人達よりも、もつと理想的に、もつとたやすく世の中が渡つて行けさうと思ひます。然し實際はそれ程段階的に出来てもゐなければ、まして私達が考へるやうなエレベーター式にも出来てゐないことを知る時があると共に、まだ／＼勉強の足りない身でそのやうなことを考へて見るだけ無駄だとも思ふ時があるからであります。

然し、こゝに空想は試験勉強のやうなものだと考へる人が若干あると致しますと、其の人々は其の次に如何なる證明をするのでありませう。假に試験問題が五つあるとすると、實際はそれが目的であつて、他の事柄には全然必要がなかつたわけでありませう。にも拘らず仙人の妙術を心得てゐない以上、必要のなかつた事柄までも調べます。調べなかつたとしても、それは神かけて出ないと信じた人でも多分なかつたと思ひます。と考へて見ますと、水の月を取らうとした猿は別として、空想は人の頭に當然存在し得るものとなります。

試験問題の五つは空想から生じた實現であります。でありますから私達の頭から飛び出した愚かな猿の言ふことにも一理あることになります。空想は文明への経路であり、又文明の母でもあります。空想は自由であります。實現に對する懸念も疑惑も一切念頭から取去つて、私達は思ひのまゝの空想をめぐらすことを許されてゐるのであります。私達が頭に描くすべての夢に對して、異存を申し立てる人は無い筈であります。それを唯空想として取扱ふ以上は

昭和七年を反省して

第四學年梅組 野 村 京 子

昭和七年も早や暮れようとする十二月三十一日、考へれば一年といふ月日は長いやうに思はれるが實に短い月日だ。私は此の一年の間どんな希望の下に進んできたのであらうか。否有意義に此の一年間を費やしたであらうか私は將に暮れようとする此の日に過去一年間を反省して見るに過去の生活を満足する事は出来ない。否無念の涙が双方の目よりぼてりきつたはゞを流れるのを如何にする事も出来なかつた。あゝ、どうしやう。昭和七年といふ長い月日を無駄に費やし無意味な生活をした。あの昭和七年を如何して取り返さう。もう二度と昭和七年は訪れないのである。私は如何にすればよいのか昭和七年の生活は確かにだらしがなかつた。それが今の私に始めて分つたのである。

人々は私のだらしない生活を確かに感じてゐたであらう。併し社會の人々は哀れな私に何の注意もしてくれなかつた。そして私も人々の注意を受けなかつた。注意を受けないからと云つて無意味な生活に気がつかずに今まで生活し七年の將に暮れようとする此の日に始めて目ざめた私は餘りに哀れであり、餘りに鈍感であつたのだ。過去の私はほんとうに不幸な人間であつた。併し私が過去に於て無意味な生活をつけてゐる頃は、私は絶體に自己を不幸とは考へずむしろ幸福だと考へてゐたであらう。併し目ざめた今の私は如何に過去を後悔しても如何にするすべもない。「後悔は先にたゞず」とやらの昔の諺の通りである。私はさつき社會の人口私の生活を感じてゐたであらうが注意してはくれなかつたと云つた。併しその人々の中にも眞に私の未來を思ひやましい眼を以て注意してくれた人はいつた。

それは云ふまでもないなつかしい學びの師であつた。あの先生方こそ眞に未來を思ひやましい眼を以て注意して下さつたそのものである。

だのに、不幸だつた私はそのやさしい先生の注意もきかず先生の御心中もはからずしてひどい先生だ。

こわい先生だ。などと口から出るまゝの事を云ひ散らしればかりかその御注意さえ耳にしなかつた。

先生は此の私の態度を見て如何に悲しまれ且哀れに不幸な人間だと思はれた事であらう。

併し三十一日といふ日に七年は暮れようとする此の日にはじめて私は目ざめたのだ。

あゝ併し餘りに遅かつた。

あたりはだん／＼闇に包まれ夜は沈々と更けて行く。

此の静寂なる夜、何故昭和七年をあのようなまじめさに失敗したかといふ事を一人静かに考へれば其は確かに私の意志が弱かつたゝめである。

過去の私は餘りに意志が弱かつたのである。

人間は意志が弱くては駄目だ。

意志の弱い人間は駄目だ。

あらゆる誘惑荒波に打ちかつ爲の因になるものは皆強い意志だ。

そうだ意志だ。意志の強固だ。

私の失敗の原因は分つた。

私は思はず喜びの眼を或一點に見はつた。

それは云ふまでもない過去の生活を注意して下さつたなつかしい學びやの師の幻影である。

先生お許し下さいませ。過去の私をお許し下さいませ。私は幻影に向つてこう叫びつゝ悔悟の思ひで一杯になるのであつた。

除夜の鐘は沈々と更けわたる静寂なる夜にしかも過去の生活にめざめて今改心せんとする私を喜んでくれるかのように、併し過去の生活を共になげいてくれるかのように、その鐘の音は今の私にとつて喜びを含みそして悲しみを含み又改心した現在の私を祝福してく

れるかのように静寂なる闇の中にもん／＼と鳴りわたる。

過去の不幸な人間は今めざめた。

あゝ、私は幸福である。

目ざめたと云ふ事だけでも幸福である。

過去の不幸な中にも幸福である。

ふと目が落ちたそこには妹が可愛い、雨の眼をしづかにつむり楽しい夢路を辿つてゐるのであらうすや／＼と眠つてゐる。

あゝ明ければ新年だ。さうだ。

これを機会に改心しよう。

昭和七年を失敗させたのは弱い意志だ。

意志だ。意志が弱かつたゝめだ。

そうだ。意志を強くもたらう。

そして種々な荒波に打ちかつて行かう。

さうだ。やらう。希望にかきやく昭和八年。

人間の生活線は希望が第一だ。

希望のない人間が何にならう。

意志の強固だ。

そして希望に向つてぐん／＼進むのだ。

これがせめても過去の生活の償いだ。

私は静かに笑みつゝ希望に輝く昭和八年を期待しつゝ静かな除夜の鐘を唯だうつとりと聴いてゐた。

新しき年を迎へて

第四學年 冷 泉 龍 子

除夜の鐘が夜更けの空に響き渡つて年が改まります。

この事實を只ぼんやりと考へれば無意味な事に違ひありません。しかし一歩進んでこれを考へる時、それは多くの意味を含んで居る様に思へます。そうして人々はこれを色々に解釋してゐる様に思へます。例へば一休和尚の様に「門松や冥土の旅の一里塚」といふ様な考へ方をして、新年といふ事は死に近い事を意味して居るのに多くの人々はこれを楽しみ喜んでゐるといふ矛盾した人間の考へを皮肉つてゐます。又他方に於ては「二年の計は元且にあり」となり元且として一ケ年の總計劃、一ケ年活動の源泉と考へる人もあります。私は今此の二つの言葉を只文字通りに解釋しないで、その奥に潜むもつと深い、そして深い意味を考へて見たいと思ひます。私は前者を消極的な態度、後者を積極的な態度と考へませう。この二つの態度の中何れを私達は元且に當り、とらねばなりませんでせうか。先づ前者の消極的態度について考へませう。我々が昔と違つて激しい生存競争を営んで行く、まして近頃の様な自力更生の叫ばれてゐる時代にはこの態度は不適當と考へられます。それは一休和尚の如く、世を離れた隱者の生活を發つてゐる人として初めて言はれる事で、私達の様な若い血に燃ゆる、希望のある人々にはこんな態度は不適當だと思へます。私達將來の日本を背負つて立つ可

き第二の國民がこんな元氣のない事では將來の日本は案じられま

す。殊に思想に、經濟に、外交に、その他各方面に今や一大國民的決心の必要なるこの時代には、我々はこんな消極的な態度に止つてゐてはなりません。こんな態度に甘じてゐる人は敗者として人蔭に泣き、こんな態度の家庭は恵まれざる家庭として榮えず、こんな國民を持つ國家は劣敗國としてやがては亡んで行くでせう、それ故に私達はこれよりは、進んで積極的態度を取らねばなりません。殊に現在の私達はやがては社會の荒波を乗り越えて行かねばなりません。そして今日の如く世相の惡化した社會に入るに當つては、確固たる信念と、考へ方と、をうして何物にも屈しないといふ確心の必要な事は今此處に述べる必要を認めねばなりません。一體日本の婦人は他國の婦人に比して消極的だと言はれてゐます。それは長い間積り積りた封建制度、武家政治の結果かもしれせん。勿論この中には幾多の長所も見出されますが又同時に多くの缺點も見出されます。この點は日本婦人の長所であり、又短所である様に思はれます。

あの世界の總てを滅茶苦茶にしてしまはんとした歐洲大戰に於て、ドイツが四面孤立の中に立つて、おんなに長く抵抗した原因の一つは婦人の援助によるもの大きいと言はれて居ます。しかしながら遂に矢折れ、屈するに至つた原因の一つも亦婦人の屈伏、婦人の不統一による所大きいと云はれてゐます。かく見ますと一國の興亡の原因は亦婦人の如何によると斷言して差支へないでせう。將來に於て我が日本も世界を相手に、正しきが故に戦はねばならぬかもしれま

せん。その時私達婦人の消極的にして、その力の薄弱な時は、或はドイツと同じ運命を見なければならぬかもしれせん。そんな事を其から其へと考へる時、私達は益々女性の社会、世界に對する強い認識と確信とそして何物にも屈せざる積極的態度の必要を痛感せざるを得ません。私は今新しい昭和八年を迎へるに當り一年の計は元旦にありといふ語の廣い、そして真深い意味を理解して、それが全日本女性のモットーとなる事を望んでやみません。

田舎の冬の朝

第四學年 品川 房子

「キキ、キキ」と啼く百舌鳥の聲に初冬の長夜も明けた。戶外を眺めると驚くばかりに靄白な霜です。昨日寒かつたからだらうと思ひながら冷たい手をこすり／＼庭に出て見ると草木は皆霜に敷はれて寒さうにうなだれてゐる。昨日まで口々に美しいと愛ではやされてゐた根根の小菊も、今は霜にやけて唯だかれるのを待つてゐるやうで一入物淋しい。そのまゝ野原に出た畑の間を通ると氷のやうに冷い風が頬にあたつて思はずぶ／＼と懐へる遙か向ふの家々は霧の底に漂ひ其の横合から曉の光を受けて白くきは立つた小川の水が見える。路傍の枯草に宿つた霜は薄綿を敷いた様でそれに朝日がちら／＼と輝いて劍の穂先を見る様です。哮喘を急ぐと何處かで「ひどい霜ですね」といふ寒さうな聲がする。一つ二つ深呼吸すると吐

いた息が煙の様に顔にまつはる。風もないのに桑の葉がはら／＼と音をたて、地に落ちる。隣の家の屋根が日赤にあたつて霜を被つた瓦から水蒸気が盛に立ち上つてゐる。空は淡黄色に冷く晴れて雀のさへずりがあちらこちらから賑かに聞え初めた。

浮び来るまゝ、彼等のお正月

第四學年 前田 禮子

格子の向ふをととても寒さうに夕風がむせびながら通つて行くと、その後を追ふ様に、速くから網曳の聲が聞えて來た。
エンヤヨーエンヤヨー 言葉ははつきり解らないけれども、どことなく生々した力強い聲が、耳から身體に傳つてすざて行く。暖いお湯の中でお茶碗を洗ひながら、そのエンヤヨーの連續をきいてゐる中に、ふと今朝うちに寄つて行つた、年とつたお魚賣のお母さんと思ひ出した。
「奥様、どうやら今年は正月が迎へられさうでござります。はい」彼女の顔には、かくしきれない喜びが溢れてゐた。
「今年は景氣がいゝの」母がきいた。
「はい、まあ、あんた様、十圓近うするちゆう鯛がとれましてから」
「ほう、そりやお目出度いね、たくさんとれたかね」
父も口をはさんだ。

「はい、まあ毎年々々不景氣で節季にや苦しんだもんでござりますで——はい、今年はどうやらねお蔭様で——」陰曆を用ひる彼女達にも、はや師走は十日近く過ぎてしまつてゐる。今年も又どんなに考へ苦しんでゐたのだらうか、現に四五日前

「奥様、一そ此頃は漁がござりませんで、はい、節季になるちゆうのに——」と長々とこぼして行つたお母さんもあつた。年はまだ若いけれども子供の多いと言ふお母さんだつたが。

不安な生活、自然に住む生きた魚を相手に、續けてゐる彼等の生活は、本當に覺えない不安なものだ。とれる時にはとれるが、とれない時にはちつともとれない。たくさんの子供を連れて、その不安な生活におびやかされてゐるお母さんの、赤いかじかんだ手が思ひ出される赤ざれだらけの手で冷いお魚をいじくりながら話して行つた。

「だけどあのお母さんだつてきつと今頃は喜んでゐるに相違ない。今朝大漁のお話をきいた時にもさう思つたけど。」

エンヤヨーエンヤヨーまだまだ聞えて來る。照りつける夏の日光としほからい海水とによつて、赤く黒く磨き上げられた彼等の顔は、今海上を渡る冷い風をみんな吸つて、大きい口をあけて。そして調子をあげてゐるのだらう。ひげだらけの赤銅色のその腕や足も、力一杯働いてゐるんだらう。

「入るぞう」彼等は考へてゐるかも知れない。それとも何にも考へずに唯一生懸命をたぐつてゐるかも知れない。然しいづれにし

でも今彼等の顔は、美しく輝いてゐるに相違ない筈だ。

やがて訪れて來るお正月、寒い風と戦ひながら、冷い水に負けないで思ひきり働いて、そして迎へるお正月、それは彼等にとつてどんなに喜しく、楽しいものであらうか。働きの後に與へられる何とも言へない聲の快さ。その喜びは當然彼等に與へられるべき管のものであつたのだと思はれる。

あの子供の多いといふお母さんや、年とつたお母さんや、エンヤヨーを朗らかに歌つてゐる海の若人達の事を思つて、私もとても／＼うれしくなつて來た。彼等の上に輝きあれと祈りたくなつた。

蓬萊山

おめでたう！ お屋敷を祝ふ前に、みんなで言つた御挨拶の聲は弟の聲が一番大きかつた。老ひたりと言へどもつてな顔付で、一番お禮者をたくさん食べたのはお父さん。

お屋敷をほんのちよつびりなめて、一番小さい弟がヒョロ／＼する。さつきまで暖湯をたいて部屋をあたためたので、みんな赤い顔をしてうれしさうだ。すましてゐてやらうと思つてゐる自分もついつりこまれて笑ひ出してしまふ。床の間にかけた蓬萊山の日の出のお日様もにつこり。

とにかく平和な新年だ——。

「禮ちゃん十八かいの、今年は」

「ウ、ン知らない、フ……」

「何でも十七ちゆう摩をきいたのが去年じゃつたから、今年は十八じゃらうの」

「知らんワ……」

「十八か、十八ちゆうとおばあさんが當家へ嫁入つて来た年じゃが……」

あんまりおばあさんが私の顔をごらんになるので、はづかしくなつて飛んで逃げてしまふ。

人生五十年とすれば十八年は約三分の一にあたる。人生の三分の一なんてオイヤオヤだ、五十幾つまで生きた所で幾る所僅か、これや油断がならないぞと思ふ。

「この子もそろ／＼人生へのりだす頃になつたが、覺束ないものだ」と思つておばあさんが、私の顔をごらんになつたのかも知れない。一寸はずかしくなつて情なくなる。

鏡を覗いて「お前十八かい」つて言つて見る、すると「十八は十八だが顔には皺が三つもよつてゐるよ」と、誰か言ふ。何だかおかしくなる。

希望ははるか

学校へ行つてお友達と新年の御挨拶する。すると誰もが「つまら

ない卒業だもの」とおつしやる。

それを思ふとよも淋しい、卒業！ お目出度い華やかな言葉だが、又事實それはたまらなく寂しい言葉だ。卒業してしまつたら——つまらない、寂しい、悲しい——。

だが私達は希望を持たねばならない。自分相當の希望に向つて進む事が大切なのだ。いつまでも夢を追つては居られないのだ。現實に生きねばならない。

希望ははるか。

年頭に際して努力を思ふ

今や多事多難なりし昭和七年を送り新しい希望と更に重大な意義に満ちた昭和八年を迎へました。家々に立てられた日の丸の旗も松飾りも皇室の無窮を壽ぎ奉りこの芽出度い新年を祝福してゐるやうであります。

茲に昭和七年を顧りみますに滿洲事件に於ては今以て國際聯盟は容易に之を承認せぬが我が松岡全權の御奮闘によつて漸時日支間の眞相と帝國の公正な立場をみとめて來る様であります。

又國內にしては最近自力更生が盛んになつて來てゐます。私共各人は自己が自己を更生して大いに自力奮闘しこの不況に對して打開せねばならない事は當然な事でありませぬ。昔の諺に「天は自ら助

くるものを助く」と言つてゐます。自ら立働くところに天の恵があり神の助けのある事は疑ひのない事でありませぬ。自力更生……この不朽の言葉こそ現代の私達の念頭に置いて、一刻も忘れてはならない事でありませぬ。

あらゆる階級の有識者達が悲境打開のために種々施設された事柄も未解決のまま昭和八年に持ちこたされてゐます。思へば現下の非常時に當りこの重大時にのぞみ私達は學校生活もあと三月足らずで終らうとしてゐます。今新春を迎へるに際し輝く將來によりよき希望を有たんとするには靜かに過去の生活をふりかへつて考へて見る事でありませぬ。そして大いに奮起し眞剣な努力をせねばならぬ事でありませぬ。

逝きし姉

残りなく散つてしまつた樹立を通して春の様な暖い日光がまだ冬と言ふのに訪れて参りました。

昔い空何處まで續いてゐるのであらうかあの大空？ 美しい山お春が來るのです向ふの方から……

そうした自然の美しさを眺めてゐると私の眼には知らず知らず涙が浮んで來るのでした。思出すまいと思つても忘れる事は出來ません。その遠くもないあの悲しい思出を……。

最後に近い調査の日、確か十二月の九日でした。明日と云ふ調査を目前に控えた日、空は美しく晴れて心も知らず朗らかなる様な日でした。私達は其の日裁裁判所の公判傍聴を終つて、灯の淡い町を通り初冬の冷たい夕風の身に浸む田舎道を通つて家路に着きました。

其の時の私の心は早く歸つて勉強しようの心のみでした。一歩家の中に足を踏み入れた私の目に映じたもの、あまりにも靜かな空氣の考へ込んだ顔、電燈は輝いてゐても何んだか暗い陰影を皆の顔に落してゐました。僅か一分足らずの中に其の理由を知ることが出來ました。大阪に嫁いだ姉よりの悲報、「良子危篤直ぐ來い」あゝ、呪はしい其の文字。

母は泣いた手に荷物を纏めて夜風の冷たい田舎の驛を後にして都へと悲しみの心を抱いて旅立ちました。昨日に變る今日の身の上あゝ思へば去りにし六月クラスの人道と幾多の憶れと希望を胸に抱いて行つたあの大阪の地よ、さよれ今行く母の姿を想ふて……

其の夜一夜明日は調査だ……が固く冷たい車中に今宵一夜を明かされる母の事を思ふと、又故郷遠い萩の地よりの訪れ如何にと持ちわびてゐるであらう姉の姿を……。走馬燈の様に私の頭を駭亂の巷に變へるのでした。

一時、二時暗い外面に木枯の風の音のみして靜かなそして淋しい冬夜は移り去り曉告ぐる鐘の聲に早や臺所に下り立つて、しみじみと母無き後の苦しさを偲ぶことが出來ました。そして登校。重い苦

しい胸を抱いて答案の用紙に向ふ時思はず落した大きい涙。それが悲しみの涙でなくて何でせう。十二月十一日遙かなる都ではなつかしい母に逢ひし喜びも東の國で姉は遂に呼べど歸らぬ永遠の旅に立つてしまひました。

あゝ死と云ふ呪はしい文字……

空は心憎いまでも澄んでゐました。でもあの夜空に姉の魂が宿つてゐるのだと思へばなつかしい夜空でした。

着いた空を見上げて泣いた時私の心は少しは柔いで來るのでした。夜目にも白き山茶花の花が木枯の冷たい風に逝きし人を想はせるやうに、花瓣は冷たい地上に安任の地を求めめるかの様にほろ／＼と散るのでした。

抱きこがるゝ人々の涙は床にひたすとも

香空しく花折れて運命の前に倒れけり

恵は厚き父母に先立つ事の悲しさを

かこちわびてし唇も今は艶なく力なし

憂ひあへりし同胞の長き別を告げんとて

深き情に難きし心の窓も閉ぢ果てし

藤村の時が今更の様に現實の私に呼びかけてゐる様でした。次の日も其の次の日も氣味の悪い程澄んだ夜空に、逝つた姉の如く毎夜／＼美しい星は輝いてゐました。

月を見て姉と呼べども答なし

思へば悲し 冬の宵々

寄宿舎生活

りん／＼、曉の静けさを破つて起床の鐘は勢よく響き渡る。

すると今まで蒲團にくるまつて夢も圓らかな我々は一せいに飛び起き直ちにあらあでもこちらでも雨戸をがら／＼と繰る音がして、忽ち合内には冷やりと快い新鮮な空氣が、今までのきたない空氣を逐ひ出して、自分がその代りに入り込む。蒲團を揚げる、寢衣を着換へる、そして直ちに顔を洗ひ、髪を結ぶ。宿當番の人はその間に窓をあけ室のお掃除をすす。起床より一時間後に響く鐘は食事を告げるのである。すると洗面をすまして机に向つてゐたものは直ちに食室に集まる。尤も宿當番の人は鐘の鳴るまでに食事の出來るやう準備をして置く。二三分たつと週番は先生を伴つて食室に來る。こゝで始めて先生と生徒は「お早うございます」と朝の挨拶を交はしてつゝましく食室につく。終へて人は直ちに受持の區域の朝清めを始める。但し炊事當番はその後始末をし、便所當番は便所に向ひ、それを終へると室の掃除區域に行つて、まだ終つてゐない時はそれを手傳ふ。週番の人は大體お掃除が終つた頃を見計つて鐘をならし先生を伴つてお掃除の跡を調査し、悪い所はしなをしをさせる。週番生は引きつゞき自習開始の鐘をならし、先生に印を押して貰つてポストに入れる。始業時間前二十分になると再び自習開始の鐘をならす。すると今まで机に向つてゐたものはやめて登校の準備をし、十分経つて鐘がなると、勢よく登校する。授業を終へて歸つて

讀しの情の慰めがてらに月に向つて姉と呼んだが答へるものは無く冷たい池の面に影を落した月のキラ／＼と輝を打たせてゐるばかりでした。

姉を慕ひ妹と慕しまれつゝ十七年の契も思へば淺い一夜の夢でありました。落花は反つて無情を感じしめ、浮雲は隠れて悲しみに涙にも果てしないのでした。権花一朝の榮。鮮妍一夕の命にも劣らない姉の死。

遠い昔、紫紺色の袴を着け、東雲家で慕の女學校に通つてゐた頃のあの姿思へば皆涙の種であります。

あゝ一九三二年、永久に逝きし私の歸らぬ此の年も早や暮れゆかんとしてゐます。あゝ都の春を持たずして逝きし姉が悲しいのです。やがては地上に春の訪れがあるのでせうが一度び逝つてしまつた姉は夏が來ようと秋が來ようと私達の許には再び歸つて來ないのです。地上に残されし人の悲しみ、まして後に残された無心の可愛いゝ子供達を眺める時。

思へば袖に涙のかゝるかな
親も無き子の母を尋ねる

の歌をしみじみと感じて來るのです。歸らぬ私の永久に安かれと祈りつゝ。

寄宿舎だより

第四學年 岩本 フ ミ ヨ

五時になると夕食の鐘がなる。それまでは自由である。外出する人もあり、読書する人も、勉勵する人も、新聞雑誌を讀む人も、遊ぶ人もある。この時間は主に修養に資する時間で、娛樂、課外の讀物は主としてこの時間になす。外出日は一週四回で、外出先や出合時刻を帳簿に記入して二人以上でなし、五時までは必ず歸り又歸合時刻を記入する。お湯は三時半より始まり五時迄。食事が終ると週番生は便りを集める。六時になると自習開始の鐘をならす。すると今まで食後の運動や、散歩遊びを愉快にしてゐたものは机に靜まつて各々練習、復習を始める。話聲一つ聞えて來ない。一時間経つと鐘を合圖に三十分遊び、七時半より又一時間勉勵する。

その間は雑誌、小説類はすべて一投に讀む事を禁じられてゐる。自習時間を終へると直ちに晩禮がある。その時は皆が合宿室の前に集り「お休みなさいませ」と挨拶し、時には先生から何か御注意される事もある。自習時間を終へて三十分間に戸をしめたり。床を引いたりして九時には消燈の鐘と共に室の電燈は全部消されて、一同揃つて感謝しつゝ暖の國に行く。唯ついでゐるのは廊下ばかりである。週番生は先生を伴つて廊下の月じまり、火の始末等を見てまわる。このやうな生活を間斷なく繰返して寄宿舎は築かれた。すべて合生は規律正しき生活を旨とし、令則を重んじて常にこれに關ひ、上級を敬ひ下級を愛す先輩の案かれた此の寄宿舎は、今や鐵道の普及に伴ひ、肉體的には衰へつゝあるが精神的には永遠に生きつゞける事だらう。



詩

元旦

第一學年 山縣操子

一、今年は八年とりの年
 一番どりもきどり聲
 「コケコツコー」の聲共に
 昭和八年明けました
 楽しい〜お正月。

二、門には國旗がひら〜と
 空には紙鳶がぶん〜と
 表はおひ羽根カチ〜と
 目出たい今日を祝つてます
 楽しい〜お正月。

三、夜はお家でかるたとり
 トランプ、双六、花合せ

勝つたり負けたり一日を
 愉快に遊ぶお正月
 楽しい〜お正月。

かくれんぼ

第一學年 佐古淑子

小さい子等のかくれんぼ
 私は一人で見えました
 ジャンケンポイで始つて
 鬼はいよ〜目を閉じた
 一二三と言ひ出して
 百まで数へて目をあけりや
 誰もゐないで家ばかり
 二百数へて目を開けりや
 家には電燈がついてゐた
 三百數へて目を開けりや
 空には星が光つてた
 鬼は悲しくなつたのか
 とう〜しく〜泣き出した

村の子供

第一學年 飯田トモエ

村のいちわる子供達、お屋根のすゞめに、
 石なげた、石はすゞめに あたらずに、
 お屋根のかはらに、あたつたので、
 其所のおばさんに、おこられた、
 あてが外づれた、子供達に〜い雀め、
 おぼえてる、にらむ子供にふんかけて、
 雀は一散逃げだした、あつけにとられた、
 子供達 何も言はずに、逃げ出した。

唯

下界を見下す平和な月は
 明るき光を投げて
 下なる世界を照して居る
 露の如き庭に
 唯一人
 空を仰いで佇めば
 清く流れる水音が
 静に〜
 我が耳に聞え来る。
 光る月の姿の中に
 懐しき
 母が浮び居るやうだ。

出征軍人を偲びて

第三學年 賀田ノブ代

學校歸りの細道を
 ひとり淋しく歩む時
 唐さす風のおそひ來て
 我が身も通れと吹いて行く

月

第一學年 吉田ユキエ

美しい
 優しく
 尊く
 そして清らかに
 まはりの星にかこまれて

明るい十五夜の空に

膚さす風の行き去りて
不圖思ひ出す滿洲の
廣野に戦ふ出征兵

極寒零下三十度

御國の爲と雄々しくも
吹雪の中も厭はずに
戦ふ我等のますらをよ
輝く我等のものふよ
只幸あれと祈りけり。

春の海

第三學年 山田英子

櫻咲く宵、朧月
ほのかに照らす海の上に、
花見歸りの客船か、
鳴らす太鼓の音かろく、
残る船足に灯が揺れる。
沖の漁火臙にけぶり、
降るやしとノノ小雑用

映る灯影にはねるは魚か、
出て行く船の體の音に、
和するは鳴か濱千鳥。

たそがれ時

第三學年 上田民子

日が暮れる、
どんより冷い冬の日が、
かけるやうに早く、
山の端にかくれる。
窓にもたれて空に見入れば
雲の動きも、
暮れるのに退つたてられるやうに、
せはしさうだ。
かすかにノノ風にのせられて、
何處かの寺の暮の鐘が聞えて来る。
さつとつめたい風が頬をかすめる。
鳥が「かあ」とないて、
日も全く沈んだ。
あゝ寂しく暮れゆく一時。

汽車にのりて

第三學年 藤村貞枝

赤松の林を後に、
煙草高左に見つゝ、
汽車は今し堤にかゝる。
ほのかなる潮の香に、
海邊の近きを知りぬ。
みこし草生ふる河原に、
草はそよ風にさわぎ、
せきせいの飛び交ふ姿、
さいなみにうつりて、
旅愁をなぐさむ。

朝

第三學年 守重京子

雨戸を離れば、
おゝ輝しい光線と、
新鮮な空氣が、
私の室に流れ込む。
朝日を浴びて光る草木の露、

日暮時

第三學年 横山きみ子

日暮時
柱にもたれて思ひ見る、
れんげ摘んだあの日の事を、
白いれんげが涙にうかぶ。
日暮時
故郷の空を眺めやり、
父母いかにと涙ぐむ、
やさしきお顔が目に見えぬ。
日暮時
ひとりぼつちの庭に出て、
帥より来た文くりかへし、
獨りさびしく涙にうるむ。

月見草

第三學年 木下房子

夕べ寂しく暮れそめて、
人影もなき草原に、
一人寂しく捨てられた、
委やさしき月見草。
どんな子供がなくさみに、
摘んで遊んで捨てたやら、
丈も短かく色淺く、
これから咲かうといふものを、
空はあかねに染められて、
開ゆるものはねぐらへと、
急ぐ鳥の聲ばかり。

雨の日

第三學年 小泉アイ

明るい晝の小雨の中を、
大きな蛇の目の傘をさした。
五つ位の男の子が、
ヨチ／＼と愉快さうに、

身に餘る傘を廻しながら、
歩いてゐる。

可愛らしい爪皮のかゝつた足駄が、
快よいリズムを引いて鋪道に鳴る。
通り過ぎながら思はずのぞきこんだ私の耳に、
雨コン／＼降つとくれ、
雨コン／＼降つとくれ、
と小さな聲で唄つてるのが
雨の音より静かに、
なつかしく響いた。

私

第三學年 正木陽子

或る日の私はむつ／＼りと
黙して居ました。誰が何と云つても。
或る日の私は悲しみで一ぱいでした。
音が愉快でも。
或る日の私は悶えて居ました。
併し今日の私の朗かき
何んだか試験にパスした
其の時のやうに。

弟

第三學年 林玉榮

オ面
オ朋
——あつ痛いちやないか
——お姉ちやんが
すきがあるからさ、
とすましてゐる弟。
ぶたれた時は腹が立つても
やつぱり可愛い弟。

旅行の夜宿にて

第三學年 林玉榮

鼠をつけよ、——お父様、
忘れ物はないの——お母様、
おみやげをね——弟達。
今朝の昔の顔が
くる／＼と廻つてあらはれる。
始めて味はふ修學旅行の夜、
せむらぎの音もうら淋しい。

暮春哀情

第四學年 河邊綾子

暮春の夕ぐれよ
雨ぐもる山村の空に
孤獨なる旅の寂寞は悲し
あゝ夕顔のほの白い花にふる夕雨が
いかにつめたたく心にしみるか
わたしは知つてゐるけれど
窓ぎはの
ばせうの葉にそゞぐ
雨脚のしめやかな音は
故郷のお母様のしのび泣きの
ほそばそと
心はいたみませ
今は
郷愁の涙さへ
夕闇の中にひえびえこぼれ
悲哀な心の鳥は
しよほぬれになつて
羽ばたきさへ止んだが
うつら／＼

打伏して

まどろむ窓邊に
あ遠く蓮正寺の鐘がひびいてくる

よろこびとは

同 益成雅子

喜悅は
何處から何處迄と
測り得られるものだらうか
いくら笑ふことができて
センチで測ることが出来ますか
底の知れない
深い喜悅の餘地を
探るものもないでせう
併しよるこびとは無生物にとつても
必要なものであらうことを
私は信じた

星

暗い水面をさまよふ燈火の影
同 有田定子

乙女の着たる振袖の様に
長くきら／＼ゆらめいてうつる此の灯
けれど闇の彼方の星は銀色で
夢の様な世界を
うるんだ瞳で見下してゐる
其の時私は
北方の空にひときは訝へたる
プラチナの如き瞳の星を見つけた
みめぐみあふれてゐるまなざし
聖者の愛の如き光
私の手はいつしかかの星にむけられて
かたく結ばれていた
次から次へと瞳にうつる
兄弟姉妹の小さき星
なんと輝きにみちた星の群よ
けれどそれも一時
突如中の一つは
一條の直線をえがいて流れた
あゝ
なんて運命の淡い星
はかなき生命といへやう
我々人生も亦このやうなものか？

元旦の朝

同 西田清子

胸一杯の明るい心
朗らかな心
楽しい心
そして健康な身體
昭和八年を迎えて
雨にけむる元旦の朝に
お庭の鶏とちかひました
今年こそはしつかり勸みませう
今年こそはしつかりはげませうと
新たなる希望を胸にいだいて

元旦の朝

同 品川房子

朝だ——朝だ——
窓を開くと
清々しい空気が
明るい光線が
さつと空へながれこむ

朝五時

同 馬屋原純子

朗らかな朝
氣持よい朝
鳥の中の
草に降りた露も
朝日にきら／＼と水晶の如くに光る
朝の散歩
鳥中をく／＼と
お野菜を見て歩く
窓をみがき／＼
父の植えし
かまに漬菜にお大根
私の植えた

はうれん草
母のそだてたチンヤツ葉も
みんな元氣に青々と
朝の大氣を吸つてゐる。

色あせし友禪

同 三 輪 愛 子

其の昔
我が幼かりし時
常に好みし
友禪の着物よ
そを今見れば
色あせし
淋しき友禪
そは永久に語りえぬ
夢をひめて
冷たくねむれる
はかの如きか
其の昔はなやかなりし
おゝあの色を……
淋しく幻にうつしながら

一人淋しくねむれるか
色あせし
友禪の着物……おゝ

夕ぐれの濱

同 末 岡 さかえ

漁舟歸り盡して
人もなし夕ぐれの濱
打見る鳥々の山
夕靄たなびき今日も暮るゝ
岸に立ち父呼ぶ子等の
影なくして暮るゝ夕ぐれの濱
誰ぞ歩みし此の足跡に
おゝ小さき蟹のたわむる
一人ゆく我足許に寄せて
何處にか行く大海の波
見上ぐる空に星の輝やき
青松音なくして今日も暮るゝ
波にたわむる無性動物
蟹に思ひり啄木の歌
東海の小島の磯の白砂に

我泣きぬれて蟹とたわむる
東海の小島にあらで萩の海邊
沖に釣する魚舟もなく今日も暮るゝ

十八の乙女

同 堀 初 枝

訪づれた
静かにそつと訪づれた
一九三三年が……
我等の昭和八年が……
通めく十八の乙女よ
新鮮で澄潤として朗らかに
そしてやさしく美しく
眞白きばらの花のやうに
一點のけがれもなく
赤きばらの花のやうに
情熱と愛情を持つて
清くやさしく強くあたたかく
朗らかに進めよ
我れ十八のこの年を――



和歌

落葉 第二學年 藤 家 敏 子
裏戸より隣の軒の干柿のよく見ゆるまで落葉しにけり
老 松 同 重 麻 靜 子
千代八千代榮ゆる御代のしるしをば示してぞ立つ宮の老松
鶯の聲 同 福 田 瀧 惠
とく起きて東に向ひ拜すれば空にきこゆる鶯の聲
元 日 同 小 川 象 江
ぼのぼのと空しらみきて萬歳のひびききこゆる今朝のうれしき
残 星 同 藤 道 谷 惠 彦
起きいでゝはるかあなたを眺むればさやけき空に星ぞ残れる
川 風
友送るたそがれ時のかへり道ひとしほ寒し冬の川風
人形市 同 綿 津 和 枝
山茶花の散る眞晝なりむしろしきて妹が呼ばる人形の市
元 且 同 齊 藤 幸 子
ぼのぼのと空しらみ行く村里に折しも聞ゆ曉の鐘

冬の夜

一筋の月の光のわが庭をつめたく照す冬の夜半かな
同 藤原 俊子

秋の夜

さえわたるみそらに月の輝きて菊とひそかに語る秋の夜
同 蔵田 八穂

新年の夜

第三學年 阿座上 京子
松籟の音淋しくも聞きながら讀書にしたしむ正月の夜

五月雨

同 安藤 フサ子
五月雨にぬれてとどきし君が文淡くにじみてほのかにきゆる

汽車

同 石津 ヒサヲ
喜びも又悲しみも管乗せて雨に濡れつゝ汽車は走れり

秋の川邊

同 伊藤 道子
秋深みいよゝすめる水の面に赤き落葉のうきで流るゝ

元且の朝

同 上田 民子
鶏の鳴く音と共に飛び起きぬ初日慶はし元且の朝

籬

同 岡 満
誰かふくむぎ笛の音はさえずえとさやけき空の藍にとけゆく

水 仙

同 小野 八重子
山はだの崖にもそぐはぬしとやかさすらりと立てる水仙の花

夜廻りの聲

同 大河 戸たけ子
世のためと聲も凍れる寒き夜になほ夜まはりの聲はひびけり

俄雨今日を晴れにと乙女等の着かざりし衣打ちよごしけり
同 並川 文江
旅に行く友を送りて秋風の一人身に沁む驛の夜かな

山茶花

同 名和 洽子
時雨降る夕べ冷たく山茶花の花びら白くぬれてこぼるゝ

夕暮の鐘

同 藤村 貞枝
夕暮の空に流るゝ鐘の音に筆取る手をば休めける我

雨上り

同 松尾 悦子
雨上り和庭の水々は洗はれて清くさやかに緑ましけり

夏の日

同 室谷 敦子
真山にひぐらし鳴きて一日を思ふまゝにぞ今日も送れり

冬の夜

同 守重 京子
小夜更けて肩の寒きに目覺むればかすかに聞ゆ拍子木の音

楓物の手もと

同 森屋 壽江
楓物の手もと休めて外みれば夕焼赤く川面であせり

故郷を後にして

同 山田 英子
薄れゆく我が鳥影を望み見て鴉鳴く音に又涙する

出征兵を思ひて

同 山田 正子
寒空の下に戦ふますらをの苦しき思ひ我も勵まん

友の便りを待ちて

同 山中 松子
淋しさに窓にもたれて思ふかな別れし友はいかにおはすと

正月

同 吉田 早苗子

一四〇

幼子 同 大島 光子
幼子の片言まじりの戯れに祖父母の顔は無きまでになる

夏の朝

同 大橋 タカ子
朝露に根をぬらして踏み入れればトマトの香ほのかに漂ふ

幼子

同 齊藤 マサ子
孫あやす父の面をかきしに思はずブツとふきだしにけり

新年

同 坂上 孝子
新玉の年の始めに祝ふかな我が大君の御代の榮を

ボート

同 作間 淑子
冬の濱ボート淋しき砂の上ペンキの色もうすれ行きつゝ

十五夜の月

同 末光 文子
縁側にすゞみゐる間に十五夜の松にかゝれる満月の月

涼風

同 杉山 富子
とく起きて川邊に立てば涼風の髪をなぶりてそよ／＼と吹く

夕暮

同 高崎 千壽子
叱られて籬の若葉むしりつゝ淋しく聞きぬ山寺の鐘

母

同 田村 文子
なんとなく若き喜び覺えつゝ見上ぐる空のあはき水色

鶯

同 中谷 ミツエ
入齒して若くなりぬと母君の笑まるゝ除見つゝかなしむ

新年

同 長尾 光子
うら／＼かな光さしこむ縁側に鶯の聲のどけく聞ゆ

晴衣着て羽根つき遊ぶ幼子のおかつば姿の愛らしきかな
同 吉田 富美
なつかしき友のたよりに打ち笑みつづくに筆とりかへしきけり

年末

同 井町 文子
何事の憂ひなくして慈なくすごしゝ年の有難きかな

夜店

同 植村 千壽子
道べりに店をはりたるおもちや屋の前にたちたる子等の笑顔よ

夏休

同 岡喜 美子
今日も又一日は暮れぬ平凡に如何に過さん長き休を

夕涼

同 岡村 公子
夕涼み暗き空をば仰ぎ見て星數かぞへて明日を喜ぶ

畫の海

同 岡崎 延子
海と空一つにたけて眞青なり砂濱白くかゞやく眞畫

桶の水あふれて

同 同 崎 延子
桶の水あふれてぬらす青笹の器に輝ける朝の静けさ

秋の夕暮

同 小野 智恵子
空を飛ぶ小鳥の行方ながむればさびしさまる秋の夕暮

年始

同 小野 村壽子
「舊年は」「今年も又」と長々き隣同志の年始をかしも

母

人の母見る度毎に我が母のやつれし姿思ひ出すなり

冬の朝

行く人はみな外套の襟立てぬ屋根の瓦に霜白き朝

子

教へてもたいぼんやりとしてる子に... 柏 木 喜美子

新

つめたさに襟持つ手も凍りたり... 元且 且 藤 光 子

夏

空一面ちらばる星をながめてはひとり... 梅 和 田 和 子

海

夕ぐれのなごきに立ちて見渡せば... 有明月 同 田 村 米 子

山

山蔭の長きにあきし汽車の窓や... 遠足の朝 同 林 玉 子

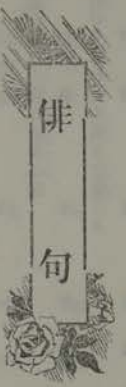
笛

何人か吹き行く笛のあはれきに... 梅 寒 同 渡 邊 往 枝

歸りまさぬ結のみ魂の安かれと頭をたれけりみ佛の前に
 冬 寒 同 同
 山鳩の鳴く聲あはれ冬寒し有明月の峰にかゝりて
 除夜の鐘 同 同
 何時もきく鐘にしあれど殊更に悲しき聲ゆ除夜の鐘かな
 梅の花 同 中 村 正
 つり舟のかゝるが如き三ヶ月の光にほのかに梅の花咲く
 年 同 長 山 菊
 打ちふりし傘の雫のかゝりしか前行く人のふりかへり見る
 休み日 同 同
 休み日の朝を落着き母上と朝餉したむ我のうれしき
 門 松 同 木 村 喜 久
 よき年の初日射し來ぬ門松の梅もめでたく咲きてありけり
 寒 梅 同 横 山 か や
 さびしげに梅ぞ咲くなる里遠くすむ人もなき山寺の庭
 荒 磯 同 前 田 禮
 裂けてとぶ波の響としぶきのみ荒磯の日ぐれ千鳥もなかに
 前途を見つめて 同 同
 わが前に續くいばらの細道を苦しくも我はたらきて行かん
 初 日 同 長 富 ヨ シ
 見渡せば海に初日のかゞやきて遠つ鳥山おほらかに見ゆ
 若 水 同 同

若水を汲みつゝきけばしたりの井戸底深くひやく鶴
 友の便り 同 中 村 スミ子
 眠られぬ夜のつれづれになつかしの友の便りを取りいだしよむ
 鶯の聲 同 同
 ほのぼのと温泉町の夜はあけて木の間にきこゆ鶯のこゑ
 故 郷 同 岡 崎 玉
 久々に故郷訪へばいろりべにやつれし祖父の面影のあり
 夜明り 同 益 成 雅
 東雲の落にあればしらじらと男波は猛り大地明け行く
 鶉 聲 同 馬 屋 原 範 子
 ほのぼのと初日影さす大空に朗らかにひやく鶉のこゑ
 父戀し 同 高 屋 琴 子
 うつしを又取り出して涙せり亡き父君の思ひ出されて
 朝の海 同 齊 藤 富 美
 大漁の旗に朝日のかげさしてこゑ勇ましく潮引する見ゆ
 新 年 同 齊 藤 富 美
 禮服の酔ひどれもくる松の内
 福壽草 同 西 田 清 子
 元旦をことほぎ祝ふものゝごとと早や咲きえめし福壽草かな
 日章旗 同 金 子 ナ セ
 うらゝかに朝日の光さしいで、軒にひらく日の丸の旗
 神 詣 同 朝 枝 都 喜 子

初詣する拍手のこだましてめでたく明るる東雲の空
 羽子の音 同 同
 乙女子の打らふる袖もかろやかに青空たかくひやく羽子の音
 初 詣 同 河 邊 綾 子
 我が心いとすが／＼しあら玉の年のはじめの神詣して
 元日の祈 同 同
 君が代の千代の榮をあら玉の年のはじめにわれ祈るなり
 衣籠ふ日 同 同
 ひたすらに衣籠ふ廊屋の西窓にうすら陽射せり雨やむらしも



年の暮 第二学年 重 藤 静 子
 呼び賣の鈴の音淋し暮の町
 雨の正月 同 松 浦 八 重
 弾き初の琴の音ゆかし雨の朝
 追 羽 子 同 福 長 恵 美 子
 追羽子や年詞の客にじやまをされ
 門 松 同 藤 田 ト シ 子
 かだまつを立てゝよろこぶ子供かな
 羽 子 板 同 内 田 安 子

枕邊に羽子板おいてねる見かな
 初 詣 同 田 中 ア サ 子
 御手洗水の氷もこぼるや初もうで
 嵐 同 小 田 和 子
 木の葉とぶ嵐の夜のさむさかな
 冬の朝 同 福 本 ツ ル 子
 寒空にからす鳴き行く冬の朝
 宮詣り 同 若 松 ヨ シ 子
 元朝や家内揃つて宮詣り
 秋の月 同 藤 道 谷 恵 夏
 常に見る松も興あり今日の月
 年 賀 狀 同 瀧 野 和 子
 ひろげ見て一人はゝえむ年賀狀
 初 日 同 津 森 静 代
 大御代をことほぎまつる初日かな
 初 日 同 田 中 浪 子
 母さんの眞似しておがむ初日かな
 かるた會 同 兒 玉 八 重 子
 かるた會少女たもとをひるがへし
 冬の朝 同 木 原 八 重 子
 下駄の音も淋しく響く冬の朝
 松の内 同 同

なんとたう心もうれし松の内

冬 第三學年

窓ガクス見つめて寒し今朝の霜

早苗取

五月雨かふるさん姿の早苗取

梅の花誘ふけふのあたゝかさ

さわがしき蛙のこゑや初夏の宵

山茶花

山茶花の淋しく散れる夕の庭

若葉

つゆあがり見わたす限り若葉なり

田植

五月雨や笠笠つけて早苗取

螢狩

浴衣着やうちわ片手に螢籠

田植

牛鳴くや田植忙しき五月雨

秋の夕

亡き友の面影しのぶ暮の鐘

螢

夏の宵はたるすい／＼飛ぶ川べ

山路

四方の山鯉鳴きしきる夏の晝

田圃道

ボチャ／＼と蛙飛込む田圃かな

海歸り色の黒きをきそひけり

春雨

春雨にもえ出し木々の若芽かな

正月

雨に明け雨に暮れたる松の内

山路を辿につゝ

蟬の聲聞きつゝ山を登りけり

冬

空浴えて寒さ身に沁む冬の月

遠の山白雪降り冬の朝

年の暮

さねの音聞えて暮はせまりけり

朝の海

初春や氷平線をとぶかもめ

雪の朝

雪の上一ひら落ちし紅椿

松尾悦子

大和泰子

山中松子

横山壽子

井町文子

植村千壽子

大谷和子

柏木喜美子

齊藤光子

水津サヨ

夏の濱 遠

夏の濱 方此方に日傘かな

夏の或日

夏の日やトマト輝く日でりかな

盛夏

じいじと畑なきしきる夏さかな

つばめ

夕映の空にとびかふつばめかな

赤椿

雪の日にはえてうるはし赤椿

秋の田

黄金の波間に立てる案山子

正月

晴着きて羽根つきかはすお正月

冬

せしらの雪も冷たし霜の朝

螢狩

川風の誘ふが儘に螢狩

霜草

朝日さす寒結床や霜草

寒梅

寒梅や所望にのこる枝もなし

永安淑子

同人

服部末代

平島京子

平野晴代

平野晴代

福島成子

藤田光子

三戸文子

宮野重

金子敦子

同人

同人

同人

同人

同人

同人

同人

同人

同人

梅の花

快よき朝のめざめや梅の花

寒月に匂ふ姿や梅の花

門飾

松竹に梅もえへるや門飾

冬の月

山茶花の夜目にも白し冬の月

朝の海

元且や雨に覆れる朝の海

門松

門松に降るや小雨の音たてゝ

枯葉

まいりて河面に浮かぶ枯葉かな

椿

しめりたる石塔の苔や落椿

東から年は明けけり朝の海

若水

若水におどる姿や今朝のゆき

小原種子

渡邊シズ子

末岡さかえ

西田清子

河邊綾子

岡崎玉枝

品川房子

品川房子

冷泉たつ子

冷泉たつ子

冷泉たつ子

冷泉たつ子

冷泉たつ子

冷泉たつ子

冷泉たつ子

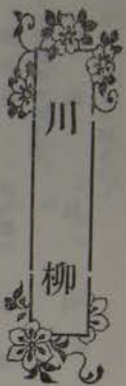
冷泉たつ子

冷泉たつ子

冷泉たつ子

冷泉たつ子

冷泉たつ子



第一學年 上野喜久子

からた取お手つきしては頭かき
妹はをかしい形で羽根をつき
元旦や雨降る中に国旗立ち
年の暮もちつく音で目がさめる
年賀状多くくるのを嬉しいが

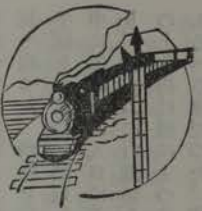
鼻眼鏡かけて喜ぶ子供かな
瘦せガール負けるなぶたがこゝにあり
松の内モダン娘も高島田
おやつ時忘れず歸る子供かな
卒業や急に娘になりすまし

杉山富子
大和泰子
厚東由子
小泉アイ
松浦ツネ子

藤村詩集より

潮音

わきてながるゝ
やほじほの
そこにいざよう
うみの琴
しらべもふかし
もゝかはの
よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば
うらゝかに
とほくきこゆる
はるのしほのね



修學旅行記

深川地方へ

第一學年 菊屋定子

今日、五月十七日はいよゝ待ちに待った修學旅行の日
であります。やつとのことで玉江驛について見ると大方來
て居られました。「汽車が来た」。の誰かの一言で私たちの
目はみんな燈煙の向ふにそゝがれた。大きい黒い魔物が
ずん／＼と近よつて來る様な気がした。「ゴー」といふ大
きい音とともに汽車は私達の前へ横づけになつた。我先に
と汽車へ乗込む。

やうやく窓側に席をきめて落着いた。萩の町も燈煙の後
に消て行く。よく實のつたのが朝日にかゞやいて金黄色に
なつた濃い緑の葉の間からてん／＼と見える。いつか山の
中を通り越して海岸に出てゐる。今日は相當波もあらぬ。海

邊の岩にのりあげては白い飛沫をあげる。汽車はそれ等の
景色を後にしてすん／＼進んで行く。誰かどひやうきんな
聲を出して「山藤が、山藤が」といふと其の隅の方で「ま
あきれいな」といふ聲がきこえた。硝子越しにあたりをな
がめると、なるほど山の中腹の所に薄紫色の花が春霞の様
に／＼かたまりになつてたれ下つてゐるのだ。よく見るとま
だ／＼其處にも此處にもたくさんある。

いよゝ三隅驛についた。あたりは一面廣い田である。
これから山莊へ向つて出發し大塚寺へ行つて戰國の音をし
のんで、そこでお辨當を食べるのである。今日の遠足も三
分の一はすんだ。空は晴れ渡つて遠足には最上の天氣であ
る。

秋芳洞探勝記

第二學年 厚東智恵子

五月二十一日は私の一生涯に残る印象であらう。此の日
は秋芳洞へ旅行したのであつた。實に豪壯な觀めであつ
た。さて、此の日はどんよりと曇つてゐて、今にも雨が降
つてこようと言ふ午前八時過ぎに、自動車で本校を出發し
たのであつた。此の時こそ我等の心が一勢に躍り出した時

だ。私は自動車の旅行は始めである。十六臺の自動車は皆一勢に春の空気を漂はせて、旅路を進るのであった。だん／＼行く中に明木の雲雀峠を越えた。所が折悪くも中の一臺が故障を起した。そこでみんなは、下車して暫く休息した。私は天気の悪かつたせいも、少し気分が悪くなつてゐたので喜んで下車し、大地を踏み占め天空を仰いだのである。其の時の心持は又何んとも言へぬ良い心地であつた。五分間休憩して又旅路に急いだ。それからは大分心持がよかつた。時々運轉手が歴史の話をして下さつたりして、漸く十時過ぎに秋芳洞へ着いた。みんなは喜んで下車し我先にと宿屋の二階へ上つた。さうして喜んでお辨當をひらいた。あちらに一組、こちらにも一組、誰もか楽しいらしくお菓子等を取りかはしていらつしやる。中央にお土産を賣る所も出来た。そこで私は羊羹を二包買つて今日のお土産にした。まだ喜びもさめぬ中にいよ／＼の目的地である秋芳洞へ向つた。持物を宿にあづけ靴下をぬいで藁草履を穿き手拭をかぶつて整列した。案内者を先にしてだん／＼行く中に遂に洞の入口に着いた。其處には一の淵と言ふ處があり、眞向ふに白瀧がものすごい音をたて、流れてゐる。其の上を掛け橋によつて渡るのだ。が餘りの物すごさに足がふるへる程だつた。其處を通り越すと左に空瀧があり。少

し行くとも長淵の渡しへさしかゝつた。其の邊から電燈があらちちらちらに二燈づつ點けてあつた。渡場には今上天皇がお召しになつた渡舟がそなへてあつた。みんなは我先にと渡舟に乗り向岸まで連れて行つてもらつた。今度は欄干だけ付けてある流のある川の中を渡るのだつた。それからは百枚皿、千町田等の珍らしいものばかりであつた。又南風岩、荳柄、傘づくし等の岩も見た。だん／＼行く中に岩屋觀音、蘇鐵岩、黄色柱、大佛岩、不動岩等もあり遂にこれからがおそろしい猿迂りを登つて黒谷へ行くのだつた。猿迂りの所へ来た時心がほつとした。さかしい崖に鐵のくさりがかけてあり、それを傳つて下り、黒谷を見に行つた。いよ／＼此處を最後の見物として、私はもとの道に戻つた。歸りは氣も足もなれてしまつたのか、どん／＼走つて戻り又もや物凄い白瀧の上を通つて、やつと明い世界へ導かれた。今まで闇の世界にあつた私達が此の光の國を見出した一瞬は、何んとも言へぬ嬉しく、太陽の有り難さを眞から味つた。かうして無事に何の故障もなく、見學をすませて、印象深き、且つ、思出多き秋芳洞を後に、一行は元氣よく歸途に就いた。

此の旅中最も私の腦裡に深く刻みこまれたことは、自然の力の偉大さと、太陽の有難さを眞から味はつたことであ

ある。

あの洞内の有様、見るもの聞くもの、實に感歎詞を發せずには居られなかつた。

空は不機嫌な天候であつたけれども、私達一同は、本當に愉快に、有効な旅行を終へた。

萩より岩國へ (第一日目)

第三學年 井 町 文 子

薄ら冷たい朝霧の中を、始めての一泊旅行に胸を躍らせながら、玉江驛へと歩を進めました。

嬉々として歩んで行く、私達の頬には折から曇りがちの空模様を柔じながらも、昨日の天気豫報を信じて、にこやかな微笑が、誰の顔にも、浮んで居りました。

陽の光は見られませんでしたが、結局は今日の様なお天気がいゝかも知れないと思つて、旅行の第一歩を踏みました。

正明市と厚狭で乗り換へましたが、本線だけあつて座席も、列車内も大變綺麗でした。

十二時前、三田尻に着きましたが、山陽の町だけに萩よりもずつと賑はしく、羨しい氣持がしました。

構内に下りた時には、中野先生がお迎へに来て居られました。

知らない土地に来て、假初の知人に會ふさへ嬉しいのに、しかも私達の恩師である中野先生にお會ひした時には、本當に懐しい感じがしました。それからは、先生の御案内で松崎神社に参拜しました。高くて澤山ある石段を登りつめた時には、皆が息をはづませて居ました。此處は、俗に天神様と云ひ、菅原道實公をお祀りした、日本で一番古い天神様だそうです。後には酒垂公園もあつて、廣い雅びな所でした。春風第二禮殿と云ふ、俗には千疊敷と云ふさうですが、高い見晴しのいゝ高殿があつて、そこに上ると三田尻の町全體は一眸の中に收められます。私達は此處で十分の休憩を貰ひ、各々町を歩いて来た人もあり、色々な物を買つて、荷物を増した人もありました。

その中、朝から氣遣つてゐた雨が降つて來ましたので、急いで集り、それから防府グランド、國分寺を見學して、毛利公御邸へ行きました。公御邸内の植込には、つゝじなど、澤山の木があつて、葉は青々と、雨に一層緑を増したかのやうに、いかにも五月らしい感じがしました。

長いそれ等の道を通つて、正面玄關に着いた時には、雨は大變ひどくなり、それこそ車輪をも流さんばかりの勢でした。公御邸に仕へて居られる老人の方に案内して貰つて、

家の内部は見る事に出来ませんでした。庭園を廻り、由緒ある書院、毛利公の先祖の祀つてあるお廟などを見せて頂きました。

多々良山の麓に、かうした一種厳肅な感じのする宏壯な邸に、私達の殿様は餘生を静かに送つて居られるのでせう。此の度は上京中でありましたので、お目にかゝることは出来ませんでした。公爵邸を辭し、ひどい雨の中を驛にと急ぎました。午後三時三分の汽車に乗つて、目的地岩國へと汽車は私達を運んで行きました。鹽田は硝子窓が雨脚の爲に曇つて見ることは出来ませんでした。

六時過ぎ、岩國へ着きました。私達菊組は錦帯橋の側の白鷺旅館に、梅組は海部旅館に、泊る事になりました。橋は見事ですが、寫眞で見たりも美しくはないやうでした。けれど雨上りの牙々とした山を脊になんとなく古典めいた感じを起させたのがこの錦帯橋でした。櫻の並木は、綺麗な街道に、爽やかな青葉の色を匂はせて居ました。

私達は橋を観賞することよりも、早く休みたいと思ふのが先でした。お風呂へ、みんなと騒いで入りましたが、他所に来て、疲れた體を湯ぶねの中に浸した時には、なんとも云へない氣持がしました。濃々と立つ白い霧を見て居ると、始めて、家の事を思ひ出して、今頃は弟達も、矢張り

前にして熱い味噌汁でお腹をつくる時、出發！と云ふ氣分が胸に腹にはては手に足にまでみなぎつて來るのです。それは雨の夕の錦帯橋に比べて。

岩國よ！錦帯橋よ！さやうなら！昨日の雨にたゞかれた泥靴もかろく、大きな土産も元氣よくひつかへてはしやぎながら宿を出た。此の橋は六萬石の大名吉川公が造られた物で構造が大變よく考へてあつて大水が出た場合には浮く様にしてあり、水中の石の部分には鉛がとかし込んであるとか、五六年前に二百五十年祭が行はれた等は噂への道の錦帯橋の上で某先生からうけたまはつたお話です。

午前八時二十三分岩國をはなれた私達一行は麻里布で再び汽車から吐き出されました。驛前の店に荷物をあづけて帝國人絹工場へと向ひました。かなり廣い麥畑の中に立つてゐる二本の煙突を目ざして。

本門は日曜なので閉ぢられてゐましたから裏門から入つて行きました。「まあ！」が皆の口から突發されました。工場、私達が心の中に畫いてゐた工場、それは大きい煙突の下に低い建物が這つてゐる、そして其の中の空氣は機械油のみで満たされてゐる。そこで働く人はよく見かける「あれは紡績工場で肺を病んで歸つたさうな」と云ふ様な人に近い人を想像して、その人達が監督の人の目を恐れて

お風呂だらうと懐しい心持がしました。

湯上りを涼しい窓邊に寄つて、髪を梳つて居ると、橋の上を蛇の目の傘をさして、人が通つて行くのが見えました。それは丁度繪の様でした。ぼと／＼と落ちる雨垂の音、如何にも五月雨の後の情緒とも云ひませうか、それからは三々伍々連れだつて、始めて錦帯橋をふみました。暗くなつて居ましたし、踏みなれない橋なので、ともすれば滑り勝てました。さうして遅くまで未知の町を歩き廻り、十時頃旅館へ歸りました。それからが又一騒ぎで、追々に友達も歸つていらつしやるし、床も敷いてありましたが、其の上を飛び歩いたり、べちや／＼しやべつたり、お土産を出して並べて見たり、葉書を書くやら、枕の取り合ひつこや、散々騒ぎましたが、何時しか隅の方から、順々にやすらかな寝顔が並んで來ました。

かうして、楽しい旅行の第一夜は、私達のかすかな寢息の中に過ぎて行きました。

岩國より萩驛着まで(第二日目)

第三學年 作 間 淑 子

日本晴の空と雨に洗はれた山とをバックにした錦帯橋を

背を丸くして働いてゐる……。此の様な工場を心の中に造つてのぞんだ工場の偉大だつた事よ美しかつた事よ、日曜とは云へあまりのんびりとしてゐるのではないか、廊下などですれちがつた女工さん達は大變快活で愉快さうでした。

事務所から舎監の先生に案内して戴いて寄宿舎を通りました。二階建が八棟、花園をはさんで立つてゐて、室は二十疊十二人とかで、きちんと整理してあつて見るからに感じの好い室でした。課樂室にはビンボン、輪投、オルガン等が女工さん達の爲にそなへてありました。食堂、刺寮室、プールの様な風呂場をそれ／＼見學しましたが、中でも面白く又變に感じたのは刺寮室の隣の室でした。誰かゞ讀みにくさうにモ、チ、ヤ、キ、バと面白い發音讀みましました。皆で餅やきば、餅やきばと顔見合せて笑ひながら我先にと頭をつゝ込んで見ました。工場内には社宅が大分並んあみが置かれてありました。工場内には社宅が大分並んでゐて、可愛らしい子供がお父さんらしい人と面白さうに遊んでゐるのも、のんびりとした工場の日曜を思はせました。屋上につつて町を一陣の中に收めて、後二階の會議堂で、木材のバルブより絹糸となるまでの有様や、工場内の様子等の活動寫眞を見せて戴きました。昨夜ねむられなかつたせいか、疊の上に乗つて暖かい茶がグーツと喉を通る

と急にねむくなりました。見學を終へて〇時二十六分の汽車に乗りこみました。

車中は往きの様にこんではゐませんでした。厚狭で乗りかへて「これから萩まで直行」と云ふ聲を聞くと皆の顔は急に輝き出して、車中が大變賑しくなりました。でも萩に近づいたが、汽車通學の人が一人二人と車中に見られなくなるにしたがつて「あれ程待つた旅行もすんでしまつた。つまらない」と云ふ様な気分も湧いて來ました。午後六時四十五分至江驛に着きました。これで私達は始めての宿泊旅行もすんだのです。此の旅行を何日前から空想を重ねて待つた事でせう。でもそれも無事にすんだ今では、車中で見た面白い人の話や、宿で起つた珍事をお話するの旅行をくりかへす様な愉快さを感じます。

京阪地方修學旅行記

萩より京都旅館着まで

第四學年 中 村 正 子

溢れる期待と憧れとに満された六月四日、地上の萬象を

慈愛の眼で抱擁する美しい太陽が、崇巒の中に白々と東雲を染める五時過頃、一家の者の愛に満ちた言葉を後にして私達は學校へ急いだ。

その日、少し灰色の重たげな雲が空を被つては居たけれども、私達の心は雲も何も吹き飛ばす位喜びに満ち元氣であつた。六時、一行は萩驛に向つた。

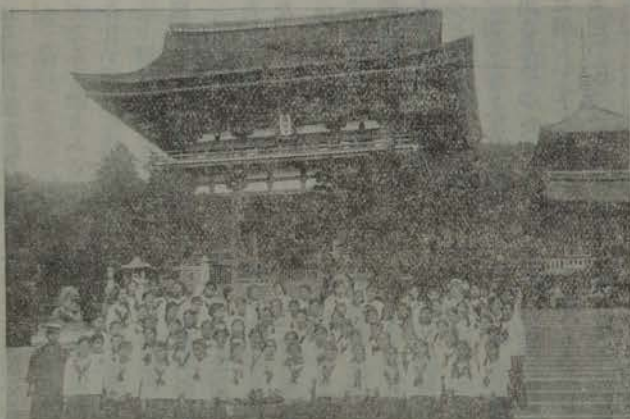
午前七時二分、溢れる喜び躍動する胸の私達を乗せて、汽車はわざわざ見送りに來て下さつた。先生方に送られて静かにプラウトホームをはなれた。僅か一週間の旅では有るが、指月の山々も一時別離せねばならないのかと思へば、一種の淋しさを感じられた。車中はいやに静寂だ。然し汽車が三見、正明市と進行を續けるに従つて、何處のグループからも喜々とした朗かな談笑が流れ始めた。やう／＼に窓外の景にもあきを覚え初めた頃、下關驛に汽車はストップした。構内を通つて關門連絡船乗場へ出て、それよりランチで門司港近くその身を碗泊させて居るうらる丸に乗船した。

此の船は大坂商船の大連航路の汽船、總噸數約七千噸と云ふのだから、汽船としては他をリードして、一二を競ふ位大きいものだつた。海の旅！何て印象深い言葉だらう。さうして私達の船

の生活は船室の——惨めな三等室——の中からはじまつた

とても綺麗に飾装されてあるだらう等、空想して來た私達には尙更あはれな光景の様に思はれた。馴れない臭い晝食をしたため、船が門司の港を出帆したのは午後一時であつた。その頃、朝の曇りがちな空も青く青く暗れて、圓い小さい船窓からうかゞはれる港街の空の上には、白雲が漂つて、白い光が燦々と降つて初夏の色が一杯だつた。

午後二時頃甲板で記念寫眞の撮影をすまし、亦船室に歸つて税關の係員の手荷物検査を受けた。からいふと如何にも仰々しい様だが、實は持物の表に検査済の紙をベタ／＼とはり付けてもらつただけ。——然しこんな所にとても汽車等で味はれないユーモアな感情が湧いた。私達は變に氣取つてベンを取るやら、甲板を二人、三人潮風に快よくひたりながら散歩したり、思ふ



海上旅行の價値を味つた。

夕食を五時頃すまして、潮からい湯が一杯な風呂に一日疲れを捨て、すつきりとした氣持で亦甲板に出て見た。向ふの方で兵隊さん達の輪投げに興じて居るのが見える。——滿洲で尊い命を、祖國日本の爲に哀れにも華やかに散つた亡き人々の御靈を守りつゝ、遺骨を持つて歸つて來た人達——私達は感動させられてしまつて、直ぐ遺骨の安置された室に行き御靈に眞心から禮拜した。感謝の心は自然にもえて、涙が頬を傳つた。亦元のデツキに歸つて兵隊さんの遊びを眺める。上氣した頬に昏黄の海風はとてもしつかつた。

そして今、一日の慈愛の光を西の海一面に眞赤に放つて、日輪は巖かにも淋しく落人の如く沈んで行く。あゝ！神秘的な海の時、暮色が次第と薄れてと墨色に變り、世は一變に闇の存在に

なつた。地上に静坐する總てが、呑海を走る船にさへ濃い夜の影が生じて来た。海の夕暮は餘りにも早く夜になつた。

夜の九時、船室は娯樂の園。——園だなんて餘りふさはしくない名だけれども——然しみんな今甘い映畫に彷彿として居る。毎日々々果しない海の上を走り続ける船で生活する人々には時々かうした楽しい、集團をする事は、その氣分をくつろがすに必要な事だ。

映畫が終ると漸々就床の時刻になつた。今まで靜かだつた所が、騒がしいものになつてしまつた。——枕々、モーフがない、色々と呼ばれる聲の爲に——でもやつと十一時頃いざこざも止んで堅い枕に夢を求めようと皆なはし初めた。が、其處には朝からの疲勞した身體を休息させるのは餘りに場所が狭まぐるしく、餘りにもエンヂンの響きは近くにあつて耳ざはりだつた。で、そつと床を放れて靜かさに浸りたいと思つて甲板に出て見た。折り悪く今夜は闇夜で甲板にはあの月の光を宿す影は見出さなかつたけれど、も北斗七星が恰も眠れる深海の上に淋しい光を投げて居るのを見ては、何だかホームシックも起つて來はしまいか、實際に淋しい涙が冷にと傳はるのを覺えた。此處にも亦自然は神祕の宮殿を作つて居た。次々に來る燈臺の灯、

行違ふ商船の黒い影、かすかに瞬く陸地の燈火、ローマンスめいた青白い魚火、すべてはつきりと印象づけられた。圓い船窓からやがて明方の光が白々とさして、東の方から黎明の光が空に海に廣がつて明瞭に島と海と地平線が目に見え、これ等すべてが夜の一時から開放されて來る頃、私達は修學旅行分けても船の第一夜を送り、上陸第一歩を迎へた。落ちついた海、朝のすべての清らかさ！何と云ふ明るい、爽快な海、海の曙は新鮮でおだやかだ。

最後の朝飯を終つて私達は漸々上陸の支度をし、再び名残つきない甲板の散歩をした。淡路島通ふ千島の歌の淡路島が朝露の中に乳色にほの見える、潮風をはらむ幾多の白帆が島がくれて居る好い眺だ。口吟さむ音聲の中にも、快よい風がリズムを作つて流れた。そして別れなければ——思出の船と——ならない時が迫つて來る。

漸々上陸。少年團の奏する悲壯なラッパの音が港街の朝の落ついた空気を響きやぶつて行く、午前七時、神戸上陸の第一歩をふみしめた。アスファルトの舗道に、街路樹の緑の影がちら／＼揺れて、コック／＼と踏んで行く靴のひびきにも新しいなと思はれた。異國的な港街神戸神戸は、新ニホンの表象だ、新

鮮なせいれんされた都會情景が、ころがつて居た。其の昔源平二氏、或は楠公奮戦の血と魂の、流れ染み込んだ地とは——時代は地球上の何處をも一日々々と變動させて來た。

先づ神戸で第一が湊川神社へ。社殿に頼づいて靜かに冥目して楠公奮戦當時を辿るには周圍は餘りにも繁華でかしましかつた様に思はれた。

それから直ぐ大倉公園へ向ふ。神戸全體が目前に展開して遠く港の様もうかゞはれた。その頃はみんなはかなりの暑氣と疲れに身を取られてしまつた様だつた。大倉公園を後にして直ぐ神戸驛に向ひ、憧れの都、京の地へと赴いた。

ブラットホームに流れ出た時、おゝ今立てる地こそはるかな日から如何に憧れて居たか知れない京の地である。一行は懐しい衝動にかられて建てる京の街を見て居ると直ぐ荷物を驛で宿の者に托して身輕になり、憧れの地の在りし昔の文化を辿るべく見學の一步をスタートした。

先づ見學の主眼目たる桃山御陵へ。電車に身を委ね、桃山で車を捨て、道の兩側に茂れる濃い緑の立木の間、落葉一片さへ尋ねる事の不可能な清い白砂の道をサク／＼と歩んだ。心も清く。

やがて御陵前に到る。溢れる水に口をすゞぎ、身を清めて玉垣の前に整列する。誠心込めて拜する時、其の神々しさ、感涙に咽ぶ。明治大帝の御聖徳、松の緑の滴りにもいや高くしのび奉る。此處より直ちに歩を東の陵へ。此處でも昭憲皇太后の御坤徳を仰ぎ崇高な感に打たれる。

古刹の多い都、雅な京の通りを三十三間堂へ。六十六間の堂の長きに二間毎に柱を置き三十三に分けられて其の名稱ある古びた藝術の面影、暗い堂内に法の燈が目はじきし、一千一體の千手觀音は、崇高、尊嚴、慈悲、圓滿の氣に満たされた中に、あわたゞしい世を、俗界を超越した感がある。

一代の偉人英雄乃木將軍のいます乃木神社へ。長府本宅を模した所の家は實に粗末なあばら屋であつた、英雄はこんな家でしかも強い堅い人物に築かれたのだ。

次は豊國神社大鐘。豊臣氏の繁華もつかの間、此の大梵鐘に小さく刻まれた、「國家安康」の四字こそ計らずも滅亡の因を成さうとは？其の響には今も三百年前の哀しい恨を秘めて息づいて居るかの様に思はれた。

京の清水寺は餘りに有名な物の一つで有る。高い懸崖に高く架せられ緑を競ふ紅葉、緑の山を、バツク

に此處は青雲の上か、緑木の頂か。音羽の瀑、京都五名水の一。どんなに莊嚴と美しさを想つて居たか知れない瀑だつたのに、その空想はめちや／＼に破られて、其の姿には幻滅の悲哀、一つのユーモアに終つてしまふ。

次は左甚五郎の「忘れ傘」「鶯張り」で有名な知恩院。インクライン。

文明の力は偉大だ、水たき所で舟を走らす——人も居ない鐵路の上を舟が行く——文明の力で無くて何だらう。

次は京都第一日目の見學箇所最後の平安神宮へ。もう此の頃は極度の疲労と旅愁に錯亂して、皆は實はもう身も投げ出してしまひたい様な状態だつた。然し塵一つ無い境内色彩の配合美しい廣莊な殿堂に頭を下げては、一種の莊嚴な感に打たれた。——花ふりかざして都大路を大宮人の行き交ふ昔を、私達は今どんな心持で歩みつゝ想ひを走せたか。

漸く宿に歸つて入浴、夕食をすませると疲れも何處にか、不思議な位元氣が蘇つた。それから各自は三々五々連れ立つて思ひ／＼夜の京をさまよつたのだ。

春の風の様に柔らかに流れる京都言葉に耳にすると、あの東山に月がする／＼登る霞む春の夜、或は夏の夕、のぼる月を拜んで居るだらりの帯の姿が想はれる。

なると又牧場の小羊のやうに宿に集らねばならない。晝より考へてよくもあれほど元氣が出たとびつくりする程だつた。床に就くとやつぱり心は、萩に歸る。橙畑が目につる。指月山が頭に浮ぶ。併し日頃の寝坊はやつぱり止まな。人が騒いでゐるうちに寝入り、朝も一等びりだつたが昨日の疲れを恢復したのも一番多かつたやうだ。今日はいよ／＼この親しくなつた京郷ともお別れかと思ふと時間の経つのが惜しかつた。今日の第一歩はお西さんだ。何だか今日はお寺ばかり廻つてゐるやうな氣がする。今我々は寫眞でよく見る本願寺に来てゐるのだと思ふとをかしい。文永九年宗祖親鸞の寂後其の委女覺信尼東山大谷の祖廟の側に伽藍を起し、親鸞の眞影を安置したのが本寺の起源である。爾來屢々宗難を蒙り或は京都山科に或は大阪石山に或は紀州鸞の森、泉州貝塚、大阪天満等に轉じたが天正九年豊臣秀吉の盡力によつて現在の寺地を定め、堂塔伽藍を完備し、本山の基礎を確立するに到り、全國門徒崇敬の中心として連綿宗祖以來の法派を傳へて今に及んでゐる。現在宗勢は所轄の別院三十五、末寺約一萬、門徒約七百萬人を數へる。又大師堂の後方にある一帯の建物即ち日暮門、大玄關、大廣間、白書院、黒書院、能舞臺、飛雲閣等は凡て桃山時代の遺物として最も著名のものである。又其の間毎

然し私達は其の様な情景に接する事は出来なかつたけれど、近代文明の様々を取入れた京の街には、何處か明るく、優美な、そして進み行く理智な人を見出す事が出来た。今夜は此の京の町でどんな歩路をさまよふことやら！

京都宿着より二見驛着まで

第四學年 岩本フミヨ

流石に京都は藝術の都學問の都市だつた。宿に着いたのは既に六時だつたが晝の疲れもすつかり忘れてしまひ、八時頃には宿を後にして皆京極祇園へと足を運んでゐた。圓山公園一帶の暗がりには春に相應しい長袖があちらにもこちらにも漂つてゐた。四條大宮に來た頃か運轉手が面白い京辯で自動車のやうな電車を教へてくれた。この無軌道電車は本年四月より京都に始めて出来たもので、トロリーバスといふ。今尙四條大宮より西院間約一軒の間試験中である。何所へ行つても赤い灯青い灯は少ない。唯黄色い灯がさびしさうに照してゐた。如何にも落着いてゐるが、しかし現代味に缺けてゐるやうだつた。祇園では幾群もの舞子に會つた。京極を除いては寺院と學校がその大部を占めてゐる。隨つて町を歩いてゐるのも大抵學生さんだ。十時に

に書いてある晝は桃山時代の氣風をそのままに物語つてゐた。これより我々の待ちこがれてゐた自動車である。此所よりいつきに北野神社に向ふ。上京區柴野のさびしい所にあつてそのあらゆるものに梅の模様があつた。祭神はいふまでもなく菅公である。だん／＼時間が経過するに隨つて名殘惜しい氣分は増して來る。義滿の奢侈を物語る金閣も三層に名蹟を留めてゐるのみであつた。義滿の當時は上層は上下悉く四方金箔を以て塗られてゐたもので、金閣の名はこれから起つたのである。その前の湖は今も尙古のまゝに其の姿をうつしてゐる。この次に自動車を走らせたのが御所である。東西二百五十米南北四百米といふ安大な地域である。この清められた白沙を始めて踏んだ時は舊都の感がした。筋壁を以つて四方を圍み、南に建禮門、北に朝平門、西に宜秋門、東に建春門を開く。宮殿の配置は大體舊平安京大内裏の古制を參酌して造りなされたもので、正殿たる紫宸殿を初め、清凉殿、宜陽殿、常御殿、小御所其他の諸宮殿が建て列ねられてゐる。現在の御所のある地は、舊平安京大内裏が荒廢した後に出來た東洞防土御門内裏といふ里内裏の跡で、南北朝の初め頃から北朝の天子の皇居となり、南北統一御天皇常住の御所になつて明治維新に及んだものである。鎌倉室町時代には時に修理造營の事もあ

つたが、應仁の大亂以後皇居は全く廢頓に任せ、畏れ多くも式微の極にあらせたが、永祿年中織田信長これを修理し奉り、豊臣秀吉更に造營して漸くその面目を一新した。後數度の火災に炎上して、現在のものは安政二年孝明天皇の御時の造營である。制式は凡て寛政年度の御造營の規模に則つたもので、明治二十二年皇室典範を定めらるゝに當り、即位禮及大嘗祭は必ずこの皇居に於て行はせたまふことを欽定せられた。此所でもう自動車は捨て、しまひ比叡山に向ふ。麓にてケーブルカーに乗る。上るにつれて京都がだん／＼麓に見えて来る。八分目位で車は止まつてしまつた。仕方がない、テクシーである。上りきるとこれは又何といふ雄大さだらう。京都は右に、左に向けば大津はその直下に聚り、又琵琶の湖はそれより遙か彼方に展開して果ては霞の中に消えてゐる。その上に船は蟻のやうに散在してゐた。この眺に吸込まれてぼんやりしてゐる時一羣の雲がさつと麓をとりまき、平安神宮の赤い鳥居もだん／＼その姿を消してしまひ、唯立つてゐる頂だけが雲の中に浮んでゐるやうだつた。此所で我々はいよ／＼藝術に生きる京都との別れを惜んで延暦寺に向ふ。この寺は平安朝の良の方位に當り、王城の鎮護として延暦年間僧最澄の開創したものである。寺の盛時には寺域六里四方に亘り、一山三

千餘の僧坊を有し、宗教界は勿論世俗的にも非常な大勢力を有して時には僧衆は兵器を携へ、闘争を事とし、後白河法皇をして喞然として「山法師」の嘆聲を發せしめたのはこの事である。これより坂本日吉神社の前に出る。僧徒はよく當社の神輿を擔ぎ出して朝庭に強訴した。琵琶湖を左に見ながら石山、草津をすぎ二見に向ふ。近づくにつれてほつ／＼雨になつた。雨に煙つた見なれない地面が走馬燈のやうに展開して行く。六時頃やつとこの二見に着いた。果して二見は如何なる所だらうか。まだ見ぬ二見！如何なるものが待つてゐるだらう？

二見着より奈良旅館まで

第四學年 三 島 房 子

二見——の一疊に私達は下車した。もう電燈も點いて邊りは薄暗くなつてゐた。一行は足も軽く海邊を辿つて二見館に着く。

浴場は他の女學生の方で満員だつたので入られませんでした。楽しい夕飯に舌鼓を打つて、九時頃迄外出を許されたのです。海邊に立てば汀にさゞめく波の静けさ、新鮮な空氣に元氣も恢復する。

此の日はどの旅館も旅行團で一ぱいで賑やかな笑ひの聲が満ち／＼てゐました。點呼をすまして夢路を辿る。

七日、四時半に起床して朝の食事を戴き、各自日の出を拜むべく参拜するのです。曇り勝ちなお天氣で残念ながら拜むことが出来ませんでした。

二見浦海岸をのぞめば實に爽快の感に打たれます。しかし海岸の全部が人工的になつて、萩の菊ヶ濱の如き綺麗な眞砂はなく大きな石ころです。自然の美が缺けてゐるやうに思はれます。長い海岸を辿つて行くと天の岩屋があります。温つぽく小さな奥深い岩屋は何となく神祕な感を起させます。此處には二見興玉神社があります。

目的の夫婦岩は案外に岸邊近くにありましたので騒かされました。兩岩には注連繩が張られてゐます。

七時半に旅館を出發して参宮電車に乗る。宇治にある内宮を参拜する。先づ宇治橋を渡り綺麗な五十鈴川がある。この川は一に御裳濯川ともいふ。宮城を流れる清流で水源が二つある。一は伊勢志摩國境の逢阪山から發するものと、内宮の西方の神路山から發するものとがある。内宮神域を貫流して兩河相合して、宇治橋下を過ぎて、再び二派に分れて伊勢灣に注ぐのです。この清い水で手を洗ひ口を嗽いで、一步、一步と砂利を踏んで清淨な道を辿る。

幾百年の老杉は森々として御殿を蔽ふ。

皇大神宮は天照大神を祀る。我が皇室の宗廟として國民尊崇の中心たるは申すまでもありません。

私共は今この前に額づいて永久に我が日の本の國が榮え皇室の御隆盛を祈らずには居られませんでした。一同整列して襟懷を正しくして最敬禮をしました時には、何とも云ひ知れぬ神々しい感に打たれたのであります。かの西行法師が

何事の在しますかは知らねども

かたじけなきに涙こぼるゝ

と詠んだのもよく理解することが出来ます。これより山田にある外宮に参拜する。構造も殆ど内宮と同じで白木にて建築されてゐる。樹木の保護といふことがよく行き届いてゐる。根本から二米の所まで、竹の割つたので周圍を圍つてあるのです。

内宮前にて記念寫眞を撮る。

これより叡古館に行く。正門の兩側には蘇鐵が嚴めしく、高倉山公園内に在る。公園は鬱鬱が圓く刈つてある。芝生の上は塵もなく掃き淨められてゐる。

伊勢神宮に由緒ある寶物を始め、各時代の服裝、貴族女子の服裝、器具、文書、繪畫を陳列した所で、中でも明治天

皇の御使用になつた束帯、乗馬服に到るまで又貴寶室には故有栖宮威仁親王の像と、故有栖宮熾仁親王の二個の像が會見の型にて石膏にて彫刻されてある。見學を終へて電車に身を託し山田驛に着く。

發車迄にまだ二、三時間程時間がありますので、各自旅館のお辨當を戴きました。やがて一時十二分、山田驛發にて、我々は、床しき神都の町に一瞥を與へて名残り惜しくも車は容赦なく軋るのみです。

奈良——美術の都、みやびやかな町。四時五十分、奈良驛着、今宵の宿は猿澤池畔の松島館です。

奈良より萩歸着まで

第四學年 前 田 禮 子

六月七日午後四時五十分、奈良に着く。黒ずんだ猿澤の水にボツリ／＼雨が落ちてゐる。おつとりして落付いた古帝都奈良に相應しい雨だ。

八日 昨夜に引かへすが／＼しい初夏の朝日が、興福寺の五重の塔が照らしてゐる。

「新婚旅行の時にはどうぞエヘ……」

「アラ よういはんわ」 親しみ易い宿の女中さんと、

姿はどんなに優雅なものであつたらうなど考へながら行く。愛らしくお辭儀をしながらついて来る鹿もだん／＼数を増してくる。お煎餅をやりながらキャツ／＼騒いで行く人もある。

馴れたり知らで驚く旅人の

たもとにすがる春日野の鹿

と古人の詠れだ歌をおちいさんがきかしてくる。この鳥居をくゞつて、長く続く石燈籠の道を行つて、木の間に洩れる日光のかすかな林に入る。

「そも／＼こゝらあたりに植えてございやす木は、なぎの木と申しまして今では神木となつてをります。六月に花を聞き、十月に實を結ぶので、實はしぼつて春日神社の燈籠の油とするのでございやす。それから名高いあの石燈籠の数は全部で千七百八十九、金燈籠は九百九十でございやす云々」

いよ／＼本殿へ行く。降りそゞぐ日光に照り光る新緑の間から見える。所謂丹塗の春日造りの社殿は典雅の極みである。心こめて社殿の前に額づく。

九條家より獻納せられたといふ燈籠、國寶となつてゐる蟬の燈籠、左甚五郎作で特別保護建造物になつてゐる斜の廊下等見て、次に七種寄生木を見る。柞、椿、南天、楓、

そんな戯談を言ひながら別れを告げて。

午前七時三十分 いよ／＼この歴史の都、古藝術の都、静寂の都奈良の昔日の佛を尋ねるべく、その第一歩を猿澤池畔にとゞめる。どす黒く濁つた水面に朝日が光つて、時々龜が頭をのぞかせたり、す／＼と泳いで行つたりしてゐた。

「これがその有名な衣掛の柳でございやしてエー」と昔この柳に衣を掛けて、この池に身を投げたといふ采女の物語をしてくれてゐる案内のおちいさんの聲にも、どこか奈良らしいさびを感じる。今は植え變へられたといふその柳を見、采女を祀つた社を地の西北に見て、次に「十三鐘」「三作石子詰舊跡」を訪ふ。幼い三作が一匹の鹿を殺した報として、こゝに石詰にされたのだといふ。三作に對する憐みの情に心を打たれると共に、いかに神鹿とはいへ、人間の命と獸の命を一緒にしたその頃の人の心持がわからなくなる。こゝらあたりから可愛い鹿が三々五々群れてゐるのを見出す。

これより春日神社に向ふ大きい道に出る。このあたりは昔春日野と言はれた所ださうで、今でも平和な長閑な空氣が溢れてゐる。白妙の衣をふりはへて若草日野を散策した奈良朝の大宮人、詩歌美術をこよなく愛したその頃の人の

櫻、藤、陸英が一所に寄生した珍らしい老木である。

伊勢大輔のいつた古の奈良の都の八重櫻は、今は師範學校の前にあるさうで趾だけを見てすぎる。

水谷神社を通つて嫩草山へ、淺緑のなだらかな如何にも平和さうな山、遠い昔唐にあつてこの山の月を慕つた古人も思ひ出される。鹿と共に記念撮影する。

何となくなつかしみのあるこの山に名残を惜しみつつ、手向山八幡宮へ参拜する。祭神は應仁天皇、仲哀天皇、神宮皇后であつて、お宮の後は手向山である。管公の腰掛岩を教へてもらつて行きすぎる。

春を表徴する三月堂、二月堂、元は東大寺の寺域内に含まれてゐる建物で、二月堂の境内の老いた良辨杉の由来などきき、新緑の下をくゞつて大鐘樓へ行く。天平の創造と言はれる大きい鐘、ゴーンとこの鐘樓からつき出される鐘の音が、莊嚴な神祕な響をもつてゆるがしていつたその頃の奈良の朝夕は平和の限りであつたらう。

それより名高い大佛殿へ。咲く花の匂ふが如き天平の文化を誇る一大記念塔たる東大寺の金堂である。

東洋一といはれるその大木造建築物の中に、崇高な慈悲深い圓滿なみ佛を仰いだ時、一千年の昔、この大藝術を生んだ非凡の大藝術家の、強い熱い信仰の力を思はずには居

れなかつた。

大伽藍は静まりかへつてゐる。

東大寺と別れを告げるべき南大門、左右の運慶、堪慶作の密迹、那羅延の二王像は、とこしへに藝術の春を誇りげである。

興福寺、藤原氏の菩提寺で華嚴宗である。之も又古藝術とほこりやかに立つ五層の塔に奈良最後の見學を終へ、小走りに驛に向ふ。

午前十一時五十分、別れの一瞥を與へる暇もなく發車す。憧れの都奈良はもはや思ひ出の奈良となつた。名残惜しかつた嫩草山の面影や、春日の森など限らない追憶にひたりながらはしる。其角が「菜の花の中に城あり」といつた郡山をすぎ、まだ奈良の夢のさめきらぬ。午後一時十九分、列車は天王寺驛にすべりこんだ。人！人！車！それ等が大音響と共に渦巻いてゐる大修羅場。第一步をふみしめた大阪の大地は、落付きのない喧噪にみだされて私達の目に映つた。周圍のすべてに驚異を感じながら天王寺公園へ行く。可愛い小鳥や珍しい獸に楽しみながら此處で暫く休憩する。

電車で大阪城へ、大阪城は天正年間秀吉が關西の諸大名に命じて、築かせたもので城廓堅牢、規模宏大、壯麗なる

文明の華でもあり文明の毒でもある享樂の渦中、然しその更ける事を知らぬ華やかな夜景は、私達に驚異と讚歎を與へると同時に、大きい疲労を與へてくれ、私達には親しめない所なのだ。割合に早く宿に歸つた私達は五六人のお友達と共に、この大阪の一夜を記念する爲に面白い思ひ出話に夢中になつてゐたが、知らず／＼の中に眠つてゐたのは十二時でもあつたらうか。

九日。室の硝子戸から入つて来る曉の光の、限らない親しみを覺えさせるのも旅の身であるからだらう。然しそこには波の音も鳥の聲もきかれないその意味に於て、實に殺風景な朝が訪れてゐる。さうして明るい正しい太陽の光に看破された町の有様は、昨夜のあの華やかな灯の殘骸だと言ひたい。

午前七時三十分出發、先づ電車で大阪中央市場へ。大阪中央卸賣市場は、大阪全市に日常食料品を供給する唯一の卸賣市場として、大阪市が設けたもので面積は東洋一ださうだ。御説明によつて鮮魚部から入る。生くさいけれど整頓のよく出来てゐる事と、その規模の宏大なのに驚く。コンクリートの上を歩きながらツルリとすべつてころんで愛嬌をふりまく方もある。青果部、漬物部、肉類部、鹽干魚部、乾物部鳥卵部等見學する。本館で暫く休息させ

點に於て天下無双であつた。後大阪落城の時から一時頽廢したが又徳川氏によつて再興せられ。現在の天主閣は昨年の秋工事が完成したもので、城趾内には第四師團の兵營がある。先づ驚くのは堀の石垣、普通の人の背丈の五六倍もありさうな石が積重ねてある。人智の發達した今の世ならまだしも、あの昔にと思へば大秀吉の面目もはかり知られる。天主閣に上る。幾つもの階段を上つて行く中に、私達は明らかに豫想を裏切られてゐた。内部はすべて現代式の建方で、昔の面影などかすかにも見出せない。何だか惜しい様な失望に似た感じだつた。頂上によると大阪市が一目に展望される。然し晴天と言はれる今日も、空は灰色にくすんで餘り遠くまで見る事は出来ない。

「あそこが三越で、あちらが市廳でせう」と説明して下さるのを聞いて、それらしい物を見出しては喜んだりした。大阪城の見學をすませ再び電車で道頓堀の宿に着く。宿に着くと張りつめてゐた氣もゆるみ疲れも出て来る。けれどもお風呂に入り夕食をとつて少し疲れを忘れると、今度は美しく變つた夜の蓉に引かれて、四人五人と連れだつて宿を出て行く。

あらゆる光線と音響の交錯、灯、灯、灯、晝の大阪が塵埃と喧噪の海なら、夜の大阪は灯の波だ。さうしてそこは

て載いて今度は大阪毎日新聞社へ。最初ヴァルコニーに案内されて四方を展望し、後記念撮影して頂く。會議室でお茶を御馳走になつてゐるともう寫眞が出来上つて私達を驚かせる。時刻なのでこゝでお晝御飯をすませ、社の方から詳しい御説明を承り、いよ／＼社内を見學する。

電送寫眞室、電送寫眞といふのは、遠い所から新聞の記事を電報で送る様に、電氣の作用で寫眞を送る装置、飛行機で東京大阪間を一時間半かゝるものを、之によれば僅か三分で届くといふ便利なもの。

活字場。廣い活字場に點々と多くの職工が働いてゐる。活字を捨てゆく彼等の手は敏速そのものだ。熟練といふもの、偉大さを強く感じる。

印刷場。此處に活躍してゐるものは輪轉機だ。眞白な用紙がする／＼と吸ひこまれて行く。瞬く間に幾つかの機械をくゞつて出て来るその時には、もはや記事は印刷されてしかも四ツ折になつてゐる。それが續々と引き出されて忽ち山と積まれる。こゝではしみ／＼機械の力の偉大さを感じる。又此處に備付けられてゐるものは、世界高速度輪轉機十一臺、高速度輪轉機十二臺である。尙英文活版場にはインキタイプ機が八臺備へられてゐる。めまぐるしい機械に壓迫され通して、外に出た時は思はずほつとした。

又費すきの日差にしては餘りにうす暗いもの足りなさを感
じた。それより造幣局へ。こゝは今日は仕事を休んでゐる
さうで安大な建物の中はひっそりしてゐた。溶解場、極印
場、彫刻場、こゝの壓印機は能力一分間に百十枚だそう
だ。製作場、試験場、精煉場等、大きい機械には白い覆ひ
がしてあり、二三人の職工が掃除をしてゐるのみで局内は
實に寂莫としてゐた。こゝを出て徒歩で三越へ。

六時前まで約三時間自由行動が許されて、皆思ひ思ひに
散つて行く。面白いので何處もエスカレーターに乗つたり
して買物をしてゐる。兄弟やお友達へのお土産がすつかり
整へられると、荷物は大きくふくらんでたつた二本の手で
は持ちきれない。並ぶ魔天樓にたそがれの色がこめる頃、
一同は阪急百貨店の食堂で夕食をしたゝめてゐた。うす黒
いコンクリートの屋根に日が落ちて、又赤い灯、青い灯の
夜が訪れる。これで大阪とも、一週間のお馴染みの關西とも
お別れかと思ふと、やつぱり淋しい。赤い灯、青い灯も何
だか淋しく目にうつる。九時前一同は大阪驛に着く。
九日午後九時二十分 嬉しいやら悲しいやらわからない
氣持で汽車は走り出す。

「さやうなら」京都よ、奈良よ、そして大阪よ！
神戸をすぎて汽車は闇の中を走り続ける。

「氣を付けてね、先生に御迷惑をかける様な事があつて
はいけませんよ。行つておかへり。」と送つて下さつたお
母さんも、
「姉ちゃん、お土産を忘れると承知せんど。」と強さう
に言つて、それでも何だか淋しさうな顔をしてゐた弟も、
みんな／＼私を待つてくれてゐる。
懐しい秋は近い。
お城山も見えて来た様だ。



十日 車中にて朝食をすませ、
午前六時九分宮島着、連絡船で嚴島へ、朝の潮風は何だ
か懐しく萩を思ひ出させ、瀬戸内海の朝を思ひ出させた。
海中に浮んでゐるあの大鳥居を見ながら、朱の廻廊を傳
つて行く。廻廊が盡きて私達は砂の上に下り、ここで大鳥
居を背景に記念の撮影をする。
それより紅葉谷公園へ、朝のすがすがしい空氣の中に、
緑したゝる楓樹の清水に影をやどしてゐる様は、實に清楚
閑雅の限りである。

千疊閣、飛彈工匠の作と傳へられる五重の塔などを見て
歸途につく。「安藝の宮島廻れば七里、浦は七浦七惠比
須」とか書いたハンカチを買つたりする。ランチにはこぼ
れて、

午前八時九分、再び車中の人となり一路西に向ふ。「麻
里布」といふ聲を聞くともう歸つたといふ感じがした。
厚狭で乗換へるとあゝもうすぐ萩だと思はれて、何とも
いへない嬉しさがこみあげてくる。

「體を大事にしてな、怪我をせんように、それぢや行つ
て来なされ。」と言つて下さつたおばあさんも、

「それぢや行くのか、行つておいで。」と言はれたお父
さんも、

汽車の感覺

ギ、ゴト、ギ、ギ、ギ 聲音のなかに不安な連鎖の
軋る音。
留まる、身體が痺れる。
驟についたらしい。
眠い聲。大船、々々、サンドウツチ……………
蛙の聲。
汽笛。プーウ、ウ、ウ……………
ギ、ゴト、ギ、ギ……………
ガアガア……。平たい音の連続、トツクン、トツ
クン、タツタラトン、ジイジイ、ゴウゴウ、戸の
軋む音、カタカタ、キツクキツク。
燈が二列に見える。
ドツクン、ドツクン、ガアガア、ヂャオオ……………
ジヨウオオ、ヂャオオ、タツタラトン。
ヂャオオオ……………。車輪が軋るはせる。
(白秋小品より)



由縁の園

隨感

昭和七年卒業

萩市濱崎町 齊藤ふみ子

二度と来ない花うばらの道、そして幾多の懐しい過去の思出をふんわりと包んで學校におさらばをする時の自分の氣持ちは？……そして今一歩進めて考へて見よう……そこに幻影する者は何か？。社會！社會！過去の學生氣分からきつぱりと離れて、新らしく社會に立たなければならぬ自分達……かくして社會に目覺めようとする努力と、戦ふべく完備しつゝある己を……見出すのだつた。近代社會の教養はデリケートな神經微妙な感情と、そして餘りにも多くの心臓を待つ事を強要してゐるのではないだらうか

大自然！人生！自然と人生は常に離れざる密接的なそして事實的な結合を語つてゐる物である……。

すべて自然が興へたものはみんな高尚な意味がある。最も適當にこれを使ふところは貴い人生の意味がある。極端な享樂主義も、極端な禁慾主義も、共に一般社會の教へには適當しない。總ての心理と道徳とは中庸の中に發見される。然らばどうして中庸を得るかと云ふ事が人間の世界の中で一番むづかしい事と思ふ。若い時にはこの中庸を得ると云ふ事が一番むづかしい。むしろ少々極端に走る位で大部分の若人の道だとも云へる。然し人間に最後の目標は中庸の徳だと云ふ事を忘れては駄目だ！

詩がおこり、美術が生れ、文學が生じ、乃至崇高な宗教が發生して來たのも人間に精神的努力精進の結果として變つて來たのだ。だから此等を無理に否定しないで、如何にして之れをより高尚なものに作り變へるかと云ふ努力をしなければならぬ。——それと同時に社會自身も文明の進歩と共に變らなければならぬ。——時代の進歩と共にもつと人間生の自然に適した無理のない社會が組織されて來るだらう——と何か自分暗示的な言葉でささやいてゐる様だ。眞の社會に接しない。そして目覺めない自分に。そし

？。かうした社會に生きて行くのが人生の使命なのか？。大自然にはぐままれて行き、そして終に社會に裁かれるのだ。こゝでは初めて人生そのものゝ價値が……。或る人は社會に對する價値が有り得るが然し營業に對しては有り得ない人間もある。亦それに對して逆の道を行ふ人もある。然して學ぶ時……、そして社會に立つた時……、その時々對して本當の價値を有するものが初めて人生の本當の幸福を見出す人なのだ。故に社會に立たんとしてゐる人間は、最初に、そして第一に「社會そのものを本當に知る」と云ふ事が社會に對する人生學の根本精神であり、又幸福を求めべき最初の手段ではあるまいか……。狂燥する鬨争。獲得それは皆時代の寫す本當の姿なのである。そこには正義も罪惡も混然と滲つてゐるのである。かうした紛然混濁たる流れの中に美しく強くかなで、行くのが眞の眞實ではあるまいか。眞實！眞實！人生社會に眞實であるが故に正しい人があるのだ。人間は眞實の全部であり、又眞實は人間の全部でありたいものだ——。

人間が或る時現實曝露の悲哀に晒された時は。すでにもう何も彼もが終であり、死に至りし時の瞬間の感情ではないだらうが……。故に人間は大自然に専心し眞實に生きる事に専心して行かねばならなくなるだらう。

友よ懐し

昭和七年三月卒業

萩市熊谷町 左野政子

一年前の三月、忘れる事の出来ない、卒業日！それは忘れる事の出来ない日である。卒業と言ふ事を味つた人々にとつて永久に卒業日は忘れられないだらう。未知の人々が、前世の宿縁が相集り、そして數年後又未知の人の様に自然に忘れて行く、そのはかなさ！

離合集散常ない世のさだめを悲しみ、又學生時代への執着心を涙と共にはらひ、互に將來をかたつて相別れたのは、はや一年前となつてしまつた。卒業式後、私と友はガランとして何だか物淋しげなグラウンドの一隅に腰を下した。そして互に見合した顔と顔、友の目からは涙が臉をかすめてゐた。その一瞬！私はどうして別れねばならないのか、如何に會は別れの始めなればとあまりにもそれは悲惨である。慘酷である。友よ！何時までも私の信ずる友として一しよに居たい！そして私のよりよき指導者として。

目と目は語つた。

友の顔に霧がかゝつた様になつて私ははつきり見え分かずなつてしまつた。その時の雰圍氣、あたりは静寂の限りである。微風が髪を撫で臉一つばいに含んでゐる涙をさらひ落した。あゝ沈黙の一瞬！二瞬！友は涙をおしぬぐつて口を開いた。その時の理智に輝く眸よ。

「法律と秩序の完備してゐる社會に立ちませう。私はどうしても職業戦線に立たねばならぬ境遇です。今私はこゝで貴女に誓ふ。堅固なる意志を持つて今までの收穫した知識をあらゆる方面に應用し、且又あらゆる方面で知識の收穫を忘れないで、きつと／＼私はやつて行く。生甲斐のある生活をします。私共は今燃ゆるが如き希望を包みきれず喜びのあまり泣いてゐるとませう。あなたはどんな道に進まれるかはつきり分らないけれど、必ず生甲斐のある生活をしてね。社會を知らない私はどんなになるか分らない。だけど／＼力強く意氣を持つてすべてに突進する積りです。さう思へば今日限りの別れですけれど、私は悲しみたくない。喜んで／＼笑つて私を社會に立たせて下されば私はどれ程うれしい事ませう。」

友の言葉！あゝ以外だつた。私はそれ程決心して居ようとは思つて居なかつた。頭の前から足先までしんとした

そしてうれしい有難いと言ふ氣持に充され、私は只顔を縦に振つた。ありがたうと。

希望に目覺めた瞬間はうれしいものでした。だが過去を懐しむ情はどうしても捨てざる事は出来ない。最後！別れ！この感情だけは頭にこびりついてゐて又一入の悲しさを増した。涙を持つて別れた一年前、あの時が忘れられない。單に卒業日が忘れられないのではない。それについてゐるすべてが忘れられないのだ。

友は一年前に誓つた言葉通り、今は堅固なる意志と力強い意氣とを持つて立派に職業戦線に立つてゐる。そして「社會がどんなものか知らないけれど」と云つたがもう嫌と云ふ程社會を見る事が出来ただらう。

大東京！それはどれ程私にとつて懐しむべき都か。友は東京に居る。友よ貴女は私の唯一の親友です。信すべき友です。信じてよい友です。貴女はいつも私を導いて下さつた。私はいつも貴女をまねた。學んだ。あなたは何と意氣のある方だつてせう。かつて「意氣」と題して會報に出した事はよく貴女を表現して居ます。それから正義感の強い方でした。或る點まで正義を重んずるその雄々しさ！床しさ！。そして常に沈黙の性がありました。沈黙の中にあるものを學ぶと云つた様な方でした。すべて私は學ぶべき事

かちを持つて航海して下さい。

私はいつまでも貴女の幸福を祈る。

東京市より

東京高等ミシン女學校本科生

昭和四年卒業 村 田 政 枝

母校を出まして三年、もうこんなにも過ぎてしまつたのかしら、たつた此の間の事としか思はれぬ卒業！

でもあれから幾日の日を送り迎へた事ませう。だのにお便り所か時候の御挨拶もせず打すぎてゐました私が、急に今頃になつてペンを取るなどとお笑ひになるかもわかりませんが、どうぞ皆様お叱りなつてこれから縁の國の仲間にいれさせて下さいまし。そして皆様の音信に接する事の出来ます様。遠く去りて始めて親の暖い心がわかります様に、私も先日一寸したチャンスに南國會誌が手に入り、計らずもその後の様子、内容の變化に驚き、急に母校の懐しさが思ひ出され、むさばる様に手にした會誌を讀みつくし早速に皆様にお詫び申し上げます。

知らぬ間に私共の頃よりずつと發展した會誌を手にしまして、先生方の御苦心と熱心なる皆様のお力がしのばれて

ばかりだつた。だが彼女は可愛想な方である。家庭の事について悲哀を感じ人知れず涙を催す事は度々だつた。だが彼女はそれを一つも人に語らなかつた。自分一人の獻身的努力によつて、すべてをまるやかにしようと思つたのである。寒風にさらされる夜空の一つの星の様にどんなに冷たく淋しかつた事ませう。自分の進むべき道が一時分らなかつた。どちらに進めば道徳にそむかない行爲になるだらうかと。あゝ彼女は道徳と云ふ事を考へねばならない境遇におかれて居たのだ。單な問題ではなかつた。この苦痛な問題をどれ程彼女は考へた事か。あはれ床し。降りそむる白雪に頭をたれる深紅の菊だ！かよはさの中にある蕨とした、胃すことの出来ない力が心に燃えて居たのだ。考へつくした、只一人で。その時の友の心境は如何ばかり！だが總明なる彼女はある一縷の光明を見出した。燈臺の明りを目あてて荒れくるふ大海に浮んでゐる船の様だ。力一つばいにそれに突進したのだ。

友よ！進むべき道をあやまつてはならない。只正しいと思ふ道をひたすらに進め。だが友よ、時々反省を忘れてはならない。反省せよ。いつでも。船のかがしつかりしてゐなければ航海は出来ない。社會と云ふ大海を航海するにはよほど強いかちが必要だ。心のかちが。強い／＼心の

心から嬉しく存じました。

一所に集立したクラスメートの方々の其の後の様子等、お互に會誌を利用すれば亦思ひ出等お話出来る事と存じます。

盡きせぬ思ひ出は書けば限りもありません。終にのぞきまして母校の發展と皆様の御健康を心から祈り上げます。

(一九三二、一一、四)

逝ける姉

昭和三年卒業

阿武郡紫福村

岩 武 正 子

天も地も裂けよとばかりひたに泣くこの悲しみをわれ如何せむ。

憧れの南の國ゆ淋しくも春に先き立ち逝けるわが姉
優しくも我をいつくしみ導きし姉はひまさらず我すゝりなく
きさらぎの空青々と晴れ渡る夕を悲しくみ極の行く
華やけき花嫁姿の我姉も一片の骨とあはれなりにし
よるこびも又悲しみも共々に分ちあひにし姉と吾なるに
すや／＼と安き眠りに入るがごと姉は逝きぬと母は話しぬ
秋雨の陀しき日も文箱をあくれば姉の文出で、來ぬ
いく月か巡り／＼て茶山花の花咲く頃となりけるかな
逝きし姉の好みし花か山茶花の咲く頃となればかくも悲し
き、

松籟の音も陀しき山裾の姉が墓標に一人ぬかづく
静やかに雪に埋れし故里の山の麓に眠れるわが姉

街に住みて

大正十五年卒業

下關市竹崎町二丁目小山第五舎

大 谷 初 子

快晴な陽ざしに緑の匂ひあり展望臺に息づける風
夜々毎に胸しめつける思ひして寝入るかなしき癖のつきた
り

この心どこへはこびて捨てやらむ月蒼白く星まばらなる宵
すみ渡る秋空の色海の色夏すぎの病みいたく身にしむ
寂しさや悲しみくやみ胸そこになみだたぎりて探へいだし
ぬ



不思議のみだのちかひのなかりせば

何をこの世の思ひ出にせむ

やちまたにもな思ひそみだ佛の

もとのちかひのあるにまかせて

のりの道まことわかたむ西ひがし

行くもかへるも波にまかせて

渡しにし身にしありせば今よりは

かにもかくにも彌陀のまにまに

一茶と良寛と芭蕉より

學校記事



學校日誌抄

昭和七年一月

- 一 日(木)午前九時より講堂に於て拜賀式を舉行す
八 日(金)午前九時より講堂に於て始業式を舉行す
十一 日(月)筒井校長は縣立中等學校校長會議のため山口市に出張
十三 日(水)本校講堂に於て阿武郡町村長會議あり
十五 日(金)繩田吉原兩教諭は秋中學校に於て開催の縣教
十八 日(月)本日より向ふ二週間寒稽古を實施す
二十五 日(月)筒井校長山口市に出張
二十八 日(木)山口縣知事岡田周造閣下來校視察さる
二十九 日(金)自治會總會並に談話練習會を開催
三十 日(土)午前八時より三十分授業にて三時限授業を實

施午前十時より寒稽古終了競技試練會を行ふ

一七四

- 二月
一日(月)縣廳よ會計檢査官來校會計檢査あり
二 日(火)四十分授業にて六時限授業實施其後講堂に於て世界探險家管野力夫氏の講演ありたり
四 日(木)國語科校内教授法研究會並に批評會を開催す
第一時限 三梅 神田教諭
第二時限 四菊 中野教諭
第三時限 一菊 河内教諭
五 日(金)筒井校長は縣下高等女學校校長會議に出席のため山口市に出張
十一 日(木)午前九時より講堂に於て紀元節の拜賀式を舉行尚職員並に生徒代表は明倫小學校に於ける建國祭に參列す
十二 日(金)中野教諭は大津郡に出張
十五 日(月)筒井校長は小郡町に出張
十七 日(水)筒井校長は秋中學校に於ける那教育會評議員會に出席のため秋中學校に出張
十九 日(金)神田教諭は室積女子師範學校二部受験者を引き率室積町に出張
二十四 日(水)自治會總會並に談話練習會を開催す

二十五日(木)筒井校長は山口市に出張

三月

- 二 日(水)本明日第三學期末考査を施行す
四 日(金)熊本縣立第二高等女學校教諭松原作吉氏來校視察
五 日(土)學藝會の豫行演習及雜祭の準備をなす
六 日(日)午前九時より地久節の拜賀式を舉行す式後各組毎に雜祭を行ふ午後一時より母姉招待會並學藝會を開催す
七 日(月)昨日の後片付をなし其後校庭に集合新に御下附の勅語の奉迎を行ふ
阿武郡醫師會を本校講堂に於て開催
九 日(水)筒井校長は山口市に出張
十 日(木)陸軍記念日につき藤田中將閣下の講演ありたり
十一 日(金)本明日第二次學期考査を施行す
十六 日(水)成績會議を開く
十七 日(木)筒井校長は山口市に出張
十八 日(金)卒業式の豫行演習を行ふ
十九 日(土)午前九時三十分より卒業式を舉行午後一時より送別會を開催す

二十日(日)午前十一時より謝恩會を午後二時過ぎより同窓會の新入會員の歡迎會あり

二十二日(火)卒業式其他の後片付けをなす

二十三日(水)終業式を舉行

二十六日(土)入學考査準備のため午後一時より職員全部出勤執務す

二十七日(日)入學考査を施行す

二十八日(月)入學考査を施行す

二十九日(火)入學考査の合格者を發表す

四月

八 日(金)午前九時より講堂に於て始業式を舉行午後一時より新入生の入學式を舉行す

九 日(土)正午より中野、池上、兩教諭の告別式を行ふ

十二 日(火)放課後各學友區の區長副區長の選舉を行ふ

十四 日(木)筒井校長は縣下高等女學校校長會議に出席のため岩國町に出張

秋山、藤田兩教諭は羽賀茶方面に、伊藤、吉原兩教諭は木間方面に何れも遠足の實地踏査のため本日午後同方面に出張

十五日(金)志都岐山神社の例祭につき第五時限後職員生徒一同志都岐神社に參拜す

一七五

十六日(土)筒井校長は學事視察のため廣島市に出張
二十日(水)晝食後本年度の豫算會議を行ふ

本日は雨夫に就き體育デーを取止め級會を開
催す

二十一日(木)四十分授業にて五時限を實施、午後一時より
講堂に於て乃木大將の甥に當る玉木中佐より
乃木大將夫妻に關する講演ありたり

二十二日(金)第六時限に講堂に於て自治會總會並に談話練
習會を開催す

二十三日(土)筒井校長は山口縣教育會代議員會に出席のた
め山口市に出張

二十五日(月)第四學年は木間方面に、第三學年以下は羽賀
臺大井方面に何れも選足をなす

二十六日(火)四十分授業にて六時限を實施、午後二時より
和田校醫の結核豫防に關する講演ありたり

二十七日(水)靖國神社臨時大祭につき休業

二十九日(金)午前九時より講堂に於て天長節の拜賀式を舉
行す

三十日(土)午後一時より公會堂に於て秋町招魂祭を舉行
さるるにつき本校生徒中百田町、東田町、唐
鍾、御許町、松本方面の生徒は代表としてこ
れに參列す

十七日(火)第一學年生徒は秋山、繩田、今城、七俣、岡
田、有田諸先生引率の下に三隅、深川、湯本
方面に修學旅行をなす

二十日(金)第六時限に終會を行ふ

二十一日(土)第二學年生徒は秋芳湖方面に第三學年生徒は
今明日中防府岩國に何れも修學旅行をなす

二十三日(月)筒井校長は山口市に出張

第三學年の修學旅行に参加せし生徒並に引率
教員は前日の日曜と練習へ本日休業とす

二十五日(水)第五時限後伊藤教諭引率の下に椿東方面の生
徒は松陰神社に參拜す

二十七日(金)午前八時十分より講堂に於て田村海軍大佐の
日本海海戦を主題とする講演ありたり其後職
員並各組對抗の陸上競技大會を開催す

三十日(月)午前四時限實施午後〇時三十分を期し行啓
記念日につき遙拜式を行ふ

筒井校長は東京市に於ける全國高等女學校校長
會議に出席のため本日より十日間東京市に出
張

午後一時半過ぎより各方面別に松陰神社、金
谷天神、春日神社に參拜す

五月

三日(火)第一、二學年生徒は和田校醫の身體検査を受
け

四日(水)職員並に第三、四學年和田校醫の身體検査を受
け

五日(木)放課後級會を開催す

六日(金)第六時限に各學級毎に修繕デーの作業をなさ
しむ

七日(土)京都の寫真師來り職員並各組記念撮影をなす

九日(月)文部省より龍山督學官來校視察さる

十日(火)午後三時過ぎ山口縣師範學校訓導上田勘助氏
引率の下に同校附屬小學校兒童南園館の見學
に來る

十三日(金)第六時限に講堂に於て自治會總會並に談話練
習會を開く、午後一時半過ぎ内務省財務課長
地方債課長坂千秋氏一行秩市制調査の途次來
校

筒井校長は今明日山口市に出張

十五日(日)第二回小學校尋常科女子體育祭を舉行す

三十一日(火)白戸學務部長來校視察さる

六月
三日(金)土屋教諭は今明日中下關高女に於ける體操科
主任會議に出席のため下關市に出張

四日(土)第四學年生徒は秋山、吉原、河合教諭引率の
下に午前七時二分萩驛發の列車にて向ふ一週
間京阪地方修學旅行の途に上る

第三學年生徒は本日より八日まで中間考査を
施行す

虫歯豫防デーにつき第四時限に伊藤教諭より
虫歯豫防に關する講話ありたり

六日(月)第一、二學年生徒は本日より向ふ三日間中間
考査を施行す

九日(木)第三學年生徒は土屋、神田、藤田直、岡田、
各教諭引率の下に田床山に

第一、二學年は伊藤、繩田、今城、七俣、河
内、藤田好、池内、笠置各教諭引率の下に香
川先生の臨地講演を聞きつゝ萩の史蹟巡りの
遠足をなす

十日(金)本日は時の記念日に當るを以て第六時限に各
級並より組生徒に對し時の尊重に關する訓話

あり

午後三時二十分校庭に集合し、玉江驛、萩驛東萩驛に分れ、第四學年の旅行隊の出迎をなす

第四學年の修學旅行隊は午後四時八分萩驛着の列車にて歸萩

十二日(日)午後一時より講堂に於て水雷戰隊參謀白石中佐の支那事變に關する講演ありたり

十四日(火)下關高等女學校教諭綿田氏來校本校數學科授業を參觀さる

十八日(土)午後一時より職員生徒の第一回勝チブス豫防注射を行ふ

二十日(月)伊藤教諭は本日より向ふ三日間岩國高女に於ける教務主任會議に出席のため岩國町に出張

二十四日(金)四十分授業にて午前中五時限實施午後一時より講堂に於て自治會總會並修學旅行報告談話會あり

二十五日(土)午前八時十分より講堂に於て皇太后陛下御誕辰拜賀式を舉行

午後一時より第二回勝チブスの豫防注射を行ふ

八日(木)記念式計畫委員會を開く

九日(金)美育科の校内教授法研究會を開く

第二時限 習字 一菊 秋山教諭

第三時限 音樂 二菊 河合教諭

第四時限 圖書 一梅 秋山教諭

十一日(日)本校球技部選手は岡田教諭外三名の職員引率の下に宇部體育協會主催の三球大會に出場のため宇部市に出張す

十二日(月)土屋教諭は宇部市に出張

十三日(火)自治會總會並に乃木大將夫妻記念談話練習會を開催す

十六日(金)服裝携帶品の検査を行ふ

十七日(土)滿洲事變勃發一周年目に相當するを以て筒井校長より滿洲事變及滿洲國に關する講話あり

十九日(月)筒井校長、岡田教諭は本日より三日間山口市に於て開催さるる思想問題講習會に出席のため山口市に出張

二十二日(木)本校各部選手は土屋教諭外三名の教員に引率され明日舉行される競技大會に出場するため長府町に出張

一七八

二十七日(月)第六時限に各組毎に服裝携帶品の検査を行ふ

七月 一日(金)岡田千引教諭の就任式あり

四日(月)勝チブスの豫防注射を行ふ

八日(金)本日より三日間第一學期末考査を施行す

十二日(火)本日より十八日迄日曜を除き午後一時より菊ヶ濱にて水泳練習を行ふ

十三日(水)大阪朝日新聞社計畫部長大江氏の滿洲事變其他に關する講演ありたり

十九日(火)午後一時より成績會議を開く

二十日(水)終業式を舉行式後自治會總會を開く

八月 四日(木)生徒召集日につき各擔任區域の除草をなさしめ各級監と懇談後下校せしむ

二十二日(月)第二回生徒召集日にして前回同様作業せしむ

九月 一日(木)午前八時より講堂に於て始業式を舉行す式後第二學期正副級長の任命式あり

二日(金)ネクタイ及靴の検査を行ふ。自治會役員の改選並に自治會評議員の指名あり

三日(土)本校創立二十周年記念計畫委員會を開く

二十三日(金)本校各部選手は長府町グラウンドに於て舉行される西部女子中等學校體育聯盟主催の陸上競技並に球技大會に出場す

二十四日(土)筒井校長土屋教諭は西部女子中等學校體育聯盟理事會に出場

二十七日(火)第二學年生徒の保證人會を開催す

二十八日(水)第三、四學年の保證人會を開催す

十月 一日(土)本校陸上競技並に球技部選手は伊藤教諭外三名の教員引率の下に明日宇部市に於て舉行される山口縣體育大會に出場するため宇部市に出張

選手以外の生徒は明木村方面に終日遠足を行ふ

二日(日)本校各部選手は宇部市グラウンド及宇部高女校庭に於て舉行される山口縣體育大會に出場す

五日(水)オリンピック出場選手阿武巖氏の講演並に各種目の實技を見學す

六日(木)春日神社の例祭につき職員生徒一同春日神社に参拜す

一七九

七 日(金)理科校内教授法研究会を開く

第一時限 四梅 幾何 吉原教諭

第二時限 三梅 幾何 繩田教諭

第三時限 一松 植物 藤田好教諭

第四時限 三菊 化學 伊藤教諭

午後二時より右の批評會を開く

十日(月)和田校醫より視力保存に關する講話ありたり

十一日(火)第四學年生徒及研究科生徒は伊藤教諭外

十四日(金)筒井校長は山口市に出張

十五日(土)秩市役所藤本書記の毛利家歴代の藩主の治蹟

並に志都岐山神社の由來につき講話ありたり

十六日(日)午前十一時より講堂に於て同窓會總會を開催

す同窓生の來校者九十四名あり

十七日(火)午後一時より體育大會の豫行演習を行ふ

二十二日(土)明日の體育大會の諸準備をなす

二十三日(日)本校第十六回體育大會を舉行す

二十七日(木)來る本校創立二十周年記念行事の一つなる學

藝會の豫行演習を行ふ

二十九日(土)創立二十周年記念式の準備をなす

三十日(日)教育勅語成申詔書の奉讀式あり式後教育者に

御下賜の御沙汰書の奉讀式あり其後記念式の
會場準備をなす
三十一日(月)記念式の諸準備をなす
十二月

一日(火)午前九時半より講堂に於て記念式を舉行引續

き祝賀會を開催す午後は食堂賣店展覽會を一

般に公開す

二日(水)午前十時より講堂に於て學藝會あり前日通り

食堂賣店展覽會を公開す

三日(木)午前七時五十分より講堂に於て明治節の拜賀

式を舉行す同十時より卒業生及在學中の物故

者並に舊職員の物故者の遺族を招待して慰靈

祭を行ふ尙ほ前日同様一般に食堂賣店展覽會

を公開す午後二時より四時過ぎ迄公會堂に於

て永井郁子女史の獨唱會を開く午後七時より

九時過ぎ迄一般聽衆に對する音樂會を開催す

四日(金)各係毎に會場其他の後片付けをなす

五日(土)午前八時四十分より體育祭を舉行す尙ほ午後

は講堂に於て記念式の慰勞の活動寫真映寫會

を開催す

七日(月)今城教諭柳井中學校に於ける英語科教授研究

會に出席のため柳井町に出張

八日(火)校醫のトラホームの檢診あり

九日(水)校醫のトラホームの檢診あり

十日(木)精神作興に感ずる詔書の奉讀式あり

十一日(金)筒井校長岡田教諭は原狭高等女學校に於ける

家事科研究會に出席のため厚狹町に出張

十二日(土)筒井校長岡田教諭は厚狹高等女學校に土屋七

依兩教諭は深川町に於て舉行される小學校兒

童體育大會に參列のため深川町に出張

十五日(火)午前七時各方面別に松陰神社春日神社金谷神

社に曉天參拜をなす

十八日(金)體育科校内教授法研究会を開く

第四時限 體操 三梅 土屋教諭

第五時限 體操 一梅 七俣教諭

午後二時より右の批評會を開催す

二十一日(月)自治會總會並に松陰先生御事蹟に關する談話

練習會を開催其後職員生徒一同松陰神社に參

拜す

二十二日(火)本日より三日間休日を除き第二學期の中間考

査を施行す

二十六日(土)防長教育會窪田理事武智視學官日田東京高等

師範學校教授來校觀察さる

二十八日(月)本日は兵制六十周年記念日に相當するを以て

田坂海軍中佐より兵制に關する講演ありたり

池内教諭は本日より向ふ一週間共同觀察のた

め京阪地方に出張

十二月

一日(日)日本防火宣傳デーに相當するを以て筒井校長より

防火に關する講話ありたり

二日(日)金 第四學年梅組の母姉會を開催す

三日(日)土 第四學年菊組の母姉會を開催す

七日(水)午後二時三十分より訓育協議會を開催す

九日(金)午後一時より四年及研究科生徒は萩院裁判所

の公判を傍聽す

十日(土)本日より向ふ四日間日曜を除き第二學期末考

査を施行す

十六日(金)服裝携帶品の檢査を行ふ

十七日(土)自治會評議員會を開催す

十八日(日)學友會を開催す

二十二日(木)成績會議を開く

二十三日(金)自治會總會並談話練習會を開催す尙ほ第三學

期の自治會役員の選舉を行ふ

二十四日(土)午前九時より講堂に於て第二學期の卒業式を
舉行す

卒業證書授與式

昭和七年三月十九日午前九時半より第二十回卒業證書授
與式舉行。

舉式次第

- 一、生徒、卒業生、職員入場
- 二、保證人入場
- 三、來賓入場
- 四、樂式の挨拶
- 五、唱歌 君方代(一同起立)
- 六、勅語奉讀(一同起立)
- 七、唱歌勅語奉答(一同起立)
- 八、學事報告
- 九、證書、賞品、賞狀授與
- 一〇、學校長告辭(卒業生起立)
- 一一、來賓祝辭(同)
- 一二、生徒總代送辭(卒業生在校生起立)
- 一三、卒業生總代答辭(卒業生起立)

- 一四、保證人總代挨拶(職員起立)
- 一五、唱歌、祝歌(在校生卒業生起立)
- 一六、唱歌、迎げば尊し(卒業生起立)
- 一七、閉式の挨拶
- 一八、來賓、卒業生、保證人退場
- 一九、職員、生徒退場

告辭

卒業生諸子、

「光陰矢の如し。」といふ古語もある通り月日の経つのは早いものである。諸子が本校に入學せられてから早十四ヶ年の星霜も過ぎて、本日爰に目出度く卒業せらるゝこととなつた。

諸子は申すまでもなく諸子の御両親其の他御一家の方々も嘸々喜んで下さると思ひます。此處に並んで居らるゝ諸先生も私も實に嬉しいのであります。併し此の嬉しさに付けても、御両親、御兄さん、御姉さん又は親に代つて諸子を世話して下さつた方々の宏大なる御恩の程を深く考へて頂きたいのであります。萬一恩を忘れる様な事があれば是れ墮落の第一歩に踏み込んだもので、折角受けた教

育を蒙なしにするものであります。

本日は諸子に取つても、私共に取つても、眞に嬉しい日でありますが、愈々これで當分御別れせなければならぬかと考へますと眞にお名残りが惜しくて仕方がないのであります。併し斯くして止むべきではない、お別れに當り一言を呈して餞けと致したいのであります。

今日の女子は昔の女子に比べると大變に社會上の位置も向上して參りました。女子の活躍する世界も非常に廣くなりました。大正より昭和にかけては女子の各方面への進出は著しいものであります。久しく社會は男子本位であつた我が日本にも、女性の春が巡つて來ました。今日各方面に於て殆んど男子と同等に遇せらるゝ程となつた。否場合によつては女子が却つて優遇せらるゝ程である。此の昭和に生れた諸子は眞に幸福であると言はねばなりません。併し權利の半面は義務であり、地位向上の半面は責任の重荷と言ふことであります。女子の自重を要すること一層大となつた現下の日本に於て、比較的高い教育即ち高等女學校の教育を了へた諸子は國家社會の中堅として此の新しき地位を善用し、此の重い義務を果す様に校中に學んだ智徳を基として更に一修養を積んで頂きたいのであります。次に申したい事は女子は如何に解放せられ、如何に其の地

位が高まつてもその本領とする所は古今東西に亘つて變る所はないのであります。言ふまでもなく主婦なり母となつて家政を齊へ、子女の育成に任ずべきはその本然の使命であります。此の使命への自覺が不足する所に多くの間違が起るのであります。何卒單に表面的の智的自覺に止らず深い内面的の信念となるまで自覺せられんことを祈つて止まないものであります。最後に今日住み馴れた母校を巣立つて實社會の荒波に乗出さんとする諸子の爲め、老船頭の經驗より得たる處世上の指針まで一言を加へたいのであります。それは今回の南園會誌の巻頭にも掲げて置きました通り、假令今後如何なる境遇に陥るとも常に前途に光明を發見することに努め、一路此の光明に向つて邁進することであり、人間は最後の一呼吸まで希望の光を認むる所に幸福があるのであります。古來大志ある偉人が如何なる困難も物の數ともせず、克く其の志を遂げたのは全く明日の希望に生きたからであります。而かもその心境は明鏡の如く澄み渡りたる「明き清き直き誠の心」を以て只一途に邁進したから天晴偉業を成し遂げたのであります。戒むべきは薄志弱行であり、卑怯虚偽であり、虚榮と依頼心であります。「我は正道を歩んで居る」と云ふ固い信念こそ鐵石をも砕くことの出来る固い心となるのであります。過

日陸軍記念日に藤田中將閣下のお話の中にあつた「我に正しき道理あり」と言ふ信念こそ百萬の大敵をも恐れない勇氣の源泉であります。

さらば行け「明く、清く、直く」而して「強く、優く」尚言ふべき事は多くあるが平素大抵言盡してあると思ひますから今はこれで止め置きます。

山口縣立萩高等女學校長

筒井捨次郎

答 辭

由緒多き南園の學舎に、校長先生はじめ諸先生の、温く大いなる仁慈の中に育生まれ、月日の小車は多くめぐりました。今日しも、おぼつかないにも卒業といふ榮譽をになひ、多勢御來賓の御光臨を仰ぎ、私共の爲にかくも盛大なる卒業の式を挙げさせられ、有難い御諭を賜りました事は誠に光榮の至りであります。此の有難さ、うれしさ、延いては將來の責任も思ひ合はされて、小さい胸の中は、たゞ種々の感激にみまざるので御座います。

入學以來、日々御教を反古にせぬ様にとは、私共の常に心にちかひ、努力してまゐりました事で御座います。

おろかの身は只願ひばかりで、諸先生の御期待に添ふ事も出来ず、空しく今日となりましたのは、悔悟も甲斐ない事ながら、今更申しわけのない次第で御座います。私共の前途は尙遠達でございます。殊に今後の社會は、内外に亘つて益々複雑となり、國際關係も愈々多事となり。實に多難なる時代で御座います。國民として、男子の覺悟はもとよりでございますが、家庭をあづかるべき婦人の覺悟と責任も重大を加へた様に存せられます。

しかし、目覺めたる婦人を要する現代といへども、どこまでも、女は女らしくして、やさしみあり、我が身を忘れて家庭の事にいそしむは、日本婦人の美點として、もとより望むところで御座います。こゝに於て、私共は、これまで受けました御教と、今日の御諭とにより、誘惑に打ち克ち、立派な日本婦人として、恥かしからぬ様に努力致しますことこそ、多年の御薫陶と、今日の光榮とに對する報謝の一端かと存じます。今や諸先生に對する感謝と、在校生の方々に對する惜別の念とで、申上げる言葉もみだれましたが、こゝに卒業生一同に代り、謹んで答辭と致します。

昭和七年三月十九日

本科第十二回實科第二十回

才覺悟でございます。

今や、姉君様方は、大いなる理想と希望とを抱いて、學びやを果立たうとして居られます。光明は燦々として前途に輝いてゐます。しかしその前途には、更に大きい社會と云ふ學びやが横たはつてゐるのでございます。この學びやこそ、姉君様方が本校に於て學ばれましたよい實習場ではないかと存じます。こゝを卒業せられますには、浪荒い大洋を小舟を持つて渡るよりも、一層困難といはれて居ますその時姉君様方は、日頃のいつくしみ深き師の君様のみ教を、棹梶と頼まれ明るき清き強き心を奮ひ起され必ず目的の彼岸に到着せられますこと、堅く信するのでございます。そして又母となられましては、子女をよく養育せられ、國家の一大事に臨んでは、彼の爆彈三勇士の如き、忠勇無比の第二の國民を育て上げられ、私共の爲に、よい道しるべを御示しになる様にお願ひ致す次第でございます。終に臨みまして、皆様方の御健康を心よりお祈りします。在校生一同に代りまして、拙き言の葉を述べて、謹んでお送りの言葉と致します。

昭和七年三月十九日

在校生總代 小 谷 幾 子

送 辭

卒業生總代 菊 屋 正 子

野邊の若草も萌えそめ、木々の小鳥も歌ひ、輝しい希望の春は訪れました。

このよき日に、螢雪の功空しからず、多數來賓の御來臨の御前にて、御卒業の榮譽をにない給ふ姉君様方の御胸の中は、どんな歡喜と希望にふるへていらつしやることとせう。

又姉君様方の御背後にあつて、始終御慈愛の眼をそゝいでをられました師の君様や、御兩親様の御満足や御喜びは如何ばかりでございます。

願ひますれば、姉君様方が此の南園の學びやに、私共のお優しい姉君様として、又正しき指導者として、お立ち下さいますより、多くの年月は廻りました。

その間、共に學び共に遊びましたことを思へば、御名残はつきないのでございます。

併し會ふはお別れの始とか、徒に別れを惜むは詮のない事で御座います。せめて私共は殘されました美しい校風を能く守り、以て姉君様方に對する報謝の念の萬分の一と致

卒業生一覽

(昭和七年三月十九日)

本科卒業生(第十二回)

(五十音順)

秋田 順子	淺野アヤ子	阿部 光子
天野 紀子	荒尾 綾江	有吉喜久子
栗屋 チエ	安藤 美枝	阿武タミ子
石金 夏千	石川 光子	伊藤ウサヨ
伊藤 敏子	伊藤 昌子	伊藤みつ子
稻村とみ子	稻村 八重	岩田タマコ
大田 操	大谷 榮子	大和和ヤス子
大橋キヨ子	岡田 元子	岡田 義子
桂 智佐子	金子 夏江	金子モトエ
兼田 静子	河野 菊子	河野壽恵子
菊屋 正子	木村 俊子	久保田フタ子
熊毛屋光子	黒田 孝子	桑原富美子
小池 清子	神野 博江	厚東 晴子
厚東 光子	齋藤 菊代	齋藤 静枝
齋藤富美子	齋藤ミツ子	讚岐 秋代
左野 政子	鹽見 智子	志賀 篤子

實科卒業生(第二十回)

(五十音順)

末次 菊代	末本 節子	鈴木 止子
高洲ヨシ子	瀧口 桃江	瀧野 芳枝
竹下千代子	竹下マツエ	田中 君江
田中喜美子	田村 菊恵	張 達子
津森 文代	寺内 政	時山八千枝
富田 敏子	中原シゲ子	中野 桃子
中村 貞子	中村ヒサエ	西村 紀子
波田美代子	波多野百合子	林 敬子
福田喜久子	藤家 美枝	藤田みすき
徳永 初枝	松浦 照子	松田己美子
溝部 恭子	光永 一枝	三戸 文子
宮崎 克子	宗質 文子	室谷 豊乃
箭島 雪子	柳井 良子	山縣喜多子
山縣 チセ	山縣 信子	山田 康子
山本 武子	吉賀キミ子	吉村 常子
吉屋 静枝	吉原 正子	渡邊ヤスコ
赤川 慶子	阿部ツユ子	阿部モミ子
阿武 滋子	池内 ミネ	上田 政子
大田 松江	岡 恭子	尾方キヨ子
篠懸 文子	小山田サナヘ	金子 壽子

身體發育健康増進顯著者

本科 岡田 元子

清勳者

本科 伊藤ウサヨ

篤行者

本科 津森 文代

在學中精勤者

本科 石川 光子

熊毛屋光子

松田己美子

實科 高屋 菊枝

虎竹 華枝

在學中精勤者

本科 淺野アヤコ

伊藤ウサヨ

金子 夏江

河野 菊子

小池 清子

讚岐 秋代

田村 菊恵

藤田みすき

大多和ヤス子

時山八千枝

(以上四ケ年)

森重 澄子

(以上二ケ年)

安田マサ子

安藤 美枝

岡田 元子

兼田 静子

桑原富美子

齋藤富美子

瀧口 桃江

西村 紀子

筒島 雪子

久芳 禮子

清水万龜子

田中 文江

西山アヤ子

平岡 久子

松浦 梅子

安田マサ子

山本 迺子

學業成績優等者

本科 菊屋 正子

大谷 榮子

金子 夏江

高洲ヨシ子

實科 虎竹 華枝

松浦 梅子

學業成績進步顯著者

本科 齋藤富美子

山縣 チセ

瀧口 桃江

大田 松江

實科 藤村 静子

佐伯 文子

高杉波奈子

虎竹 華枝

波多野信子

藤田ミツコ

森重 澄子

山下 節子

山本マサ子

佐伯 由枝

高屋 菊枝

西村フジ子

林 ミツエ

藤村 静子

安井 貞子

山根ハナ子

荒尾 綾江

厚東 晴子

林 敬子

大多和ヤス子

安田マサ子

竹下千代子

岡田 元子

時山八千代

稲村 八重

光永 一枝

西村フジ子

林 ミツエ

學藝部だより

山縣 信子 山本 武子 吉屋 靜枝
 (以上四ヶ年)

實科 阿部モミ子 池内 ミネ 上田 政子
 大田 松江 岡 恭子 藤村 靜子
 松浦 梅子 (以上二ヶ年)

本學年間皆勤者

本科 淺野アヤ子 石川 光子 大谷 榮子
 大多和ヤス子 兼田 靜子 河野 菊子
 河野壽恵子 木村 俊子 熊毛屋光子
 桑原富美子 齋藤富美子 讚岐 秋代
 鹽見 智子 津森 文代 寺内 政
 時山八千枝 富田 敏子 中原シゲ子
 西村 紀子 波多野百合子 林 敬子
 松田己美子 三戸 文子 宗實 文子
 箭島 雪子 山縣喜多子 山縣 チセ
 吉屋 靜枝 渡邊ヤス子 大田 松江
 赤川 慶子 阿部モミ子 高屋 菊枝
 岡 恭子 久芳 禮子 森重 澄子
 藤村 靜子 松浦 梅子
 安田マサ子 虎竹 華枝

實科

一、開會の辭 四菊 前田 禮子
 二、松陰先生十一歳の時のお話 一松 秋山集義子
 三、松陰先生の友情 一梅 口羽 理子
 四、師弟生別の涙松 一菊 菊屋 定子
 五、師としての松陰先生 二松 長谷 久子
 六、松陰先生の本領 二梅 林 ヒサ
 七、松陰先生の少年時代 二菊 長岡 壽枝子
 八、松陰先生出立の日 三梅 小川 信子
 九、松陰先生の勤勞精神に就て 三菊 植村千壽子
 十、偉人をしのびて 四菊 長山 菊代
 十一、閉會の辭 四菊 光井千代子
 三、創立二十周年記念學藝會

昭和七年十一月二日 本校創立二十周年記念行事の一として學藝會を開催しました。來賓保證人其他一般の來會者多數で盛會でありました。その詳細を別項の記事に載つてゐますから此處には省きます。

四、創立二十周年記念展覽會
 昭和七年十一月一日より三日まで本校創立二十周年記念の學藝成績品大展覽會を開催しました。その陳列品は次の多種でありました。

- 一、乃木大將記念談話會
 昭和七年九月十三日 乃木大將及び同夫人に關する談話會を開きその高徳をしのび修養上裨益するところ多大でありました。其の順序は左の通り。
- 一、開會の辭 四梅 小谷 幾子
- 二、木質宿の喜劇 一松 諫早スズ子
- 三、山鹿素行先生を崇拜せる將軍 一梅 神野 澄江
- 四、乃木大將性格の一斑 一菊 松本 富恵
- 五、大兼光と月山の閃き 二松 吉原 智江
- 六、善通寺の乃木將軍 二梅 横山トシ子
- 七、乃木將軍と凱旋 二菊 阿川 雪江
- 八、乃木靜子夫人 三梅 賀田ノブ子
- 九、乃木大將の性格 三菊 福島 成子
- 十、部下に對する愛情 四梅 竹内 文子
- 十一、偉人をしのびて 四菊 木村代志枝
- 十二、閉會の辭 四梅 齋藤 富美

二、松陰先生事蹟發表會

大陰曆で十月二十七日が松陰先生の死刑の日であります。が本校に於ては昭和七年十一月廿一日を以て先生の事蹟發

- 1 本校生徒成績品
 - 2 本縣女子中等學校成績品
 - 3 他縣公立女子中等學校成績品
 - 4 本縣小學校成績品
 - 5 歐米初等中等學校生徒成績品
 - 6 現代洋畫大家作品
 - 7 秩地方有志書畫作品
- 來觀者も非常に多く盛會でありました。美術鑑賞教育の爲に相當の貢獻を致したものと信じます。





同窓會記事

萩高等女學校同窓會の 動靜について

同窓會員二千餘名の皆様には諸事多端の折柄、幸ひ御健在にて夫々恵まれたる天職のために御精進されて居られること、存じます。冀くは將來とも益々御自重の上、更に一段の御進展あらんことを衷心お祈りいたします。母校も皆様の御援助のお蔭によりまして、次第に發展して参りました。校舎も改築されて参りますし、校地も擴張され五百の乙女が嬉々として活動に勉強に力めてゐます。扱これより同窓會の動靜を少し述べさせて頂きます。前に皆様の御賛成を得まして改築することになつておりました舊雨天體操場改築工事の事につきまして、御相談いたすことになりました。七月七日午後二時より母校南園館にて發

起人會を開催する事となり、夫々へ理事の方から御通知いたしました。當日は折悪しく大雨でもあり、不参者が多勢ありましたので、七月十六日に期日を變更して更に開くことにいたしました。今度は發起人及研究科生等で約五〇名の参會者がありました。

校長先生より第一に舊雨天體操場の改築についての御説明がありまして、次に同窓會員方の御寄附による金額に達しませんので、其の不足の分は同窓會への入會金及同窓會主催の何等かの催をして其の収益によつて充當して行きたいとお話がありました。其からお互に歡談となり、音楽會などもその一つとして計畫したならばなどの話も出で、又舊情をも温めあつて四時過散會いたしましたのであります。次で改築工事に着手され、時は夏なり天候は可し、工事は着々と進行して参りました。

次で十月八日午後二時より母校南園館にて役員會を開催し、十月十六日午前九時半より開催しました同窓會總會の件及母校創立二十周年記念式及記念行事の件につきまして協議を致すことになりましたが、出席者約四十餘名、協議の結果、別記の様な同窓會總會の際の餘興プログラムと、記念行事の一として母校の先生及生徒の物故者、同窓會員の物故者、舊師の方々中の物故者慰靈祭（之については記

四、會務報告

五、協議創立二十周年記念式及附帯行事に關する件

- 六、役員改選
- 七、會員感想發表
- 八、閉會の辭 會員 植村幸子
- 九、一同退場

總會終つて直ちに一同、食堂に參集し書食を共にいたしました。供する所至つて粗餐でも、舊情の濃かなる所珍味佳肴に優ること万々でありました。満堂に溢るる笑顔の輝きは、さぞや昔の女學生の傍が、期せずして浮んで來たこととせうと思はれました。

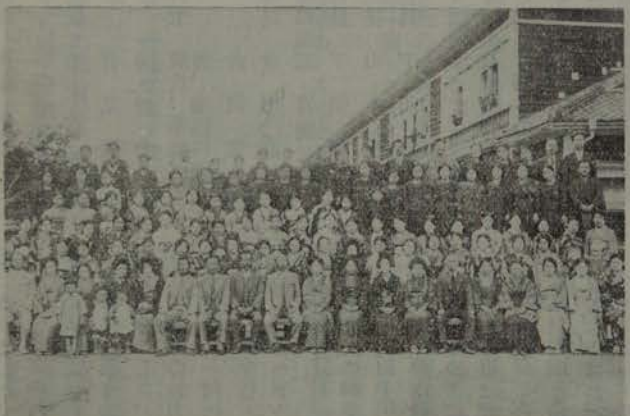
次で校庭で記念撮影

終つて午後一時より再び講堂で、プログラム順により愉快な餘興に移りました。

- 餘興プログラム
- 一、開會の辭

興

二、餘



念行事の記事参照して下さい)同窓會主催で行ふこと、賣店及食堂の世話をする事、音楽會の會員券頒賣すること等を決定し總會への案内状は今までの様に新聞廣告にせず、一々手紙による事に決定したのであります。かくして愈々十月十六日午前九時半より同窓會總會を開くことになりました。

この日は誠に恵まれた總會日和とでも云ふべき小春日和で、参會者會員九十四人、母校の先生方二十人打つて一團となつた穏やかな雰圍氣の中に有意義に且つ楽しい一日を過ぎたのであります。(別記會員大谷榮子嬢の同窓會總會の記を御覽下さいませ)

- 第十九回同窓會總會順序
- 一、一同入場(講堂)
- 二、開會の辭 會員 倉田靜子
- 三、會長のお話

- 1 獨唱 鷓 母校生徒 河野 定子
- 2 合唱 琴 研究科生 佐野、齊藤、藤村三氏
ヴァイオリン 萩管絃團有志
- 3 舞踊 唐人お吉 母校生徒 柏木喜美子
- 4 獨唱 月見草、霧島 同 吉見 清子
- 5 舞踊 埴生の宿 同 岡村 公子
- 6 飛入(滿洲大根) 研究科生 清水、黒田、久芳、齋藤四氏
- 7 長唄 吾妻八景 唄 倉田 登園
上調子 會員 倉田 静子
- 8 手踊 靜御前 三味線 母校生徒 竹岡 文子
會員 下間 静子
母校生徒 山本 愛枝
會員 下間 静子
- 9 手踊 春雨 會員 下間 静子

三、閉會の辭

かうして興味百パーセントの餘興も終となりました。おゝ總會の懐かしさよ、餘興の何と楽しく嬉しかりしことよ、會員の皆様は會終るも猶去りがてにして、今日一日の夢の跡を回想されるかの様で、あの席この場所、三々伍々にまどるをなしての話ぶりは、流石と涙ぐまるるほどでしたが、やがては時刻が其を許さず皆人共に惜しき情を後

として御卒業になりましたので、従前はその通りに申してゐましたが、今後は創立當初よりの年次によつて第九回本科卒業生と申し、順次十回十一回と申すことになつたのであります。皆様の御承知置きをお願いいたします。

次に猶一つお願い申しますことは御一身上の異動とか御氏名御住所などの御變更ありました際はぜひ至急お知らせ願ひたいと存じますし、誰様かお知合の方の異動等御承知の時は、誠に恐れ入りますが御一報下されば仕合せに存じます。終りに臨みまして、會員御一同の多幸あらんことを祈ります。

同窓會々則

- 一、本會ハ會員相互ノ舊情ヲ温メ心身ノ修養ヲ圖リ兼テ社會ノ風教ニ貢獻スルヲ以テ目的トス
- 二、本會ハ山口縣立萩高等女學校南園會特別會員及校外會員ヲ以テ組織シ事務所ヲ同校ニ置キ支部ヲ設置ス
- 三、本會ノ事業左ノ如シ
 - 1 總會並ニ支會開催ニ關スルコト

に殘して歸途につかれたのは、早や夕陽西に迫らんとする頃でありました。

かくして母校の體育大會も過ぎ、愈々母校の創立二十周年記念式及記念行事の三日間が参りました。

これら行事も皆様のお蔭で嘗つてない嚴肅盛況裡に終る事が出来ました。中にも慰靈祭の神々しさ、音楽會の見事さは、皆様のお力の賜とはいへ、只だ、感謝と感激の外ありません(何れも記念行事及記念文集等を参照して下さい)冀くは今後ともよりよき力を母校發展、同窓會發展のために御與へ下さることを祈ります。

猶序に申上げますが、校内役員としては、昨年四月縣立防府高女へ御榮轉になりました中野先生の後任として御新任の岡田千引先生が副會長に、伊藤通利先生、岡田カツ先生、池内登美子先生が理事に御就任下され、筒井會長御指揮の下にお世話下さる事になつてゐます。岡田、池内兩理事は母校御出身の方では何かと御活動下さるに便利かと存じ喜んでをります。次に今までは實科何回或は本科何回と申してゐましたが、昭和七年度より實科がなくなりましてので、今後は第何回本科卒業、第何回實科卒業と申すことに改めました。其で本科卒業の方は大正十年三月、第九回實科卒業の折に第一回の本科卒業生

- 2 講習會ノ開設ニ關スルコト
 - 3 敬老、慶弔、慈善、勤儉力行ニ關スルコト
 - 4 會員近況調査ニ關スルコト
 - 5 其他必要ト認メタル事項
- ### 四、本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 1 會長一名 學校長ヲ推戴ス
 - 2 副會長一名 首席教諭ヲ推戴ス
 - 3 理事若干名 本校南園會特別會員、支部幹事並ニ本校毎回卒業生中ヨリ各組ニ付互選シタルモノ二名宛
 - 4 支部幹事若干名會長之ヲ委屬ス
理事又ハ支部幹事ニ缺員ヲ生ジタルトキハ總會ノ際之ヲ補充シ缺員ノ補充ニ急ヲ要スル場合ハ總會ヲ待タズ會長ニ於テ便宜補充スルコトアルベシ
- ### 五、役員ノ任務左ノ如シ
- 1 會長ハ本會ヲ總理ス
 - 2 副會長ハ會長ヲ補佐シ其ノ不在ノ時ハ代理ス
 - 3 理事ハ本會ノ事務ヲ擔任ス
 - 4 支部幹事ハ支部ノ發展ヲ圖リ其務ヲ擔任ス

六、總會ハ毎年一回之ヲ開ク
 七、本會ノ經費ハ會員ノ會費及有志ノ寄附金ヲ以テ之ニ充ツルモノトス

同窓會校外役員氏名表

(總員百七十名)

昭和七年十月十六日第十回同窓會總會開會の際本年度校外役員互選に當り會長の指名に一任されましたので、御卒業の年次や地方關係等を御考慮の上、左の通り依頼される事になりました。何卒本會發展のため格別の御盡力を希望いたします。

校外理事	七十八名	住所氏名	住所氏名
卒業年月	卒業回数	住所氏名	住所氏名
大正二、三	一賞	濱崎 馬庭タマヨ	東田町 倉田 静子
三、三	二同	江向 有田 ミサ	西田町 河村 貞子
四、三	三同	唐 植村サチコ	五間町 大谷フクコ
五、三	四同	吉田町 下間 静子	吉田町 高木 梅代
六、三	五同	土原 長井 トミ	橋本 末水 ヘル
七、三	六同	西田町 有吉トミコ	吉田町 田北 治子
八、三	七同	江向 今地タミ子	東田町 桶谷ハナコ
九、三	八同	米屋町 岡本 昭子	東田町 若松 キサ

一〇、三	九本	椿神原 荒地 久子	香川津 三好 マツ
同	九賞	濱崎 長谷川久子	榎町 中原 ヨシ
一、三	一〇本	東田町 吉村 ヒナ	
同	一〇賞	東田町 村田トメ子	
二、三	一一本	平安古 桑原 小春	松本 永安 静枝
同	一一賞	山田 時山マサコ	平安古 柳屋ミチコ
三、三	一二本	堀内 大田 貞子	西田町 河村 信子
同	一二賞	五町 關屋キヨコ	濱崎 村田シズ子
四、三	一三本	河添 石津 和子	濱崎 光井 泰子
同	一三賞	東田町 藤屋 春子	五間町 村七キヨ子
同	一三賞	東田町 三浦 文子	金谷 高洲 リヨ
一五、三	一四本	濱崎 石川サザ子	五間町 吉山登喜江
同	一四賞	堀内 桂 松子	堀内 小池 幸子
同	一四賞	堀内 砂 君子	堀内 和子
昭和二、三	一五本	西田町 神子 キク	川島 杉山 文子
同	一五賞	吉田町 三輪 トミ	東田町 津田智恵子
二、三	一六賞	平安古 林 富子	川島 宇野 英子
三、三	一六本	土原 仁保 キク	川島 弘中 静
同	一六賞	東田町 村上 照子	新堀 桑原 ヨシ
同	一六賞	御許町 中原タカ子	雜式町 堀 貞子
四、三	一七本	下五間町 石光静子	平安古 竹内 操子
同	一七賞	吉田町 吉田富美子	河添 田村フサ子
同	一七賞	江向 堀江 靖子	西田町 藤川 美枝

昭和五、三

一八本	濱崎 松浦 光子	松本 坂 佳子	
同	同 菊 河添 安田クニコ	米屋町 光國 茂子	
同	一八賞	川島 土井 富子	熊谷町 藤山トヨ子
六、三	一九本	土原 岡村 フキ	南古萩 玉井 節子
同	一九賞	吉田町 田北ミネ子	川島 杉山 美枝
同	一九賞	東田町 福永 徳榮	松本 田村トキエ
七、三	二〇本	松本 厚東 晴子	土原 高洲ヨシ子
同	二〇賞	松本 金子 夏江	濱崎 石川 光子
同	二〇賞	土原 西山 綾子	西田町 波多野信子

支部幹事

江向方面	九十二名		
(八丁) 渡邊 八百	(八丁) 吉井 延子	(八丁) 大谷 キク	
明倫 波多野愛子	(江向) 窪井 藤江	(江向) 馬屋原壽満	
本門前			
(江向) 淺野 愛枝			
河添方面			
(河添) 吉村 常子			
橋本唐穂御許町方面			
(橋本町) 増山静子	(橋本町) 行本貞子	(橋本) 富田千恵子	
(橋本町) 伊藤浪子	(御許町) 中村艶子		
平安古方面			
(平安古) 三隅田貞子	(平安古) 山縣貞子		

堀内方面

(堀内) 小林八重子	(堀内) 河野壽恵子	(堀内) 津森 文代
濱崎熊谷町方面		
(濱崎) 波多野トヨ子	(濱崎) 齊藤富美子	(濱崎) 田中君江
(御弓町) 岡村孝子		
米屋町鹽屋町惠美須町吳服町魚棚南古萩片河瓦町津守町方面		
(吳服町) 上利光子	(惠美須町) 池内 巴	
(惠美須町) 山中リヨエ	(惠美須町) 宗實元子	
田町新堀方面		
(田町) 上田昌子	(東田町) 久保春枝	(東田町) 三好敏子
(東田町) 柏木敏子	(東田町) 佐伯花子	(東田町) 若松ツル
(東田町) 八木正枝	(新堀) 中村芳子	
吉田町五間町古萩今古萩渡り口方面		
(吉田町) 山根アキ	(五間町) 吉原正子	
川島方面		
(川島) 溝部恭子		
土原方面		
(土原) 森川ハツ子	(土原) 末岡 益子	(土原) 長井 密子
椿東方面		
(松本、無田原) 三輪芳子	(松本、舟津) 鈴木絶子	
(松本、上野) 國重 節子	(中津江) 百濟 萩江	
(松本) 土井幸子	(前小畑) 厚東萬子	

椿 方面

- (鎌式町) 江山タキ子 (鎌式町) 笠井清子 (青海) 藤田イセコ
- (大谷) 金子 敏子 (椿町) 田中 雪子
- 山田方面
- (玉江) 白井アキ子 (玉江) 松本 春子 (倉江) 山本 禮子
- 大井方面
- (坂本) 山根ツジエ (大井) 河野喜彌子 (大井) 金子モトエ
- (大井) 齋藤 静枝 (大井) 阿武タミ子
- 奈古方面
- (奈古) 齋藤 義子 (奈古) 小野千枝子 (奈古) 松浦 照子
- (奈古) 大山 富代
- 宇田方面
- (宇田) 緒方 幸
- 明木方面
- (明木) 神崎シヅ子 (明木) 光永 一枝 (明木) 上田 政子
- 須佐方面
- (須佐) 岩本 富子 (須佐) 佐久間千代子
- 三見方面
- (三見) 村上フサ子 (三見) 三元 孝 (三見) 松尾 愛子
- (三見) 佐々木初子 (三見) 林 ミツエ
- 三隅方面
- (三隅) 藤田 愛子 (三隅) 角木 綾 (三隅) 河邊不二子

大津郡方面

- (滋木) 尾崎婦美子 (日置村日置下) 國司壽恵子
- 美濃郡方面
- (大田) 友永アサ子 (赤郷村) 吉崎 久子
- 川上方面
- (川上) 江舟三三子 (川上) 吉屋 静枝
- 吉部方面
- (吉部) 中村 政子 (吉部) 大田 春代
- 佐々並方面
- (佐々並) 村田イシ
- 紫福方面
- (紫福) 岩武 正子 (紫福) 服部富貴子
- 徳佐方面
- (徳佐) 杉 愛子
- 福川方面
- (福川) 内藤ヨシ子

第十九回同窓會總會の記

大谷 榮子 記

第十九回同窓會は十月十六日(日曜)母校講堂に於て開催せられました。此の日期の中は随分ひどい雨でしたが、

開會時間が迫るにつれて漸く降りやんで、午後はからりと晴れて快い小春日和でございました。

朝の雨模様の子いかに大分お集りが遅い様でございましたが、でも三々五々と連れだつて定刻前の講堂は時ならぬ華やかな色彩を呈しました。定刻より少しおくれで午前十時半一同講堂に入場、ついで開會の辭を倉田静子様がのべられ、一同起立國家合唱の後校長先生のお話があり、皆さんは小學校中等學校を順次進んで行かれてこゝに卒業されて見ると、自分達の出身學校や、クラスメイトが非常に懐かしく思はれるものである。小學校は左程でもないが、中等學校は殊更に印象が深く懐かしいものである。學校は第二の家庭と思つて、かうした會合には進んでお集り願ひたいとお話で、又十一月の二十周年記念のこと、東京支部のお話もあり、最後に近頃萩地方の女性を望まれる方がだん／＼あるから、皆さん各自が一層自重されて、現代世上のやかましい思想方面、或は素行の方面に於ても間違ひのない様にとの御訓話がありました。

次に岡田教頭先生の會務報告があり、現在建ちつゝある雨天體操場の事、又今年の南園會誌は二十周年記念號として發行される由、又會員數について、或は基金や、記念建築工事費の内譯について詳細なお話があり、次に協議事項

に移り、同じく岡田先生より二十周年記念式の事、永井女史音楽會の事、體育會當日の賣店のこと等について種々協議された後、理事の改選の相談があり、終つて後一同講堂退場。寄宿舎食堂に於いて久し振りに會つたお友達同志や先生と御一緒に、在學當時の懐舊談にふけりながら楽しくお話しお晝御飯を戴いて後、校庭に於いて一同記念撮影をしました。午後は講堂に於て同窓生や在校生の心をこめた面白い、或は美しい數々の餘興がたくさんあり、一同お菓子をいたゞきながら打ちくつろいで興に入り、午後四時すぎ和氣霽々裡に散會。各自連れだつていそ／＼と家路につきました。

黄昏迫る空の彼方に沈み行く夕日は、色はえて今日の此の日を祝福するかの如く赤々と輝いてゐました。

南園婦人文庫だより

南園婦人文庫も年を遡うて充實してまゐりました。昨年七月以降の購入新刊圖書を挙げれば左の通りであります。

書 名 著 者 冊數
女學生時代から結婚まで

春子の教育	山本 勘助	一	最も要領を得たるヴァレーボールの階段的指導法と	坂本 廣市	一
松陰及其後	矢次 寅輔	一〇	最新規則の具體的補充解説	滿川龜太郎	一
子供の爲の發明發見家物語	栗原 登	一	激變渦中の世界と日本	中等教育學院	一
理科傳説物語	堀尾 實善	一	女子英語の準備	同	一
日米戦ふ可きか	仲摩 照久	一	女子數學の準備	同	一
女子高等専門學校入學試驗要項綜覽表	直木三十五	一	女子幾何の準備	同	一
日本の戰慄	野間 清治	一	女子代數の準備	同	一
榮えゆく道	小澤覺輔譯	一	女子算術の準備	同	一
日本怖る可し	金澤庄三郎	一	女子作文の準備	同	一
廣辭林	飯田 彌助	一	女子國語の準備	同	一
趣味の有用植物	村越三千男	五	朗らかな人生	三宅やす子	一
生物學史物語	中川 逢吉	一	世界の重大變局	小嶋 德彌	一
日本文化史	笹川 種郎	一	傳説俗信風俗民謡趣味の國	日野碯彌彦	一
名もない小鳥	小笠原幸彦	一	アメリカは日本と戦はず	小笠原幸彦	一
後醍醐天皇御事蹟	渡邊 寛	一	滿鮮	山本 實彦	一
圖解式英文法	正田 淑子	一	花の作り方	草人社同人	一
正大の馬	坪田 讓治	一	カワト圖案集	内藤 良治	一
踏海士志金子重輔傳	福本 椿水	一	實用ボスター圖案集	北原 義雄	一
第十回オリンピック大會眞帳	澤本 健三	一	地理と地理教育上中下	稻葉 晴忠	一
版畫禮讚	山田 清作	一	國語と國文學の研究	末政 寂仙	一
			島崎藤村集	島崎 藤村	一

菊池寬集	菊池 寬	
泉鏡花集	泉 鏡花	
藤村女子讀本卷四	島崎 春樹	
同	同	
奮闘主義日蓮の人生觀	鷺見 日顯	
郷土傳説を戯曲化する兒童劇脚本	長尾 豊	
花袋紀行集	田山 花袋	
新らしい詩の作り方味ひ方	田中 价山	
例句添付俳諧歳時記	石野 舟洲	
参考中等動物圖説	岡田彌一郎	
文章俳句大觀	中内 蝶二	
新式漢和辭典	中山久四郎	

豫約書

括弧内は全冊數 其の下は既着の分		
世界地理風俗大系 (一八)		
國民思想叢書		
大百科辭典 (一五)		
國文學講座 (一五)		
現代醫學大辭典 (二六)		
月刊雜誌		
子供の化學。少女畫報。少女俱樂部。ABCウイクリ。		
心の花。一年の英語。二年の英語。家事研究。國際寫真		
情報。乃木式。精神。朝日スポーツ歌。アラ、ギ。ホト		
トギス。		

運動部だより

昭和七年四月の本校生徒の身長・體重・胸圍は下記の如し
 文部省統計は明治三十三年より昭和四年に至るまでの平均
 但し大正十年度を省く

年齢	検査人員	性別	身長	體重	胸圍
13歳	125人	文部省 本校昭和六年度	136.2mm	31.6kg	69.0cm
		同	140.4	33.6	64.9
		同	141.0	34.8	67.7
14歳	132人	同	141.4	36.1	68.3
		同	146.8	39.9	70.2
		同	143.7	38.9	70.3
15歳	91人	同	146.0	40.5	71.7
		同	147.9	44.2	75.6
		同	148.3	43.6	74.4
16歳	97人	同	148.3	43.8	74.2
		同	150.7	44.3	74.3
		同	149.9	46.6	75.3
17歳	32人	同	149.2	46.0	75.9
		同	148.9	45.2	75.0
		同	149.5	46.2	75.6
18歳	2人	同	149.5	47.5	77.2
		同	147.2	46.9	75.7
		同	150.1	47.7	77.6

1100

昭和七年度第一學期(毎年六月中検査)(本校制定テスト)女子體力検査合格者左の通り

- 第一級合格者 ナシ
- 第二級合格者 四菊 長山菊代 同 羽倉玉枝
 四菊 堀初枝 同 揚井竹子
 一梅 早川喜美 同
- 第四級合格者 四菊 末岡サカエ 同 玉井喜久子
 四梅 岩崎 幸子 同 尾崎富美子
 同 末武 政子 同 中村 聖子
 同 藤永 芳枝 三菊 山本 愛江
 三梅 吉田早苗子 二菊 田村富美枝
 同 寺本 文子 二松 金子タツエ
 一菊 砂 良子 同 伊藤 久子
 同 山根 清子 一松 阿武 孝枝
 同 金子 敏子 同 弘長 治子
 四菊 吉賀 澄子 同 岩本フミヨ
 同 小谷 幾子 同 齋藤 富美
 同 冷泉 龍子 三菊 藤田 光子
 同 山村富士子 三梅 高崎千壽子
 同 田村 文子 同 並川 文江
 二菊 野坂みち子 一菊 松本 富美

第六級合格者

- 一梅 井上多美恵 同 山本 文子
- 一松 秋山集義子 同 佐々木 翠
- 同 波多野文江 同 藤田 徳子
- 同 藤野千代子 同
- 同 賀田多美代 同 島屋 光子
- 同 澄野万龜枝 同 林 英子
- 同 藤野 文枝 同 松本 禮子
- 同 高松 正子 同 永田 泰子
- 同 山縣 節子 同 吉田 泰子
- 同 植村千壽子 同 岡村 公子
- 同 松浦ツネ子 同 三梅 大橋タカ子
- 同 田村 里子 同 室谷 敦子
- 同 横山 壽子 同 二梅 岡田 公子
- 同 岡村キミ子 同 馬屋原三枝子
- 同 小川 菊江 一菊 小万 美香
- 同 木村 艶子 同 齋藤 芳枝
- 同 日名内多美子 同 三上 安子
- 一梅 油屋 嘉乃 同 荒川 君子
- 同 幸坂キクエ 同 中島 久江
- 同 原田 菊子 同 一松 今田 静江
- 同 柏村 清子 同 佐古 淑子

昭和七年度第二學期(毎年十一月中検査、文部省體育聯盟制定)女子競技検査合格者

- 第三級合格者 四菊 賀田多美代 同 末岡サカエ
- 同 玉井喜久子 同 長山 菊代
- 同 羽倉 玉枝 同 弘長 治子
- 同 堀 初枝 同 松本 禮子
- 同 揚井 竹子 同 吉賀 澄子
- 同 岩崎 幸子 同 岩本フミヨ
- 同 尾崎富美子 同 未武 政子
- 同 藤永 芳枝 同 小野村壽子
- 同 藤田 光子 同 山村富士子
- 同 岩城 文子 同 田村 文子
- 同 並川 文江 同 山田 英子
- 二菊 小田 セツ 同 山下タカ子
- 同 藤井 壽子 同 村木 幸子
- 同 矢次 文子 同 砂 良子
- 同 伊藤 久子 同 大岡 延子
- 同 齊藤 芳枝 同 揚井 虎子
- 同 山根 清子

1101

權威と數に燦然と輝く
優勝カツプ!!

之ぞ本校六百の乙女の魂であり努力の結晶である

十四の優勝カツプ

本館の正面入口の右側に古い應接室がある。何に氣なくはいると右側に白布を敷いた長い机の上に大小無数のカツプが塵埃一つなく整然として排列してあるのが目につくであらう。之れを昭和七年九月より十一月の三ヶ月に渡りて縣内に或は縣外に於ける多數の陸上競技大會に於て本校が血の出るやうな努力と涙と熱とを以つて獲得した榮譽ある優勝カツプである。ペンを取るにあたりありし昔のスパイクの跡をたどり記憶に残るままを述べれば、

西部女子中等學校體育大會

山口縣西部女子中等學校體育聯盟主催の西部女子中等學校體育大會は九月廿三日昨年同様、下關市外長府グラウンドに開催さる。

本校選手は(陸上競技十五名、排球十名、庭球六名、籃球五名、合計三十六名)前日筒井校長先生の御懇切なる御訓示をかたじけのふし、岡田、土屋、七俣、繩田、藤田の

諸先生の引率のもとに二番の上り列車にて長府グラウンドへ急ぎ、長府高女寄宿舎に戦勝を祈りつゝ一泊。明ければ九月廿三日氣づかはれたる夜來の雨は早朝より秋陽うらゝかに照り、微風ありて誠に申し分なきスポーツ日和である。競技はトラウツクに、フキル下に、ジャンプに、スローに、若き乙女の輕快、躍動は次から次に展開されて行く。

昨年、下學年、陸上競技に於て斷然他をリードし、庭球及總得點に於て二等の好成績を挙げ、萩高女の名譽を發揚したのである故に本年は更に一步進んで全種目に必勝を期すべく選手は終始一貫、緊張と努力を以つてスポーツ精神の發揮に努力す。

戦は刻一刻と感激の極に達し、遂に上學年下學年の陸上競技及四百米繼走に優勝し庭球及總得點に於て二等の好成績を挙げ五つのとうときカツプを獲得したのである。

陸上競技

上學年陸上競技

- 一等 萩 一九點
- 二等 下關 一九點
- 三等 山口 一八點

四等 防府 八點

五十米決勝

- 一等 七秒四 並川文江(萩)大會新記録
- 二等 田畑梅子(香川)
- 三等 藤井静子(防府)
- 四等 吉倉婦美子(山口)

並川は第二豫選に於て、七秒四の大會新記録を作り、再度決勝にて新レコードを作る。

ピストルショットと共にスタートするや四選手は殆んど並行し卅米あたりより並川トップに出で、ダツシュ強く二着との差三米餘にてゴールに入る。

百米決勝

- 一等 十四秒四 並川 文江(萩)
- 二等 藤井 節子(防府)
- 三等 長尾 光子(萩)
- 四等 伊達千鶴子(下關)

並川準決勝に於て十四秒四の本大會新記録を出したるも轉戦の疲労回復せず遂にニューレコード出ざるは遺憾である。洗練されたホームに於て二着との差四米を引離してテープを切る。

四百米繼走決勝

一等 萩 五十九秒二 大會新記録

(三年並川文江 同 長尾光子 同 山村富士子)

同 植村千壽子)

- 二等 下關
- 三等 山口
- 四等 田部

並川トップに出で五米を引きはなし、植村へバトンを渡し植村六米位の差にて山村へ渡し山村良く走り十米の差をつけラストの長尾へ渡す長尾のピツチ強く二十米の差をつけて一着となる。

走幅跳決勝

- 一等 村井(下關) 四米三二
- 二等 力石(山口) 四米二六
- 三等 河野(同) 四米〇五
- 四等 小澤(防府) 三米九五

走高跳決勝

- 一等 村井(下關) 一米三〇 大會新記録
- 二等 平田(田部) 一米二五
- 三等 玉井(萩) 一米二五
- 四等 桃井(阿部) 一米二二

三段跳決勝

- 一等 田畑(香川) 九米一四

- 二等 保積(下關) 九米〇二
 - 三等 小澤(防府) 九米〇
 - 四等 力石(山口) 八米九〇
- 籠球投
- 一等 岸本(山口) 二十一米六八 大會新記録
 - 二等 藤本(同) 二十一米三五
 - 三等 楠部(下關) 二十一米〇一
 - 四等 堀(萩) 一九米八一五

下學年陸上競技

- 萩高女斷然他をリードし卅一點にて優勝
- 萩 卅一點
 - 下關 廿三點
 - 防府 十一點
 - 宇部技 四點
- 下學年陸上競技は豫想通り萩高女強く斷然他をリードし全種目に得點卅一點を獲得して優勝す。
- 五十米決勝
- 一等 藤井 壽子(萩) 七秒八
 - 二等 藏本登美子(下關)
 - 三等 村木 幸子(萩)
 - 四等 福田 初枝(深川)

一回で出揃ひ藤井スタート悪く卅米邊よりスタートダッシュ強く二着との差一米餘にてゴールに入る。

百米決勝

- 一等 矢次 文子(萩) 十五秒
- 二等 古田 清子(下關)
- 三等 藏本とみ子(同)
- 四等 未岡美代子(萩)

四百米繼走決勝

- 萩 (二年藤井壽子 同村木幸子 同矢次文子 同木下タカ子) 一分三秒
- 下關
- 宇部技
- 厚狭

昨年萩高女五十九秒二即ち自己の作れるレコードを破るべく力走したるも練習不足、轉戦のためレコード破れざるは遺憾であり。

走高跳決勝

- 一等 寺本 文子(萩) 一米二五 大會新記録
- 二等 中尾 壽子(下關) 一米二〇
- 三等 淺川トシ子(防府)
- 四等 金本サツキ(田部) 一米一五

寺本一米三〇へバーを上げたるもおしくもキツクたりなため落とす。

走幅跳決勝

- 一等 木下タカ子(萩) 四米五五 大會新記録
- 二等 佐伯 富代(防府) 四米二〇
- 三等 向山スミ子(下關) 四米一〇
- 四等 山田 月子(厚狭) 三米八五

木下昨年自己の作れるレコード四米四五を第二回目に破る。

三段跳決勝

- 一等 木下タカ子(萩) 一〇米〇四本縣大會新記録
 - 二等 向山スミ子(下關) 九米〇五
 - 三等 濱田 益子(防府)
 - 四等 砂 良子(萩)
- 木下本縣大會記録九米八一を第三回目に破りベストシツクス轉戦の都合で棄權す
- 籠球投決勝
- 一等 佐伯富代(防府) 二三米〇一 大會新記録
 - 二等 前田久子(山口) 二二米七五
 - 三等 永竿英子(下關) 二〇米七〇
 - 四等 矢次文子(萩) 二〇米四九

庭球

- 優勝戦
- 山口三—〇萩
- 川崎 四—〇 松浦
 - 滿井 四—〇 藤永
 - 宮田 四—一 馬屋原
 - 原谷 四—一 佐竹
 - 倉本 四—二 賀田
 - 鹽見

各校總成績表

校名	排球	籃球	庭球	上學年陸上	下學年陸上	得點
1 山口	優勝	同	同	三等	〇	十四點
2 萩	〇	〇	二等	優勝	同	十一點
3 防府	三等	同	〇	四等	三等	七點
4 下關	〇	〇	〇	二等	同	六點
5 厚狭	四等	二等	四等	〇	〇	五點
6 宇部	二等	四等	〇	〇	〇	四點
7 長府	〇	〇	三等	〇	〇	二點
8 宇部	〇	〇	〇	四等	〇	一點

(一等四點 二等三點 三等二點 四等一點)

山口縣體育大會

山口縣體育協會主催第二回縣下女子中等學校體育大會は秋空一碧一沫の雲さへなく晴れ渡りたる十月二日宇部市神原グラウンド及宇部高女球場に於て盛大に舉行さる。

大會前日本校各部選手（陸上競技九名、庭球四名、排球九名、籃球五名）は必勝を期し、土屋、七俣、伊藤、藤田の諸先生に引率され、宇部高女寄宿舎へ一夜の夢を結び戦勝を祈る。

明くれば二月早やくも縣の西方より或は東方より球技の強剛、女子師範、山口高女を始め、陸上の玉下關、防府高女等續々グラウンドにつめかけ、球技に陸上にツレニングを開始すれば、我おとらじと並川、木下の至寶を始め、長尾山村、植村、藤井、村木の同志滿々たる諸嬢洗練されたホームでオーミングアップを開始すれば、スタンドよりたへず拍手起る。

やがてピストルショットと共に五十米豫選の火ぶたは切らる、百米に、二百米に、四百米繼走に、次から次に演技はとどころりなく進行し愈々白熱化し、若き乙女の血潮は高鳴る。

遂ひに本校木下は三段跳に於て二等、走巾跳に於て四

米六七の好レコードを出して優勝、尊きカップを獲得す。

一方四百米繼走に於ては第一豫選に於て五十六秒二、第二豫選に於て五十六秒フラット同じく決勝に於て之れと等しきレコードを出し二等との差二十米餘を引離して裕々としてゴールに入る。

昨年の縣レコード五十八秒を破る。木下、並川、長尾、矢次の平常の自覺せる合理的練習と奮闘の結果である。

藤井、山村、村木、寺本の諸嬢、五十米に百米に或は走高跳に豫選にパスしながら入賞出來ざるは遺憾なことである。

西日本リレーカーニバル

九州陸上競技聯盟主催第六回西日本リレーカーニバル祭は十一月廿日戸畑市外明治専門學校グラウンドに於て開催さる參加校は戸畑、小倉、門司高女等九州の諸強剛を始め十數校集まり、本校よりは三年、並川、長尾、二年、木下矢次、藤井の諸嬢より成るリレーチーム出場。

前日土屋、七俣、藤田の諸先生に引率されて戸畑に向ふ。午後明專グラウンドを見學し、小倉驛前の靜かな館へ二泊。明くれば廿日、空はどんよりと曇り今にも降りさうな薄寒き秋日和である。グラウンドは連日の雨続きでコンクリン最も悪く、好記録等出すには至難の極みである。

第十六回體育大會の記

第四學年 朝枝 都喜 枝子 記
木村 代志 枝子 記

待ちに待ちたる運動會

來れり 來れり

あゝ愉快

輕快なりズムの中に今日の運動會は始つて行く。秋たけなは十月二十三日、冷い迄に晴れ渡つた空、運動場の白いライン、學年別の色鉢巻、それ等と共に運動會らしいすがらしさ、輕快さを見せてゐる。純白な運動服に、溢れ出る力を包んだ五百の生徒達、その顔も生々としてゐる。

午前八時、いよいよ演技は開始された。第一回五十米競走、運動場が擴張されて始めての運動會で、各選手は伸びびく／＼と自己の全力を唯兩足に注いだ。總べて學年對抗なので各組の應援ぶりは格別である。等に入つた者は意氣揚々として、記録席で記録して貰ひ賞品を頂く、記録係は直に掲示係、探點係に報告する。一回毎に學年別の旗で等を示し、又グラフに表す。之によつて一同の心は益々奮起する。かく

午前九時演技は開始され、尋常科男女、高等科男女、中等學校男女、大學専門學校等各種の團體リレーは次から次へと何れも火の出るやうな接戦を演じ、プログラムは進展し、若きスポーツアスリートの躍動の好チャンスである。

午前十一時、女子中等學校四百米繼走豫選は開始さる。並川のトップ、木下のラストダツシュ強く、五十七秒フラットの記録でゴールに入る。

やがて午後二時最後の戦は來た。愈々決勝である。三十分前にウオーミングアップを終り決勝へ望む。胸は高鳴る眼は血走る、心臓は躍る、抽籤、スタート、ピストル、フアールと言ふやうにトラック選手の定石が始まる。

並川スタート良く最初よりトップに行き、長尾へバトンタツチの時は六米餘他を引離し、長尾又良く走り十米の差で矢次に渡す、欠次ストライドでぐんぐん引離しラストの木下へ十二米位の差をつく、バトンタツチ良く木下ロングストライドで最後のダツシュ強く、遂に二十餘米の差を以つてゴールに入る。時にタイム五十六秒七昨年レコード五十七秒を破る。小倉高女の保有する本大會レコード五十五秒を破ることの出來ざりしは遺憾なことである。

かかる各種の大會に於て團體に、或は個人に十四の意義ある、權威ある優勝カップは獲得されたのである（T生）

てプログラムは着々として進む。やがて予守リレー、猿廻リレーだ何れも昨年と同じで、そろそろ歩む者、横にねじれる者、とんでもない所で廻つたり、等々。われる様な應援に一層氣はいら立つ。さすが練習の効か四年生は断然優勢だ。次は小學校リレー豫戦。何時も體育會を飾る一つとなつてゐるが、今年はお場校が少く皆豫戦に入つた。

紅白のリボンをチヨコナンとつけた幼稚園児の、可愛い遊戯も間もなく済んだ。誰しもそのあどけなさに引きつけられるだらう。かくする間を寫眞師はあちらこちらと奔走して活動寫眞に収める。やがてお晝だ。

午後零時四十五分、民衆體操、やがて流暢な、軽快な樂の音につれて全校生徒の行進だ。黒い靴下、ズロース、白い運動服、すべてのそろひの姿が美しい。

その先頭を肅々として進む花輪、さうして優勝ゆツプ、選手の意氣が、氣持が、溢れ出る様だ。萩高女の運動部の未來を、我等及び一般觀衆の胸に強く思はする如く、それ等は高く澄んだ秋の空に向つてゆるやかに動きつゝ進む。涙ぐましいばかりに嚴肅な行進だ。

第二十四回パン食競争、風にゆられて口につかれて……ゆらゆらするお煎餅を、大きな口を明けながら追ひかけてゐる生徒達、ユーモアな光景だ。直線的な一年生のダン

ス奉祝、日の丸の旗の音も心よい。四年の社會競争はやつぱり體育會第一の人氣ものだつた。第三十八回職員競走、先生方はこの體育會の空氣にふれて、若かりしその昔に返られた様に快活に櫓ころがしに熱中されてゐる。生徒達は聲かぎり一所懸命で應援に努めてゐる。時恰も三時半、すべては終を告げた。一同集合、校長先生の御訓示、五百の生徒の顔は、かすかな疲れと大いなる満足に輝いてゐる。勝つた者も、負けた者も。

閉會の辭、萬歳三唱、聞け人々、若き血に燃ゆる我等の感激の叫びを

乙女の嬉びの叫びを……

空中高くさける煙火よ、我等の思出の忘れ得ぬこの體育大會を、何時までもしるす如く高らかに響け。

プログラム

- 1、保健體操 全校生徒
- 2、五十米 學年對抗
- 3、暗號競争 三年生
- 4、二人三脚 學年對抗
- 5、走巾跳、三段跳決勝 同
- 6、二百米 同

- 7、メヂンボール 同
- 8、輪廻リレー 同
- 9、籃球投決勝 同
- 10、百米 同
- 11、猿廻リレー 同
- 12、五十米 同
- 13、盲啞木劍 一年生
- 14、幼稚園遊戯 幼稚園生
- 15、フリーキックリレー 學年對抗
- 16、子守リレー 同
- 17、小學校選手優勝旗返還並ニ決勝 小學校選手
- 18、ダンス、オプウエヴス 四年生
- 19、排球職員生徒聯合對選手 職員生徒
- 20、職員對選手リレー 職員生徒
- 21、民衆體操 全校生徒
- 22、行進 同
- 23、盲啞リレー 學年對抗
- 24、パン喰競争 二年生
- 25、ダンス、奉祝 一年生



- 26、百足競争 學年對抗
- 27、社會競争 四年生
- 28、紅葉狩り 學年對抗
- 29、ダンス、荒城の月、スコットランド 二年生
- 30、障礙物 學年對抗
- 31、五十米 同
- 32、ダンス、ダニエーヴ 三年生
- 33、六才以下幼兒競争 同
- 34、一人一脚リレー 學年對抗
- 35、卒業生競争 卒業生
- 36、來賓競争 同
- 37、一六〇〇米リレー 學年對抗
- 38、職員競争 同
- 39、閉會式 同

昭和六年度南園會歳入歳出決算書

歳入之部

金參百五拾七圓壹錢
 金百參拾七圓
 金貳千八百八拾五圓
 金四百參拾六圓五拾壹錢
 金貳百貳拾壹圓拾錢
 合計 金四千參拾六圓六拾貳錢

前年度繰越金
 職員會費
 生徒會費
 財産收入
 雑收入

金百參拾七圓參錢
 金四拾圓六拾貳錢
 金貳百圓
 計 金參百九拾參圓四拾六錢
 合計 金參千七百參拾八圓拾壹錢
 右差引錢 金貳百九拾八圓五拾壹錢
 二十周年記念事業積立金
 運動部費
 園藝部費
 翠年度繰越金

篤志者芳名

昭和七年一月ヨリ
 同年十二月マデ

歳出之部
 經常費
 金八百參圓拾錢
 金貳百貳拾壹圓九拾貳錢
 金九百六拾參圓六拾七錢
 金參百六拾參圓七拾八錢
 金四百六拾參圓九拾八錢
 金五拾六圓五拾錢
 金四百七拾壹圓七拾錢
 計 金參千參百四拾四圓六拾五錢
 臨時費
 金拾五圓八拾壹錢

總務部費
 學藝部費
 運動部費
 會報部費
 圖書部費
 園藝部費
 補助部費

昭和七年一月十八日 書 籍 一部
 大阪市速浪區水崎町 中山太一
 昭和七年二月十九日 雜 剝 製 一
 萩市北古萩 木村隆法
 昭和七年三月十一日 支那人形 一
 萩市椿東 福島成子
 昭和七年四月二十日 金拾圓 懷 恩 會
 昭和七年五月七日 書 籍 一部
 東京市麹町區內山下町一丁目 中山文化研究所
 東洋ビルヂング四階
 年昭和七七月二十二日 書 籍 三部
 大阪速浪區水崎町 中山太一
 昭和七年十月二十九日 金拾圓

研究科規定

第一、萩高等女學校ノ卒業生ニシテ特ニ家政ニ必要ナル學科ノ研究實習ヲナサントスル者ノ爲ニ同窓會ニ於テ研究科ヲ設ク
 第二、研究科ノ修業年限ハ壹ケ年トス但シ本人ノ志望ニ依リ壹ケ年以上引續キ研究實習スルコトヲ得
 第三、研究科ハ本校南園館ニ置ク但シ本校ノ授業ニ差支ナキ時ハ本校ノ教室ヲ借用スルコトアルベシ
 第四、學科並教授時數左ノ如シ
 習字、珠算、家事、裁縫、手藝、音樂、體操、作法
 計三二時間
 尙隨意科目トシテ生花茶儀ヲ教授スル外課外トシテ

阿武郡奈古村 岩武忠幸
 昭和七年十月三十日 金五圓 六尾アヤ
 阿武郡奈古村
 昭和七年十二月七日 滿蒙印畫輯 三部 齊加チセ
 大連市外周水子小野田
 セメント會社々宅
 昭和七年十二月十三日 金參拾圓 山本治郎一
 萩市御許町

講演見學等ヲ行フコトアルベシ
 第五、研究科生徒ハ研究科專任ノ教員及本校當該學科擔任ノ教員之ニ當ル
 第六、裁縫手藝材料ハ豫メ之ヲ一定セズ總テ家庭ノ有合セノ品ヲ携帯セシム但シ特ニ新教授ヲナス必要アル時ハ豫メ一定ノ材料ヲ準備セシムルコトアルベシ
 第七、裁縫手藝等ノ成績物ハ總テ教師ノ檢閲ヲ受ケ其成績ヲ帳簿ニ記入シ保護者ノ檢印ヲ受クルモノトス
 第八、學期、休業日、授業ノ終始總テ本校ト同一トス
 第九、授業料月額(八月ヲ除ク)貳圓及南園會費月額五拾錢ヲ毎月五日限リ納付スルモノトス但シ一月四月ニ在リテハ其月十五日限リトス
 第十、全月缺席者ト雖モ當科ニ席ヲ有スル者ハ前記金額ヲ納付スル義務アルモノトス
 第十一、所定ノ課程ヲ修了セル者ニハ修了證書ヲ授與ス
 第十二、研究科生徒ハ規律ヲ重シ禮儀ヲ正シクシ質素勤勉ニシテ常ニ本校生徒ノ模範ヲラン事ヲ心掛クベシ
 萬一其ノ本分ヲ忘レ本校ノ體面ヲ汚スガ如キ行爲アリタルトキハ相當ナル處分ヲナスコトアルベシ
 第十三、服裝ハ本校制服ノ一部ヲ改造セシモノトス但シ事情ニ依リ質素ナル和服(着袴ノコト)着用妨ゲナシ

會告

一、卒業回数變更について

從來本科卒業生は本科設置以來の何回卒業生といふことになつておりましたが、今後は本科實科共に創立以來何回目の卒業生といふことに改め、實科卒業生は「第何回卒業生(實科)」(回数に變りはありません)とし、本科卒業生は「第一回卒業生が創立以來第九回の卒業に相當致しますから、左表の如く卒業回数を變更致します。

舊回数

- 本科第一回卒業生
- 本科第二回卒業生
- 本科第三回卒業生
- 本科第四回卒業生
- 本科第五回卒業生
- 本科第六回卒業生
- 本科第七回卒業生
- 本科第八回卒業生
- 本科第九回卒業生
- 本科第十回卒業生
- 本科第十一回卒業生
- 本科第十二回卒業生

變更せし回数

- 第九回卒業生 (本科)
- 第十回卒業生 (本科)
- 第十一回卒業生 (本科)
- 第十二回卒業生 (本科)
- 第十三回卒業生 (本科)
- 第十四回卒業生 (本科)
- 第十五回卒業生 (本科)
- 第十六回卒業生 (本科)
- 第十七回卒業生 (本科)
- 第十八回卒業生 (本科)
- 第十九回卒業生 (本科)
- 第二十回卒業生 (本科)

一、會員の通信について

學校又は南國會苑の通信若くは職員宛の書狀(年賀狀の如きも)には必ず卒業の年(又は卒業回数)現住所、氏名、

福式啓蒙式

福式啓蒙式は、本校創立以來、毎年行われてきた重要な行事の一つである。この式は、卒業生に対する激励と、在校生に対する啓蒙を目的として行われる。式の内容は、校長の訓詞、卒業生の報告、在校生の宣誓などからなる。この式を通じて、卒業生は、卒業後も母校とつながり、社会で活躍することを期す。在校生は、卒業生から学び、自ら進んで学業を遂げることを誓う。この式は、本校の歴史と伝統を継承し、未来を拓くための重要な機会である。

卒業生は、卒業後も母校とつながり、社会で活躍することを期す。在校生は、卒業生から学び、自ら進んで学業を遂げることを誓う。この式は、本校の歴史と伝統を継承し、未来を拓くための重要な機会である。

(改姓せられた方は舊姓も)を明記して下さい。

一、會員名簿について

會員名簿は相當苦心して作つたものですが、何分多數のことですから、不備の點も有る事と思ひます。特に住所不明の會員の多數ある事は誠に遺憾なことであります。御心當りの方は御自身のことは勿論、御友達のことも、御遠慮なく至急御知らせ下さい。御助力によつて、なるべく完全なものにしたいと思ひます。

一、會員身分異動に就いて

會員の方にして、轉居、改姓その外身分上につき、異動を生じた時は、その都度至急御通知を願ひます。御通知なき時は會誌や會報を送附することが出来ぬのみならず、學校よりのすべての通信も出来なくなり、何かと不便を生じますから。

一、縁の圓投稿について

校外會員の通信は、讀者に非常な感興を起さしめるものであります故、一言半句の斐書文でもよろしいから多數御投稿下さいませ御願ひ致します。

一、會誌發送について

會誌代前納の方にして、會誌を御受取りにならぬ時は何かの行違ひにつき、御遠慮なく至急會報部宛御照會を願ひます。

一、會誌代について

會誌代は一冊金參拾五錢につき至急前納して下さい。右代金を前納せられぬ方々は七月發行する南國會報を送附するだけです。それ故南國會誌御入用の方は、現住所、氏名(舊姓も併記のこと)並に卒業の年を明記し別紙振替用紙御使用の上豫め申込んで下さい。但し在校會員は毎月南國會費を出して居ますから別に納入するに及びません。校外會員の方はなるべく南國會誌を御購讀になります様御願ひ致します。

會員名簿

(昭和八年一月十五日現在)

○印……南國會基金完納者

十印……補習科及研究科修了者

●印……死亡者

(昭和八年一月十五日庚午)

會員名錄

●甲………

十田………

○甲………

特別名譽會員

●兵庫縣武庫郡本山村(逝去)
●東京市芝區今里町
同

名譽會員

兵庫縣武庫郡精道村打出
同 神戸市東平野
玖珂郡神代村
阿武郡明木村
●豊浦郡長府町(逝去)
●萩市(逝去)
●都濃郡下松町
●大阪市長區生玉町六十一番地(逝去)
●萩市江向
●豊浦郡彦島町(逝去)
萩市江向(京都府相樂郡東和東村大字門前四三)
同 江向(大阪市長區東統谷町四丁目)
同 今古長(阿武郡大井村一、七五九)
同 江向(島根縣倉吉町八一三)

特別會員

久原 文子氏
久原房之助氏
久原 清子氏
齊藤 幾太氏
田村 市郎氏
松浦 誠氏
瀧口 吉良氏
横 俊治氏
増山 宗史氏
岡村 勇二氏
岡 十郎氏
林 勇輔氏
岡 乙治郎氏
筒井捨次郎
岡田 千引
伊藤 通利
秋山 誠一

舊特別會員

同 土原(宮崎縣南那珂郡鶴戸村三三四)
同 江向(萩市四二五)
同 江向(厚狹郡厚南村九五三)
同 本校教員住宅(愛知縣海部郡立田村宮地三六一)
同 江向(豊浦郡豊田中村字八道九二一)
同 江向(福岡縣八女郡福島町本町二番地ノ二五二)
同 平安古(福岡縣田川郡後藤寺町見立三二七八)
同 土原一七二
同 堀内(山口市上宇野令二三四六)
同 河添三軒屋町(茨城縣鹿嶋郡谷貝村上谷貝五二)
同 香川津三、七二五
同 御許町(大分縣速見郡杵築町二六五)
同 堀内一五〇
同 江向一三〇
同 土原三〇ノ二
同 吳服町一六三五
同 南古萩(豊浦郡田掛村一三〇)
同 江向(東京市長區雪ヶ谷町二二五)
同 阿武郡佐々釜村(死亡)
同 吉敷郡小郡町
同 南滿洲撫順南臺町一ノ一
土屋 滿美
北野 ウメ
鶴田 熊雄
神田 信明
今城 四郎
吉原 正士
七俣 與
藤田 直人
河内ツネノ
藤田 好男
岡田 カツ
河合 ワカ
池内登美子
有田 晉彦
今道 貞一
上村 政三
和田 涉
笠置 はま
松田 ヘル
三隅要之助
植村 秀枝
(豊田)

滋賀縣神崎郡北五個莊村小幡
廣島縣立吳高等女學校
岡山市南片二七七
勸靜不明
長崎縣師範學校
萩市土原
山口縣防府町榮町
阿武郡佐村
京都府宇治町宇治火藥製造所官舎
名古屋市外守山町守山八四六
萩市平安古
靜岡縣立靜岡高等女學校
神奈川縣小田原高等女學校
東京府下大森新井宿一〇四九
●都濃郡福川町(死亡)
●萩市河津
熊本市池田町字岩立七〇一
●吉敷郡善山村(死亡)
埼玉縣北埼玉郡中條村字今井
下關市長崎町上條二一五四
和歌山縣有田郡廣
福井市寶永中町二五
●萩市堀内(死亡)

(松宮) 細居 シヲ
高田 哲
(河原) 西原 夏
前田 直子
(坂口五郎) 三戸 宣光
山内 清次
中野 スエ
藤井 二郎
今井チエ子
山田 兵吉
竹内新三郎
飯塚マツヨ
(井上) 飯塚マツヨ
(沼田) 北川 恒
(齋藤) 大谷 タカ
田中タカヨ
田村 繁
米原 鶴太
本永 旭
(八木) 井桁コサミ
(田村) 進藤 ウメ
(坪野) 三崎 シヅ
(奈良) 古津差起子
河村タケヨ

萩市平安古
東京市高田區雜司ヶ谷金山三三九
佐波郡出雲村
●萩市濱崎(死亡)
●同 江向(死亡)
同 車田町
長崎縣立諫早中學校
勸靜不明
吉敷郡岡村
阿武郡三見村
大阪府此花區西島町北港住宅一二二ノ二
勸靜不明
萩市今古萩
●同新堀(死亡)
千葉縣千葉市千葉淑徳高等女學校
廣島市外牛田村枝寄
兵庫縣魚崎町東橫屋
吉敷郡大森村
廣島縣立吳高等女學校
勸靜不明
山口縣岩國高等女學校
吳市大正中學校
廣島縣立庄原實業學校

(藤野) 田總百合之助
馬淵 カネ
重本マサ子
中津江延彦
福島 誠清
三輪 マサ
石橋 孟
飯塚 ヨシ
(堀上) 西村 キヨ
長澄 市衛
五十崎 和
(中村) 金子モ、エ
伊藤 セイ
中村 彌兵
關田 貢
河村 一郎
世良 ハツ
安富 敦子
野田 葉月
原田 梅子
上利 テイ
柳原 良助
野田ヨシコ

大阪市大手前高等女學校
神戸市立第一高等女學校
神戸市立第一高等女學校
東京市外巢鴨町二丁目三十五
萩市江向
大分縣大分市春日町
大津郡仙崎町
朝鮮忠清南道公洲高等普通學校
萩市平安古
熊毛郡勝間村
都濃郡福川町
長野縣立中野高等女學校
京城府黃金町二丁目五一
●萩市小橋筋(死亡)
山口市後河原
朝鮮元山春日町二六
長野縣長野市
大津郡三綱村
福島縣石城平第一尋常高等小學校
都濃郡花岡村
萩市平安古
鳥根縣濱田女子師範學校
山口縣立防府高等女學校
萩市樺町
●神戸市立第二高等女學校

(齋藤) 森脇 八重
藤井 俊治
安永 スエ
佐々木ヒデ
山本 勉彌
堀江ウタロ
齊木 ミツ
富谷 寛一
安野 章
守田 茂作
片山 幹子
俣野 信
吉田 勝郎
長濱 友雄
齋藤 彦一
赤川 正三
布村 とき
宇野 ヒサ
入江好次郎
松村 百子
田淵 武彦
玉置 文
中野 貞介
池上岩太郎
原田 チロ

●第一回 卒業生(實科)
大正二年三月(年齢順)
(氏名)(寄姓)(本籍)(現住所)
○松野 ユキ 萩 土原 大阪府下泉北郡高石町羽衣八
六五ノ四
住所不明
○松浦 コウ(伊藤)同 同
○松本 早知 同 東田町 (死亡)
○梅田 カツ(宮本)同 南片河 朝鮮京城大和町三ノ一〇
○金田 トキ 大瀬戸崎
○大草政子(山本)萩平安古 (死亡)
○緒方 幸(山本)同 濱崎 宇田郷村
山口 エン(津田)同 東田町 大阪府住吉區平野流町女子師
範學校前 山口民次郎方
○井原 ミツ(竹内)同 惠美須町
○河崎 スエ(中島)同 御許町 厚狹郡船木町字小野
○高垣 清子 同 古萩
○田中 冬子 同 樺 (死亡)
○伊藤ミドリ(齋藤)阿 大井村 神戸市灘區高尾通二丁目二八四
○山下 歌子(小澤)萩 樺 大阪府泉北郡濱寺村訪森字船
尾通
○久保田ミサ子 福岡縣小倉市外中津口一五一
●後藤 ハル(田邊)萩惠美須町 (死亡)

三

十〇水井 ミツ(村田)萩 椿東 大坂中河内堅下村安堂
 十一〇依々木フジロ 阿 三見村 朝鮮咸鏡北道明川郡東面明洞
 公立普通學校校長宿舍
 〇金子 ハツ 同 大井村
 〇福岡 サト(藤田)同 福川村 京城和泉町鐵道官舎十一ノ一
 十〇長谷川サダ(野上)萩 土原
 十〇倉田 静子(倉田)同 西田町
 十〇水木 チヨ(倉田)同 今魚沼町(死亡)
 〇藤井 キク 阿 徳佐村
 〇大崎トシヨ(平田)萩 熊谷町 下關神之町大崎保太商店
 十〇馬庭タマコ(金子)阿 福川村 萩濱崎町
 十〇松井 チヨ(河上)萩 橋本 臺北西門町二ノ一七
 津田 桃代(金子)同 椿東 住所不明

第二回 卒業生(實科)

大正三年三月(年齢順)
 安澤 マサ(大岩)萩 新堀 住所不明
 〇時藤 シナ(松村)同 江向 松村榮方
 〇岡 レン(大崎)大 三隅村 萩市小橋筋
 柱 シズエ(岡司)萩 椿 住所不明
 十〇有田 ミサ(阿部)同 江向 臺灣臺北東門町一〇六
 十〇桑木 イヅ(多田)同 椿東 福岡縣善導郡上穂波村字長雄
 原田 トミ(上田)同 河添 嘉福株式會社嘉福鐵業所

十〇小野 キク(松村)同 江向 小倉市外足立村三萩野萩崎
 十〇坂本 タカ(岡)阿 小川村 須佐町本町
 〇山縣 於松(伊藤)同 大井村 住所不明
 宮本 タカ 同 大井村 萩市新堀
 〇横地 幸(河野)萩 江向 住所不明
 田邊 カメ(山下)同 椿東 (死亡)
 〇河村タミ子 同 熊谷 (死亡)
 十〇見玉美智子(三宅)同 江向 住所不明
 澄田 ハツ 同 堀内 福岡縣田川郡神田村字金田東
 棧橋
 吉本 ヨシ(神村)同 米屋町 朝鮮京城府元町一ノ一三〇
 阿部 スマ 同 片河 大津郡深川村正明市
 〇坪倉シゲヨ(岡部)阿 須佐町 住所不明
 十〇岡田 英子(山根)萩 河添 住所不明
 〇河村 貞子(三好)同 西田町 住所不明
 〇藤田 豊子(未成)同 平安古 住所不明
 十〇三浦 テイ(大中)無 淺江村 熊毛郡島田村原

第三回 卒業生(實科)

大正四年三月(年齢順)
 〇阿武タケヨ 阿 福宮村
 〇加藤 雲(栗原)下關市田中新町住所不明
 十藤田 優子(筒島)阿 吉部村 大津郡三隅村
 十〇島田ツメヨ(山本)萩 濱崎 下關市入江町海岸通り

四
 〇石津喜與子(中村)萩 東田町 住所不明
 〇溝端 フジ(葦刈)同 河添 廣順市忠海町二五
 〇上田 信子 阿 明木村
 〇三浦 君子(神代)萩 河添 住所不明
 〇玉木 チヨ(大賀)同 藤屋町 岡山縣津山市
 十三 佐 節 美 大嶺村 住所不明
 十〇玉木ハツヨ(藤波)萩 米屋町 下關市神之町大通リ九五
 十〇吉田 チヨ(原)同 土原 住所不明
 十〇大野 アキ(森重)阿 大井村 住所不明
 〇木原 雲(伊藤)萩 堀内 住所不明
 〇島田 壽美 同 椿町 (死亡)
 十〇内藤 千代(堀) 同 濱崎 (死亡)
 〇上田 正子 同 椿津原 住所不明
 〇高橋 恭(小野)阿 奈古村 (死亡)
 十〇藤家キシヨ(長見)萩 藤屋町 住所不明
 十〇桂 ナキ(中原)同 椿東 大坂市西成區玉出町千本通五
 丁目七
 〇島 小ナ(安達)同 同 (死亡)
 十〇岡藤ミヨ(藤本)同 御許町 香川縣今治市啓巳通り
 十和田 キク(原) 同 平安古 住所不明
 〇藤谷 千代(中原)同 橋本 朝鮮釜山府大倉町四丁目
 村田 マシ(今地)阿 川上村 同
 西岡マサヨ(倉重)萩 椿東 下關市衛生武久町一二五西岡
 方

五
 〇藤村 マツ 阿 川上村 住所不明
 〇松岡 花子(松野)萩 土原 東東府大井町出石五五六
 三浦 チセ 同 濱崎 住所不明
 〇瀬戸 由子(河北)同 同 京都府下綾部町本町五丁目キ
 リスト教會
 〇河野ミツ子 同 今古萩 (死亡)
 〇山口屋シナ(山下)同 山田 住所不明
 島本 チヨ(大森)同 濱崎
 〇伊藤 ミチ(村上)同 東田町 住所不明
 十〇笹村 壽子(海) 同 椿東 朝鮮全北鎮南
 〇長崎チエ子(三上)同 山田 東京本郷區本郷五ノ一四
 〇玉木 ヨシ(西山)同 川島 萩市金谷
 〇大橋 トメ(國弘)同 同 山口市木町
 〇下瀬 清子(林) 同 平安古 住所不明
 〇尾坂喜與子(君谷)阿 小川村 (死亡)
 〇野村ツルヨ(田中)萩 椿東 (死亡)
 〇中村 操(田村)同 椿 住所不明
 十〇山下 壽美(吉田)同 川島 東京府花房郡平塚町大字戸越尾百ノ帖
 三六四
 〇萩村ツミコ(田中)同 椿東 (死亡)
 十〇齋藤 ヌス 阿 大井村
 〇三好マヤコ(秋枝)同 福寶村 萩市香川津
 十〇厚東 佐世 萩 椿東
 〇原 フミ(長井)阿 川上村 下關市須磨松風町六丁目二十
 四ノ一

- 南方 京 萩 樺東 神戸山下町四丁目二一
- 植村サチヨ(山本)阿 三見村 萩市吉田町
- 三原 幸子(山中)萩 橋本 山口市今道二三
- 福永 フサ(伊藤)阿 川上村
- 十倉増千代子 同 高俣村 (死亡)
- 十林 シズ(河田)萩 米川村 大坂市西區長堀北通二丁目一番地 米元幸重内 (死亡)
- 齊藤 キタ 萩 樺 朝鮮京畿道長嶺邑内 (死亡)
- 金井 カメ(阿武)同 樺東 朝鮮京畿道長嶺邑内 (死亡)
- 赤司 尊子(倉田)同 吉田町 (死亡)
- 井上キミコ(黒瀬)同 江向 (死亡)
- 山下 サト 同 山田
- 吉賀 クリ(三村)同 濱崎 吉賀幸助方
- 小宮 トヲ(中原)同 土原 朝鮮釜山本町一丁目
- 藤野 トシ(吉賀)同 熊谷町 厚狭郡船木町
- 藤井 菊代(龜見)同 樺 萩町土原 永田恒一
- 津守 フキ(重政)同 橋本町 豊浦郡西市町
- 中村 スミ(大山)同 樺 東京府下松澤村上北澤文化村内一七〇 (死亡)
- 松原 ツル 同 米屋町 下關市丸山町八九〇
- 久保田ヨシ(穴田)同 土原
- 十村木 秀子 同 堀内 福岡縣若松市堺町四丁目
- 十能美滿壽子 同 江向
- 馬屋原孝子 同 樺東

- 十内藤ヨシヨ 同 江向
- 十佐藤シズ(金子)同 平安古 住所不明
- 渡邊 テツ(村田)同 江向 萩市堀内
- 十宮原 千世(河野)同 土原 美禰郡赤郷村
- 小笠原嘉子(三好)同 濱崎 東京府下萩窪二ノ一〇三
- 能美 ヨシ(片山)同 樺東 住所不明
- 十池田マツヨ(井上)阿 福川村 山口市西白石
- 長嶺 芳子 同 徳佐村
- 小河ハナエ(岩竹)萩 江向 阿武郡小川村
- 十白井 ハナ(平木)同 樺 愛知縣寶飯郡國府町大字久保
- 三浦 ヨシ 同 江向 (死亡)
- 金子 トミ 同 樺東 住所不明
- 三浦サダ(阿座上)同 江向 住所不明
- 岡野 千代(長谷)同 津守町 住所不明
- 田原千代子(石井)同 田町 横濱市上反町五〇〇吉田〇泰
- 伊藤 喜代(古橋)同 川島 司方
- 野村 フジ 同 米屋町
- 十田村 清(金子)阿 宇田郷村大坂市天王寺區眞法院町二番地 (死亡)
- 十榎原マサ 萩 堀内 (死亡)
- 大谷フクコ(堀永)同 東田町 萩市五間町
- 秋里ツズコ(松岡)同 樺東 美禰郡長登
- 淺野ミサヲ(伊藤)同 江向 東京府下高井戸町中高井戸谷

- 阿武 クリ(寺田)萩 樺東 萩市橋本町
- 松崎 チヨ(阿部)同 古萩 萩市江向徳隣寺裏川筋
- 土田 チヨ(松屋)同 東田町 同東田町梅月亭右
- 岡村シゲコ 同 平安古
- 十松井 松江(山本)同 江向 阿武郡淵富村
- 十三上 文子(松井)同 川島 大坂市東成區大宮町七ノ二二
- 藤厚 キタ(三村)同 樺東 萩市推原
- 十原 ヘル(澤部)同 同 (死亡)
- 小野フミコ 阿 奈古村
- 十藤井 政(大賀)萩 江向 (死亡)
- 加藤 泰(竹重)同 同 福井縣福井市浪花中町二十一番地加藤七三郎氏
- 黒瀬 ヒサ(宮原)同 山田
- 十佐村 ヨシ(安田)阿 福川村 (死亡)
- 十荒木ハツメ(米原)萩本市外黒髮村 山 大分縣宇佐郡四日市町寺
- 十堀 壽子(鈴木)萩 西田町 横濱市青木町澤渡谷一六〇〇
- 村岡ミヅリ(堀江)同 江向
- 村田 コト 同 熊谷町
- 植松 須恵(村田)同 江向 住所不明
- 林 保子(藤達)同 平安古 山口市八幡馬場
- 吉田 トキ(遠藤)同 古萩 吉敷郡小郡町柳井田
- 永松 静子(國重)同 樺東 朝鮮黄海道海州殖産銀行舎宅
- 十佐伯千代子 阿 福川村

第四回 卒業生(實科)

大正五年三月(年齢順)

- 十松井 豊子(河村)萩 橋本 (死亡)
- 米澤 秀子(和田)防府町三田尻 東京四ツ谷六番町四八
- 十山川 文子(阿武)阿 福川村 住所不明
- 古式 静 佐 中ノ關 住所不明
- 富塚 タネ(大田)萩 津守町 住所不明
- 堀永クリコ(増野)同 濱崎 臺北洲基隆郡金瓜石
- 兒玉 豊子(山根)阿 嘉年村 住所不明
- 高木 梅代 萩 濱崎 群馬縣吾妻郡鱒郷村吾妻川電力株式會社合井發電所社宅 (死亡)
- 十藤原 久枝 同 樺東 (死亡)
- 十山根マタコ(山下)同 平安古 (死亡)
- 北村 龜子(井本)阿 須佐町 小川村原中
- 十伊藤 光子(北村)阿 萩江向 (死亡)
- 十前田トミコ 同 地福村 (死亡)
- 江原キタコ(能美)萩 土原
- 佐伯 菊野(世良)同 濱崎 住所不明
- 十津原ミヨ(澄里)阿 三見村 (死亡)
- 鈴木 菊枝(猪口)兵庫縣一原郡松帆村 東京府下南葛飾郡金町一六二八
- 堀 富美(工藤)萩 南古萩 東京府下杉並町馬橋十

- 十〇中興 千代 鳥根藤吉田 住所不明
- 〇永岡フサコ(在々木)阿生實村 大津郡深川町
- 白井アキコ(吉田)阿 萩山田 萩市會江
- 長谷川トシコ 同 藤生村
- 〇岡村 ツル(横山)萩 河添 東京市外灘ノ川町北谷端三六
- 〇野村 マツ 同 榎東 (死亡)
- 〇大田 スミ(井町)阿 三見村 長野縣埴科郡屋代町
- 〇江山タキコ 萩 榎東式町
- 〇中村 絹子(岡) 同 川島
- 〇岡本 秀子(田原)同 山田 萩市五間町 岡本直介内
- 〇柏村 ヨシ(中村)同 川島 滿洲奉天松島町三柏村商會内
- 〇秋山 キク(香藤)同 御善町 (死亡)
- 〇登川 トヲ(桂木)阿 小川村
- 十阿武 ミト(河村)萩 榎東 四津線流南縣城康樂園醫務所 榎林式會社際運流南營業所
- 〇藤本 豐子(岩田)宇部市堀返
- 〇齋藤 喜美(伊佐)萩 榎東 萩市榎東中ノ倉
- 十〇安部 壽子(原川)同 土原 東京府下向島寺島町二〇八
- 〇黒瀬ビデ(久保田)同 榎東 住所不明
- 十〇長見マサコ 阿 福賀村 住所不明
- 〇下間 静子 萩 吉田町
- 〇高壽ヨシヨ 同 山田玉江浦 住所不明
- 十〇中鉢フヂノ(藤原)臺灣高雄州屏東四八九
- 〇井上ふみ子 萩 江向 住所不明

- 十〇藤井 文子(竹内)住 島地村 東京市外灘谷金王一二
- 十〇野上 壽恵 萩 土原
- 〇枝村 茂子(石光)同下五間町 京都府下新舞鶴町三條海岸三井物産 (死亡)
- 〇堀 綾子 同上五間町
- 〇吉村 キク 同 榎東 萩市中ノ倉
- 〇内山 ノブ(中村)阿 川島 臺北市外大正町七條
- 〇瀧田 高子(安田)同 河添 岩手縣沼宮内營林署
- 〇香藤ヤス子 同 榎大谷 (死亡)
- 〇末武 満子 同 榎東 阿武紫福村
- 〇玉井 芳江 同 江向
- 〇伊藤 君代(堀) 同 河添 (死亡)
- 十〇六草チヨコ(山本)同 平安古 (死亡)
- 〇藤山ユタセ 阿 紫福村 臺北市文化村二條
- 十〇藤井アキコ(難波)萩 米屋町 住所不明
- 〇宮川 八重(國司)同榎東鶴江 東京市外大井町鮫洲一三〇
- 〇宗樂シゲコ 同 橋本
- 〇坂口タカコ(高橋)同 江向 朝鮮水浦府祝町三丁目八番地 大連市薩摩町關東館口號
- 〇領家 マス(村上)同 東田町 朝鮮京城府旭町一ノ七十一
- 十〇榮近 雪子(植村)同 榎東 朝鮮京城府旭町一ノ七十一
- 〇阿武ミユキ 同 同 (死亡)
- 〇石川 文子 同 同 住所不明
- 〇水津フミ子(村木)同 同 廣島市白鳥九軒町一七八
- 谷井 雪子(穂) 同 江向 千葉縣銚子町榮町

- 〇花村 秀子 萩 堀内 名古屋市女子商業學校
- 十〇岡本 ミチ 同 吉田町 住所不明
- 〇堀 壽子 同 東田町 (死亡)
- 〇藤山 末(原)同 平安古 小量田町設
- 十〇白石 マス(山下)同 山田 住所不明
- 〇柴田タケヨ(吉岡)阿 高俣村 (死亡)
- 石井 壽万 萩 土原
- 〇石津 光子(白根)同 濱崎 住所不明
- 〇上田 ツル 同 御許町 (死亡)
- 〇久保 春枝(阿武)同 濱崎 萩市東田町
- 〇今地 マツ 阿 川上村 萩市江向
- 十〇吉田ヨシコ 萩 濱崎
- 十〇吉野俊子(中原)同 橋本 (死亡)
- 〇小笠原マス 同 堀内 住所不明
- 〇藤村 文子(野村)同 御許町 (死亡)
- 〇松本 アサ(後藤)同 今古萩 門司市丸山町二丁目
- 〇渡邊 八百 同 江向八丁
- 〇村田 照子(山中)同 橋本
- 〇永田 操(植村)同 榎東 (死亡)
- 〇河村 千代 同 新堀 (死亡)
- 〇松谷トヲコ(重枝)同 橋本 朝鮮仁川府濱町
- 〇藤井 良子 同 米屋町
- 〇福本 照子(齋藤)同 濱崎 東京市小石川區武島町三番地

- ### 第五回 卒業生(資料)
- 大正六年三月(年齢順)
- 〇志道 百重(宮原)美 赤郷村 岡山縣倉敷町倉敷紡績會社
 - 〇高橋 タミ(茂住)萩 堀内 宅
 - 〇三島 コロ 阿 三見村 (死亡)
 - 十都築 ユキコ 同 生雲村
 - 久村 トキ(小林)同 奈古村 住所不明
 - 〇後藤 フミ 萩 御許町
 - 〇松村 キク(中村)同 唐橋町 山口市後河原
 - 十〇倉富 イチ 都 風野村
 - 〇福根フサコ(富士見)玖岩國町 都濃郡徳山町字新町
 - 〇神田 雪江(伊藤)阿 大井村 朝鮮釜山辨天町三ノ二九
 - 〇永吉 芳子(伊藤)同 同 下關市竹崎町
 - 〇田原 ヨシ(伊藤)萩 榎小畑 神戸市西灘河原三八四
 - 神代 政子(村上)同 土原 兵庫縣武庫郡打出字三反田三
 - 〇萩原千代子(河村)阿 三見村 萩市八丁筋七九五
 - 〇大谷 壽(松尾)萩 榎東 萩市鹽屋町
 - 〇片山 キク(小河)阿 小川村 鳥根縣美濃郡吉田村
 - 〇磯貫 ツル 同 生雲村
 - 伊藤トミコ 萩 榎東 山口市飯田町 宮村竹藏方
 - 〇大津 アサ(榎木)天 三隅村 萩市橋
 - 山崎 サチ(河井)萩 川島 住所不明

- 平田 陸子(伊藤)阿 大井村 北海道北道釧路市農事試験場官舎
- 厚東 英子(福原)萩 椿東 住所不明
- 飯田 靜江(岸)同 椿 住所不明
- 長井 トミ 阿 川上村 萩市土原
- 十〇石川ハルコ 大 日置村 萩市椿沖原
- 〇師井 アイ 萩 熊谷町 (死亡)
- 十〇岡田八重子(松本)同 同 東京市世田ヶ谷區代田二ノ一〇五一
- 〇玉井 ヨシ(厚東)同 山田 (死亡)
- 田村 良子(近藤)同 椿東 朝鮮新義州守備隊官舎内
- 河崎 好子(竹内)同 古萩 神戸市運宮通二丁目三七
- 倉増 太代 阿 高橋村
- 十池田 京子 萩 熊谷町 (死亡)
- 十〇岸森 京 同 江向
- 藤本 芳江 同 御許町 住所不明
- 村田喜代子(金子)同 川島 住所不明
- 篠田 アキ(武田)同 山田 福岡縣直方町山部
- 川口 信子(河村)同 江向 北海道旭川市宮下通三丁目鐵道官舎
- 十〇田上ヨシ子 同 椿東 住所不明
- 十〇西島キヨコ(田中)同 椿 豊浦郡宇賀村本郷
- 小柳サヨ子(並川)同 河添 臺北市築地町三丁目五番地
- 十〇吉田 フミ(厚東)同 椿東 萩市松本新道
- 〇中嶋ヨシ子 同 土原 (死亡)

- 大谷チエヨ(武林)同 平安古 朝鮮咸鏡北道慶源守備隊官舎
- 榎原 静子(松本)同 東田町 住所不明
- 松尾 キク(中原)同 椿東 東京市世田ヶ谷區代田六三五
- 十〇宮川 ツル 同 濱崎 住所不明
- 西山キクヨ(田中)同 椿東 大阪府三島郡吹田町田中町
- 十〇齋木 ミツ(齋藤)同 八丁 大津郡仙崎町
- 井上 三枝(藤井)同 江向 神戸市熊野町四丁目六一
- 十田中 静子 同 椿町 (死亡)
- 長尾チヨノ 同 山田木間
- 十〇柴 田キク 同 江向
- 白石 則子(中原)阿 福川村 大津郡通村
- 松本喜久子 萩 椿東 神戸市平野矢部町二一二
- 十〇渡邊 嘉子 同 古萩 住所不明
- 十〇久保アキ子 同 江向 明倫小學校
- 武田 静枝(木村)島根縣邑智郡田所村(死亡)
- 〇杉村 サヨ 萩 山田 (死亡)
- 十〇佐伯マツ子(小島)同 椿東 萩市川島
- 増増 ユリ(土田)島根縣益田町イ二三三
- 松谷 ウメ(松浦)萩 椿東 大阪府港區田中町三丁目七
- 十〇吉田 貞子 同 椿東 住所不明
- 十〇齋藤 雪枝 同 新堀
- 台田 廉子 同 椿東 萩市小畑
- 長田千代子(松浦)玖岩國散島 吉敷郡小郡町長田敷房方

- 占部 竹子(桂)萩 土原 若松市外二島白米社宅
- 松本 サキ(神野)同 江向 朝鮮嶺山郡馬九坪 松本農場
- 十〇奥 幾子(山根)厚 小野田 住所不明
- 十〇中野 チカ(白井)萩 椿 椿東小學校
- 十〇末岡ハルコ 美 於福村 住所不明
- 渡邊 ヨシ 萩 椿東 萩市橋本町
- 十〇末永 ヘル(吉屋)同 油屋町 (死亡)
- 〇辻野ハナコ(藤部)同 椿東 神戸市平野楠谷町二六二ノ二
- 藤村 峰子(多田)同 同 (死亡)
- 〇大瀧 政子(草刈)同 河添 佐渡郡右田村
- 十〇小野 サキ 同 椿東 山口市下立小路
- 山内ハツエ(乃美)同 江向 吉敷郡秋穂村山内唯五郎方
- 十〇肝付 澄江(瀧口)阿 明木 東京府下西東鴨町堀ノ内一〇
- 天野 ミツ(田坂)萩 椿 住所不明
- 森脇美智子(黒瀬)萩 山田 山口市下立小路
- 〇藤田ハツセ 同 椿 (死亡)
- 〇秋山ウメノ(増山)同 同 (死亡)
- 十〇村上 貞子(新庄)同 熊谷町 萩市江向
- 増山 静子 同 橋本

- 栗田 鹿子 阿 吉部村 (死亡)
- 種子 綾(岩武)同 祭福村 福川尋常小學校
- 岩田フミエ 同 籠生村
- 山田マサコ 萩 山田
- 依々木ツチ(竹重)阿 吉部村
- 小野 静子 同 奈古村 青島明水路二號
- 堀永 ツタ 同 三見村 (死亡)
- 玉木シゲコ(富田)萩 土原 富田内
- 小川 良子(藤田)同 椿 萩市瀧淵
- 守重 志都(羽鳥)同 椿東 鹿兒島市岩町本願寺別院
- 田中 スミ(平田)同 椿 大阪府北區東野田町五丁目八
- 品川マツヨ 阿 福賀村 山口市大段大路
- 木村 清子(堀) 同 宇田郷村 山口市大段大路
- 藤井 静子(田中)萩 椿 門司市浦南町四五七
- 藤井 美代(高州)同 同 臺灣臺中市高砂町七帝國製糖會社宅
- 金子 徳 阿 宇田郷村 福島市船場町三十一
- 十〇田中 静(桂) 萩 川島
- 内藤ツルコ 同 江向
- 名倉ナヲコ(今田)同 五間町 岡山縣都窪郡倉敷町榮町六〇
- 山中 松子 同 平安古 高知市江ノ口東鹽田一二五八
- 神田サトセ(服部)阿 三見村石丸 山内伍六内
- 有吉トミコ 萩 萩市西田町

第六回 卒業生(實科)

大正七年三月(年齢順)
三好 シゲ 萩 濱崎 住所不明

十〇 淵屋 千代 同 瓦町

甲賀 健子 下關市上新地 住所不明

〇 吉澤 文子(大谷) 萩 鹿嶋町

〇 中村 貞子 同 椿東 (死亡)

〇 岡 朝子 同 濱崎 東京市淺草區榮久町二〇松本方

〇 福田 文(林) 同 河香 名古屋市中區西塚町一七

〇 龍谷フサヨ(藤田) 同 椿 横濱市子安字溝下一五一四

十〇 末成 清子 同 平安古 (死亡)

〇 波多野ナツ 同 新堀 (死亡)

〇 松藤 通子 同 椿東 神奈川縣箱根小涌谷

〇 島屋 ツチ(河野) 同 奈古村 萩市鹽谷町

〇 小田 エイ(中村) 同 同

十〇 阿部 照子(早川) 萩 堀内 阿武郡能生村持坂

〇 村上 ウメ 同 東田町 (死亡)

十〇 飯塚 ヨシ(堀上) 同 新堀 住所不明

〇 大庭ヨシ子 同 西田町 (死亡)

〇 横山 朝子(岡本) 同 米屋町 豊橋市礼子町八千代製薬株式

〇 岡村 園子(岡村) 同 平安古 大坂市東成區森小路八丁目六〇

〇 松本ヨシコ 同 新堀 神戸市外原田二四八關西學院

〇 秋本 綾子(吉崎) 萩 宿津村 東京市麻布區仲ノ町四

〇 尾崎ヨシコ(西郷) 萩 椿東 萩市濱崎

〇 田北 治子(松尾) 同 江向 萩市吉田町

〇 綾木 貞子(藤田) 阿 福川村 奈良縣吉野郡下北山村下池原

宇治川電氣會社々宅

〇 藤田 トミ(池田) 萩 椿東 山口市野田官舎内

〇 竹内 豊(杉山) 同 惠美須町 寒澤臺中市木ノ下町一

十〇 小池ヒサ子(河村) 同 川崎

〇 伊子 菊子(吉賀) 同 濱崎

〇 金田千代子(齋藤) 同 大井村

〇 松村 幸枝(吉村) 萩 五間町

〇 岡本 シヅ(藤田) 同 椿 吉野郡小郡町

〇 秋山 操(黒濱) 同 同 住所不明

秋本ミツコ 同 同

十〇 田越イセコ 同 平安古 (死亡)

十〇 倉塚登志恵(杉) 阿 高俣村

〇 岡 ツチヨ 同 福川村

〇 松尾 ヒサ(山内) 萩 土原 上海華租路八七東華紡績會社

安井 ツユ 同 川上村 住所不明

村上 スエ 萩 東田町

〇 香川 マサ 同 土原

〇 杉山 梅尾(大鳥) 同 濱崎 門司市谷町一丁目

村岡 愛子(杉山) 同 川島 椿東小学校

十〇 三輪 芳子(小島) 同 椿東 萩市沼田ヶ原

〇 日高ノブコ(吾吉) 阿 濱崎 吳市倉間通り四丁目九番地

〇 町原 シカ(小河) 阿 小川村

十〇 末永 梅尾(石川) 阿 福川村

〇 野尻 幸代(渡邊) 萩 江向 神戸市平野湊川町三五三

〇 白石 壽子 同 東田町 (死亡)

〇 佐尾知世子(鶴) 同 江向 住所不明

〇 斎藤 文(田坂) 同 江向 大津郡深川村河原

〇 橋村 トミ(田村) 同 河添 (死亡)

〇 内藤キヨコ(藤川) 同 西田町 東京市外高田町高田十二五住所不明

〇 末式 愛子 同 椿東越ヶ濱

〇 伊藤 花子 同 江向 (死亡)

〇 佐方敬子(阿摩上) 阿 川上村 阿武郡地福村

〇 中山 壽子 萩 萩 (死亡)

〇 原 千代 同 同 住所不明

伊藤ヒデコ(阿) 同 同 住所不明

十長島 藤之(瀬戸) 同 野間村 下關市後田一一

第七回 卒業生(資料)

大正八年三月(年輪順)

殿重 ミミ(藤原) 萩 大田町 住所不明

〇 山縣 ヤス 萩 平安古

〇 中村キキヨ(伊達) 同 椿 朝語全羅南道長城

〇 福 貞(金子) 阿字田郷村 山口市道場門前

〇 小塚 静子(遠藤) 萩 濱崎 東京府下淀橋柏木八七二

〇 平田 春江 阿 小川村

十〇 山中 繁 萩 濱崎 (死亡)

十〇 下瀬 ミツ(内藤) 同 川島 東京府下長崎村大和田二二四

〇 井町ヒサコ 同 濱崎 (死亡)

〇 伊藤 チヨ 同 川上村

〇 中野フミオ(阿武) 萩 西田町

〇 澄川スミ子(池田) 阿 須佐町

〇 岡村 テフ(後藤) 萩 濱崎 奈良成興與里高等普通學校

〇 横山ヒナ子(三島) 阿 三見村 正門前 阿村瀧藏方

〇 福田 和子(濫口) 同 福川町 住所不明

〇 小松 サダ(木村) 萩 惠美須町 愛媛縣宇摩郡小宮土村

〇 井原喜徳子(金子) 同 椿東 東京市外世田谷下町七一住所不明

〇 松浦キミ子 同 濱崎 (死亡)

十〇 中村ヤエ子 同 江向 臺北州宜蘭郡頭圍

十〇 笠井 曠子(笠井) 同 椿 長崎縣崎戸工業所湊浦社宅

〇 松井須磨子 美 赤郷村

〇 竹内 マツ 萩 惠美須

十〇 大場 花子(中村) 同 平安古 (死亡)

〇 永田フジエ(滝村) 同 椿東 住所不明

十〇 安田 清子 同 河添

〇 阿武ヤエ子(山川) 同 椿東 阿武郡福川村二保谷

〇 栗屋 律(久保) 同 土原 臺中高砂町一〇帝國製糖株式

會社々宅

○佐藤 壽子(上井)阿 福川村 蘆澤基茶市瑞芳庄甲園専簿十條抄不明
 十○今地タミ子(三戸)萩 江向 筑社宅内
 ○吉田 静江(加藤)東京府下西葛場堀ノ内一五十松西都方住不明
 ○片岡 綾子(錦川)吉東岐波村 吉敷郡東岐波村
 ○山田ユタ子 萩 山田
 來島マサヨ(原) 阿 紫福村 東京府下和田堀町字堀之内二
 ○岡 安子(兼重)萩 川島 臺灣高雄州東港郡溪州東港製
 糖株式會社々宅
 長野 雪子(神代)同 山田 住所不明
 ○中務 敏子(落合)同 奥股町 厚狭郡万倉村
 ○岩田 文子(植村)同 椿東 朝鮮黄海道海河郡上町一六六
 ○福地 竹子(阿武)同 同 住所不明
 ○秋枝イト(阿座上)阿 福賀村 大津郡深川町
 ○安田 安子(市原)同 嘉年村 嘉年村
 ○原 スミ 同 紫福村 阿武郡紫福村
 十○大賀 ヒデ 萩 靈尾町 (死亡)
 ○三好 ウク 熊 淺江村 (死亡)
 十○横山ヨシ子 阿 川上村 大島郡森野村字森
 十木原 ヨシ 萩 椿東 萩市越ヶ濱小學校
 ○杉山アサ子(久保)同 濱崎
 ○宮原 千代 同 土原
 ○田中 マサ 美 共和村
 十○藤田 貞子(林) 萩 平安古 住所不明

○内田 文子(堀) 同 川島 東京市外阿佐ヶ谷一六四八
 ○澄川 千里 阿 小川村
 十○今地 ヒデ 同 川上村 (死亡)
 ○山崎 貞(和田)大阪府豊能郡箕面村大字牧落百樂莊神社前
 ○阿川 榮子 阿 地福村
 ○田中 セキ(兒玉)萩 椿東 住所不明
 厚東 美恵 同 同 (死亡)
 ○宮本 信子 阿 福賀村 (死亡)
 阿村 由枝 同 福川村 住所不明
 田中 基礎(植村)萩 椿東 住所不明
 ○松永 カツ 女向津具村 萩市江向
 ○吉津 ツキ 萩 椿東 東京市小石川區雜司ヶ谷二六
 村田内
 ○細川 淑子(竹内)同 山田 山形市新築四通官舎
 ○厚東 磯子(前田)同 山田 住所不明
 十○小島タマ(三隅田)同 平安古 住所不明
 ○有田 シズ(來島)同 椿 萩市濃濁
 ○藤田 トヨ 同 同
 十津田サダ子 同 江向
 十○中村 キヨ(山下)同 山田 住所不明
 十○森田ミチ子 阿 福川村 (死亡)
 ○岩武 綾子(藤田)同 紫福村
 ○島田トメ子 同 川上村
 ○河村 清子 同 椿東 住所不明

第八回 卒業生(實科)

大正九年三月(イロハ順)

十○佐田 初枝 美 大嶺村 (死亡)
 堀 梅 萩 椿東 (死亡)
 ○大野美智子(大野)同 土原 住所不明
 ○角 喜久代(倉田) 大阪府 大阪市外守口町一六八倉田醫
 院内
 ○濱田 ハナ(中村)萩 土原 京都市上京區下長者町衣欄東
 入丸
 ○未益 マス 阿 奈古村
 ○波多野芳子 同 三見村
 ○山本 静子 萩 奥股町 住所不明
 ○長久間文子(田坂)同 江向 島根縣美濃郡都茂村大字丸茂
 (死亡)
 十○海部ウメ子 同 橋本 (死亡)
 十○羽鳥トシ子(田中)同 椿 神奈川縣鎌倉郡玉繩村岡本三三
 (死亡)
 ○半井 嘉子 同 吉田町 (死亡)
 ○天田 春代 阿 吉部村
 ○伊佐トミコ 萩 橋本 下關境浦中尾野郎内
 ○徳田 英子(前田)阿 地福村 廣島市千田町二丁目四四三
 ○中村トミ子(羽仁)萩 平安古 福岡縣戸畑市猪ノ坂町五丁目
 六號
 十○伊藤 桃代 同 椿東
 十○立野彌壽子 阿 田万崎村
 ○内藤 静子(大谷)萩 濱崎 長崎縣對島島知高濱陸軍官舎
 ○桶谷ハナコ(齋藤)同 萩市東田町
 ○春 松枝 阿 川上村
 ○落合 愛子 東京市小石川區久堅町七四

十○五鋒ヨシコ 萩 濱崎 (死亡)
 大谷 波子(石光)同 阿武郡生雲村大谷嶋一内
 ○飯田 テイ 東京市東神田區分主○宝塚市果町五八住河木崎
 林 春枝 萩 川島 (死亡)
 ○岩本 静子(林) 同 平安古 三重縣鈴鹿郡野登村區尾
 ○工藤 敏子(原) 阿 地福村 京都市田中上柳町二二
 十仁尾 玉 高知縣高岡郡(死亡)
 ○堀江トミコ 萩 江向
 ○村田 ナミ 同 川島 宇部市西區上町二丁目
 ○堀内 トメ 同 堀内
 ○豊田喜代子 同 河添 朝鮮永登浦
 ○領家 文子 阿 宇田郷村
 ○岡本 照子(大津)萩 濱崎 萩市西田町
 十○大谷 キタ 同 椿河淵
 ○渡邊 初子 同 濱崎
 ○桑原シヅコ(加藤)同 米屋町 大連市天神町七八
 ○浴野テルコ(金國)同 水車筋 大津郡日置村長行
 ○河野ニキコ 同 濱崎 (死亡)
 十○坪井ヨシコ(金子)同 江向 朝鮮慶南河東郡露梁津
 十○中津江三知子(片山)同 濱崎

- 十〇下瀬ミチヨ(横山)同 河添 (死亡)
- 倉田ミネエ(高村)同 樺 大阪市外千里山二〇七
- 高洲ナヲコ 同 土原 (死亡)
- 若松 キサ(田中)同 樺東 萩市東田町
- 富田 恒子(竹内)萩 濱崎 (死亡)
- 村谷 キタ(高橋)同 唐福 (死亡)
- 田村マサコ 同 山田
- 田坂アヤ子 同 徳山町 (死亡)
- シゲ子(坪倉)萩 石尾町 大津三隅村市岡光蔵方
- 佐伯美代子(根來)美 萩市 住所不明
- 岡江 澄(有田)萩 江向
- 永田 シヅ 同 樺東 萩市惠美須町米屋店長谷千代
- 十〇青木 勝子(村田)同 江向 治氏方
- 若林 ウメ(井町)同 濱崎 朝鮮平安南道龍岡郡龍岡邑
- 岡崎 壽子(信常)同 平安古 沖繩縣那覇市大門前通
- 江藤 幸(野村)同 樺東 島根縣美濃郡中西村
- 小田 チヨ 同 山田 福岡市須崎土手町
- 小澤 ハツ 同 平安古 三三九馬場方
- 十〇小野 君子 同 阿田万崎村 住所不明
- 小野 静子 同 萩 萩
- 口羽 朝子 同 阿 萩生村
- 國重 淑子 同 萩 萩東

- 桑原イトコ(山本)同 樺東 住所不明
- 杉本サカ(矢島)同 高俣村 住所不明
- 十〇田中 ミツ(山田)同 奈古村 住所不明
- 古谷 照子(山中)萩 濱崎 下關市柳ノ町古谷茂治方
- 河上屋房子(八木)同 鹽屋町 (死亡)
- 松浦マツ子 同 橋本
- 村田 和子(松林)同 樺東 樺東小學校
- 松本 恒子 同 東田町
- 大庭 タク(松浦)同 奈古村 紫福村
- 佐々木仁子(颯島)萩 樺東 福岡縣八女郡福島町稻富四六
- 西尾 末子(古川)同 阿田万崎村
- 見玉 章子 同 明木村
- 後藤カツコ 同 御許町 明倫小學校
- 十〇須郷 ヅチ(小河)同 小川村 住所不明
- 矢々美智恵(小島)萩 春若町 住所不明
- 十〇西村 繁子(小島)同 樺東 (死亡)
- 遠藤千代子 同 吉 小郡町柳井田 千葉縣幕張町馬加三三
- 内藤 雪子(寺山)同 阿地福村 住所不明
- 十〇阿武 菊枝 同 川上村
- 十〇林 住重(秋山)萩 同 萩
- 田村 壽子(阿武)東京府荏原郡池上村雪ヶ谷四〇
- 佐竹 昌子(佐竹)美 岩永村

- 佐久間ユキ 阿 嘉年村 東京府市本郷區元町二ノ六三
- 杉山キヨ子(木村)萩 澤國寺 朝華齒科醫學校
- 北野ツネ子 同 平安古 朝鮮黃海州北旭町
- 十〇岸 綠 同 樺 都濃郡下松町字殿ヶ浴五五九
- 豊田 ヨシ(行本)同 河添 宇部市琴芝
- 辻 元妃(溝部)同 樺東 朝鮮馬山府陸軍官舎
- 西岡 爲子(光國)福岡市庄三 住所不明
- 青木 アヤ(三浦)萩 濱崎 大阪市東區清水谷東之町四六
- 板垣 キヨ(三戸)同 山田 住所不明
- 宮本マヌエ 同 片河 (死亡)
- 十〇重岡 キヨ 同 同 (死亡)
- 河村 サダ(白井)同 樺 東京市外小石川區關口臺町二
- 有田 秀(進藤)同 香川縣 高松市四番町一ノ一
- 十〇黒田 愛江(鹽見)同 土原 上海寶樂安路求安里一〇三號
- 末成ウメヨ(平田)阿 紫福村 (死亡)
- 宗像 俊子(森永)美 葛長田村
- 秋山 孝子(澄川)萩 支那上海上海紡織株式會社本
- 須子美登里 阿 小川村 都
- 山根 サト(水津)同 大井村 東京市外世田ヶ谷町若林一三
- 鈴木ヒサコ 萩 山田 營口旭街十四號ノ一

- 大正十年三月(五十音順)
- 平岡ハルヨ(池田)萩 土原 釜山府富平町三丁目七二
- 荒地 久子(石川)同 樺 萩町沖原
- 横山 瀧子(板垣)同 東田町 住所不明
- 山本静子(宇多田)同 樺東 住所不明
- 伊藤千代子(大山)同 樺西 大津郡三隅村中尾
- 綿貫ユウ子(小田)阿 奈古村
- 三井チヨ(小野村)萩 山田 萩町新川
- 竹村タキ子(岡本)同 春若町 朝鮮慶南金海郡進禮面
- 小島 其(大深)河 奈古村 萩市中小畑
- 大本カヅノ 同 熊 佐賀村 熊 習成小學校
- 泉原 壽子(桂) 萩 橋本 長府町松原
- 賀屋ヒデ子 同 土原
- 十〇笠原キクコ(河村)同 同 門司市大久保越
- 國重タツ子 同 東田町 住所不明
- 有馬 淑子(國弘)同 川島 萩雜式町
- 栗田シゲヨ 阿 阿嘉年村
- 倉重フミコ 萩 樺東
- 小池キヨコ 阿 生雲村 (死亡)
- 小嶋 貞子 萩 樺東 (死亡)
- 河村千代子(小枝)同 濱崎 南滿洲奉天紅梅町三十二番地
- 十〇佐伯 清子 阿 福川村

第九回 卒業生(本科)

- 神崎シズコ(坂本)同 明木村
- 佐久間ユキ 同 嘉年村 東京市本郷區元馬二ノ六三
- 陶山ミサ子 大向津具村 明華齒科醫學校 大連市大江町六 吉屋貞子方
- 瀨川 愛子 阿生雲村 奈古小學校
- 山村トヲコ(谷川)同 三見村 菖玉江浦
- 梅 マスコ 同 佐々並村
- 見島ノブコ(坪野)萩 濱崎 下關市豊前田町見島林吉方
- 中村サカエ 同 江向 朝鮮全羅南道康津郡公立普通學校
- 森 テルコ(中村)同 八丁 臺北市村上町三ノ二
- 阿武ツチコ(熊美)阿 川上村
- 原 ユキコ 萩 御許町 住所不明
- 原田 光子 美 共私村
- 村岡ミツ子(藤村)萩 熊谷町 東京府下世田ヶ谷下町六八才
- 藤山於鬼子 同 川島
- 守永フミコ(堀)同 濱崎
- 有富ミサヲ(松浦)同 山田 住所不明
- 兼田 勝子(溝部)同 河添 鳥根縣藤川郡西濱崎 住所不明
- 三浦アサヲ マツ 萩 香津津
- 三好 マツ 萩 香津津
- 榎木 里 大 三陽村
- 守永 節子 阿生雲村
- 大藤 キク(山本)萩 山田 住所不明

- 山根 静子 阿 大井 (死亡)
 - 見玉 キヨ(吉村)萩 萩 朝鮮平安北道泰川郡院西
 - 河村 サダ(白井)同 樺東 東京市小石川關口臺町二六
 - 有吉ノブ子 同 西田町
 - 岡村 マス(有吉)同 北古萩
- 第九回 卒業生(實科)**
- 大正十年三月(五十音順)
- 久永 ッチ(赤木)萩 樺屋町 朝鮮黃海道長興郡邑内
 - 中村 捷子(井本)同 須佐町 東京市深川區東町二二
 - 森重 久子(砂)萩 堀内
 - 山本 タネ(上田)同 熊谷 千葉市本町二丁目一五七二
 - 上野 マサ(植村)同 樺東 大津郡日置村黃渡戸 上野綱吉方
 - 上野ユキ子 同 平安古 (死亡)
 - 寺山タマ子(江山)阿 地福村 住所不明
 - 古川 時代(小野)同 奈古村 廣島市皆賀町市營◇宅
 - 小林ヨシコ(大島)萩 濱崎 萩市米蔵町
 - 光野 綾子(河村)同 橋本 大阪市北區澤上江町七丁目七番地
 - 森田 一子(河崎)同 堀内 堺市東二河通五丁目五番地
 - 今田 マシ(來島)萩 山田
 - 小峠ヒサコ 同 山田木間
 - 石橋 キミ(齋藤)同 樺東 朝鮮京畿道水源郡發安石橋武夫方

- 戸田ヨシ子(島本)萩 濱崎 朝鮮釜山南濱町二丁目山本方
- 池田 ヒデ(水津)阿 奈古村
- 河田ヨシ子(宗樂)萩 橋本 福岡縣大牟田市三井三池鐵業所醫院内
- 田中 君 同 川島 佐世保市
- 藤田 俊子(田中)同 樺 住所不明
- 村上 清子(田中)同 北片河 函館市東濱町三九村上壯一方
- 岩本 タリ(田坂)同 樺河内 佐賀縣鳥栖町
- 田中フミ子(高木)同 樺東松本 阿武郡地福村
- 河村 雪江(田口)同 樺 東京市牛込區市ヶ谷谷町六八
- 河上ヨシ子(田村)同 樺河内 臺灣淡水郡淡水街烽火一七
- 角木 綾子(時山)同 山田 大津郡三陽村
- 小川 トシ(時山)同 山田中渡 南滿洲瓦房店山中街昭和寺内
- 茂刈 フエ(刀彌)同 東田町 住所不明
- 元澤 ヨシ(富川)同 熊谷町 釜山本町三丁目
- 中村ツル子(中村)阿 福川村
- 中村フサ子(中村)萩 濱崎 神戸市相生町四ノ二二七高橋吉入方
- 中村 ヨシ 同 今魚橋 山口市下宇野令二三坂井方
- 山之内喜代(野田)同 南古萩 臺北市泉町二丁目七番地は十號
- 大和尾静子 同 樺東
- 波多野トミ子 同 西田町 (死亡)
- 長谷川久子 同 濱崎
- 林 静子(弘榮)同 樺東 住所不明

- 井野場コト(堀)萩 山田玉江中渡 朝鮮平壤府外西川面仁興
 - 川上喜久子(増山)同 米屋町 里朝鮮無禮炭株式會社
 - 町田 松子 同 樺 關東洲金州島海町七五ノ六
 - 林 ヒサ子(松浦)同 濱崎 萩市新川二〇
 - 三上ヨシ子 同 山田奥玉江(死亡)
 - 徳重 萬(松尾)阿 大井村 阿武郡徳生村渡川
 - 御手洗静子 同 川上村立野(死亡)
 - 竹内 チエ(茂刈)同 宇田郷村字徳郷 臺灣臺北州海山郡三峽大豹三井社宅
 - 中原 ヨシ(吉田)萩 平安古 萩市樺町
- 第十回 卒業生(本科)**
- 大正十一年三月(五十音順)
- 原 いせ子(阿武菊子)萩橋本 住所不明
 - 阿武 重子 阿 福川村
 - 堀 可子(石津)萩 堀内 滿洲開原東洋街二八
 - 若林 敏子(板谷)同 山田 上海吳淞路三三號
 - 宇佐川 都子 同 堀内 千葉縣成田町花吹町
 - 高田 花子(小田)同 熊谷町 下關市西編江町
 - 仁保 克子(大田)阿 吉部村 阿武郡須佐町
 - 大田 キク 萩 樺東 (死亡)
 - 中村 アイ(大藤)大向津具村 山口市錢湯小路
 - 金子シズコ 萩 樺東 小倉市古船場一

- 兼重 龜子 萩 十日市筋
- 牛尾千代子(河村)同 西田町(死)
- 木村テルコ(河村)阿 明木村 住所不明
- 安邊 静子(木村)萩 北古萩 佐波郡防府町三田尻青木町
- 口羽 龜古 阿 篠生村 南米ブラジル
- 黒瀬チヨ(久保田)萩 椿東 住所不明
- 百合野花子(久保田) 下關市外彦島町江浦區百合野寛一方
- 兒玉 貞(兒玉)阿 田方崎村
- 吉原 ヒナ(笹井)能 勝間村
- 佐々木民子 大 三隅村
- 齋藤 貞子(齋藤)同 小倉市米町三ノ一齋藤正敬方
- 杉 愛子(齋藤)阿 田方崎村 徳佐村
- 末岡 良子 同 紫福村 住所不明
- 能美フサ子(鈴木)萩 山田 川上村字山田
- 吉本ヒナ子(鈴木)阿 須佐村 小倉市米町九丁目
- 十○末若ヨシコ 同 奈古村
- 金子 静江(瀧口)同 明木村 (死亡)
- 永田 能生 同 大井村
- 渡邊 春江(中原)萩 椿東 住所不明
- 中村 静子 同 住所不明
- 中村八千代(中村)同 江向 住所不明
- 十○岸 ヨシコ(上野)同 椿 東京府杉並町高圓寺六〇三
- 安藤八重子(蓮池)阿 福賀村 高俣村

- 服部 貞子 萩 土原 明倫小學校
- 大野チエ子(平田)同 江向 住所不明
- 十○福富 朝子 萩 堀内 戸畑市高見町二丁目武蔵方
- 松浦 コウ(松浦)阿 大井村
- 菅野己知子(松田)萩 椿東 東京市外岩淵町稻村一〇二四
- 荒地ユキ子(前田)同 後小畑 大阪府三島郡茨木町上中條一五三
- 安藤ヒサ子(三隅)同 五間町 萩町鎌賀下リ
- 堀 ヨシ子(榎木)大 三隅村 神奈川縣川崎市旭町二丁目三七
- 村上 コト 萩 東田町 (死亡)
- 岡島ミサヲ(矢島)同 高俣村 大阪市外岡本町通リ
- 藤井 カツ(山縣)同 六島村 豊浦郡豊田下村
- 中村 直子(大和)萩 雜式町 (死亡)
- 吉村 ヒナ(吉賀)同 濱崎 萩東田町
- 角 ジョウ(吉田)同 平安古 住所不明
- 中村 ナス(吉村)同 熊谷町 朝鮮仁川府新町三六

第十回 卒業生(實科)

- 大正十一年三月(五十音順)
- 竹内千代子(井上)阿 福川村福川 住所不明
 - 十○白井ムメノ(岩崎)萩 山田小原
 - 柴田サヨ子(岩崎)同 東田町 朝鮮京城機井町一ノ一一〇七
 - 植村 親 同 椿東 (死亡)
 - 藤田イセヨ(岡) 同 青海

- 十○掛森 千歳(岡) 阿 紫福村 都濃郡向道村
- 高藤 久代(大谷)同 田方崎村 住所不明
- 谷村 綾江(河村)同 三貝村 奥市八幡通二丁目八ノ三
- 河村 操子 萩 椿東 住所不明
- 松井志都子(神田)萩 堀内 東京府下上大崎七最上寺内
- 河村スミ子 同 椿 住所不明
- 新田ミツエ(桐山)同 平安古 朝鮮咸鏡北城郵便局官舎内
- 小川ヨシ子(窪田)大 菱海村 朝鮮慶尙北道軍威郡邑内
- 黒瀬シウ子 萩 江向 滿洲撫順山城町四丁目三ノ四
- 村尾 米子(國重)同 椿東
- 品川 政子 同 熊谷町 住所不明
- 石田 利子(林成)同 平安古 住所不明
- 堀 スエ子(杉本)同 同 住所不明
- 榎屋 菊子 同 江向
- 田村富貴子 下關市仲之町 都濃郡徳山町代々小路柿並方
- 坂本 文江(田中)萩 椿東 東京市小石川區小山御殿町一〇六
- 中村シズコ 同 橋本 朝鮮木浦府大和町一丁目四番地
- 大坪節子(中津井)阿 川越村 住所不明
- 藤田百合子(中村)萩 椿 住所不明
- 宇野 キク(野村)同 濱崎
- 金清 菊香(林) 萩 藤間村呼坂 東京市芝區白金志田町六六
- 年光 キヨ(長谷)萩 熊谷町 福岡縣戸畑市鐘物會社宅
- 大西 房子(林) 同 平安古 長野縣小笠町耳取町三三七

- 廣 トミ子 同 濱崎 東京市外中野町打越二〇二三 幸阪忠作方
- 平田タキ子 同 椿 八幡市東通町一丁目横山美虎
- 平野 花子 同 平安古 朝鮮大立東雲町平野與三方
- 末武千代子(藤田)同 椿東 萩市越ヶ濱
- 十○藏本トシ子(藤田)同 椿 大津郡三隅村字宗頭
- 藤原 静子 同 笠屋 (死亡)
- 堀 幹子 同 椿東 住所不明
- 松本 ヒナ 阿 三貝村 住所不明
- 松浦 八重 萩 山田 住所不明
- 大山 秋子(松本)同 東田町 東京市川區苗木原一二五三〇
- 藤岡 歌子(松永)阿 向津具村 臺灣屏東街臺灣製糖會社宅
- 村木カツコ 萩 濱崎町 朝鮮新義州後關官舎村木義一方
- 村木 勝子 同 堀内 (死亡)
- 村田トメ子 同 東田町
- 安田 貞子 同 河添 大連市外周水子小野田セメン ト會社宅
- 齊加 千勢(山根)同 椿 朝鮮釜山本町一小宮修一方
- 藤村ミホコ(吉田)大 三隅村 美禰郡秋吉村
- 吉賀 キヨ 萩 土原 朝鮮釜山本町一小宮修一方
- 古式 フジ 同 唐穂町 滿洲吉林新開門外吉武常一方
- 武林 カツ(渡邊)同 平安古石屋町 大津郡仙崎町武林次郎方
- 神田 静子(若松)同 東田町 濱崎市根岸鷺山三六七〇神田 飲一方

第十一回 卒業生 (本科)

大正十二年三月 (五十音順)

- 十〇秋山 京子 萩 南古萩
- 〇安藤 タリ 同 萩 朝鮮成興齋龍臺四丁目陸軍官舎
- 〇阿武 米子 同 川島 (死亡)
- 〇大谷 キク(池上)吉 秋穂二島村 棒西小學校
- 〇山根 フサ(石井)萩 棒東 (死亡)
- 〇石川 ツル 同 濱崎 大津郡正明市
- 〇藤原 存子(石津)同 河添 朝鮮平壤東町陸軍官舎乙區第
- 〇伊藤 菊子 阿 大井村 第六小學校
- 〇橋 ミツ子(井上)萩 河添 横須賀市
- 〇小谷 ミツ子(小川)阿 宇田郷村 大分縣龜川町新川
- 〇小野 フサ 同 奈古村
- 十〇河内山 賴子 萩 平安古 萩市江向
- 十〇河内 賴子 萩 平安古 萩市江向
- 十〇柏木 晴子(柏木)同 東田町 三田尻
- 〇波多野 壽滿子(片山) 東京市牛込區市ケ谷木村町一五
- 〇森田 マツコ(兼田)萩 南片河 朝鮮慶尚南道蔚山錦町一丁目
- 〇北野 フジヨ 同 平安古 大阪市西成區粉濱中之町二丁目二五
- 〇佐古 花子(木原)同 川島 (死亡)
- 十〇桑原 小春 鳥根縣鹿足郡津和野 萩平安古
- 十〇桑原 サヨ 萩 平安古 (死亡)

- 〇桑原 節子 阿田万崎村 田万崎村多磨尋常高等小學校
- 〇宮井 マキ小(芳)萩 濱崎 在職
- 〇三元 信子(新庄)同 新堀 朝鮮東萊郡東萊城內宮井春一方
- 〇郡 美代子(鈴木)同 棒東 熊本市春日町七七九
- 〇助石 アサ子 同 平安古
- 〇關田 テル 同 埼玉縣秩父郡影森村
- 〇田坂 幸子 萩 江向
- 〇石井 ヨキ(田總)同 平安古 神戸市湊區都由乃町一ノ三七
- 〇大賀 静子(中村)同 同 住所不明
- 〇永安 静子 同 棒東
- 〇中村 春子 同 棒東
- 〇中村 君代 同 御許町
- 〇濱田 豊子(中原)阿 福川村 萩市江向
- 〇永富 光子(長嶺)萩 玉江浦
- 〇正司 静子(野村)同 下五間町 住所不明
- 〇久保田 素子(羽仁)同 山田 朝鮮平壤府外勝湖里
- 〇林 アサ 同 江向
- 〇河村 梅子(福永)同 橋本町 住所不明
- 〇友森 カツ(藤田)同 棒東 臺灣臺北泉町二ノ二
- 〇波多野 トキ子(堀)同 川島 萩市唐樋町
- 〇三浦 テル 同 濱崎
- 〇木村 夫久子(三島)同 同 臺北市大正町三丁目六一

- 〇三好 敏子 同 東田町
- 〇三村 ミサツ 阿 福川村 神戸市千島町二ノ三九
- 〇松屋 幾子(三輪)萩 御許町 萩市濱崎
- 十〇榎木 百合子 同 榎屋町 福川小學校
- 十〇森田 ヤス(村木)廣島縣安藝郡熊野町森田原光方
- 〇村橋 元子 萩 唐通町 (死亡)
- 〇伊藤 壽子(森田)阿 三見村 萩市大字山田區小原
- 〇安間 アヤコ 同 福川村 (死亡)
- 〇山縣 アサ子 萩 平安古
- 十〇津田 トキコ(山中)同 惠美須町 東京市外日黒町九〇五
- 〇西永 ひさ(矢野)熊本市石島寺町二丁目五〇〇 住所不明

第十一回 卒業生 (實科)

大正十二年三月 (五十音順)

- 〇阿武 幹子 萩 棒東 門司
- 〇井上 明子(石光)同 五間町 住所不明
- 〇吉田 美美子(石井)同 東田町
- 〇中本 静子(石川)同 朝鮮仁川山手町二丁目七
- 〇井上 幸江 岡山縣上高梁町下町 萩市平安古
- 〇村上 芳子(井上)厚 小野田町 鳥根縣益田町
- 〇大石 ツヤ 阿 佐々並村 (死亡)
- 〇岡本 初江 萩 東田町 住所不明
- 〇堀 ヨシヨ(小方)同 十日市 東京市外蒲田町北蒲田三八〇

- 〇鹿島 フジヨ 美 共和村 大阪市西成區二丁目三六松原
- 〇金子 タミコ 萩 葦城方 萩市川島
- 〇増野 フジヨ(金子)同 五間町 萩市濱崎
- 〇松本 操子(松山)同 川島 住所不明
- 〇村田 スケ(登)同 棒東 京都市上京區中立賣リ通り堀
- 〇津田 嘉代子(國吉)同 同 臺南臺東區里端支廳里端區里
- 〇中村 正子(久保)大 菱海村 推街官舎 (死亡)
- 〇小島 秀子 萩 棒東
- 〇里川 美智子 阿 奈古村 萩市修善女學校
- 〇坂本 静子 同 明木村 山口市國政寺
- 〇玉澤 志穂子(下井)美 大田町 朝鮮高南線裡里土車仁作方
- 〇杉山 キクエ 萩 米屋町
- 〇安田 芳子 同 御許町
- 〇田中 藤子 同 濱崎
- 〇田中 フミ 同 棒東 阿武郡地福村
- 〇永井 多津(坪井)同 山田 下關市丸山町石井牧場内
- 〇都野 美代子 同 山田 萩市江向
- 〇時山 マサコ 同 山田
- 〇三輪 シヅエ(永安)阿 奈古村 朝鮮釜山府幸町二丁目四六
- 〇松田 ハナコ(中原)同 福賀村 鳥商部内
- 〇藤平 ヒサ子(中谷)萩 熊谷町 東京府下荏原郡荏原町巾經二
- 〇五峰 稔子(西田)同 川島 住所不明

- 長谷川菊代 萩濱崎
- 波多野シズ子 同
- 福田 壽子(林) 同 平安古
- 廣瀬 ヴル 同
- 藤山 マスコ 同 川島
- 藤本 峰子 同 米屋町
- 堀野富美子 阿 須佐町
- 秋津ツギコ(松浦) 同 大津郡仙崎町秋津不二郎方
- 松本登美恵 萩 米屋町
- 松屋ヨシ子 同 濱崎
- 宮川ヒデ子 同 橋本町
- 高橋ミツ子(三浦) 防府町宮市太平町
- 森重ハツ子 阿 大井村
- 三上まさ江(森) 大 通村
- 山田 トヨ 萩 熊谷町
- 城市 アサ(横山) 阿 大井村
- 和田惠美子 同 福賀村
- 三上 豊子(渡邊) 萩 北古萩
- 柳屋ミチコ(須子) 同 江向

第十二回 卒業生(本科)

大正十三年三月(五十音順)

- 田村ヒサヨ 阿 須佐町
- 刀彌 琴子 萩 東田町
- 小倉ヘル子(富田) 同 上原
- 岩本 綾子(永田) 同 福賀村
- 永野 文子 同 橋本
- 佐伯 照子(中村) 同 川島
- 中村 政子 阿 吉部村
- 鈴木トメ子(野北) 萩 河添
- 林 菊枝 阿 須佐町
- 弘 ヒサ子 萩 津守町
- 室 チエ子(藤井) 阿 三見村
- 窪井 藤江(藤井) 萩 江向
- 阿座上マサコ(藤本) 同 川島
- 井原トモコ(藤原) 同 椿東
- 古川 愛子 阿 田万崎村
- 若松楠緒子(藤田) 萩 工原
- 堀 テフ 同 東濱崎
- 堀 マサコ(松浦) 同 濱崎
- 島山 榮子(三好) 同 東田町
- 元山 初子 同 徳島市堂三島村(死亡)
- 濱中 光子(森) 萩 江向
- 河瀬 春子(森屋) 同 米屋町

- 白石 キク(赤崎) 萩 堀内
- 田中 俊子(伊東) 阿 佐々並村
- 伊藤露美子 萩 土原
- 長嶺ハツ子(池永) 同 山田
- 金子千壽子(岩武) 阿 紫福村
- 佐藤スミ子(井町) 萩 濱崎
- 高須須屋ツル 同 山田
- 高原ハルノ(桶谷) 大 三隅村
- 大田 貞子 萩 山田
- 大田 ユク 同 熊谷町
- 重友 滿枝(岡田) 同 平安古
- 村田 清子(神崎) 阿 川上村
- 野北 トヨ(香川) 萩 濱崎
- 鈴木 佳子(金田) 阿 福川村
- 河村 信子 萩 西田町
- 河村 ユキ子 同 御許町
- 國光フキ子 同 住所不明
- 中丸 元子(齊藤) 同 西田町
- 品川 光子 阿 彌富村
- 杉山 綾子 萩 土原
- 須子 紀子 阿 小川村
- 松倉サト子(高州) 萩 土原

第十二回 卒業生(實科)

大正十二年三月(五十音順)

- 山田 富子 大 通村
- 山根千代子 阿 大井村
- 三村スエ子(山藤) 萩 山田
- 吉村 コト 同 熊谷町
- 守永 房江(渡邊) 同 朝鮮京城府旭町一丁目市場
- 吉田初江(波多野) 島根縣阿井村
- 堀森 秀子(村上) 愛媛縣今治市
- 小林フジ子(阿武) 萩 木間
- 有吉 榮子 同 東田町
- 山下喜代子(有田) 同 椿
- 瀬戸イシコ(有田) 同 江向
- 高木イチ子(阿川) 同 濱崎
- 東屋ヨシコ 同 下五間町
- 池内登美子 同 堀内
- 植村キクヨ 阿 三見村
- 金子智恵子 同 紫福村
- 河野タマコ 萩 椿
- 三原ユキ子(河崎) 同 堀内

- 河村ミドリ 同 越ヶ濱 佐々並村小學校
- 佐伯フサ子 阿 福川村
- 久繼 美子(佐古)萩 河添 萩市濱崎
- 島本 ナヨ 同 濱崎
- 關屋キヨコ 同 瓦町 三見小學校
- 井上 キタ(田村)同 萩市奥玉江
- 岩崎ハナコ(田村)同 河添
- 平岡 芳子(田村)美 大田町 支那上海揚樹浦路裕豐紗廠社
- 田村フミコ 大 荻海村 萩市越ヶ濱
- 友永ヒナコ 美 大田町
- 石津 敏子(内藤)阿 福川村 大連市沙河口白金町二一番地
- 中原シズコ 同 福川村
- 村上 初代(中本)同 田方崎村
- 梅地 キサ(中村)同 大井村 住所不明
- 村岡アキ子(西山)萩 川島
- 原田 テル 同 江向
- 守永ラヂ子(林) 同 川島 住所不明
- 阿川アキコ(林) 同 下五間町 神奈川縣河崎中幸町二二二
- 波田野フミ 阿 三見村
- 福永 ミツ 萩 堀内 萩市役所
- 中谷ミチコ(福住)大 荻海村 大津郡荻海村伊上浦
- 三浦ミサコ(藤田)萩 土原 福岡縣枝光大川社宅

- 堀本トキ子 同 堀内 福岡縣京都郡行橋町渡邊君正
- 松浦タケ子 同 橋本町 朝鮮京城明治町二丁目
- 松原 ムメ 阿 奈古村 萩市越ヶ濱
- 野田 和子(三輪)萩 椿東 廣島縣佐伯郡八幡村中地
- 水島ヒサヨ 大 荻海村
- 村田シズ子 萩 濱崎
- 武藏屋梅子 同 (死亡)
- 森田富士枝 阿 三見村
- 吉屋 タケ 同 大井村 南滿洲奉天紅梅町三番地二六
- 石原フジ子(渡邊)福岡縣鞍手郡新入村 福岡縣鞍手郡宮田町 大浦五坑 貝島舊宅内

第十三回 卒業生(本科)

大正十四年三月(梅組) (五十音順)

- 岩國 芳枝(有吉)萩 川島
- 阿武 スミ 阿 福川村黒川
- 伊東 將子(阿武)同 川上村
- 石津 和子 萩 河添
- 江川 利子 同 山田 (死亡)
- 大岡 高子 阿 須佐町 (死亡)
- 大田 温子 大阪市天王寺區東上町三八中川育子方
- 岡 トヨ 萩 蕨谷町 東京市麴町區下二番町五七
- 佐々木アサ子(大山)同 椿町

- 河村タキエ 萩 御許町 住所不明
- 川上富貴子 同 川島 京城府御成町五〇 河村清治方
- 河村登美子 同 八丁
- 神代 照子 同 橋本町 山口市飯田町高尾方
- 河野ウメ子 同 土原
- 金川 露子 同 堀内 (死亡)
- 市川美壽子(木谷)同 佐渡郡防府町宮市 住所不明
- 久志アヤ子 萩 土原 山口市湯田一本松安武方
- 熊野ヒサ子 同 今魚店町 (死亡)
- 熊谷 愛子 同 二ツ森大崎 東京
- 大崎ミヨ子(後藤)同 福川村 (死亡)
- 岩武 尙子(佐伯)阿 椿東 山口市天華雲谷庭下
- 齋藤 貞子 同 島根縣美濃郡小野村 (死亡)
- 篠原 光 同 椿東 大津郡深川村藤木
- 尾崎婦美子(鈴木)萩 吉部村 臺南嘉義街北門外三三五
- 中野キクヨ(末成)阿 下松町 萩市平安古
- 武居 榮子 同 椿東 京都市六角油小路西入森田栖
- 竹下ハナ子 同 唐麵 神戸市天野町天王谷 田村方
- 高橋ミチ子 同 明木村
- 内藤 靜江 萩 椿東松本
- 中村トヨ子 同
- 中村 信子 同

- 井町イト(奈古屋)同 米屋町
- 西山 文子 同 山田
- 能美 チヨ(青沼)同 中津江
- 原田シヅコ 同 土原 滿洲大石橋大正街一ノ三ノ一
- 大阪 宣子(原田)同 江向 岐阜市春日町二丁目北組
- 福水ヒサ子 同 橋本 安奉線草河口河上泰亮方
- 堀 俊子 同 江向 橫濱市神奈川區青木町澤渡谷 一六〇〇
- 頓野シヅ子(松浦)同 平安古
- 三好 民子 同 椿東香川津
- 光井 泰子 同 濱崎
- 村上フサ子 阿 三見村
- 村上チヨコ 萩 山田
- 森田 繁子(本永)同 堀内 臺北市米廣町五ノ十
- 森尾シゲ子 同 御許町 山口市大附町森尾虎太郎内
- 依 文子(山田)同 平安古 島根縣濱田町蛭子町
- 山本 房江 阿 川上村 高瀬長井内
- 井本 義子 同 須佐町
- 横山ミサヲ 同 川上村
- 坂本ミツヲ(松田)萩 川島 熊毛郡三丘村
- 長井アヤ子 阿 川上村 山口市大殿小路三吉方久七

第十三回 卒業生(本科)

大正十四年三月(菊組) (五十音順)

- 長井アヤ子 阿 川上村 山口市大殿小路三吉方久七

- 石川サダ子 萩 濱崎
- 今津シヅコ 同 椿區濁淵
- 井上 綾子 阿 福川村 住所不明
- 井町 梅子 同 生雲村
- 服部クマ子 同 紫福村 (死亡)
- 長谷川マサ 廣島縣豊田郡東野村 萩町新川
- 赤木千代子(波多野)萩 濱崎 萩市鶯谷
- 林 諒子 同 御許町 神戸市東須磨鑛道官舎廿四ノ四
- 原田ミツコ 同 山田 東京市赤坂區氷川町五二堀哲三郎方
- 原 テイ子 美 赤郷村 山口縣小野田町本町
- 弘永サトリ(小野村)萩 椿東 下關市竹崎町二丁目小山第五舎
- 大谷 ハツ 同 土原 撫順東三條通樂天地西村貞内
- 岡村 セツ 同 山田 椿東小學校
- 岡 里子 同 川島 宇都布西區上町二丁目國重方
- 渡邊 愛子 同 川島 萩明倫小學校
- 末光 萩野(金子)阿 三見村 大連市八幡町二六下野方
- 鎌村シズ子 萩 江向 阿 奈古村 (死亡)
- 河野マツ子 美 共和村 (阿武郡大井小學校)
- 河野チエ子 萩 椿東小畑 厚狹郡厚南村沖且 眞鍋氏方
- 吉賀ヨシ子 萩 椿東小畑 住所不明
- 山根不二子(吉見)同 河添 住所不明
- 中村トミ子(田村)同 椿 住所不明

- 田村千代子 同 難式町 大津郡仙崎町今浦町
- 桑田 末子 同 椿東 住所不明
- 波多野トシ(武田)同 山田 大津郡日置村
- 池田 芳子(高橋)同 土原 富山縣伏木町古府
- 中原 光子 同 江向 東京府下尾久町字上尾久一二六一佐々木龍一方
- 榎田千代子(宗實)同 惠美須町 東京市外移並町榮園寺七一〇
- 村岡チヨコ 同 椿區濁淵
- 豊島 幸子(村田)同 唐橋町 東京市世田ヶ谷區下北澤九六五
- 百濟 萩江 同 椿東 朝鮮釜山府榮町一丁目二五
- 濱崎ミヤ子(久保)同 濱崎 萩市江向 (死亡)
- 山本 照 同 川島 大阪府豊能郡庄内村字三星八
- 山本 靜子 同 古萩 萩市土原大塚町字本町橋本館前
- 北尾喜美子(九尾)同 下關市西細江町 萩市土原大塚町字本町橋本館前
- 藤井ツツギ 萩 山田 萩市上五間町
- 吉山登喜江(小松)同 椿 山口縣小野田セメント會社々
- 青木アサコ(寺田)同 椿東小畑 厚狹町
- 伊藤 トヨ(有吉)同 古萩 厚狹町
- 有吉 八枝 同 川島 神戸市平野町天王寺田村方
- 坂本 於橋 同 難谷町 滿洲國營口新市街入船街三六
- 齋藤 政子 同 濱崎 阿 川上村
- 木村フジコ 同 阿 川上村 山口市新道赤井榮助方
- 三輪 恒子 萩 御許町

第十四回 卒業生(本科)

大正十五年三月(菊組) (いろは順)

- 柴田シヅコ 阿 川上村 (死亡)
- 神保富美子 萩 椿東 住所不明
- 澄川 トク 同 土原 生雲村藏目喜小學校
- 伊佐 貞子 萩 本町 東京市小金井關野新田四四一 笹豐助方
- 井町アツコ 阿 三見村 朝鮮京城府明治町二丁目六十 九番地
- 松本 鐵代(岩崎)萩 椿東
- 橋本 貞子 同 椿東 萩市熊谷町
- 松本 壽子(羽鳥)同 椿 萩市熊谷町
- 土井千鶴子 同 椿東
- 寺田マツ子(岡崎)同
- 窪田スミ子(金子)阿 大井村 臺灣臺北州七星郡湖庄内三却 寺田進治方 大津郡日置村
- 河野 厚子 萩 椿東 (死亡)
- 桂 松子 同 土原 萩市江向
- 粕屋トミ子 同 魚店 姫路市京口町五五三宮永岩一 方
- 上田 童子(河野)同 橋本 大阪府西成區松通リ五丁目 住所不明
- 吉山シヅ子 同 山田 住所不明
- 松井ウメ子(吉屋)同 油屋町 萩市八丁川島
- 永岡ミサコ(高洲)同 土原 住所不明
- 多田 照子 同 椿東 明倫小學校

- 迫間芳宜江(瀧口)阿 明木村 朝鮮釜山府瀧州町六十二
- 澤 正子(田中)萩 濱崎 名古屋市外鳴海町なるみ莊一三五
- 竹重壽美子 同 江向
- 山本 保子(津守)阿 明木村 山口市東白石三三〇二
- 中村タチ子 萩 山田木間
- 中島 壽子 同 川島
- 村上 玉子 東京府下豊多摩郡澁谷町
- 竹内 イシ(植木)萩 山田 阿 明木村字笛吹
- 村田 筆子(梅本)照 光井村 茨城縣水戸市上市元山町五六 三五横須賀支之松方 阿武郡小山村本郷
- 井上 文子(植田)萩 椿東
- 柳井 君子 同 椿東
- 小倉 敏子(山根)阿 大井村
- 山本 節子 萩 渡り口 住所不明
- 山本 ナツ 長崎縣長崎市 (死亡)
- 安田百合子 萩 椿東 明木尋常高等小學校
- 益富 貞子 吉 嘉川村 住所不明
- 中野キクノ(松本)萩 山田 (死亡)
- 眞本アツコ(藤田)同 椿 東京市芝區南佐久間町三丁目九
- 飯田 靖子(福島)同 椿東 東京市外西巢鴨町池袋一〇九 六(死亡)
- 小池 幸子 同 堀内 神奈川縣箱根小涌谷
- 後藤 文子 同 椿東
- 伊藤ヨシ子(阿武)同 同 椿東 下關市宇後田京町二丁目一八

- 大藤 恒子(阿武)阿 川上村 萩市土原
- 齋藤 節子 萩 上五間町 住所不明
- 清須 イト 同 椿沖原 萩市南片河
- 三原 貞江 島根縣鏡川郡西濱村
- 白井 律子 萩 江向 東京市小石川區關口臺町二六
- 藤重 貞子 大 三隅村 河村方
- 末永 貞子 萩 橋本町 同村宗頭小學校在職
- 羽生美壽子(杉山)同 川島 江向竹田波町
- 有光美子(鈴木)同 椿東 朝鮮成鏡南道甲山郡惠山鎮陸軍官舎
- 杉山 泰子(居田)同 堀内 宇部市市役所裏通リ

第十四回 卒業生(實科)

大正十五年三月(いろは順)

- 砂 君子 萩 堀内
- 岩本 雪代 阿 明木村
- 原田シキブ 萩 山田
- 波多野照代 同 濱崎
- 堀野 文子 阿 田万崎村
- 高杉キヨ子(大野)美 大田町
- 小田カメコ 阿 奈古村
- 大田キシコ 同 田万崎村
- 小野千代子 同 奈古村

- 岡 和子(大田)萩 川島ニツ森 明倫小學校
- 足利スミ子(渡邊)同 濱崎 臺灣臺北大通リ二丁目
- 金子 ツル 阿 福川村
- 河村美登里 萩 椿東無田口 (死亡)
- 吉屋 時子 阿 大井村
- 田村モミ子 同 明木村
- 立野ヘルヨ 同 彌富村 住所不明
- 津田 幸子 同 須佐町 住所不明
- 都野幾久子 萩 江向 朝鮮大邱府東雲町六六
- 中村 君子 同 椿東松本
- 森重智恵子 阿 六島村大島 萩市津守町
- 粟田 菊司 同 吉部村 萩市堀内
- 山田モモヨ 萩 椿東松本 住所不明
- 山本 絹子 同 東濱崎
- 松浦 愛子 阿 大井村
- 藤原キクノ 同 福川村
- 安藤 ツル 萩 椿香川津
- 君谷 藤子 阿 吉部村
- 三好富貴子 萩 吉田町
- 末成 佳子(下瀬)阿 紫福村 阿武郡吉部村
- 窪田 祥子(品川) 東京市世田ヶ谷區太子堂三八
- 茂刈 菊代 阿 宇田郷村
- 吉村 滿子(末永)同 紫福村 阿武郡高俣村岸高

第十五回 卒業生(本科)

昭和二年三月(梅組)(いろは順)

- 石津 里子 萩 椿東 萩市椿西
- 伊藤 智子 阿 奈古村
- 河内 君代(板垣)熊 呼坂村
- 小野美代子(岩田)萩 奥玉江 小倉市砂津豊泉町二丁目
- 岩本 禮子 同 江向
- 波多野ヒサコ 同 前小畑 福川小學校
- 西林富美子(長谷)同 津守町 秋田市上中城町
- 林 光子 同 椿東中ノ倉 (死亡)
- 原 文子 阿 明木村
- 原田 滿恵 兵庫縣揖保郡立野町 萩市沖原
- 堀 ヨシ子 萩 青海 三見小學校
- 大橋トミ子 同 川島
- 大田ミサ子 同 土原
- 大島スエ子 同 濱崎 住所不明
- 岡本 芳江 同 大谷 住所不明
- 和田 久 豊 田耕村 神戸市龍内町四丁目一〇八和
- 渡邊美和恵 萩 大谷
- 鹿島イツコ 美 共和村
- 金山 治子 萩 上五間町 愛知縣海部郡津島町布屋町
- 河野 夏子 同 橋本町

- 松山 通子 同 川島
- 山藤キエ子(竹内)同 渡リ口 萩市吉田町
- 田總 ヨシ 同 平安古
- 神崎 松代(津森)同 堀内 東京市澁谷區字上智四一
- 中村 夏子 同 門司市大里町御所町三丁目青木徳義方
- 仲子 キク 同 西田町
- 内山 愛子 都 久米村 美禰郡大田町
- 阿 美智子(日羽)萩 堀内 下關市丸山町一九五四ノ四
- 山根 秋 同 吉田町
- 村木由喜子(山中)阿 三見村 萩市鶴江
- 山中リヨエ 萩 惠美須町
- 山本 千代 同 御許町 江向
- 山中 淑子(山本)同 土原 (死亡)
- 別府 年子(松田)同 堀内 朝鮮京城府始洞二八
- 福永 ウメ 同 堀内 東京市芝區白金三光町根本貫吉方
- 厚東 関子 同 松本
- 安達ヨシコ 同 金谷 東京市外世田ヶ谷町下北澤八
- 厚東 英子(阿武)同 土原 福岡市
- 佐方キミ子 同 倉江 大阪市西成區松通リ六丁目
- 北出イクエ 奈良市井上町 七七八下城安藤内
- 木村 壽子 萩 御弓町
- 末岡ハナ子 同 今魚備

○杉山 文子 同 川島 善福寺前
○杉山ナツ子 美 共和村

第十五回 卒業生(本科)

昭和二年三月(菊組)(いろは順)

○池内 巴 萩 惠美須町
○伊藤 基美 美 於福村 萩市唐樋 村田方
○伊東 浪子 萩 橋本
○林 京代子 同 平安古
○一山 賀代(堀) 同 川島 大阪市東淀川区國次町三八三
○堀 静子 同 椿東中ノ倉 住所不明
○堀上 重 同 江向
○大谷 チユ 同 椿東中ノ倉 阿 福井村市
○鬼村 露子 同 橋本 門司市日之出町稻荷座前藤井方
○岡 キヨコ 同 椿東後小畑
○上田 静子(岡田)同 椿東鶴江 吉敷郡小郡新町
○小野キミコ 同 椿町 神戸市外西灘村原田六〇二田上方
○若松ツルコ 同 東田町 朝鮮京城漢江通十六番地
○西山 豊子(渡邊)同 椿町
○河村 繁子 同 熊谷町 (死亡)
○川村 清子 同 熊谷町 (死亡)
○釜田 ミネ 同 前小畑

○宮原千代子 同 鹽屋町 北海道札幌市南九條西十五
○下井 美子 美 大田町 萩御許町
○平野タミ子(清水)萩 上五間町(死亡)
○水津 芳子(品川)同 熊谷町 住所不明
○廣 文子 同 住所不明

第十五回 卒業生(實科)

昭和二年三月(いろは順)

○池田スエノ 阿 紫福村
○三好チトセ(井上)美 秋吉村 東京市本郷區眞砂町一六三好俊行方
○津多野愛子(須野)山口市八幡馬場 萩市江向
○林 富子 萩 平安古
○藤田トミヨ(大山)同 椿 梅露海
○小野村満子 同 椿東 萩市後小畑
○河内山照子 同 濱崎
○花村ハツ子(横山)同 河添 萩市西田町
○田中ヤスエ(上村)同 椿東 東京市目黒區下目黒六四一植村方
○中村 節子 同 川島
○上野キヨ子 同 平安古
○宇野 英子 同 川島
○山村八重子 阿 吉部村 (死亡)
○山村 イシ 萩 椿東 新川

○横山 藤枝 阿 川上村
○横木 房子 萩 江向
○藤井ハル子(竹谷)同 下五間町 東京市外入新井町不入斗一三
○竹中 富恩 同 椿東松本 防府町松崎小學校
○津田智恵子 同 東田町
○中村アジ子 美 共和村 青島市場一路二九穴正洋行内
○中尾ハル子 萩 濱崎
○村上 信子 同 東田町
○上田ヨシノ 同 山田
○植村ヨシコ 大 日置村 萩町新川
○徳永ヘル子(能美)萩 唐樋 長崎市東山手十一
○山下 悦子 同 倉江 (死亡)
○山田 ミチ 同 土原 東京市牛込區南櫻町三五
○山本 ハナ 同 椿 大阪市此花區吉野町一丁目二
○山本壽美恵 同 大谷 〇春海寛方
○山本 聰子 同 倉江
○三輪 トミ(松村)同 上五間町 萩市吉田町
○甲谷壽美枝(馬來)同 堀内 東京市芝區高輪南町二七番地
○藤田 郁子 同 土原
○藤井マサ子 大 菱海村
○赤川 鐵子 萩 土原 佐賀市神野町東神野三番地
○行本 貞子 同 橋本

○富田トシヨ(山本)大 菱海村 大津郡三隅村宗塚小學校
○藤田ヤスコ 萩 椿露海
○吉屋キミエ(寺戸)同 椿東 住所不明
○矢田ヨシノ(上利)大 菱海村大字伊上
○有吉フサ子 萩 西田町
○齋藤 豊子 同 東田町
○三村キタ子 阿 福川村
○辰馬 和子(品川)北海道示志郡乙部村 兵庫縣宮市本町百十
○平川 フジ 萩 平安古 見嶋村駐在所
○小野村キミ(森田)阿 田万崎村 萩市後小畑
○森川ハツ子 萩 土原
○末成タケ子 阿 吉部村

第十六回 卒業生(實科)

昭和三年三月(梅組)(五十音順)

○岩武 正子 阿 紫福村第七六百三番地
○花田 鏡子 萩 椿西 住所不明
○西村 政子 同 奈古村第四百三十番屋敷
○仁保 キタ 萩 土原
○時山 文子 同 山田
○富田 文子 同 橋本
○大野 イネ 阿 奈古村
十〇大津シン子 萩 松本 山口市西白石八木宗十郎方

○小田 ミツ 阿 奈古村
 ○金子 敏子 萩 大谷
 ○金山ツネ子 同 御弓町
 十〇三元 孝(河名)同 椿西 三見村市色音寺内
 ○柏木 敏子 同 東田町
 ○吉村多喜子 同 川島 南滿洲鞍山北四條二〇七
 ○横山 登子 同 唐樋町
 ○竹内 静子 同 惠美須町 大連市外南關嶺貯炭所
 ○岡崎 敦子(瀧野)同 沖原 住所不明
 十〇江藤 文子(高村)同 江向 靜岡縣女子師範學校前
 ○澁谷美智子(高橋)同 土原 臺灣臺中市旭町六ノ一
 ○津森 茂子 同 熊谷町
 十〇中村 貞子 同 平安古 小野田山手セメント會社大賀
 十〇梅下マツ子 同 濱崎 泰助方
 十〇兒玉 重子(横田)同 椿東 德島縣宮岡町仲米崎様方
 十〇倉重千代子 同 椿東 (死亡)
 ○竹田 親枝(安光)同 土原 萩町堀内
 ○山縣 ウメ 同 河内 東京市中西區野方町上高田二
 七四
 十〇山田 道子 同 平安古 東京市外天沼一七五
 ○櫻井 静(松田)同 川島
 ○松野 君子 美 大田町

十〇池田 フミ(藤田)萩 南片河 朝鮮元山本町三丁目
 ○小原美代子 萩 島根縣藏川郡西濱村 萩市田町
 ○鬼村ユキ子(小林)萩 中津江 東京市世田ヶ谷區大字堂六三
 ●○佐伯 文子 阿 徳佐村 萩市川島 (死亡)
 ○北村 敏子 美 大田町 美禰郡赤郷村桂陽尋常高等小
 學校
 萩市新川
 十〇三隅 フサ 萩 五間町
 十〇光國 榮 同 米屋町 下關市西ノ端恒成芳藏方
 ○宮内千代子 同 熊谷町
 ○静間 芳子 阿 須佐町
 十〇弘中 静 萩 川島
 十〇本永 芳恵 同 平安古
 ○藤福サダ子 大 三隅村
 ○須子 安子 萩 江向八丁 東京府下野方町新井五〇三
 成瀬方
 ○助石フキ子 同 平安古

第十六回 卒業生(本科)

昭和三年三月(菊組) (いろは順)

○井上ヒサヨ 萩 江向 萩市唐樋町横山病院内
 十〇石井八重子 同 小畑
 ○市川 フミ 同 川島
 ○原田 照子 兵庫縣揖保郡龍野町 萩市雲谷
 ○原 マツ代 阿 紫福村 萩市雁島

○波田 幸世 萩 椿東
 ○原 ミサヲ 美 赤郷村 住所不明
 十〇西山 初枝 萩 川島 大阪市西區南堀江五丁目鳩方
 ○錢谷トシ子(堀本)同 堀内 宇部市上宇部錢谷賢次方
 ○友永マサコ 美 大田町 美禰郡秋吉小學校
 ○藤田 梅代(土井)萩 椿東 萩市青海
 ○小田 文子 同 御許町
 ○大谷 ウメ 同 後小畑 須佐町青美尋常高等小學校
 ○小田 綾子 阿 奈古村
 ○大田 好子 萩 熊谷町 山口市湯田町大正通三輪平三
 郎内
 ○山根 好子(大谷)同 中ノ倉 萩市江向八丁
 ○財満八重子(落合)阿 川上村 萩土原
 十〇佐々木マヌ子 大 三隅村 厚 厚映町
 ○珂村 ヌク 萩 椿西
 ○須子 淑子(桂) 同 川島 萩市江向
 十〇笠井 清子 同 椿西 萩市雜式町
 ○高橋イネ子 同 上五間町 住所不明
 ○長岡シズ子 阿 紫福村
 ○村田 貞子 萩 唐樋町
 ○中原ユキ子 同 土原
 ○永安ハナ子 同 川島
 ○中野カタル 大 日置村 萩市江向

十〇村上 照子 萩 東田町
 ○能美ミツヨ 同 中津江
 ○黒瀬田鶴子 同 椿西
 ○桑原 ヨシ 同 新堀
 ○阿武 鷹子(山田)大 通村 萩市濱崎町
 十〇山村 梅子 萩 濱崎
 十〇阿武 ハナ(松村)同 上五間町萩市川島
 ○大谷伊楚子(小橋)同 今魚欄 名古屋市東區下飯田町宮前三
 ●○江舟二美子 阿 川上村
 ○佐伯 増榮 萩 江向 (死亡)
 十〇菊屋喜美子 同 奥服町
 十〇木下美恵子 同 熊谷町
 十〇船 洪子 同 椿
 ○瀧部百合子 同 松本
 ○瀧部ウメ子 同 椿東 廣島縣因ノ島土生町
 ○水野 綾子(三浦)同 御弓町 岐阜縣養老郡多藝
 ○島本サメ子 同 濱崎
 ○河野智得子(下田)大 仙崎町 下關市入江町四八
 ○西村 文子 阿 宇田郷村 萩市青海
 ○最上 綾子 萩 西田町
 ○守田トミ子 萩 藤間村 萩市江向
 ○鈴木 絶子 萩 椿東

第十六回 卒業生(實科)

昭和三年三月(いろは順)

- 井上 幾代 岡山縣上房郡高梁町 萩市椿東
- 伊藤 芳子 阿川上村
- 岩崎フジ子 萩東田町 東京市小石川區下富坂町二〇
- 原川 芳子 玖 柳井町 萩市土原
- 林 孝子 萩 北古萩
- 長谷川明子 廣島縣廣品郡驛家村 京都帝大醫學部附屬醫院中寄宿舍
- 細川サト子 阿川上村 萩市江向
- 大塚 調子 同 須佐町
- 大田 美子 同 大井村
- 渡邊キタコ 萩 濱崎 門司市奈利町一丁目 野坂只一方
- 河村千代子 同 椿東
- 河村トミ子 阿 明木村 宇部市琴芝町濫谷芳子方
- 横山 清子 同 川上村宇熊谷 京都市外山科町音羽
- 田中 芳子 萩 濱崎 萩市渡り口
- 中澤イセ子 大 菱海村
- 中村富美子 萩 江向
- 中原タカ子 同 御許町
- 山中 瀧菜 同 平安古
- 山田フジノ 阿 宇田郷村
- 堀 貞子(松永)大 日置村 萩市濩式町

第十七回 卒業生(本科)

昭和四年三月(梅組)(いろは順)

- 松岡マズ子 萩 北古萩
- 松浦 篤子 阿 大井村
- 増井 孝 東京市芝區高輪町 熊本縣球磨郡人吉町南町
- 藤田アサコ 萩 青海
- 阿武マツ子 阿 三見村 三見村中山
- 阿部 嘉子 萩 美津守町
- 佐藤百合子 美 綾木村
- 齊藤 豐子 朝鮮京城道土城 臺灣花蓮港電氣株式會社 住宅サバト
- 惠美須屋マス(岸)萩 椿町 萩市玉江
- 北村喜代子 同 江向
- 御手洗菊枝 阿 川上村 川上村立野
- 三輪 美子 同 紫瀬村 萩市御許町
- 柴田キヨ子 同 三見村 三見村浦
- 藤田マツ子 同 同 三見村河内
- 吉田 文子(茂刈)同 宇田郷村 萩市江向
- 山縣 スミ 萩 山田
- 松井 節子 美 赤郷村 東京市世田ヶ谷區下北澤六三
- 藤田 照代 廣島市竹原町 萩市今古萩
- 岸 常磐(藤山)阿 紫瀬村 萩市玉江
- 藤井 繁子 萩 土原 萩市川島
- 小林八重子 同 堀内
- 淺海千代子 同 椿東
- 赤崎 ヒナ 同 堀内
- 阿武 敦子 同 椿東
- 有田 澄子 同 堀内
- 大藤 和子(有田)同 江向 東京市外濫谷櫻谷六
- 内藤ナミ子 同 椿 阿 奈古村末若一男方
- 山根フジエ(齋藤)阿 大井村 坂本
- 佐伯千代賀 萩 濱崎新丁 (死七)
- 三坂ハルエ 同 椿東 川上村袴場小學校
- 三戸 正子 同 江向
- 河村 隆子(三輪)同 椿東 門司市東本町二丁目
- 三好タメ子 同 同
- 柴田キヨ子 同 同
- 弘 ユキ子 同 津守町
- 水津 順子 同 椿
- 田村 朝子 同 東田町 萩市登谷

- 波多 靜江 萩 椿東
- 仁保 正子 同 土原 東京府西荻窪東京女子大學
- 細田マツコ 同 東濱崎
- 堀本シブエ 同 堀内 玖珂郡麻里布岩國人絹會社庶務課
- 堀野 公子 阿 田万崎村 萩市松本
- 土井 幸子 同 椿東
- 大庭キタエ 同 五町
- 大石ヒサ子 同 堀内
- 小野 清子 同 濱崎
- 藤村ツタエ(河村)阿 三見村 萩市奥玉江
- 田中 清子 萩 平安古
- 竹内 操子 同 平安古
- 竹内 茂 同 古萩 神戸市蓮宮通二丁目三七
- 田中 雪子 同 椿
- 高洲 キヨ 同 椿
- 中谷 幸子 阿 明木村 萩市川島
- 中村富美子 萩 奈若町 同 堀内
- 馬屋原雪滿 同 江向
- 上田ミドリ 同 山田
- 百濟 万喜 同 椿東
- 山田 徳子 同 北古萩
- 八木 正枝 同 東田町
- 山根 アヤ 阿 大井村

第十七回 卒業生 (本科)

昭和四年三月 (菊組) (いろは順)

- 伊藤 靜枝 山口市 厚狭郡船木町宮本
- 十○石津 夏子 萩 堀内
- 西山 正子 同 山田 白水小學校
- 刀彌 カメ 同 東濱崎 東京市麴町區飯田町五ノ三〇
- 大永千代子 大 日置村 櫻寮内
- 宗實 元子 萩 惠美須町
- 村木 宣子(岡田)同 鶴江 朝鮮羅南軍本町三八
- 大島 敏子 萩 濱崎 大連市秀月臺一七八
- 河村フジエ 同 江向 門司市東本町二丁目
- 十○川島佐芽子 阿 須佐町
- 吉田 武子 同 吉田町
- 田中美譽子 同 東田町
- 田中富佐子 同 吳服町 福岡市馬出寺中一二四ノ二
- 田中シズエ 同 椿東 並木方
- 竹内 勝子 同 平安古 萩市椿
- 十○大草フサ子(田村)同 河添 萩市濁瀨
- 永安イッコ 同 椿東 神戶市葦谷區筒井通二丁目五
- 長村フジエ 同 椿東
- 中原 豊子 同 椿東

四〇

- 中村 艶子 同 御許町
- 中村 千枝 東京市本所區向島諸地町 萩市玉江
- 中村 芳子 萩 東田町
- 中本智恵子 阿 田方崎村
- 上田 静子 萩 西田町
- 口羽千重子 同 堀内
- 倉重トミ子 同 堀内
- 久保田惠美子 同 椿東 阿 福川小學校在職
- 十○矢次登美子 阿 小川村 萩市御許町
- 山根キタヨ 萩 橋本町
- 山根キタヨ 同 山田木間 萩市小畑 山根政二内
- 松本ヘル子 同 同 住所不明
- 松屋千代子 同 濱崎
- 深井 貞子 同 山田
- 藤田 富枝 阿 福川村
- 阿武 淑子 萩 椿東
- 十○秋山敏子 同 北古萩 (死亡)
- 岡 美子(阿字雄)阿 大井村 阿武郡紫福村
- 佐伯 花子 萩 東田町
- 木原 雪子 同 椿東 大井小學校
- 下井智恵子 厚 方倉村 萩市御許町
- 柴田シヅコ 阿 福川村
- 守田富美子 萩 御許町 (死亡)
- 森屋滿壽子 同 瓦町

- 杉原みつ代 阿 大井村 東京市江戸川區小松川三ノ五
- 末岡 静子 萩 魚欄町 三片山平作方
- 小川千鶴子(荒地)萩 椿西 岡山縣玉島町
- 美野 芳江 熊 平生 萩市堀内公會堂内

第十七回 卒業生 (實科)

昭和四年三月 (いろは順)

- 井川志末子 大 三隅村
- 石津スミ子 阿 明木村 萩市川島
- 林 トミ子 萩 川島
- 林 宣子 同 平安古
- 西尾 祥子 阿 田方崎村 徳佐村龜山小學校
- 西村 正恵 高知縣土佐郡下知町 吳市東二河通り二丁目六ノ五阿部方
- 十○堀江 靖子 萩 江向
- 岡崎 政子 阿 川上村高瀬
- 岡崎 壽子 同 同
- 河内山千壽江 萩 濱崎 東京市本郷區西片町一〇 若山要二内
- 中谷 芳子 大 向津具村
- 村岡おさだ 萩 川島 萩市江向
- 村田マサエ 同 北古萩 東京市淀橋區柏木三丁目四〇
- 十○岡守ツチ子 同 神原 六 藤野岩友方
- 木村 春子(久志)同 江向 廣島市河原町二一三ノ一六
- 木原龜鑑方

第十八回 卒業生 (本科)

昭和五年三月 (梅組) (いろは順)

- 郡司須恵子 萩 諱前
- 山根サワヨ 阿 紫福村
- 松永 菊枝 大 菱海村伊上
- 松本ツルヨ 同 同
- 松永 静代 同 向津具村 萩市江向
- 増野 紹代 阿 福川村 美禰郡直長田村淳美小學校
- 藤川 美枝 萩 西田町
- 兒玉 静子 吉 井關村 萩市江向
- 江原千鶴子 大 日置村
- 栗屋 得子 萩 平安古 萩市江向
- 有吉 壽 同 北古萩
- 有馬 初枝 同 濱崎
- 末武ヒサヨ 同 越ヶ濱
- 相本フミ子 同 同
- 鈴木ヨシコ 阿 福川村
- 伊藤 里子 萩 椿東 神戸市西灘河原三八四 田原吉良方
- 十○石九 都 同 椿 兵庫縣西宮市外今津町今津字山中五五〇 藤田方
- 十○渡多野靖子(須多野)山口市八幡馬場 萩市江向 山田山下町三ノ一
- 羽仁喜久江 萩 平安古 廣島市女子専門學校
- 林 壽子 島根縣通摩郡五十猛村 萩市川島

四一

○見玉登美代(堀) 萩川島 臺北市外樹林酒工場官舎
 ○岡 久子 阿 紫福村 阿 田方崎村多磨小學校
 ○小原 正代 島根縣城川郡西濱村大地 萩市吉田町
 +○大橋マサコ 萩川島 東京市牛込區女子醫學專門學
 ○大野サダ子 阿 三見村 萩校
 ○小田 君江 萩 椿東 朝鮮開城滿月町八七七一
 +○若松 梅子 同 東田町 小田正藏方
 ○和田 安子 豊 田耕村 神戸市葦合區藤内町五丁目一
 +○河野喜彌子 阿 大井村 二〇
 ○吉井 延子 萩 江向 福岡縣三池郡駿馬 京都同志社專門部英文
 ○高田 美子 萩 五町 萩市渡ヲ口
 ○田中喜美子 同 川島 同 平安古石屋町
 ○竹内 義子 同 土原 朝鮮京城府漢江通三ノ九二横
 ○中村千代子 同 千樹方
 ●○長野 光枝 山口市同政寺 (死亡)
 ○長嶺マサコ 美 岩永村岩永下郷 東京市外池上町徳持
 +○村上アサエ 萩 東田町 五六六
 ○野田 綾子 阿 篠生村 萩市米屋町
 ○二宮 菊子(久保) 萩 東濱崎 住所不明
 ○久津内貞子 阿 須佐町 萩市今古萩
 ○柳井 文子 萩 山田
 ○山縣 照子 同 椿東 萩市工原

○安田マサコ 同 同
 +○松浦 光子 同 濱崎
 ○藤田 トミ 同 椿
 +○藤屋ツル子 同 東田町
 ○藤山タメ子 同 椿東
 +○厚東 静子 同 同
 +○栗屋喜美子 同 土原 萩市江向
 ○有田 幸子 阿 吉部村吉部上
 +○坂 佳子 萩 椿東
 ○佐々木千鶴子 同 古萩 萩市大谷
 ○三好 孝子 同 東田町
 +○水野 信子 同 元町
 ○弘兼 文子 同 椿東
 ○井関 節子(平島) 同 御許町
 ○森 艶子 阿 川上村
 +○本永 隆子 萩 堀内
 ○森中 美代 阿 須佐町 萩市江向
 ○居田百合子 同 嘉年村嘉年下 萩市堀内
 ○杉山 昌 萩 北古萩
 ○金子喜江子(澄川) 同 東濱崎 萩市五間町
 +○鈴木志計子 同 椿東
 ○重藤美知子 福岡縣田川郡金川村 萩市濱崎

第十八回 卒業生(本科)

昭和五年三月(菊組) (いろは順)

○伊藤ハツ子 阿 大井村
 ○井上 忠子 同 福川村 山口市西白石 池田方
 ○石津 麻子 萩 椿町
 ○石丸喜久枝 同 濁淵
 ○中所 富子 同 川島
 +○西村ヤエ子 阿 紫福村 東京市澁谷區常磐松實陸高等
 ○岡野 芳子 萩 合江 女學校專門部
 ○小田喜久子 同 同
 ○渡邊 時子 同 山田
 ○河邊不二子 大 三綱村
 ○川村 利子 萩 熊谷町
 ●○香川 ミチ 同 濱崎新町(死亡)
 ○金子 初代 同 江向
 ●○吉村フミ子 同 熊谷町 (死亡)
 ●○田中 夏子 同 椿町 (死亡)
 佐伯 文子(竹岡) 同 西田町 萩市東田町
 ○竹田 直子 阿 福智村福田下 萩市堀内
 ○竹重 園子 萩 江向
 ○瀧野 琴 同 椿東 萩市椿原
 ○内藤ヨシ子 阿 福川村福井下 萩市椿東

○國本ミツ子(長田) 萩 椿東 釜山西町二丁目四番地
 ○作間富美枝(長澄) 阿 三見村 朝鮮羅南本町公立小學校前
 ○草刈 貞子 萩 細工町
 ○國司壽恵子 大 日置村日置下
 +○矢次 純代 萩 平安古
 +○安田クニコ 同 河添
 ○田中 愛子(松尾) 阿 三見村 東京市中野昭和通
 ○松田フミ子 同 椿東
 ○藤田喜多子 阿 徳佐村 東京女子職業學校
 ○藤井シズエ 大 向津具村向津具下 萩市西田町
 ○福田 静枝 萩 椿屋町
 ○栗屋 淑子 同 江向 萩市平安古
 ○有吉 久子 同 同
 ○有馬キヨ子 同 濱崎
 ○淺野 綾子 同 椿東
 ○安野志都子 阿 彌富村彌富下 萩市平安古
 ○天野レイコ 美 伊佐町 瀨洲國四平街仁壽街櫻井方
 +○澤本 乙女 萩 東田町 萩市土原新道
 ○境 千代 同 江向 東京市外池橋町柏木三五三
 ○光國 茂子 同 米屋町
 ○柴田 信子 同 美敷町
 ○重本千鶴子 政 堀里市町岩木 萩市濁淵
 ○廣 常子 萩 濱崎

○廣田 綾子 同 土原 大阪市西區新町四丁目二番地
 ○關屋ヨシコ 同 元町 齊藤和服裁縫所内
 ●○助石マツコ 同 平安古 (死亡)
 +○國司 瀧子 同 土原

第十八回 卒業生 (實科)

昭和五年三月 (いろは順)

○井上 正世 厚 小野村 萩東田町
 ○石井喜久恵 萩 椿東
 +○石田 芳子 阿 福川村黒川
 ○原 トミ子 萩 川島
 ○林 シズ子 大 向津具村向津具下
 ○西村 芳乃 萩 椿屋町
 +○峯岡テル子(西山) 同 川島 豊浦郡栗野村
 ○堀 千代子 同 椿 東京市外杉並町馬橋(元半井内)
 +○豊田 鏡子 山口市田町 萩市下五間町
 +○土井 富子 萩 川島
 +○鬼村シヅ子 阿 福川村福井下
 ○大西 民子 萩 濱崎
 ○大石ヒナ子 阿 明木村 萩椿町
 ○小野 規子 同 奈古村
 +○片山 歌子 萩 椿東
 ○片山 安子 阿 紫福村

第十九回 卒業生 (本科)

昭和六年三月 (梅組) (五十音順)

○浅野 愛枝 萩 江向

○吉繼キクエ 萩 椿 四四 防府町多々良 壺谷内
 ○高橋ヨシ子 同 唐橋
 +○田中 幸子 同 椿
 ○瀧 禮子 同 山田
 ○土田 テル 同 濱崎新町 萩東田町新堀
 ○内藤 良子 阿 明木村 萩椿町金谷
 ○長岡ヘル子 同 六島村大島
 ○村田ウメ子 同 田方崎村上田方七七五
 +○武蔵屋ヒナ子 萩 壺屋町
 ○藤原龜代子 同 椿東
 ○藤田 花子 同 椿
 ○藤田喜美子 同 椿
 ○藤山トヨ子 同 熊谷町
 ○齊藤千代子 同 椿東中倉 萩新川
 ○木原美津子 厚 船木町 萩泉服町
 +○光田 照世 萩 今古萩
 +○白井美都子 阿 福川村
 +○篠田千代子 奥市龍田通 萩椿東
 +○下田美智子 大 仙崎町 下關市入江町四八 徳氷方

○安藤フジエ 同 平安古
 ○池上ミキ子 吉 秋穂二島村 室積女子師範學校教員養成所
 ○伊東 昌子 東京府下大久保百人町 東京市牛込區女子醫學專門學校内
 ○井町 ハル 萩 越ヶ濱
 ○岩本 林子 同 南古萩 萩市南片河
 ○岩本 富子 阿 須佐町
 ○内山 貞子 美 大田町 室積女子師範學校教員養成所
 ○内山 泰子 萩 上野 萩市松本
 ○岡村 スキ 同 土原
 +○小野智枝子 阿 奈古村土
 ○加藤 富子 萩 西田町 萩市元町
 +○金子 恭 阿 福川村
 ○金子 光代 萩 江向
 ○川上 幸子 阿 三見村
 ○河野タケ子 同 奈古村濱崎
 ○官野 藤子 萩 古萩
 ○黒瀬千鶴子 同 金谷
 ○厚東 萬子 同 前小畑
 ○佐久間千代子 阿 須佐町 朝鮮黃海道汗浦郵便所
 ○佐々木美都子 同 紫福村京佛 萩市濱崎町伊勢島方
 ○守永 君代(榮田) 同 福川村
 ○田中 操 萩 川島 萩市平安古
 ○玉井 節子 同 唐古萩

○富田千恵子 同 橋本町
 ○中野 友子 阿 須佐町
 ○中原 隆子 萩 松本津川端
 ○中村タキ子 同 椿町
 +○長井 密子 阿 川上村字高瀬 萩市土原
 ○長谷喜代子 萩 御許町
 ○長谷川マヌエ 同 椿東
 ○波多野トヨ子 同 濱崎
 ○深井 チエ 同 倉江
 ○藤田 幸子 同 椿東松本 萩市椿東前小畑
 ○藤田 實子 同 堀内
 ○藤田 文子 同 土原
 ○藤田 元子 同 土原
 ○藤村 多喜 同 八丁川島
 ○室谷キヨ子 阿 田方崎村江崎
 ○本永 松恵 萩 平安古
 ○森川 秀子 阿 小川村 萩市南古萩
 ○山本 禮子 萩 倉江
 ○横木 貞子 同 江向
 ○吉田 花子 同 平安古
 +○長岡由美子 阿 紫福村 萩市西田町

第十九回 卒業生(本科)

昭和六年三月(菊組)(五十音順)

- 七利 光子 萩 吳服町
- 阿武トシ子 同 川島
- 阿武マツ子 同 椿東
- 石原 英子 同 同
- 石光 總代 同 平安古
- 岩崎タミ子 同 東田町
- 岩武 哉 同 紫福村
- 十○上田 昌子 萩 西田町
- 大駒 秀子 大 仙崎町
- 岡崎 文枝 美 秋吉村
- 岡村喜久枝 萩 濱崎本町
- 岡村 孝子 同 御弓町
- 尾崎登茂恵 大 仙崎町
- 河村 壽江 萩 新堀
- 幸崎シズエ 同 椿
- 齋藤 信子 同 御許町
- 齋藤 雪子 同 吉田町
- 齋藤 義子 阿 奈古村
- 坂本 展子 萩 熊谷町
- 十○末岡 益子 阿 福川村

- 末武 貞代 萩 鳳内
- 末岡ミサエ 同 平安古
- 末光紀代子 下 關市
- 十○杉山 美枝 萩 川島
- 高杉 愛子 同 御許町
- 十○田北ミネ子 同 東田町
- 竹田 貞子 阿 福賀村
- 竹原フサ子 萩 西田町
- 十○田坂チヅ子 同 椿
- 中村 靜枝 同 川島
- 能美タミ子 阿 川上村
- 能美ユキ子 萩 唐樋
- 服部富喜子 阿 紫福村
- 福間 正子 萩 濱崎
- 堀田 文子 同 同
- 松浦キク子 同 東濱崎
- 松浦 富枝 同 濱崎
- 三戸喜代子 同 吳服町
- 宮内 信子 同 熊谷町
- 三好カツ子 同 川島
- 守田 律子 熊 藤間村
- 十○山縣 貞子 萩 平安古
- 山本 イチ 同 御許町

第十九回 卒業生(實科)

昭和六年三月(五十音順)

- 十○山本ツル子 同 倉江
- 山本 美智 同 川島
- 横山壽美子 大 日置村
- 阿部 スミ 萩 御許町
- 井川 竹子 大 三隅村
- 伊勢島キヨ子 萩 濱崎
- 植村 春子 同 椿東
- 大山 玉代 大 向津具村
- 十○大山 富代 阿 奈古村
- 大田 民子 大 日置村
- 大田ヒサ子 大 向津具村
- 小野村清子 萩 椿東
- 金子 信子 同 椿
- 金子 芳子 同 椿東
- 岸 千代子 同 椿
- 熊野 實江 大 深川町
- 香原キクエ 萩 榎屋町
- 十○佐々木初代 阿 三見村
- 須山マサ子 阿 平安古
- 田中 照子 美 大嶺村

- 田中 敏子 同 同
- 田村 高 厚 二俣瀨村
- 田村トキエ 萩 椿東
- 都築 松代 同 生雲村藏日喜(死亡)
- 幸戸ハルノ 萩 椿東
- 東野 幸子 大 向津具村
- 水田 當子 萩 椿東
- 中原 操 同 同
- 中村セツノ 同 平安古
- 西村 正子 阿 宇田郷村
- 東 喜佐子 山 口市吉敷
- 弘津 静子 萩 今古萩
- 藤井 玉子 同 山田
- 藤村 静代 同 熊谷町
- 十○藤田 菊枝 同 南片河町
- 藤田ヒサ子 同 榑西
- 福永 徳榮 同 東田町
- 三浦 錫子 同 河添
- 三浦富美子 同 北古萩
- 十○三隅田貞子 同 平安古
- 矢次 清子 同 同
- 山本 照子 同 熊谷町

○吉岡トキヨ 大菱海村 九州大學醫學部看護婦寄宿舎
 ○吉崎 久子 美 赤郷村 北寮七室
 ○吉田 千代 萩 五間町 萩土原
第二十九回 卒業生(本科)
 東京市神田区北神保町八
 高島町

昭和七年三月(菊組)(五十音順)

秋田 順子 萩 惠美須町
 淺野アヤコ 同 吳服町
 荒尾 綾江 吉 小郡町 東京市小石川區大塚町四一
 石川 光子 萩 濱崎 瀬戸糾方
 伊藤 昌子 同 土原
 稻村 八重 豊 長府町
 岩田タマコ 東京市將田區蓮沼町一七八五鈴庵
 大田 操 萩 濱崎
 大谷 榮子 同 椿東 萩越ヶ濱
 大縣キヨ子 同 川島
 桂 智佐子 同 上五間町 萩下五間町
 金子 夏江 同 椿東
 十金子モトエ 阿 大井村市場
 河野 菊子 萩 橋本 萩御許町
 熊毛屋光子 同 椿 山口市師範學校前
 桑原富美子 同 西田町
 小池 清子 同 堀内 東京市外高田町高田一〇六

神野 博江 阿 彌富村宇淵富下
 齋藤 菊代 萩 東田町
 齋藤 静枝 阿 大井村坂本
 十齋藤富美子 萩 濱崎
 十讚岐 秋代 同 古萩
 鹽見 智子 同 椿
 末次 菊代 美 伊佐
 瀧口 桃江 阿 明木村 萩河添
 竹下マツエ 萩 椿
 張 達子 同 土原
 津森 文代 同 堀内
 寺内 政 同 平安古 萩越ヶ濱
 富田 敏子 同 越ヶ濱
 中原シゲ子 同 椿東
 中村ヒサエ 同 橋本
 西村 紀子 同 堀内 萩川島
 波田美代子 同 椿東
 波多野百合子 同 川島 萩濁淵
 藤家 美枝 阿 佐々並村久年
 藤田みすき 廣島縣賀茂郡竹原町 萩今古萩
 松浦 照子 阿 奈古村
 溝部 恭子 萩 河添 萩川島
 宗實 文子 同 惠美須町

十柳井 良子 同 山田
 山縣喜多子 阿 川上村 東京市外南足立郡花畑村十番
 山縣 テセ 萩 山田 朝鮮釜山濱洲町六二 追問方
 吉賀キミ子 同 濱崎 東京市芝區白金今里町一八
 十吉原 正子 同 上五間町 久原氏方
 十渡邊マスコ 同 北古萩
 宮崎 克子 美 岩永村下郷
 鈴子 止子 大 深川町

第二十九回 卒業生(本科)
 昭和七年三月(梅組)(五十音順)

阿郎 光子 阿 三見村
 天野 紀子 萩 東田町 萩吳服町
 有吉喜久子 同 西田町
 栗屋 チエ 同 平安古
 安藤 美江 同 同
 阿武タミ子 阿 大井村
 石金 夏子 萩 土原 萩古萩新橋
 伊藤ウサコ 阿 福川村黒川
 伊藤 敏子 萩 椿區大谷
 伊藤みつ子 阿 福川村黒川 萩椿東三瀬川
 稻村とみ子 豊 豊東村上保木 萩江向中村影方
 大多和ヤス子 萩 椿區

岡田 元子 同 椿東鶴江 東京市杉並區馬橋踏行社々
 岡田 義子 同 江向 宅村木方
 倉田 静子 同 南片河
 河野壽恵子 同 今古萩 萩堀内
 菊屋 正子 同 吳服町
 木村 俊子 阿 三見村
 久保田フク子 萩 香川津
 十黒田 孝子 同 川島
 厚東 晴子 同 松本
 厚東 光子 同 前小畑
 齊藤ミツコ 阿 大井村
 十五野 政子 同 見島村 萩熊谷町中村方
 志賀 篤子 萩 河添
 十末本 節子 吉 名田島村 萩堀内
 高洲ヨシ子 萩 土原
 瀧野 芳枝 同 椿區
 竹下千代子 同 椿東鶴江
 十田中 君江 同 濱崎新町
 田中喜美子 同 椿町
 田村 菊恵 同 山田
 十時山八千枝 同 山田眞奥玉江
 中村 貞子 同 堀内
 中野 桃子 大 日置村 萩江向

林 敬子 愛媛縣松山市二番町二二 萩江向
 福田喜久子 萩 梅區青海
 藤永 初枝 美 龍長田村眞名
 松田己美子 萩 椿東松本
 光永 一枝 阿 明木村
 三戸 文子 萩 江向
 室谷 豐乃 阿 田万崎村
 十箇島 雪子 同 吉部村 萩市平安古
 山縣 信子 萩 椿東
 山田 康子 大 通村 山口高等女學校
 山本 式子 萩 椿東後小畑
 十吉村 常子 同 河添
 吉屋 靜枝 阿 川上村

第二十回 卒業生 (實科)

昭和七年三月 (五十音順)
 赤山 慶子 朝鮮慶南河東郡 萩市山島
 十阿部ツユ子 阿 明木村 萩市濱崎
 十阿部モミ子 同 同 萩市濱崎
 阿武 滋子 同 大井村
 池内 ミネ 萩 惠美須町
 上田 政子 阿 明木村
 十大田 松江 萩 土原

岡 恭子 阿 福山村 萩市土原
 尾方キヨ子 同 三見村 萩市平安古
 十茂藤 文子 美 赤郷村 萩市江向
 小山田サナヘ 同 大嶺村 阿 大井村
 金子 壽子 阿 三見村
 十久芳 禮子 萩 土原 萩市江向
 佐伯 文子 美 別府村 萩市香川津
 十佐伯 由枝 阿 大井村 萩市玉江
 十清水万龜子 廣島縣尾道市 萩市彌屋町
 十高杉波宗子 萩 御許町 阿 大井村
 高屋 菊枝 萩 濁淵
 田中 文江 大 日置村
 西村フジ子 同 同 萩市奥玉江
 西山アヤ子 萩 十日市
 波多野信子 同 西田町
 林 ミツエ 阿 三見村
 原田由紀子 兵庫縣揖保郡龍野町 萩市沖原
 平岡 久子 大 向津具村
 藤田ミツコ 萩 椿區青海
 十藤村 靜子 山口市後河原 萩市米屋町
 十松浦 梅子 阿 大井村
 森重 澄子 同 六島村大島 萩市米屋町
 十安井 貞子 同 川上村椿濱

在校會員

第四學年

安田マサ子 玖 川下村 阿 三見村
 山下 節子 阿 三見村中山 萩市平安古
 山田千代子 大 通村 萩市北古萩
 山根タツコ 萩 吉田町
 山根ハナ子 同 川上村 萩市橋本
 ●山本 治子 萩 平安古 (死亡)
 山本マサ子 阿 明木村 萩市青海
 鹿竹 華枝 同 宇田郷村

(菊組) (五十音順)

阿座上勝子 萩 江向 萩市山島
 石田 知子 同 江向
 石原 禮子 同 椿東 萩市土原
 石光 壽子 同 濱崎
 磯野千尋子 同 瓦町
 大岡 光子 同 西田町
 岡野 輝子 同 唐樋 萩市山田
 小田多都子 同 熊谷町
 賀田多美代 阿 大井村
 角屋シゲ子 萩 古萩

金子 敦子 同
 龜屋 文子 同 椿東 萩市山島
 木村喜久枝 同 川島
 木村代志枝 阿 佐々並村 萩市吉田町
 小原 穂子 鳥根縣鏡川郡西濱村 萩市西田町
 佐伯 朝子 美 別府村下嘉万 本校寄宿舎
 島屋 光子 萩 萩市濱崎
 水津 靜江 阿 福川村福井下 萩市松本
 末岡サカエ 萩 椿東
 玉井喜久子 同 南古萩
 嶋野萬龜枝 同 椿東
 飛落八千代 阿 吉部村吉部下 本校寄宿舎
 中村 鈴子 萩 萩市松本
 中村 澄子 同 唐樋 萩市唐樋
 中村 正子 同 唐樋
 長富ヨシ子 同 土原
 長山 菊代 阿 空占村
 西村 政子 同 榮福村 萩市大谷
 林 英子 萩 川島 萩市平安古
 原川 幸子 萩 柳井町柳井津 萩市土原
 弘長 治子 阿 見島村木村 萩市惠美須町
 藤野 文枝 萩 山田
 堀 初枝 同 濱崎

前田 禮子 同 椿東
 松本 禮子 同 江向 萩市河添
 光井千代子 同 濱崎新町
 守永子鶴子 同 濱崎
 楊井 竹子 同 江向
 山本 光子 同 椿東
 横山かや子 同 東田町 萩市土原
 吉賀 澄子 阿 大井村坂本
 吉野トシ子 萩 堀内
 渡邊 静子 阿 川上村相原 萩市江向
 渡邊 佳枝 萩 椿
 和田 榮子 豊 田耕村 萩市江向

第四學年

(梅組) (五十音順)
 朝枝都喜子 大 三隅村 萩市吉田町
 有田 定子 萩 堀内
 井町マサコ 萩 椿東
 岩崎 幸子 同 江向
 岩本フミヨ 阿 須佐町 本校寄宿舎
 馬屋原純子 萩 江向
 岡崎 玉恵 美 秋吉村 萩市江向
 尾崎富美子 熊 塚積町 同濱崎

鹿島 千代 美 共和村 本校寄宿舎
 金子 テキ 阿 福川村 萩市川島
 河瀬シゲ子 萩 惠美須町
 河邊 綾子 大 三隅村 萩市川島
 木村喜美子 萩 北古萩
 小谷 幾子 山口市 萩市南片河
 齊藤 富美 大 向津具村 萩市御許町
 品川 房子 萩 熊谷町
 末國フサエ 同 萩市平安古
 末武 政子 同 椿東
 高崎八重子 玖 高森町 萩市吉田町
 高松 正子 阿 紫福村 同吳服町
 高屋 翠子 同 川上村 同土原
 竹内 文子 萩 古萩
 田中百合子 同 椿東 萩市平安古
 田中ヨシコ 同 椿東
 田邊フミ子 同 唐樋町 萩市倉江
 津田 貞子 同 東田町
 中川 満子 同 江向
 中村 翠子 同 椿東
 西田 満子 同 北古萩
 西林キミ子 同 古萩
 野村 京子 美 大塚村 本校寄宿舎

第三學年

伊勢島政子 萩 濱崎
 井町 文子 同 濱崎
 植村千壽子 阿 三見村
 大谷 和子 萩 江向 萩市堀内
 岡 喜美子 同 濱崎
 岡村 公子 同 北古萩
 岡崎 延子 阿 川上村高瀬 萩市土原
 小野 智恵 同 奈古村 萩市御許町
 小野村壽子 萩 椿東後小畑
 神田 幸枝 阿 三見村

(菊組) (五十音順)

萩 米屋町
 同 椿
 同 堀内
 美 別府村 本校寄宿舎
 萩 北古萩 萩 北古萩
 同 平安古
 同 土原
 阿 須佐町 本校寄宿舎
 同 川島
 柏木喜美子 萩 東田町
 河田 功 北海道札幌市北四 萩市川島ニッ森
 木下 房子 飯町西六丁目二 萩 熊谷町
 久保井島代 廣 賀茂郡東志和村 萩市東田町小泉方
 小泉 アイ 坊 秩父郡横瀬村 同右
 原東 由子 萩 御許町 萩市濱崎
 齊藤 文子 同 土原
 齊藤 光子 同 椿東町 萩市吉田町
 佐伯 曉美 同 東田町
 佐竹ヨシエ 同 河添
 品川フミエ 同 堀内
 白石 幸子 同 東田町
 水津 サヨ 阿 大井村
 鈴木 繁子 萩 椿東
 鈴木ハツ子 阿 福川村福井下 萩市土原
 田中 朝子 同 奈古村大字木與
 田中 サン 同 六島村大字大島 萩市濱崎
 田村 吉江 萩 椿東
 田村 米子 同 濱崎
 安永 淑子 同 椿東
 服部 未代 阿 紫福村 萩市土原
 平島 京子 萩 御許町
 福島 成子 同 椿東

藤田 靜江 同 椿 萩市江向八丁
 藤田 光子 阿 福川村 萩市土原
 正木 陽子 萩 江向
 松浦 孝子 同 濱崎新町
 松浦ツネ子 阿 大井村
 三戸キヨコ 萩 椿東
 宮野 環 大 俵山村湯町 本校寄宿舎
 山村富士子 萩 濱崎
 山本 延枝 阿 大井村
 山本 愛江 萩 椿
 山本 綾子 同 東濱崎 萩市橋本
 和田 和子 豊 田耕村字朝生 萩市江向
 平野 晴代 阿 川上村立野 本校寄宿舎

第三學年

(梅組) (五十音順)

阿座上京子 阿 紫福村 萩市堀内
 安藤アサ子 千葉縣長生郡二宮本郷本 萩市江向
 石津ヒサヲ 阿 明木村字菅蓋 萩市川島
 伊藤 道子 豊 田耕村上大田 萩市南古萩
 岩城フミ子 萩 吉田町
 上田 民子 同 萩渡リ口 萩市川島
 岡 靜江 同 御弓町 萩市春若町

岡 二三子 同 倉江
 岡 滿 阿 紫福村 萩市川島小橋筋
 小野八重子 同 奈古村字土
 大河戸タケ子 佐 島地村 大津郡三隅村豊原
 大島 光子 萩 濱崎
 大橋タカ子 同 川島
 賀田ノブコ 阿 大井村字坂本
 小川 信子 萩 雜式町
 齋藤マサ子 阿 大井
 境 綾子 萩 平安古字石屋町
 坂上 孝子 同 堀内 萩市露谷
 作間 淑子 阿 須佐町 本校寄宿舎
 末岡美枝子 同 福川村黒川 萩市土原
 末光 文子 萩 椿
 杉山 富子 同 川島
 高崎千壽子 玖 高森町 萩市吉田町
 田村 里子 萩 濱崎 萩市露谷
 田村 文子 同 堀内
 中谷 光枝 萩 椿町
 長尾 光子 同 濁瀧
 並川 文江 同 河添
 名和 治子 朝鮮慶尙南道密陽 萩市奥玉江
 藤村 貞枝 山口市後河原 萩市米屋町

堀 タマ 萩 江向 萩市川島
 松尾 悦子 阿 三見村
 室谷 敦子 同 田万崎村江崎 萩市南古萩
 守重 京子 萩 今古萩
 森屋 壽江 同 元町
 山田 英子 大 通村向町 本校寄宿舎
 山田 快子 萩 松本推原
 大和 泰子 阿 福川村 萩市雜式町
 山中 松子 同 三見村 明石
 吉田早苗子 萩 吉田町
 吉田 フミ 同 川島二ツ森
 横山キミ子 阿 川上村字瓜作 萩市椿町
 横山 壽子 同 三見村
 山崎千枝子 萩 平安古 萩市御許町
 山田 正子 萩 北古萩

第二學年

(菊組) (五十音順)

赤間アキ子 大 深川町露木 本校寄宿舎
 阿川 雪江 萩 濱崎
 有田 孝子 阿 須佐町松原 本校寄宿舎
 岩崎 芳子 萩 東田町
 伊藤登道代 同 濱崎

伊東ひさ子 阿 佐々並村 萩市河添並川方
 岩本 壽子 萩 西田町
 上田 靜江 同 川島
 上田 光子 同 御許町
 大深 芳枝 阿 奈古村
 小田 セツ 同 同 本校寄宿舎
 加藤 道子 萩 山田 萩市樺島金谷黒瀬方
 川津 淑子 阿 大井村 萩市五間町
 河村タカ子 萩 中津江
 木村 範子 同 北古萩
 熊谷キヨ子 同 吳服町
 藏田 八徳 同 江向
 厚東智恵子 同 前小畑
 齋藤ツル子 阿 吉部村 萩市江向
 齋藤 幸子 同 明木村 同川島十日市筋原田方
 重枝 幸子 大 菱海村 同今古萩
 水津キミエ 阿 奈古村木與
 末光 且子 下 關市後地 萩市藤谷町
 埜 松子 萩 平安古
 瀧野 和子 同 椿風神原
 田中 浪子 同 椿東 萩市平安古林榮次方
 田村富美枝 同 古萩 同玉江觀音院
 津森 靜代 同 堀内

第二學年

(梅組) (五十音順)

寺本 文子 同 春若町 萩市江向
 長岡壽枝子 阿 紫福村 同土原十日市筋
 永田キタノ 同 明木村 同八丁川島
 中村 泰子 萩 平安古
 西崎 照代 廣島縣高田郡井原村 萩市河添梅地方
 野坂みち子 萩 堀内
 廣 吉子 同 濱崎
 藤野 和子 同 吉田町
 藤道谷恵夏 同 濱崎新町
 増山スエ子 同 米屋町
 松浦 政子 阿 大井村
 松谷 咲子 萩 山田區 玉江
 馬庭アキ子 同 堀内
 溝部壽美子 同 川島
 三輪喜久枝 阿 紫福村 萩市北古萩
 安田 文子 玖 川下村 三見村浦
 柳林 明子 萩 堀内
 山中 孝 同 梅東香川津
 吉見 清子 同 東田町
 若松ヨシ子 同 東田町
 綿津 和枝 阿 小川村 字田郷村
 渡邊 信子 萩濱崎新町

池田百合子 佐 右田村佐野 萩市樺大谷丸三渡邊方
 石九 智子 萩 川島一九三
 伊藤 俊子 阿 大井村上坂本
 井上 君恵 美 鼓木村楳竹 萩市樺東二五四四
 井上ミサヲ 大 三隅村三隅中 萩市中渡官舎内
 井町タマコ 萩 越ヶ濱
 岩武 知子 阿 紫福村七六〇三 本校寄宿舎
 梅下美津子 萩 濱崎新町
 梅屋 静枝 同 土原
 岡田 公子 同 樺東小畑
 大庭 清子 同 梅東香川津
 岡 安子 同 奥玉江
 岡村キミ子 同 北古萩
 鬼子千代子 阿 福川村福井下 萩市樺渡邊ヨシ方
 河野 定子 同 大井村 本校寄宿舎
 柿山瑠璃子 萩 樺東 萩市平安古
 鹿島 静 美 共和村嘉万 本校寄宿舎
 片山タマキ 萩 樺東中ノ倉
 藤部貴美子 同 川島 三見村
 金子ノリ子 同 山田村木間 萩市江向堀内
 河村 富子 同 西田町

木村 隆子 阿 三見村蔵本
 佐伯 イネ 大 三隅村三隅中 萩市唐穂横山内
 佐伯喜美子 萩 樺洞淵
 齋藤 薫 同 吳服町 萩市川島
 柴田 シナ 同 樺東新川
 柴田 鶴子 阿 福川村福井上 萩市江向伊東孝子内
 島本 清子 萩 濱崎
 末岡美代子 同 樺東中ノ倉
 世良 安子 同 江向 鹽屋町
 田中マコト 阿 大井村字馬場
 土屋富美子 萩 樺東推原
 中野 愛子 大 阪府河内郡松原字新堂 萩市河添鮎川
 西村 満子 萩 今古萩 春若町
 橋本 雪江 同 濱崎
 波多野馨子 同 府種町 萩市樺東香川津
 波多野千鶴子 同 江向
 小倉 美子 同 大谷
 林 ヒサ 同 江向
 福本ツル子 阿 奈古村字野地
 藤田美陀子 大 三隅村三隅上 萩市鹽屋町藤田内
 藤田美津子 萩 樺青海
 藤田 リツ 阿 大井村 本校寄宿舎
 松田壽美子 萩 樺東
 馬屋原三枝子 同 江向

村田 鶴子 阿 佐々並村 本校寄宿舎
 山一 光香 大 三隅村三隅上
 山口屋郁子 萩 熊谷町
 横山 幸子 大 日置村 萩市唐穂
 横山トシ子 萩 濱崎
 青山阿彌子 大 三隅下
 上利 愛子 萩 山田
 井關八重子 同 御許町
 内田 安子 阿 川上立野 萩市樺町渡邊ヨシ方
 小田カツコ 阿 奈古村
 小田 和子 萩 熊谷町
 加藤 美知 同
 金子タツエ 同 上五間町
 河野 幸子 阿 大井村
 木下タカ子 萩 細工町
 木原ヤエ子 同 弘法寺 浮島町
 小池 勝子 萩 堀内
 小川 菊江 同
 兒玉八重子 吉 井關村 萩市江向
 磯 織枝 同 芝島町 萩市江向

第二學年

(松組) (五十音順)

佐々木初枝 廣島市竹屋町 萩市江向武本方
 重藤 靜子 福田郡金田付編 萩市濱崎
 篠原 敏子 萩江向
 神野 高子 同江向
 末永 嘉子 福若松市修多羅 萩市吉田町
 宗樂 方子 萩橋本
 高洲ツヤ子 同土原
 田中アサ子 同土原
 田中 玉江 阿奈古村
 山中ふじ子 山口市八幡馬場 萩市吳服町
 長谷ヒサ子 阿字田郷村 萩市江向益田貞子方
 萩谷ハナ子 萩御許町
 花田きみ代 大通村 本校寄宿舎
 楡垣ツユコ 阿奈古村 萩市南古萩
 福田 謙恵 萩 椿東権原臺
 福長恵美子 同東田町
 藤田 住江 玖 川下村 大津郡深川町正明市
 藤田トミ子 萩 東田町齊藤方
 藤原 俊子 同土原
 瀧 ユキ子 愛 越智郡宮浦村 萩市椿東
 藤井 壽子 大 速見郡石垣村 萩市香川津
 藤井 文子 萩 土原 同川島二森
 藤家 敏子 大 三隅村東方
 阿 佐々並村 萩市吉田町木村方

古屋 梅子 萩 平安古
 古屋 嘉江 吉 小鮎村 阿武郡奈古村
 杉浦 八重 萩 土原
 宮本 隆子 同東田町 萩市濱崎
 六尾サエ子 阿奈古村
 村本 幸子 萩 鶴江
 村益フジ子 玖 由宇町寺迫 萩市川島十日市筋
 本永 幾代 萩 平安古
 矢次 文子 阿 福川村 萩市川島溝部方
 吉原 智江 玖 高森町 萩市平安古

第一學年

(菊組) (五十音順)

砂 良子 萩 堀内
 石川日出子 同 椿東
 五峯 孝子 同 濱崎
 伊藤 久子 大 三隅村 萩市廣通
 飯田トモエ 阿 三見村
 井町ヒデ子 萩 越ヶ濱
 大岡 延子 同 西田町
 小方 美香 同 川島 萩市御許町
 大谷ミチ子 阿 須佐町 本校寄宿舎
 蒲 淑子 阿 吉部村 萩市平安古竹内方

河野マスコ 萩 中小畑 萩市新川
 金子 菊江 同 椿東
 菊屋 定子 同 吳服町
 木村 艶子 阿 佐々並村 萩市東田町
 齊藤 芳枝 萩 吉田町
 柴田フミコ 同 椿東舟津
 澄川 ミツ 同 熊谷町
 周山 雅子 同 土原
 竹内マツ子 同 目代
 竹下 泰子 同 濱崎
 田總 セツ 同 平安古
 田村八重子 阿 須佐町 本校寄宿舎
 中村 君代 萩 平安古
 橋本美津子 下關市赤間關町 本校寄宿舎
 早川 澄子 萩 堀内
 早川 園枝 阿 佐々並村 本校寄宿舎
 原田 久子 萩 唐樋
 日名内多美子 同 江向
 藤田 綾子 大 三隅村
 藤田ヒデ子 萩 椿町金谷
 増野 恭子 同 江向
 松原 君江 同 濱崎本町
 松本 富恵 同 今魚棚

松本マツ子 佐 右田村 萩市吉田町
 三上 安子 萩 江向
 溝部 文子 同 椿東目代
 村岡 幸枝 同 江向八丁
 森重 末子 阿 大井村
 森重 紀子 同 六島村大島 萩市熊谷町
 箭島 文子 同 吉部村 萩市平安古
 山田恵美子 下關市田中町 大 三隅村
 楊井 虎子 萩 江向
 柳井清壽子 同 山田 阿 三見村
 柳井 柳子 同 御許町
 山根 清子 同 吉田町
 山根 靜子 同 椿町
 山本 輝子 大 三隅村
 横山 マサ 阿 川上村 萩市椿東香川津
 吉岡 公恵 萩 木間 本校寄宿舎
 萬屋ハツ子 同 玉江浦

第一學年

(梅組) (五十音順)

油屋 喜乃 萩 濱崎新町
 荒川 君子 大 深川町
 有田 マツ 萩 江向

安藤 政江 同 平安古
池内千代子 同 堀内
石田 豊子 阿 明木村
石橋 朝枝 萩 椿原
伊勢島静子 同 濱崎
市川シヅ子 大 深川町
伊藤 澄江 萩 椿
井上多美恵 同 江向 萩市河添
井町 貞子 同 北古萩
上田 節子 同 川島
上野喜久子 同 東田町 萩市江向
岡 節子 阿 繁福村 萩市江向
大島 梅子 萩 濱崎
大藤 和子 大 三明村
木下 静子 長崎縣北高菜郡長田村 本校寄宿舎
口羽 理子 萩 唐樋 阿武郡大井村
幸坂キクエ 同 椿
兒玉 芳子 同 川島
鹽田 園子 同 堀内
白井 愛子 同 前小畑
神野 澄江 阿 福川村 萩市椿原香川津
田金キヌ子 大 深川町
田坂美代子 熊毛郡八代村 萩市平安古

田中 愛子 同 中
田村フサ子 大 三隅村
中島 久江 萩 土原
長谷 紗子 阿 三見村 萩市吉田町
永富 定代 萩 山田
西山 好子 同 十日市
野村 岸江 厚 厚秋町 萩市御許町
野村 節子 美 秋吉村 萩市土原
早川喜美江 美 共和村 萩市東濱崎
原田 菊子 萩 山田
廣石 健枝 阿 宇田郷村
藤井美彌子 萩 堀内
柳木キサ子 阿 生雲村 萩市吉田町
柳井タミ子 萩 山田
山縣 操子 同 平安古
山田 一江 阿 生雲村 萩市今古萩
山田 直子 萩 北古萩
山本 文子 同 椿
吉田ユキエ 阿 三見村 萩市山田
吉富志津子 大 深川町
米屋 薩子 玖 岩國町 萩市古萩
藤永 朝 豊 瀬部村 本校寄宿舎

第一學年

(松組) (五十音順)

秋山集義子 萩 椿町
阿武 孝枝 同 江向
諫早マミ子 同 川嶋
井上サトリ 美 秋吉 本校寄宿舎
今田 静江 萩 御許町
植村 菊枝 同 椿原
宇野 幸子 大 三隅
大島 清子 萩 濱崎
柏村 満子 同 川島
金子 房子 同 椿原
象本タミ子 同 椿原
河野ウメコ 阿 奈古
河村トク子 萩 江向
上村 壽榮 同 椿原
木原 繁子 同 土原
小谷 清子 山 馬場殿小路 萩市南片河
坂 幸子 萩 椿原
佐古 淑子 同 江向
佐々木 翠 廣 横田村 萩市堀内
重見ミツコ 萩 平安古
末岡 良子 阿 福川村 萩市土原
高崎 克子 玖 高森町 同吉田町

武波 富子 吉 小郡町 同土原
田中 サト 萩 吉田町
田中トミ子 同 南古萩 阿武郡三見村
田村ミヅ子 同 西田町
寺嶋 和子 熊 高水村 萩市河添
虎竹 和恵 阿 宇田郷村
中村 康子 萩 椿原
西山 貞子 同 川島
波多野文江 同 濱崎
檜垣シヅ子 廣 海田市 大津郡正明市
平川アサ子 萩 椿町
平田喜久江 同 江向
藤田 徳子 阿 福川村 萩市土原
藤野千代子 萩 山田
町田マサエ 同 江向
馬庭 芳枝 同 濱崎
村田アヤ子 同 同
安田ミツ子 玖 川下村 三見村
行本 雅枝 萩 橋本
横木 信子 同 江向
横屋 文子 同 鹽屋町
吉原 秀子 同 上五間町
吉村喜久枝 同 堀内
渡邊 由子 同 山田
墨瀬 頼子 同 椿町 萩市土原

昭和八年二月五日印刷
昭和八年二月十日發行

山口縣立萩高等女學校內

編輯人 神田信明

山口市後河原一五

印刷者 小澤彬啓

山口市縣廳通り

印刷所 山口響海館

電話二一三番

發行所 山口縣立萩高等女學校南園會

